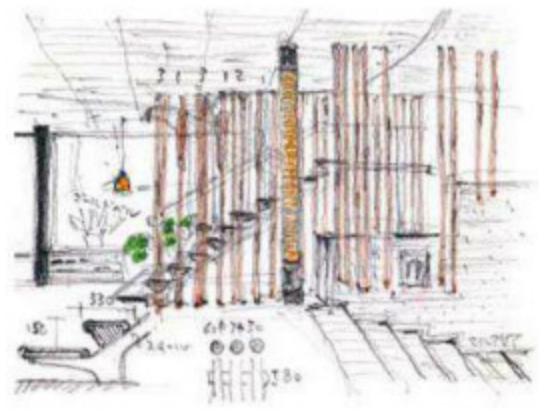
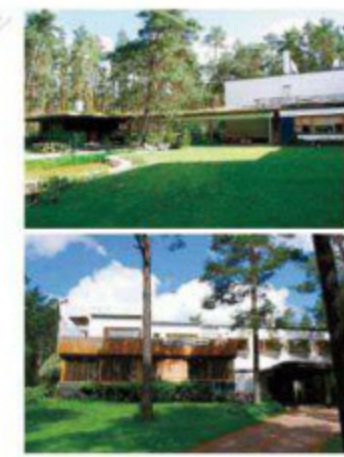
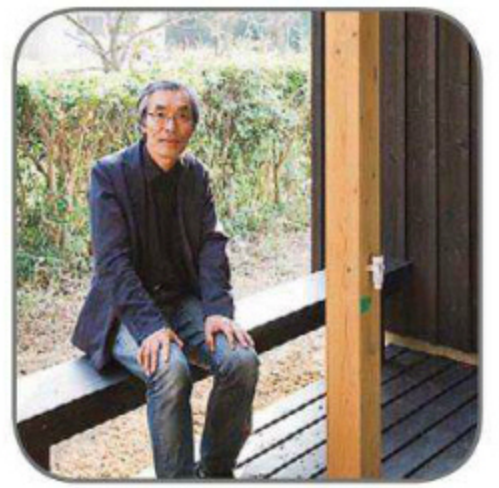
2012年9月号（第317号） 昭和61年7月8日第三種郵便物認可 平成24年8月19日発行 毎月1回19日発行
住宅特集
新建築
317
2012
SHINKENCHIKU
JUTAKUTOKUSHU
9
第28回新建築賞
一次審査 結果発表
作品／十二題
武井誠＋鍋島千恵
窪田勝文
島田陽
木原千利
千葉学
池田雪絵
安藤毅＋大友和樹
玉上貴人
森清敏＋川村奈津子
飯田善彦
杉千春＋高橋真奈美
伊藤博之
松尾宙＋松尾由希
小特集：キッチン回りのデザイン
作品／八題
若原一貴／河内一泰
平野正典／林順孝
田中知博／服部信康
齋藤由和／横河健

マイレア邸、エントランスポーチのスケッチ。

マイレア邸、階段のスケッチ。

マイレア邸、ミュージックルームのスケッチ。

マイレア邸外観。／撮影：神家昭雄

かみや・あきお
1953年岡山県生まれ／1974年国立明石工業高等専門学校建築学科卒業／1987年PLUS建築研究所設立／1994年神家昭雄建築研究室に改称／古民家再生工房のメンバー／1998年「明石の家」で日本建築学会作品選奨、BELCA賞受賞／1999年「古民家再生工房の継続的な活動」で日本建築学会賞業績受賞／2002年「MTT」でグッドデザイン賞、福武文化賞受賞／2009年「岡山の家」（本誌0503）で第1回JIA中国建築大賞、「近未来の木造住宅」設計コンペ最優秀賞受賞／2010年「谷万成の家」（本誌1106）で第11回JIA環境建築賞 住宅部門優秀賞受賞／2011年「今の家」で第8回日本建築学会中国建築文化賞受賞／主な著書に『古民家再生術』（共著、1995年、住まいの図書館出版局）
http://ww3.tiki.ne.jp/~kamiya-akio/

手を使って考え、足を使ってさまざまな場所で体験し、
何度も見てスケッチに描く行為から、新たな視点を発見する。

空間に響くディテール

神家昭雄（建築家）

手と足を使うということ

社会に出て建築を学び始めた頃、河井寛次郎記念館で「手考足思（しゅこうそくし）」という言葉に出会いました。正確な意味は理解できませんでしたが、頭だけで考えるのではなく、身体感覚が重要で、手を使って考え、足を使っていろいろな場所へ出かけて体験し、自分の力で考えることが大切だということではないかと勝手に理解していました。その頃から建築を見る旅に出かけると、写真を撮るだけでなく、スケッチブックを開き、そこで出会った街並みや風景を自分の手で描くように心掛けています。そして、建物を描くことを繰り返すうちに、自ずとディテールが見えてくるようになります。そこから、優れた建築はディテールの集積であることがとてもよく分かるようになりました。スケッチをすると、対象物を何度も繰り返し見ることになり、その繰り返しによって、頭ではなく身体に深く記憶されます。自分で描いた風景は何年経っても、その時の光・気温・風・音と共に甦ってきます。単に目で見るだけではなく、何度も見る行為と、それをスケッチというかたちで自分なりに紙の上に再構築する行為が、私にさまざまな感覚をもたらしてくれたと感じています。

30代のはじめ、独立した時には木造住宅を設計した経験がなく、木造に関する知識も乏しいものでした。ちょうどその頃の世の中はバブル経済といわれた好景気で、古い民家が簡単に壊されている状況と、雑誌で見る海外の再生事例のかっこ良さに魅せられていて、民家を再生すれば、時間をテーマとした魅力的な建築がつくれるのではないかと考えていました。そこで5人の仲間と古民家再生工房（http://kominka.main.jp）をつくり、木造の勉強会を始めました。月に一度、古い民家や古い街並みを訪ね、民家の特徴や架構を調べたり、格子・虫子窓・なまこ壁・簓子下見板・建具・箱階段など、民家の部位を実測したりしていました。持送りなどはトレーシングペーパーに直接写し取って記録したものです。とにかく実測をすると、そこからディテールを学ぶことができ、寸法感覚も身に付けられます。

たとえば格子ひとつをとっても学ぶことは多く、桟の大きさ（見付と見込み）は桟の間隔と密接に関係していて、目的や地域によってさまざまなデザインやディテールがあり、それが地域の特徴になっていることも分かりました。民家に見られるデザインやディテールは、生活の知恵から生まれ、長い歴史の中でダメなものは淘汰され、よいものだけが洗練されながら残ってきたものなのです。実測によって伝統的なかたちやデザインを学び、ただ写して記録するだけではなく、そのかたちが生まれた精神を考え、現代の視点で新しいデザインやディテールを考えたいと思っています。民家は私にとって、木造の知識を学ぶ教科書のようなものです。勉強会や実測などを通して、民家の翳りある空間に身を置き、格子を通して入ってくる強い光と陰、障子を透して入ってくる柔らかな光、床にバウンドして入る光、時の移ろいを感じさせるさまざまなシーンを体験しました。こうした時間に立ち会えたことは、古民家の再生だけでなく新しい建築を考えるうえで貴重な体験となっています。

マイレア邸をスケッチに描く

この夏、アルヴァ・アアルトを巡る2,400kmの旅をしました。ここでもいくつかスケッチをしながら建築を見て回ったので、その時の印象と併せて紹介したいと思います。

マイレア邸はなだらかな丘の上にあり、真っ直ぐに伸びた松林の中にひっそりと佇んでいます。低く抑えた自由曲線の印象的な庇に迎えられて玄関ドアを開けると、そこは窓のない閉鎖的な風除室です。丸いトップライトから落ちる柔らかな光に包まれた、静謐で祈りの場のような雰囲気です。高揚する気持ちを静め、「外」から「内」への気持ちの切り替えを促されます。

優れた建築には「外」「内」のつなぎ方や、人をもてなす作法に建築家独自の技が隠されています。ここでは閉鎖から開放へのドラマがあります。この住宅には、ふたつの斜めの壁が効果的に配置され、空間に流れを生んでいます。光を抑えたエントランスホールに入ると、正面に緩やかにカーブする背丈ほどの自立した壁がアイストップとなっています。この壁には絶妙な角度が付けられ、身体は明・暗の操作と相まって、自然と明るいリビングルームへと向けられます。

もうひとつの壁は、書斎とミュージックルームを仕切る本棚で、一部が斜めにずらして置かれ、型通りのリズムを嫌うアアルトらしい配置となっています。もし、このふたつの壁がなかったら、空間は四角四面で、この住宅の特徴であるエントランスホール・リビングルーム・ミュージックルームへと、自然に流れるような連続性は存在しなかったでしょう。

細い丸柱で囲まれた、おなじみの階段や籐を巻いた黒い柱は、この住宅に強いインパクトを与えています。水平に広がる空間と、不規則に並ぶ柱の垂直線の構成は、どこかフィンランドの水平と垂直が印象的な風景（どこまでも続く平坦な地形と、真っ直ぐに伸びる幹の細い松やシラカバの林）を思い起こさせます。階段を囲む丸柱や籐巻きの柱は、森へのオマージュであり、室内に広がる光景は、フィンランドの風景を抽象化しているようです。

アアルトは内部空間と外部空間の連続性に注力していますが、内部空間に外部の要素を取り入れることで、「内」「外」のつながりに、より親和性をもたせようとしたのではないでしょうか。

私が訪れた夏の午前は、南東にあるミュージックルームに低い光が射し込み、ここが最も居心地のよい場所になっていました。光は水平に下りたブラインドに反射して天井を照らし、さらにその光が奥へと拡散していたのが印象的です。この部屋の記憶の残照は、美しい光の光景だけが強く心に残っている不思議な体験でした。

アアルトは日本の建築と文化に大変興味をもっていて、日本建築の要素が散見されます。エントランスポーチの丸柱は、こんもりとした自然石の上に建っています。また、ポーチを囲むように格子状に並べられた細い柱は皮付丸太で、茶室の土縁のような印象を受け、数寄屋の美意識が感じられます。

室内の床の仕上げにも興味深いものがあります。日本の民家は空間の序列によって、床の仕上げを土間（三和土）、板の間（木）、座敷（タタミ）と変えています。ここでも仕上げを、目地の太い300mm角のラフなテラコッタタイル、目地のない150mm角の磁器タイル、フローリング、カーペットと、ワンルームでありながら用途に合わせて貼り分け、緩やかに領域を規定しています。特に、一段低いエントランスホールに貼られたラフなテラコッタタイルの床は、外部的な扱いがしてあり、民家の土間に通じる構成が見られます。タイルとフローリングの見切り方は流れるような曲線で、空間に動きを与え、書斎とリビングルームを分ける本棚上部の波打つ間仕切り壁は、無双の欄間をイメージさせます。

人間本位の環境建築

私が最も驚いたことは、70年前から人間本位の環境建築がつくられていたことです。窓には、日射遮蔽のための外付けのブラインドが組み込まれていたり、ルーバー状の庇には植物が茂っています。断熱と結露防止のために二重のガラス窓になっていて、万一に備えて結露水の排水も考えられています。外壁には植物が登るための細工がしてあり屋根には芝生が植えられています。天井の小幅板張りの目地には、気が付かないほど小さな穴が無数に開けられ、天井全体で換気や空調が行われていることが分かります。室内には1日を通して美しい光が入ってくるでしょう。他の建物では、窓際のレンガでつくられたベンチに温水を通し、ベンチを温めながらコールドドラフトを防ぐ、にくい工夫がしてありました。

私は、建築の生命線は光・プロポーション・内部と外部の関係性にあると考えています。マイレア邸は、これらのことが高い次元で表現されています。そして人の気持ちに寄り添ったディテールから生まれた、暖かく包み込まれるような空間に、今なお多くの人が魅了されているのです。今回訪れたアアルトの建築は、気品があり、森や都市の中にさりげなく、静かに建っていました。

Discussion's Theme

910mmモジュールについて（後編）

若原一貴（設計者）×**杉下均**（建築家）×**服部信康**（建築家）

南沢の小住宅　若原一貴（本誌1205）

左頁：左から杉下さん、若原さん。奥に見えるのが服部さん。
下：南沢の小住宅リビングから玄関方向を見る。

スケール感を消すための操作とは

若原　実際には910mmという大きさは一定ですが、空間の操作によって、その大きさの感じ方は変化させることができると思います。ただ、そこには方法論があるわけではなくて、設計者の経験やさまざまな体験から導き出されるもので、それが空間の個性になります。
狭小な場所では、窓の高さや光の取り入れ方、あとは個々の領域どうやってつくるのか……。
たとえばダイニングの椅子に座った時、どれぐらいまでの範囲をダイニングととらえるかの感覚は自分でもっていて、大きな住宅ではそれが十分に納まるのですが、小さい住宅の場合、個々のテリトリーが入りきりません。だからオーバーラップさせるんです。ダイニングとソファのあるリビングのテリトリーがあるところで重なる。910mmの空間の中で境界が消えてしまうかのような操作を意識しつつ、本来は境界が消えると、空間のとっかかりもなくなってテリトリーとしても分からなくなってしまうのですが、その感覚を残すために、光の入れ方や量をコントロールする。それが小さい住宅を考えるプロセスだと思います。

服部　910mmにこだわっていくと、テリトリーの境界が明解になりすぎて、ある時代の建築家は、それをしつらえでコントロールしようとしていたと思います。今は好きな家具が置ける余白をつくろうとする場合が多くて、そういった余白はテリトリーとテリトリーを重ねることでできた曖昧なスペースに生まれているのではないでしょうか。
「南沢の小住宅」でいうと、2階廊下が少し広くなっている部分だったり、一段高くなっている和室部分。910mmを使ってある型にはめながら、多様な　開を空間の構成や要素から導き出しています。

杉下　2階は雁行していますね。これは桂離宮の雁行した平面を見れば分かるように、まさにそれによって奥行が生まれています。
もうひとつ、この住宅では斜めに挿入されている壁によって、光の強さを抑えながら空間へと取り込んでいます。大きな壁面に対して低い位置に窓を取り、光の入れ方を工夫して周辺の壁に反射させ、光を回しながら上部へとその明るさを上昇させていくような手法。これは若原さんの個性ですよね。体験的に体得してきたことを空間に反映することができている。光の入れ方は、非常に成功しているなと思います。

若原　さきほどの服部さんのお話で、家具と空間のしつらえの話があったのですが、910mmを使っているもうひとつの理由は、今の日本の住宅の一般解を目指したいと思っているからです。ある層の人たちに向けた家具できっちり設えられた建築というより、どちらかというと庶民的な家を目指し、いばらないようにしたい。910mmをもう少し大きくして1,000mmモジュールにすると、威圧感というか、権威主義的になってくる。それが悪いということではなくて、東京郊外の住宅街には相応しくない。それは素材にも同じ意識があります。いばる材料は使いたくない。いばらない材料を使うことによって、やさしく見えるようにしたい。910mmのスケール感と素材がうまくミックスすると、人に受け入れられやすい住宅になるのではないかと考えています。910mmを使っていることで誤解されないようにしたいのですが、これを崩してはいけないと頑なに思っているわけではないんです。どう崩したのかにその時代性が反映されるのではないかと思っていて、たとえば、昔の民家は僕も好きで、見に行くと実測してみるのですが、計ってみると、結構嘘ついてるんだなと分かるんです。

服部　そうですよね。

若原　でもその嘘な部分から、江戸時代より以前に建てた人の気持ちが、なんだか分かるような気がするんです。伝統的な切り口からのみ語ってしまうと一見とっつきにくいものと感じるかもしれませんが、やってきたことはそれほど変わらず、意外にも昔の方が非常に上手に嘘をついている。それを理解すれば、910mmモジュールをあまり窮屈に感じなくなります。

服部　作法のようになってしまうと窮屈ですが、910mmを通して見ることで、そこからずれているものの意味を発見できる。日本の伝統文化を通して新たなもののつながりが見い出せるように思います。
今の若い方は寸法やモジュールをあまり使わないようなのですが、それらのよさを引き継いで、若い人なりのあり方を見つけてほしいです。

若原　地味に見えるかもしれませんが、とても大切なことですよね。

杉下　寸法に対する意識が確かに最近は薄れていると感じます。どうしてもルールや縛りに思えて、抵抗があるのでしょう。でも縛りじゃなくて、人間生活に合っているから現代に残ってきたものだと思うんです。それと、世界にあるさまざまな寸法体系を見ても、尺とフィートが非常によく似ているように、人間の体格差は若干あるにせよ、人間の骨格がもっている寸法感覚、決めやすい寸法はあるのだと思います。それを利用しない手はない。人間の骨格に根付いたものであるとするならば、みんなが分かりやすいと同時に、居心地のよさが生まれ得ることも必然的に納得できます。もちろんそれだけじゃないですが、根拠に乏しい建築の空間操作だけでつくってしまうと、なんだか居心地が悪い、違和感を感じてしまうのですが、下地として自分なりの寸法体系をもっていると、よい空間がつくりやすい気がしています。あとの個性は本人が培ってきたものをどう生かすかでしょう。

若原　そこから今の時代にあった突破口が見つかると信じています。もちろん目指しているのは新しいものですから。

杉下　そういう意識が今回の住宅の斜めの壁に反映されているのですよね。単なる910mmグリッドでやっていたら、ダイニングの斜めの壁は出てきませんよね。でもこの空間でもっとも重要なのはこの壁であり、それは若原さん自身の中から出てきた大きな意味をもつものです。

若原　玄関のところがちょうど棟の位置ですから、本来はそこに2階の梁がある方が自然なんです。そうすればここの大きな壁面で受けた風が2階へ伝わるので、家全体として非常に合理的な力バランスになります。だけどそこに梁は設置していなくて、小屋梁をいちばん大きな耐風梁にしています。450mmのLVLの梁で、これは現代の材料です。この梁がない時代だったら、成立しない空間なんですよ。そういう意味では、オーソドックスな建築ではありません。

杉下　以前の住宅でも4間ぐらい飛ばしていましたよね。僕だったら、ぜったいどこかに柱を立てます。僕の場合は2間（12尺、3,640mm）が目安ですから。プランをつくる時に敷地に2間の点をつくっておくのです。

現代性を獲得するために

若原　910mmを使いながら、すべて建築のしつらえを決めてしまうようなつくり方はしていなくて、といって好きなようにしてくださいという建築でもない。テーブルの位置などは照明の落とし方で前提をつくっているし、ストーブの位置によってソファの置き方などもある程度規定している気がします。でも、何かしらの自由度はつくっておきたいんです。さきほど服部さんがおっしゃった余白があること、どこまで建築に自由度をもたせることができるかは、いつも悩むところですね。

服部　僕は最近、規定された場所よりも、ある意味余白の空間の方が気持ちよいのではないかと思っています。建築家の操作が絶妙に介在し、住まい手に上手に委ねられている空間。たぶんそれは、910mmというある意味での縛りが空間の中にあるので、そこから解放されているかのように感じられる場所に、より心地よさを人は感じるのかもしれません。矛盾に満ちているようですが、決して910mmが気持ち悪いということではなくて、そこにある緊張感から解き放たれるような感じ。どうでしょうか？

若原　それはあるかもしれません。不自由に設計していると、何が自由なのかがある時見えてくる。その自由が見えてきた時には、それに従っても許されるのが建築の面白さだと思います。僕はそれに最初気が付かなくて、不自由に不自由にずっと設計してきたのですが、あまりにも不自由に設計していたら、その先に何があるか自分で分からなくなって、ある時「なんでこんな不自由にやってるんだろう？　建築なんだからもっと自由でいいじゃないか」と思うようになりました。不自由というのは910mmを守らなきゃいけないとか、構造体もあまりスパンを飛ばさないとかいったことです。で、ずっと不自由にやっていてその意味が分からなくなってきた時、我慢し続けて抑えている自分に気が付きました。今度はそれを疑問に思って、解き放してみたのです。すると、910mmがなんてことのないただそこにあるものに思えてくる、自由になれた気がしました。つまり、910mmはあくまでもひとつの下地や前提であって、建築の価値を決めるものではないんですね。なぜなら、ここにいる3人が910mmを使ったとしても、すべて違った空間ができるでしょうから。

杉下　僕も単なるきっかけにすぎないと思っています。建築をつくるうえで、何の手がかりもない広くて大きくて好条件の敷地につくるより、さまざまな条件をクリアしないとできない、そんな敷地の方が建築家はよい空間をつくったりします。910mmもある意味そういうもののひとつでしかないと思った方がいい。それも決して悪いことじゃなくてよい寸法体系ですけれどね。このことはものをつくるうえでは常にある話で、住宅を機能主義を前提に考えていくと、理解が難しいですが、桶と水場があれば、浴室という場所になり得る、僕の場合でいうと、最近土間をつくることが多いのですが、別に床を張らなくてもよいかなと。玄関で靴を脱ぐ当たり前の行為を変えてみることで、新しいことが発見できます。基本的に住宅は人が住むものですから、1日中同じ場所で椅子に座っていたとしても気持ちがいいと思ってもらえるものでありたい。あり得ないと思っていたことの発見が、新しい生活行為につながると思います。
服部さんの住宅にもたくさん段があって、それがとてもよいと思うのですが、昔の民家も土間からすごく上がります。床の高さを変えて空間を変えるというのは可能性のある操作なんです。

若原　断面の話をしますと、ここでは階高を少し上げないとユニットバスが入りませんでした。ユニットバスは配管等々の設備回りを入れ込むので2,500～2,600mmぐらい必要なんです。そのために洗面室が1段下がっています。

服部　それがすごく生きていますよね。

杉下　ここでは既製品の選択もうまいですね。最近はベーシックな既製品がなくなっています。僕たちみたいに、ある寸法体系の中で設計をしている者であれば、既製品が使いやすい気がしますが、実際に調べてみると全然使えない。手の感覚で動かせるものが、ことごとくなくなってきていて、すべてオートマティックなものに移行している気がします。

若原　現代の建築は、アッセンブルすることなしにはつくれなくなっていると思うんです。どこかでアッセンブルな仕事も建築だと思ってそれを受け入れた方がいい。ただその受け入れ方にも建築家の思想が現れるのだと思います。
今回、おふたりに「南沢の小住宅」を見ていただき、自分でも意識していなかったことに気が付きました。寸法体系や感覚はそれぞれに異なるものですし、正解がない建築の設計の中で、人の居場所としてどんなスタンダードを示していけるのか、それをこれからも考えていきたいと思います。（2012年6月30日、「南沢の小住宅」にて。文責：本誌編集部）

『新建築住宅特集』2012年5月号　特集／小さいことへのアプローチ

小さな家に込められる、大いなる熱意と挑戦

松井晴子（編集者）

松井晴子（まつい・はるこ）
1944年生まれ／桑沢デザイン研究所卒業／建築専門誌、住宅誌の編集を経て、フリーランスで「住」に関わる取材執筆・単行本の企画・編集を行っている／著書に『住宅の手触り』（2007年、扶桑社）、『建築家が建てた50の幸福な家』（2010年、エクスナレッジ）、共著に『郊外住宅地の系譜』（1987年、鹿島出版会）／企画・編集に『小さな建築』（2007年、みすず書房）、『日本の住宅をデザインする方法』（2011年、エクスナレッジ）、『世界の建築・街並みガイド』全6巻（新装版2012年、エクスナレッジ）ほか多数

『新建築住宅特集』5月号の特集「小さなことへのアプローチ」に掲載されている16軒の住宅を誌上で見て、思うところを書いてほしいというのが編集部から私への依頼だった。私は設計者ではない。だが子供の頃から、よそ様の家を訪ねると、すべての部屋を見せてもらうのが趣味だったので、いわば「家ウオッチャー」。見てきた家の間取りを方眼紙に描き、さらに自分の家族が住むとしたらどのように工夫すればよいかと、いくつものバリエーションを描いては、ひとり遊びを楽しんでいた。学力・創造力ともにおよばず設計者になれなくて、建物を見る側、つまり編集者になったのだが、建築をクリティカルにとらえるのではなく、子供の頃によそ様の家を見せていただいた時のワクワクする気持ちのまま、暮らす側に立って建築や街を見続けている。

50年代、60年代の「小さな家」

「小さな家」というと思い出すのが1950年代に建てられた増沢洵さんの「最少限住宅」（『新建築』5207）と清家清さんの「私の家」（同5703）、そして60年代の東孝光さんの「塔の家」（同6701）だ。「最少限住宅」は、何年か前に小泉誠さんによって「9坪ハウス」として再現されたので、記憶に新しいかもしれない。3間四方の3分の1が吹抜けの2階建て。私は中学生の頃、この家が紹介されていた雑誌を古本屋で立ち読みして釘付けになってしまった。それまで私が見てきた家は、戦前に建てられた玄関脇に洋間があったり、南側の居室と北側の水回りを中廊下で分けた平屋が多く、建築面積も20〜30坪くらいあっただろうか。ところが「最少限住宅」は建築面積わずか9坪、吹抜けと書斎、家事室まである。間取り図とモノクロ写真を見て、建築家がつくる家は美しい、とまず思った。そしてこんなに小さい家でも親子3人が暮らせるんだと、なぜか嬉しくなった。というのはその頃、私の一家は8畳と3畳に小さな台所が付いただけの、企業の接客施設に付属する管理人室のようなところに間借りしていて、いつかは「わが家」を建てたいというのが5人家族の悲願だったからだ。これくらいの家なら手が届くのではないかと、9坪に子供部屋を足した案を私は方眼紙に描いた。

「私の家」を訪れることができたのは、建築専門誌の見習い編集者になってから。その頃は土足のまま暮らしてはいなかったと思う。靴を脱ぎ素足で鉄平石の床を歩いた時の、ちょっと冷たくて固い足裏の感触、トイレにドアがなかったこと、庭に向けて大きく開かれた窓があり、鉄平石の床の先に庭が広がっていたことなどが、強烈な印象として残っている。だが動くタタミの台がその時どのように使われていたのか、なぜか記憶が定かでない。建築面積は15坪強しかないのに、庭までも生活空間に取り込んでいるから狭くない。その頃の東京の郊外では、敷地に対して建物は2〜3割を占めるくらいで、どんなに小さな家であっても、「一戸建て」の家に暮らすということは、ある程度の広さの庭があることだった。

「塔の家」は1966年の竣工直後に取材させていただいた。それからも機会があれば、何度かドアをノックして、そのつど、流しの前で洗いものや料理をしている節子夫人の笑顔に迎えられた。建築面積4坪の中に地階のアトリエから最上階の子供部屋まで5層に積み重なっている垂直空間を覗かせていただき、吹抜けのある階段が、移動という機能を超えて重要な役割を果たしていることに気付いた。驚いたのは、予告なしにふいに訪れても、台所も浴室も掃除がいき届いていて、ベッドカバーさえ乱れていなかったことだった。小さな家で快適に暮らしていくには、それなりの心遣いが必要なのだと節子夫人から教えていただいた。

その後、取材でたくさんの「小さな家」を見せていただくことになるのだが、これからの日本人の暮らしを示唆したり、都市に住むことの意味を示してくれたこれら3つの家を超える事例は思い浮かばない。それでも私は「小さな家」が好きなので、見学できる機会があれば、子供の時と同じように、生活を想像しながら楽しませてもらっている。

とはいっても「小さな家」の定義は難しい。狭小敷地であればよいのか、建築面積が小さければよいのか。私の考える「小さな家」は、それだけではない。日本人の身体感覚に馴染む寸法で構成されているか、身体に触れる部分の素材の質感はどうか、陽だまりや風が感じられるところがあるかなど、家としての心地よさが基本的に担保されていないと、「小さな家」は成立しないと思っているからだ。だが一方で、地震への不安はあるものの、東京くらいの気候であれば、雨風がしのげれば、バラックのような家でも住みこなすことはできるのではないかとも思っている。そんなことを考えながら、16軒の写真と図面、そして設計趣旨にざっくり目を通した。

周辺環境から生まれた「小さな家」

巻頭の横河健さんの別荘「志立別邸」は、採光・通風・眺望が確保されていて、プロポーションも美しく、木の質感に包まれ、精巧につくられた宝石箱のような小屋だ。ほかは隣家が密集した敷地に建っているので、その対比に編集の意図を感じる。都市に建つ15軒の配置図と写真を見て、周辺環境との関わりなしに建築は成り立たないことを改めて感じた。当然とはいえ建物のかたちは、敷地の形状や広さや隣家や周辺の状況に左右される度合いが、小さな家では大きい。ほぼ長方形の斜面地に建っている三浦慎さんの「43base」は田の字プランにして、長方形の床の高さをずらして組み上げ、床段差でそれぞれの領域をつくり、狭い→広い、低い→高いを繰り返して、地階から屋上に抜ける構成だ。内部に仕切り壁をもたない、立体ワンルームのような家を常に気持ちのよい状態に保っていくには、住み手にもデザイン力が求められると思った。

荒木毅さんの「荏原の家」は、旗竿敷地の竿部分まで居住空間に取り込んでしまっているのが面白い。幅わずか910mm、奥行5,460mmの書斎とデッキ。こうした細長い空間にいるとどんな心地がするのか、想像するだけで楽しくなってくる。

榊原節子さんの「中崎の家」は、K型のブレース壁で組んで幅2,660mm、長さ10,105mmの3層の細長い居住空間をつくっている。長手方向に家具や浴槽を配置すれば、採光も通風も確保しながら「十分住めるでしょ」とアピールしているのが爽快だ。

杉浦英一さんの「東大泉の家」では、正方形の平面の中に斜めに階段を通して、階段を挟んで居室と水回りを床レベルをずらすことで分けていることで、床面積以上の広がり感をつくり出しているのに驚いた。

竹口健太郎さんと山本麻子さんの「Dig In the Sky」の空間構成はもっと強烈だ。3層の細長い平面の南側、真ん中、北側にそれぞれ4,700×2,700〜3,000mmの居住空間を設けて、真ん中からチューブのように階段や廊下が出て、南と北の空間をつないでいるトポロジカルなワンルームになっている。こればかりは実際に空間体験しないとその不思議な魅力は正確には分からない。

岩岡竜夫さんの「乃木坂ハウス」も体験しないと温熱環境の効果が分からないと思ったので、拝見させていただくことにした。建築面積6.7坪、地階からテラス階まで5層の鉄骨造と一部RC造。建坪は「塔の家」よりやや大きいが、1層1部屋の垂直ワンルーム。この家の真骨頂は「塔の家」が果たせなかったワンルームならではの温熱環境の制御を、設計の重要なテーマにしていることだ。訪れた日は外気温30度、室温26度、私にはちょうどよい室温だった。エアコンを設置せずに、各階のスラブ面を蓄熱式の輻射冷暖房システムにしている。夏は冷水蓄熱層の水を屋上に設置した雨水と井戸水を利用した冷却塔で冷却し、湿度が高くなりやすい地下や断熱が少し不十分な最上階にはファンコイルユニットに井戸水を通すことで冷房を行う。冬は屋上の太陽熱集熱器で加熱された温水を冷温水ポンプで各階の床・天井に送って暖房する。アトリエにしている地階にはコンクリート製の蓄熱層があり、給水用の青いポリエチレン管と給湯用の赤いポリエチレン管が、地下から屋上までつながっていて、螺旋階段の脇に管を設置しているので、階段を上り下りする時も、各階の部屋からも青と赤の管が見える。まるで人体の中を通る動脈と静脈のように、室内を温めたり、冷やしたりしてくれる仕組みが、生活しながら目に見えるのだ。近年、多くの機械はコンピュータで制御されていて可視化されないので、家庭で使われている機器の多くは、故障すれば買い替えるしかない。でもこの家では温熱環境の仕組みが目に見えるし、雨水や井戸水、そして太陽熱を利用してエアコンなしで快適な室温を保っている。そのけなげさが嬉しい。同時に、こんな小さな家1軒だけに、この素晴らしい技術を使うのはもったいないという気もしてきた。

「小さな家」は街の種になる

こうした相矛盾する感覚は、都市に建てられる小さな家を見るたびに、私の中にわき上がってくる。

おそらく建築面積わずか10数坪足らずの住宅にこれほど建築家が精魂込め、知力の限りを尽くしてプランを考え、新たな技術を追求する国は日本をおいてほかにないだろう。私が小さな家に惹かれるのも、そこに設計者のこの敷地にはこれしかない、とことん考え抜いた無駄のない案が詰まっているからなのだが、建築家のそのエネルギーを個人の1軒の住宅だけに使うのはもったいないなあ、と同時に思ってしまう。

世界一高い東京の土地価格では、ローンを組むサラリーマンが都市に住みたいと思えば、獲得できる坪数は限られている。「狭小敷地、変形敷地だと住宅メーカーに依頼しても予想以上の案は出てこない。せっかく購入した土地なのだから、今までの暮らしが変わるような予想を超えた家に住みたいと思ったら、建築家に依頼するのがベストだ」。小さな家に住む建主の多くは、建築家に設計を依頼した理由を私にこのように説明する。つまり、変形狭小敷地こそ、建築家の出番というわけだ。だが、特異な形態の家は、時には周囲の景観から浮いてしまうこともある。浮いてしまうだけならまだしも、騒音のように感じられることもある。ではそのようにならないようにするにはどうしたらよいのだろう。建物の高さや窓の位置を周辺とそろえる、外壁の色や材質を周辺の建物に近いものにするなどの配慮が必要な場合もあるかもしれない。

建築家が手がける家は、住宅戸数にしたらほんのわずかだ。だが道行く人の心に残る小さな家が街の中に1軒でもあれば、いつか日本の街はいい感じになると私は信じている。その種になるのが、建築家が設計する「小さな家」だ。街の中でどのような役割を果たすのかを視野に入れながら、人びとの記憶に残る「小さな家」をこれからも建築家にはつくり続けていってほしい。

新建築社WEBサイト

新建築 Online

＊ 見やすいサイト

最新号がひとめでわかるTOPページ …①

＊ googleサイト内検索が便利 …②

＊ 登録が簡単に …③

＊ WEBコンテンツが充実

MOVIE …④
100以上の建築動画コンテンツを公開

SPECIAL …⑤
新建築社の関わるイベント情報やWEBオリジナル企画を紹介

TV …⑥
イベントのUSTREAMアーカイブ

Photo Gallery …⑦
雑誌未公開写真のアーカイブ

Download …⑧
月刊誌の総目次、informationのPDFなど、無料コンテンツをストック

＊ Online shop が便利

カートに入れるをclick！…⑨
会員登録なしでも購入可能

詳細は、下記URLをご覧ください。

http://www.japan-architect.co.jp

© 新建築住宅特集2012年9月号／第317号
2012年8月19日発行 毎月1回19日発行
定価2,000円 本体1,905円
振替：00150-6-30658

［編集発行人］吉田信之
［編集長］中村光恵

［表紙・誌面フォーマットデザイン監修］ K2
［発行所］株式会社新建築社
東京都千代田区霞が関三丁目2番5号
霞が関ビルディング17階 〒100-6017
tel. (03)6205-4380（代表／総務・出版）
(03)6205-4381（編集部直通）
(03)6205-4382（広告部）
fax. (03)6205-4386（代表／総務・出版）
(03)6205-4387（編集部・広告部）
e-mail ja@japan-architect.co.jp
URL http://www.japan-architect.co.jp
写真部：
東京都文京区湯島2-30-8 5階 〒113-0034
tel. (03)3811-9132
fax. (03)3816-2589
［印刷所］株式会社廣済堂
［取次店］トーハン 日販 大阪屋 中央社
栗田 鍬谷 協和 太洋社 西村

表紙の写真 展の家
設計：武井誠＋鍋島千恵／TNA
撮影：新建築社写真部

CONTENTS

第28回新建築賞 一次審査結果発表

作品

小特集／キッチン回りのデザイン

新建築 住宅特集

317 2012 09

CONTENTS

コラム & エッセイ

EXHIBITION

BOOKS

NEWS

TOPICS

PROFILE・編集後記

新建築賞（旧吉岡賞）について

新建築賞は『新建築住宅特集』の新人賞として、住宅作品を通して建築設計の新たな展開に大きな可能性を感じさせる新人の奨励のために、その作品の設計者を表彰するもので、年 1 回の選考が行われてきました。これは本誌の母体である『新建築』誌を創刊した故・吉岡保五郎の業績を顕彰して設けられ、故人が設立した財団法人・吉岡文庫育英会の主催により開催されました。吉岡保五郎没後 35 年が経過した 2008 年より、「新人賞」「登竜門」という賞の性格をさらに強化し、充実したものとすべく、その名称を「新建築賞」に変更しました。これにより、今年も本誌 2011 年 1 ～ 12 月号までの間に掲載された住宅作品に加え、『新建築』誌に掲載された住宅に関連した作品（集合住宅など）も受賞対象としています。

2011 年度の審査方法

今年の新建築賞は二段階の審査となっており、次号と連続で掲載します。
本号で紹介する一次審査では、審査員のおふたりが推薦した作品について議論し、読者推薦の作品も併せて、数作品を二次審査を希望する作品として選びます。
二次審査（次号掲載予定）は、審査員が二次選考に残ったそれぞれの設計者と 30 分の対話形式で作品について質疑します。そのあと審査員の協議によって最終的に新建築賞が決定します。（編）

第28回　新建築賞　一次審査 結果発表

審査員　山本理顕　安田幸一

やまもと・りけん
1945年北京生まれ／1968年日本大学理工学部建築学科卒業／1971年東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修了後、東京大学生産技術研究所（原研究室）／1973年山本理顕設計工場設立／2002～07年工学院大学教授／2007年～2011年横浜国立大学大学院建築都市スクールY-GSA教授

推薦作品

Small House　（本誌1102）
畝森泰行建築設計事務所

シナの木と白い家　（本誌1107）
髙橋真紀＋潮上大輔／髙橋真紀建築設計事務所

二重螺旋の家　（『新建築』1112）
大西麻貴＋百田有希／o+h

駒沢公園の家　（『新建築』1108）
今村水紀＋篠原勲／miCo.

ルーフテクチャー波賀　（本誌1109）
遠藤秀平建築研究所

やすだ・こういち
1958年神奈川県生まれ／1983年東京工業大学大学院修士課程修了／1983～2002年日建設計／1988～91年バーナード・チュミ・アーキテクツ・ニューヨーク勤務／1989年イエール大学大学院修士課程修了／2002年～東京工業大学大学院准教授、安田アトリエ主宰／現在、東京工業大学大学院教授

推薦作品

Forest bath　（本誌1111）
生田京子建築研究室　尾関建築設計事務所

二重螺旋の家　（『新建築』1112）
大西麻貴＋百田有希／o+h

シナの木と白い家　（本誌1107）
髙橋真紀＋潮上大輔／髙橋真紀建築設計事務所

LCCM住宅デモンストレーション棟（本誌1105）
小泉雅生／小泉アトリエ＋LCCM住宅設計部会

多摩平の森住棟ルネッサンス事業 たまむすびテラス　（『新建築』1108）
リビタ　ブルースタジオ　瀬戸健似＋近藤創順／プラスニューオフィス　ランドスケープ：オンサイト計画設計事務所

審査座談会：外への視線と内なる表現の狭間で

審査員：山本理顕 × 安田幸一

──新建築賞は1987年に創始してから今年で28回を迎えました。審査員のおふたりには、2011年の『新建築』『新建築住宅特集』に発表されている住宅、および集合住宅をご覧いただき、賞の受賞候補となる推薦作品を5作品ずつ挙げていただきました。まず2011年の掲載された住宅、集合住宅についてもたれた印象をお聞かせください。

山本理顕（以下、山本）　大きく分けると、住宅の根拠を都市との関係に求めるのか、自分の内側に求めるのかというふたつの方向に分かれているように思いました。前者は住宅をつくる時にそれが都市の中にどう関わるのかということを考える方向。1970年代当時は、周辺との関係をあまり考慮しない住宅ができても、特に不思議だとは思いませんでした。その頃と比べると、都市自体が変わってきていますし、今は多くの建築家が「外と関係をもちたい」という気持ちがあるような気がします。ただどうやったらその関係ができるのか、ガラス張りにして外が見えることだけで成立するというものではないと思います。後者は篠原一男さんに代表されるような、作家の内的な表現に徹底していくような手法です。一方で環境性能を上げようとすると、内側にこもりがちになる。ライフサイクルコストや断熱性能を考えると、むしろ閉じてしまった方がよい。内側だけで完結させた方が性能は上がります。しかしそうした建築を見れば見るほど、自分の建築のことだけでよいのかという気がします。外との関係をつくろうとしても、その「外」が景観として評価しにくい「外」であるとしたら、環境性能と共に住宅を考えることが極めて難しいということなのだと思います。でも多くはこのふたつの方向性の中間に揺れ動く、さまざまなつくり方の流派や作法であるような気がします。

安田幸一（以下、安田）　私は篠原一男研究室に在籍していたわけですが、彼は社会性から遊離した特別な世界を雑誌の中でつくり上げました。本来プライベートであるはずの住宅の空間が、一般化していくもっとも有効な手段が雑誌という存在でした。
今の時代は、開く／閉じるを含めた表現を大切していると同時に居心地もよいという、両方が存在することが求められているのでしょうか。居心地と環境はけっして同義ではありませんが、社会的な通念として、環境に配慮しなければいけないという風潮には、誰もが時折窮屈さを感じているような気がします。環境のことを無理にいわなくてもいいじゃないかという建築も多くなってきたように感じました。もう少し建築は肩の力を抜いて、自然体でもよいのかもしれないのです。
今は建築家が自信を失っている時代かなと思います。2001年のアメリカ同時多発テロ事件（9・11）でモダニズム建築への問い直しがなされ、昨年の東日本大震災では完全に打ちのめされました。建築の限界のようなものを感じたのがこの10年間でした。そのことが2011年の誌面に直ちに反映されているわけではありませんが、こうした状況の中で、今回の賞では、未来への何か明るい兆しが見い出せたらと思っています。住宅に限らず、一般建築にも適用するような概念や　望が、住宅という小さな建築に入っているといいなと思っています。

──おふたりが選ばれた作品について、それぞれ推薦された理由を教えてください。

「Small House」　畝森泰行

山本　はじめ、アトリエ・ワンの「スプリットまちや」（本誌1102）と、長谷川豪さんの「浅草の町家」（『新建築』1112）を選んでいたのですが、すでに受賞された方たちだということで、一部推薦作品を変更しました。でもこのふたつの作品は都市への開き方という面で、とても成功していると思います。
まず「Small House」は、4,000mm四方という小さい建築面積の中で、各階の階高で住み方を操作していて、それぞれ高さが違うのですが、その解き方がとても面白いなと思いました。

安田　住宅で階高をずらすやり方は青木淳さんの「i」（『新建築』0104）から始まっているように思います。この平面を見てみますと各階ほぼ同じかたちですが、階高が各階の性格付けをコントロールしていますね。

「Small House」

山本　エントランスを入ってすぐに、半地下のベッドルームが見えて、その同一フロアに納戸、階段を上がるとダイニングルーム、そこは階高があるのですね。

安田　べた基礎とありますので、おそらくはぎとった土量で相殺して地耐力をかせいでいるのでしょう。小さい建物ではとても有効な手法ですね。ベッドルームを少し掘り下げているのは、縦穴住居のような安心感と、構造的な理由もあると思います。

山本　2階スペアルームは天高が1,700mmだけど、子供が小さい間だったら子供部屋として十分使える。その上は、水回りがある三角形のテラスルーム。この構成は狭い敷地の中でかなり有効だと思います。柱の外側に壁があるけれど、あえて見せて、ディテールも工夫していますね。階段の位置するところに大きい窓があって、通風も兼ねて少しだけ開く感じです。ここも外に開くような環境ではないけれど、あえて開いているのがよいですね。夜、電気がついているだけでも周りの人たちは安心すると思います。それは採光のためだけの窓ではなくて、外との関係をつくろうという意識が強いからなのだと思いました。

安田　小さいと灯りの雰囲気しか分からないけれど、これだけ大きな開口がひとつでもあると人が生活している気配が外に十分伝わりますね。

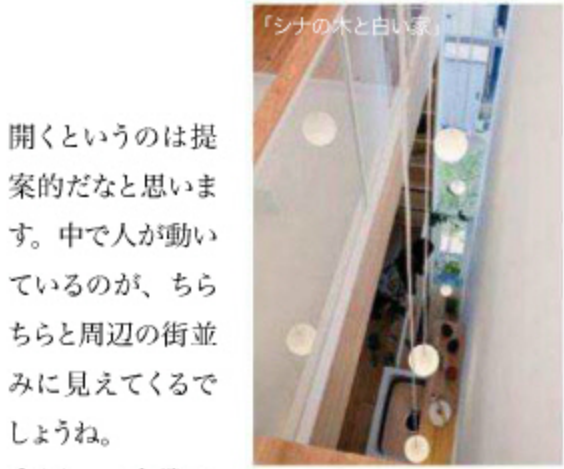
山本　四角い箱に、四角い穴をあけてその穴のバランスを考えるというつくり方自体が、今や一方の主流派ですが、外に対してどう開くのか考えやすいのかもしれませんね。ベッドルームはちょっと小さくて辛いように思うけれど、実際どうしているのか気になります。

「シナの木と白い家」　髙橋真紀＋潮上大輔

山本　この作品は立面が面白くて気になっていました。壁の真ん中に配管が露出している。でもサイドにスリットがあることで非常に開放感があるし、その開いた場所に動線があるのも面白いアイデアです。お風呂はどうしているのでしょう。上がバスルームで、湿気が下に降りていくでしょうね。

安田　大胆ですよね（笑）。でも普段バスタブを使わない時はインテリアの一部になってよいわけですから、斬新なアイデアでとても面白いです。

山本　多くの日本人にとって、バスルームはリラクゼーション・ルームですからね。開くことと閉じることという、都市との関係をどういう風につくっていくかという方法としては、動線部分を

「シナの木と白い家」

開くというのは提案的だなと思います。中で人が動いているのが、ちらちらと周辺の街並みに見えてくるでしょうね。

安田　実際にスリット部分にカーテンをしないで暮らしているかなど、気になりますね。外へ開くことが雑誌の中だけで成立していることが多々ありますので。

山本　僕は住宅のつくり方が、私たちのプライバシーの概念を決めてきたと思うんです。だから小さな住宅でもひとつつくることで、周りとの関係やプライバシーの意味が変わっていく可能性をもつと思う。そこが重要なことではないでしょうか。今回僕が推薦している住宅は、そういう意識をもった家ではないかと思っています。

「二重螺旋の家」　大西麻貴＋百田有希

安田　この住宅は実際に空間を体験してみないと分からないというのが正直な感想なのですが、内と外の階段が本格的な二重螺旋になっているわけではないのですよね?

山本　そうですね、外階段は途中で終わっているようです。二重螺旋までいかず、「二重ら」くらいですね(笑)。

安田　敷地がふたつの旗竿部分をもっているので、その1本1本が螺旋へつながっていくイメージとしてあるのでしょうね。旗竿がそれぞれ住宅へ侵入してきて、屋上で出会うような……。

「二重螺旋の家」

山本　しかし小さい戸建て住宅ですからね、あまりにこだわってもかえって住みにくくなってしまいます。

安田　この住宅の最大の特徴は、普通だったら、これだけ小さい家だと居室を少しでも大きくするために階段空間を小さくするところを、ここは逆に読み解いて幅広い階段を設けているところです。普通とは逆に主室面積を最小限にして、サービスとサーバントが逆転している。写真を見ていると、寝室もベッドが置いてあるだけだから、部屋に入ったらもう寝るしかないということでしょう。だからほとんどの活動は住宅の周縁部で行われているという、行動の不思議な逆転が面白いところではないでしょうか。ただあまりにも中の部屋が窮屈になっているおそれもあるので、本当の感覚はどうなのかを知りたいですね。

山本　そうですね。廊下のような動線部分が機能をもった部屋として上手に計画されていると思いました。それと外側の階段は、実際にどのように使っているのでしょう。バスタブのところから外へ出て、屋上のパーゴラまでいける外動線が、日常生活の中で積極的に使えていると面白いなと思ったんです。外からいつも人が動いているのが見えると面白いなと思いますけれど。

安田　最近はアトリエ・ワンの住宅作品や「曽我部邸」(曽我部昌史＋丸山美紀／本誌0707)など、面白い住宅が旗竿敷地で生まれる傾向があります。予算も敷地も限られている、しかしどう豊かに暮らすかを一般化することが、建築家のやるべき仕事と思います。だから旗竿敷地へ着目していたのですが、こうした解が出てくるとは想像もしていなかった。そういう意味では今までになかったタイポロジーとしての可能性があり、住空間としてもうまくいっているのであれば素晴らしいと思います。

「駒沢公園の家」　今村水紀＋篠原勲

山本　これは改築なんですね。

安田　ピクチャレスクですし、僕もとても気になりました。

山本　もともとは建て売り住宅のようですが、それを増築して、内部にスリットを設け、3棟のヴォリュームとして見せている。住宅地の中で、こういう建て方をすることで、街並みが相当変わると思います。今までの一住宅一家族としての家のあり方から、この建ち方だとひとつの住宅のように見えない、そういう住宅のつくり方があるのだと驚きました。単なるインテリア的な改修という枠を超えて、周辺に対する建ち現れ方を変えてしまおうという、新しい手法ではないでしょうか。家と家の間が自由に操作できることへの可能性を見せているようにも感じました。相当大胆ですよね。

「駒沢公園の家」

安田　衝撃的ですよ。屋根なども断面にしてしまっていますから、防水のことなど聞いてみたいことはたくさんありますよね。でもこれほど割り切っている建築はなかなかないと思います。開口部をものすごくシンプルに納めていて、それが従来の家のイメージから大きく逸脱しているのだと思います。これが普通の引違い窓ですと周辺の景色に溶け込んでしまうのでしょうが、大きな1枚ガラスを入れていることが、スケール感を含めて周辺環境から飛び出して見えるのだと思います。その大胆さが妹島和世さんの事務所OBという感じはありますね。

山本　そうですね、窓枠のディテールはどうなっているんでしょう。枠がないように見えますけれど。

安田　そこは気になりますが、思い切ることで生まれている景色には魅力を感じます。

「ルーフテクチャー波賀」　遠藤秀平

山本　この住宅は、今まで話題に上がった住宅とは全然作法が違うものだと思います。箱状の空間がランダムに配置されて、その上に大きな屋根が架かる構成ですが、暑さに対してはどのように対応しているのかなと思います。

安田　きっと空気の逃げ場がうまく取られているのでしょう。そうでないとかなり厳しいものがありそうですね。

山本　屋根の素材のFRPがどれぐらい断熱性能があるのか、その辺が気になります。ただ、今まで挙げてきた都市型の住宅として街並みをどう変えていくかとか、小さいものの中でどう工夫するかといったことではない。敷地の形状という与条件があって、そこにどう建つかというアプローチ以外は遠藤さんの馬力で解決していますね(笑)。建物としての構成の強さのようなものが、ほかに推薦したものに比べるとまったく違っているということで選びましたが、プランの印象とは違ってかなり内向きな住宅ですね。

「ルーフテクチャー波賀」

安田　これだけの敷地環境にあって、外にほとんど開いていないのが不思議ですよね。普通は大きな開口を設けて、庭との関係性をつくるのではないでしょうか。それがまた特徴なのでしょう。箱の回りの空間が、通路のようであったら面白いなと勝手ながら思いました。外に対してそれぞれ抜けられる、たとえば山本さんの「山川山荘」(『新建築』7808)ような構成もあり得るかなと感じます。

「Forest bath」　生田京子　尾関勝之

安田　この住宅は切妻屋根を1カ所三角形で抜いただけの単純なジオメトリーでできています。外からは閉じているように見えながら、中から見ると非常に開放的です。

「Forest bath」

山本　僕もとても気になった作品です。昔の篠原さんの作品の写真に似ていますよね。

安田　そうなんですよ……ちょっと懐かしさを伴って拝見してしまいました(笑)。三角で切り取られた残余空間が寝室とバスルームになっていて、開口は地窓風に取ってあり、視線が自然と下へ向き、外からも見通せないようにうまく計画されています。一方、居間からの視線はやや上方へ向き、開放的に外へ放たれます。上手だなと思いました。写真の撮り方もとてもよかったと思います。住宅は写真の善し悪しがずいぶんと評価に影響します。この単純なジオメトリーの中で、写真が建築の魅力を惹き出したことも素晴らしいです。

山本　確かに写真の撮り方のうまさもあるのかもしれません。本当のところはどうなのだろうと思いました。天井高のあるところは高く、抑えられているところは1m程度、その勾配が非常に大胆で、広角の写真で広がりがよりダイナミックに感じられるのかもしれませんが、この写真は文句なしにかっこいい。実際に是非見てみたいと思わされる作品です。

安田　また細かいことですが、窓回りの壁をシャープに尖らせたり、軒の線が薄くつくってあったり、景色を抽象化する際のディテールに気を使っている。とてもシンプルな構成ですが、こういう案には気が付かなかったなと思いました。周辺環境についても隣近所から丸見えの条件の中で、配置計画も鑑みながら、内部からの風景はうまく抽象化されていて、隣の家が見えていてもまるで絵画のような感覚になります。

山本　僕もこれはディテールの扱い方のうまさだと思います。プランを見るとその三角形のかたちがちょっとダイレクトすぎるようにも思いますが、この構成は面白いと思いました。写真がきれいに見えてくるのは、ディテールの妙が効いていると思いますね。開口部の取り方も不思議な感じがしましたが、周りが建て込んでいるということなので、そのあたりの理由が気になります。

「LCCM住宅デモンストレーション棟」
小泉雅生　LCCM住宅設計部会

安田　この住宅は、以前見学会があったので実際に見てきました。訪れた季節が「筑波おろし」が吹きつける本当に寒い真冬でしたが、南側の室内テラスの黒い床に陽が燦々と当たり、ゼロエネルギーなのに暑いぐらいの日溜まりになっていました。極端な事例ではありますが、今の環境的な視点の中で、建築、住宅として何ができるのかを暗中模索している生々しい姿が見えている、そういうストレートさがよいと思い、今回推薦したのです。

一方、人が住んでいないモデル住宅であるし、実験住宅としてこんなに陽が当たる場所に建っていて、ここで出された結果をそのまま市井の住宅に反映することはできないだろうという懸念も当然もっています。膨大な研究データを基に、ひとつのデザインにまとめあげたという点で、時代性の視点からここで山本さんと議論できたらと思いました。

山本　側面の壁は少し外側へ開いているのですか？　何のために開いているのでしょう。

安田　風向きの関係と思います。デザインということではなくて、環境負荷を減らすための根拠の中で導かれています。民家のうだつのようなイメージで西日をカットする意味合いもあるかもしれません。かたちの根拠は、ベースとなるような平面や形態はどこかにあったと思いますが、そこから実験や検証、シミュレーションを重ねて結果をフィードバックし、トライアンドエラーの中でこの住宅としてのかたちが導かれたということです。

山本　実験データのみからかたちが導き出されることはないと思います。どこかでつくる人の意志と共にかたちがあるのだと思います。そこをどう考えたらよいか難しいところです。

安田　確かに「かたち」の評価は難しいです。実験的なトライアルの中で、こういう住宅は体感してみないと分かりません。たまたま僕がこの住宅を体験して、よくできていることを感じ、その「感覚」を雑誌でどのように取り上げるか、啓蒙の意味でも考えるチャンスと思いました。見ることより、感じてみないと分からない住宅の判断基準というのも難しいものですが……。

山本　実験住宅としてはとても素晴らしいものだと思うけれど、ではこれが具体的にどのように実際の街の中につくられていくのかな？　と思った時、周辺との関係をイメージするのが難しいと思いました。

安田　おっしゃる通りです。東京の街中にこれと同じものを建てようとすると、これほど豊かな敷地はあり得ません。この敷地環境が必須では特殊解で終わってしまうので、これからさらなる展開が必要と思います。

「LCCM住宅デモンストレーション棟」

山本　こういう住宅の環境的なあり方と、都市住宅で提案されることを一緒にして考えられると面白いのですが。あと、太陽の光を取り入れる観点で南側には開いていますが、やはり環境住宅は内に閉じる方向性になっているように思います。空間内部の風の通り方などを計画しようとすると、全体に開いてし

まっては難しいのかもしれませんが……。

「多摩平の森住棟ルネッサンス事業 たまむすびテラス」 リビタ ブルースタジオほか

安田　これも社会的な意味が大きい作品です。公団住宅は住まい手の老齢化が進んで世代交代の時期がきているし、建物の耐震補強も必要です。同時にエレベータも新たに設置しなくてはいけません。いろいろなことを一般解として考えざるを得ない時代になってきていて、大学院の設計の授業でも3年間ぐらい続けて団地の再生に関する課題は出して議論してきました。
この「たまむすびテラス」で見られるアイデア自体は、正直見慣れているものも多いのですが、それらを実際に実現するとなるとてもハードルが高い。それがここでは実現していることがまずは素晴らしいと思いました。
建築の耐震補強において、壁厚を厚くすることだけで対応していますが、これだけの規模の住戸を再生する手法としては有効と思いますし、建築単体で再生をするのではなく、美しいランドスケープで居心地のよい場所へと変換できている。今後、必要とされるであろう再生手法として有効で是非候補に挙げたいと思いました。
URの物件を、民間が手掛けて再生する手法も新しいプログラムですよね。いろいろな意味での期待を込めています。

山本　今はこうした老朽化した公団住宅の多くが壊されてしまっていますからね。そして民間のディベロッパーが、超高層の分譲マンションを建てるケースが増えています。でもそれすら立地条件がよいところだけで、少し郊外に建てられた高度経済成長期の集合住宅群は、再生する手法も見つけられないまま空洞化する状況に歯止めがかけられずにいます。

「多摩平の森住棟ルネッサンス事業 たまむすびテラス」

安田　階段室型の集合住宅は、エレベータも簡単に付けられないですからね。ここでは外側に一本廊下をつくってエレベータを設置しています。

山本　これだけの規模でつくったものは、上手に残す方法を考えるべきだと思います。長い間そこで生活してきた人たちの間にコミュニティが生まれているし、壊してしまうとすべてがなくなってしまう。どんなかたちにせよ、記憶として引き継がれているものがあることが、大切だと思います。

安田　そうなんです。団地の景色というのはネガティブに捉えられてもいますが、ここでは子供たちが集まる豊かな遊び場の風景としてとらえられている。今後の保存再生の手法にも関わるのですが、まったく新しいものに生まれ変わってしまうより、もとのファサードが残像のように少しでも残っている方が、住まい続ける人たちにとっては思い出の継承が生まれ、ずっと心が休まる場になるのではないでしょうか。

山本　「団地」というスタイルをつくって、そこにたくさんの人たちが長い間生活をしてきていますからね。『滝山コミューン一九七四』（2007年、講談社）という本では、著者の原武史さんが昔の公団住宅に住んでいて、そこで成長した子供たちのところを訪ねています。そこでは、いくら団地批判があったとしても、そこでの記憶や景観を大切にしている人がとてもたくさんいるんだということが書かれています。

安田　木も大きく育ってる場所が多くて、当時は苗木だったものが、20、30年経って大木になってきた風景があります。設計当時はきっと、そうやって木が育つことを想定して隣棟間隔も決めていたのではないでしょうか。でもやっと育ったら、団地を壊してしまう。果たしてそれでよいのか、いろいろな意味を込めて、社会的な意味を問いたい作品です。

山本　先ほどの「LCCM住宅」もそうですが、住宅は本当に評価軸をどこに置くかがとても難しいですね。
今回は読者の方からも住宅を推薦していただき、作品としては、藤本寿徳建築設計事務所「須波の家」（本誌1106）、前田圭介/UID「Rustic House」（本誌1105）、芦沢啓治建築設計事務所「SKYCOURT」（本誌1106）、藤江通昌／ESPAD環境建築研究所「優間の家」（本誌1109）、丸山弾建築設計事務所「那須の家」（本誌1101）がありました。それぞれによく考えられていて、住宅のもつ居心地や、シェルターとしての精度の高さはとても高いものだと思うのですが、本当にそれだけでよいのか、できればその先を見据えた、「一住宅＝一家族」という枠組みも超えて次の提案に結び付くような住宅に今回は目を向けたいと思います。

安田　以前の新建築賞の系譜を見ていても思いますが、ディテールがない住宅というのはあり得ないように思います。ディテールがきちんとあって、住宅であるというスタンスを感じます。でも、住宅がひとつの建築である以上は、それだけではなくて、人間にとっての新たな発見の場でもありたいですよね。

──これですべての作品が出そろいましたので、二次審査へ進む5作品を決めていただきたいと思います。

山本　いろいろ話をする中で絞れている感じがありますが……大西さんたちの作品は安田さんも推薦されていますが、ここでの生活は楽しそう。是非話をお聞きしたいですね。

安田　実は推薦の時見落としてしまっていましたが、畝森さんの作品についても聞いてみたい。

山本　生田さんの作品もよいですね。周辺との関係や細かいところへの配慮が気になりますが、それでも面白い構成の住宅だと思います。

安田　どのようにしてあの構成を考え出したのかがポイントですね。是非聞いてみたいです。それと、今村さんと篠原さんの作品も衝撃的でしたから、とても興味深いです。僕も話を聞いてみたいと思います。
僕が推薦している「LCCM住宅」と「たまむすびテラス」の2作品は、いま、こういった住宅のあり方の社会的な意味合いを問うためにも、是非議論する必要があると思って挙げています。住宅の新人賞といった意味合いでの対象にはなりづらいものと認識はしていますが、これから先の時代、今を入口として広がっていく流れだと思いますので、是非皆さんにも考えてみていただきたいと思います。

──では、二次審査へ進むのは、次の5組の方たちにしたいと思います（右頁参照）。
また日を改めて、それぞれ受賞対象者と直接対話する形式の二次審査を開催致します。どうもありがとうございました。

（2012年7月20日　新建築社にて　文責：本誌編集部）

二次審査 選考対象5作品

Forest bath
生田京子建築研究室　尾関建築設計事務所

生田京子　Kyoko Ikuta
1971年東京都生まれ／1995年早稲田大学大学院卒業／1995～2001年大林組東京本社設計本部／2002～03年デンマーク王立アカデミー建築学校／2005年名古屋大学大学院博士課程修了／2005～07年名古屋大学助手／2007～08年名古屋大学助教／2008～10年名古屋大学施設計画推進室准教授／2010年～現在、名城大学准教授

二重螺旋の家
大西麻貴＋百田有希／ o+h

大西麻貴　Maki Ohnishi
1983年愛知県生まれ／2006年京都大学工学部建築学科卒業／2008年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了／2008年～大西麻貴＋百田有希共同主宰
百田有希　Yuki Hyakuda
1982年兵庫県生まれ／2006年京都大学工学部建築学科卒業／2008年京都大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了／2008年～大西麻貴＋百田有希共同主宰／2009年～伊東豊雄建築設計事務所勤務

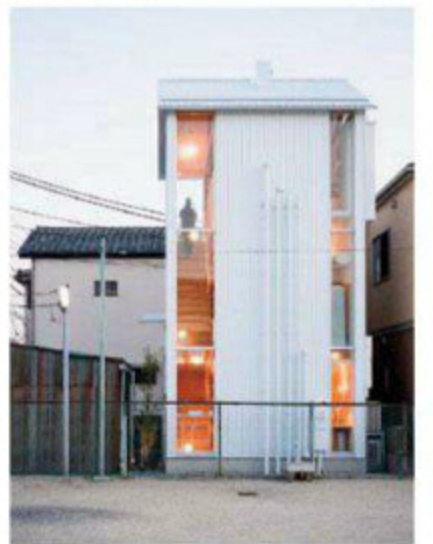
駒沢公園の家
今村水紀＋篠原勲／ miCo.

今村水紀　Mizuki Imamura
1975年神奈川県生まれ／1999年明治大学理工学部建築学科卒業／2001～08年妹島和世建築設計事務所／2008年miCo.設立／2009年～女子美術大学非常勤講師
篠原勲　Isao Shinohara
1977年愛知県生まれ／2003年慶應大学大学院政策メディア研究科修士課程修了／2003年～SANAA事務所／2008年miCo.設立

Small House
畝森泰行建築設計事務所

畝森泰行　Hiroyuki Unemori
1979年岡山県生まれ／2005年横浜国立大学大学院修士課程修了／2002～09年西沢大良建築設計事務所／2009年畝森泰行建築設計事務所設立／2012年～横浜国立大学Y-GSA設計助手

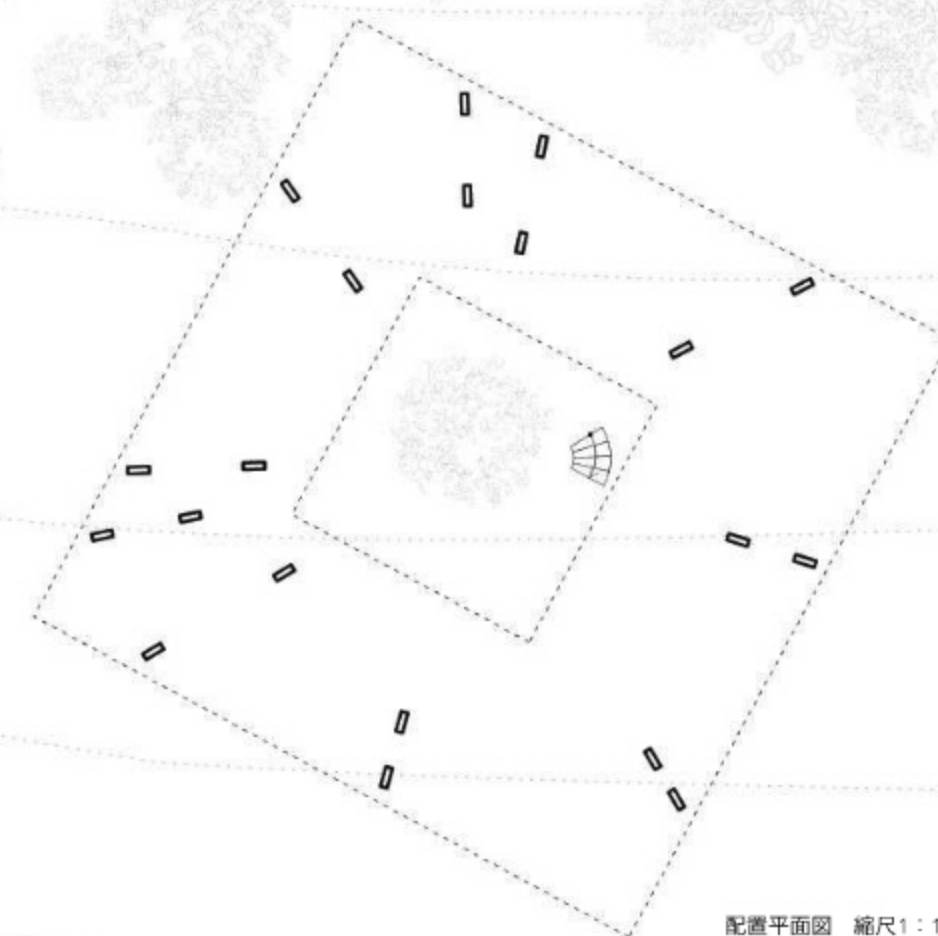
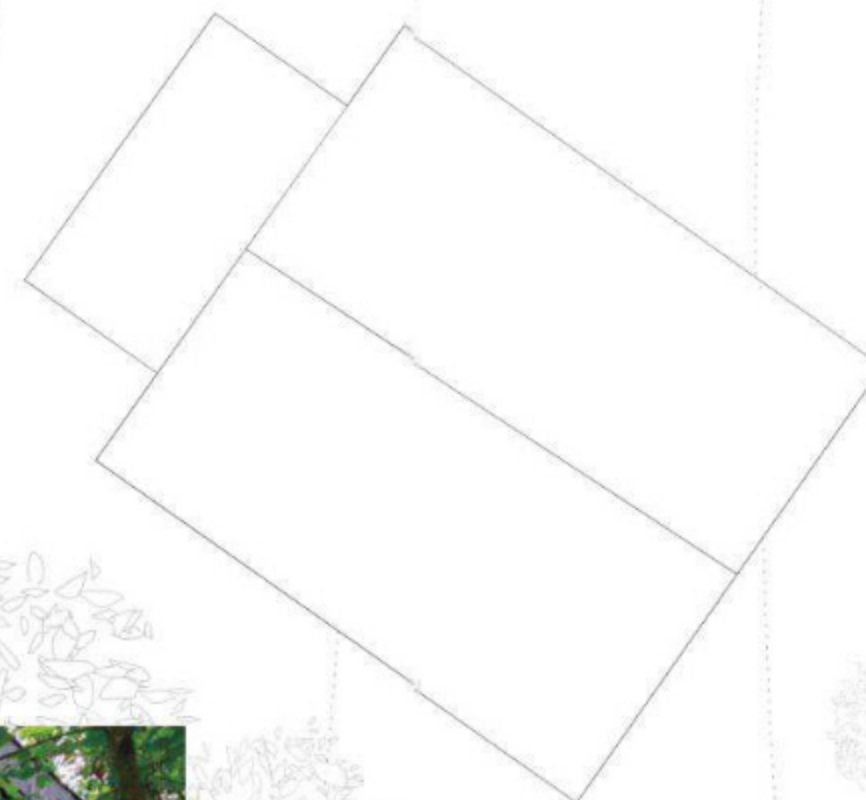
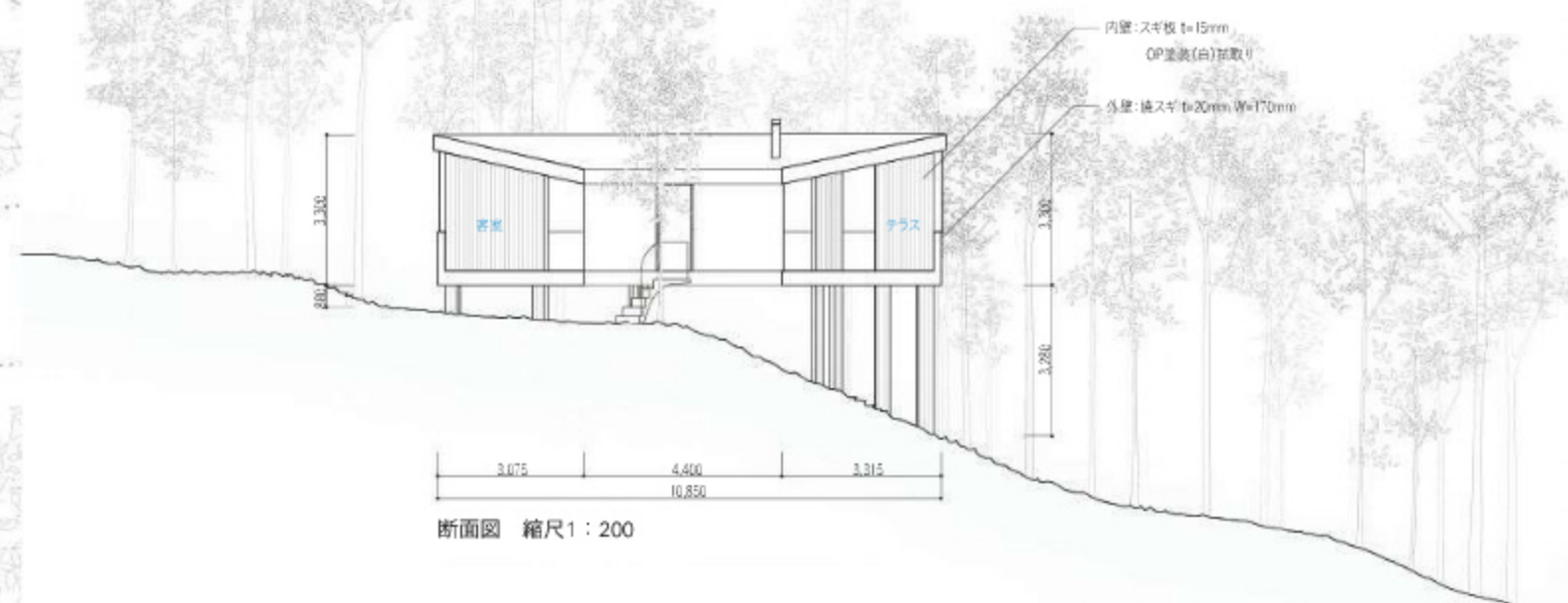
シナの木と白い家
髙橋真紀＋潮上大輔／髙橋真紀建築設計事務所

髙橋真紀　Maki Takahashi
1975年東京都生まれ／2000年昭和女子大学大学院修士課程修了／2000～03年RABBITSON／2005～07年岡田哲史建築設計事務所／2007年髙橋真紀建築設計事務所設立
潮上大輔　Daisuke Shiokami
1976年大阪府生まれ／1999年東京農業大学農学部造園学科卒業／2002年法政大学大学院工学研究科修士課程修了／2002年～安井建築設計事務所

展の家

spread house
長野県茅野市

武井誠＋鍋島千恵／TNA
Makoto Takei＋Chie Nabeshima／TNA

北側外観。傾斜地に建つ口の字型の空間は基礎から連続し放射状に広がる壁柱に支えられ外周、内周（中庭側）とも4面開口となっている。アプローチのブリッジは地面から約2mもち出している。ブリッジ手前の足下灯もオリジナルデザイン。

東側の敷地下方より建物を見上げる。放射状の基礎に囲まれた中庭が木々の間に浮かび上がる。地震力の向きの応じて2組でひとつの柱が、中庭を挟んだ向かい側の柱と対になって構造的に働いている。

中庭の夕景。積雪や生態系に配慮し建物を斜面からもちあげることで、外側に広がる斜面と連続して人の居場所にもなっている。2本柱はそれぞれ上部室内の壁と対応し、中庭に向かって放射状に位置する。室内では森に向かうと壁の存在が消え、部屋を移動すると壁の存在が際立ってくる。

キッチン・ダイニング。方向性をもった壁柱が回廊状の一室空間の中に居場所をつくる。屋根は中庭に向かって勾配（1/10）をつけることで、森側から見る外観としての屋根の存在を消し、室内から森を見る時の天井の存在感を薄くしている。

寝室。外周部は 850mmの高さまで腰壁を立ち上げ、その上に高さ1,900mmの、中庭側も床から高さ1,900mmのガラスの開口を4面回している。

沈下橋

橋には2種類ある。一般的な橋は「抜水橋」と呼ばれ、われわれが普段使っている「橋」である。一方、四万十川には「沈下橋」と呼ばれる橋が架かっている。その名の通り、増水時には橋が沈み、向こう岸に渡ることができないのだが、水位が下がれば何事もなかったかのようにもとの姿に戻る。日本最大級の川に架けられた橋は非日常的な氾濫をかわすべく、ガードレールさえも取り払われている。「沈下橋」は人間と雄大な川面との間にスリリングな関係をつくりながら、生活文化遺産として四万十川流域の対岸の日常を今もしっかりとつないでいる。

展の家

別荘は圧倒的な自然の中に身を置き、日常との間に少しだけ断絶状態をつくり出しているといえる。 それは一時的に四万十川に沈む橋のように、自然のありのままの状態を引き受けることで、周辺の自然環境の圧倒的な魅力に近付くことができる関係かもしれない。「　の家」の敷地は、東に向かって緩く傾斜しており、くの字で折れ曲がった道が敷地を取り囲んでいる。別荘地では珍しい、高低差のある「2面接道」の斜面である。木々の間を散策していると、居心地のよい場所が次々と　開していくような、斜面で分断された森をつなぐ建築をつくろうと考えた。

森の構造

木の間隔や位置、枝の疎密や方向、葉の裏表や大きさといった森の構成要素の中で、生物は最適な場所を選択して暮らしている。そういった豊かな森の中で、人間と自然との居心地のよい関係性を考えてみたいと思った。

壁を森の中に放射線状に広げると、その間には森の外へ向かって開きながらも囲われた場所ができる。壁の長さ、壁同士の角度、壁の方位は、居場所の性質と周囲の森の環境との関係で決められており、壁の集まる中心をなくすことで、内側に向かっても開かれる。積雪から縁を切るようにもち上げられた床は、生物が巣をつくる森の上層環境と同じように、人の居場所になっている。地面と建物は、室内の壁の両端から伸びた壁柱によってつながっていて、木々の足元を縫ってできる獣道のように、方向性がありつつも、動き回ることができる下層環境をつくっている。放射状に並んだ壁の中心、すなわち建物に囲われた斜面に立つと、もっとも森から離れているのに、壁や屋根、床や腰壁が視界から消え、森ともっとも近い居場所であることに気付く。それは、斜面が建物の中に入り込んでできた森の内部であり、森が建物で切り取られた外部の部屋だからだ。

端のかたち

世界で頻発する自然災害を目の当たりにしていつも思うことは、自然の脅威による表層的な風景以上に、その場所のもつミクロな構造にも目を向けるべきではないかということだ。建築行為は自然に対する攻撃ではなく、自然からの享受に始まるとすると、建物と大地との関係は、繊細でなくてはならない。

「輪の家」(本誌0611)、「廊の家」「(本誌0901)、「方の家」(『新建築』0910)「　の家」と、人間と自然との関係で生じる「端」のかたちをつくってきた。沈下橋が、川の抵抗を減らすためにあらゆる箇所が流線型であるように、別荘も自然の力をしなやかにかわしながら、それでいて、周辺環境の魅力的な風景を構成するかたちの一部になるような、自然との豊かな関係をつくる「端」の建築であるべきなのだ。(武井誠+鍋島千恵)

左・右：四万十川にかかる沈下橋である向山橋。
写真提供／TNA

納戸から趣味室まで見通す。左側手前の壁とその後ろの壁の間が玄関、その後ろが客間、そして趣味室。床はオーク、壁と天井はスギ板にOP拭き取り。

デッキから室内を見返す。中庭の中心に植わっているのは山もみじ。

ダイニング・キッチンの開口部。開閉するスチールの建具は壁の外側で上部から吊っている。建具枠を天井の中と外壁の外へ追いやり、落葉や積雪、虫など外部環境が堆積する場所を最小限にし、外部と内部の境界を視覚的にも機能的にも軽快にしている。

断面詳細図　縮尺1：10

展の家

所在地／長野県茅野市
主要用途／週末住宅
家族構成／夫婦

設計
TNA　担当／武井誠　鍋島千恵　綾城圭
構造　小西泰孝建築構造設計
　担当／小西泰孝　鈴木健

施工
第一建設　担当／小林竜二
設備　白山商会　担当／白山尊信
電気　掛川電設　担当／掛川勇治
薪ストーブ　山林舎　担当／児玉新時
外階段　東工　担当／草彅基文

構造・構法
主体構造・構法　鉄骨造
基礎　布基礎

規模
階数　地上1階
軒高 6,650mm　最高の高さ 6,750mm
敷地面積　1,034.3m²
建築面積　98.3m²
（建蔽率 9.51％ 許容 20％）
延床面積　98.3m²
（容積率 9.51％ 許容 40％）
1階　98.3m²

工程
設計期間　2010年9月〜2011年2月
工事期間　2011年3月〜2011年8月

敷地条件
地域地区　自然公園法
道路幅員　北5.5m　南4m
駐車台数　1台

外部仕上げ
屋根／FRP防水（指定色塗装）
外壁／焼スギ t=15mm
開口部／鋼製建具 複層硝子

内部仕上げ・使用機器
リビング　ダイニング　キッチン　寝室
床／オーク t=15mm OS
壁・天井／スギ板 t=9mm OP拭き取り

浴室　玄関　テラス
床／セランガンバツ t=20mm
壁・天井／スギ板 t=9mm OP拭き取り
厨房機器／AEG 6800 3KF-N
照明／外構照明・ペンダントライト（TNAオリジナル：東工）
衛生器具／Tform
空調器具／薪ストーブ（TNAオリジナル：山林舎）

設備システム
空調　暖房方式／薪ストーブ　電気式床暖房
換気方式／24時間式機械換気+自然換気
給排水　給水方式／上水道直結
排水方式／浄化槽
給湯　給湯方式／ガス給湯器

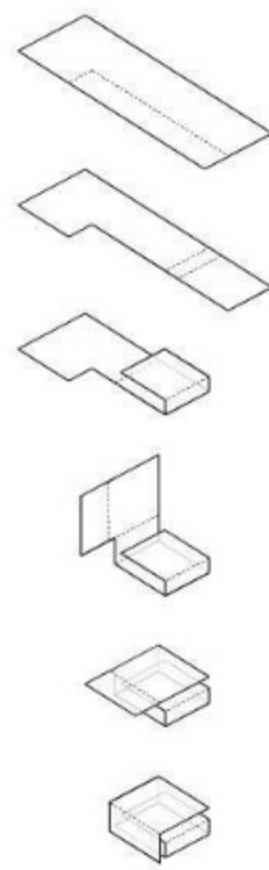
撮影／新建築社写真部

敷地は海抜約100mの高さにあり、南面に街並みや瀬戸内海が開ける。

TA-HOUSE

兵庫県西宮市

窪田勝文／窪田建築アトリエ
名和研二／なわけんジム
Katsufumi Kubota ／
Kubota Architect Atelier
Kenji Nawa ／ NAWAKENJI-M

コンクリートプレート１枚からかたちができている。

プレートがかたちをつくる過程を示すダイアグラム

下：7世紀はじめの古墳に面する南側外観。／右：600mmの庇の出にテーパーをつけ、コンクリート躯体の抽象度を高めている。

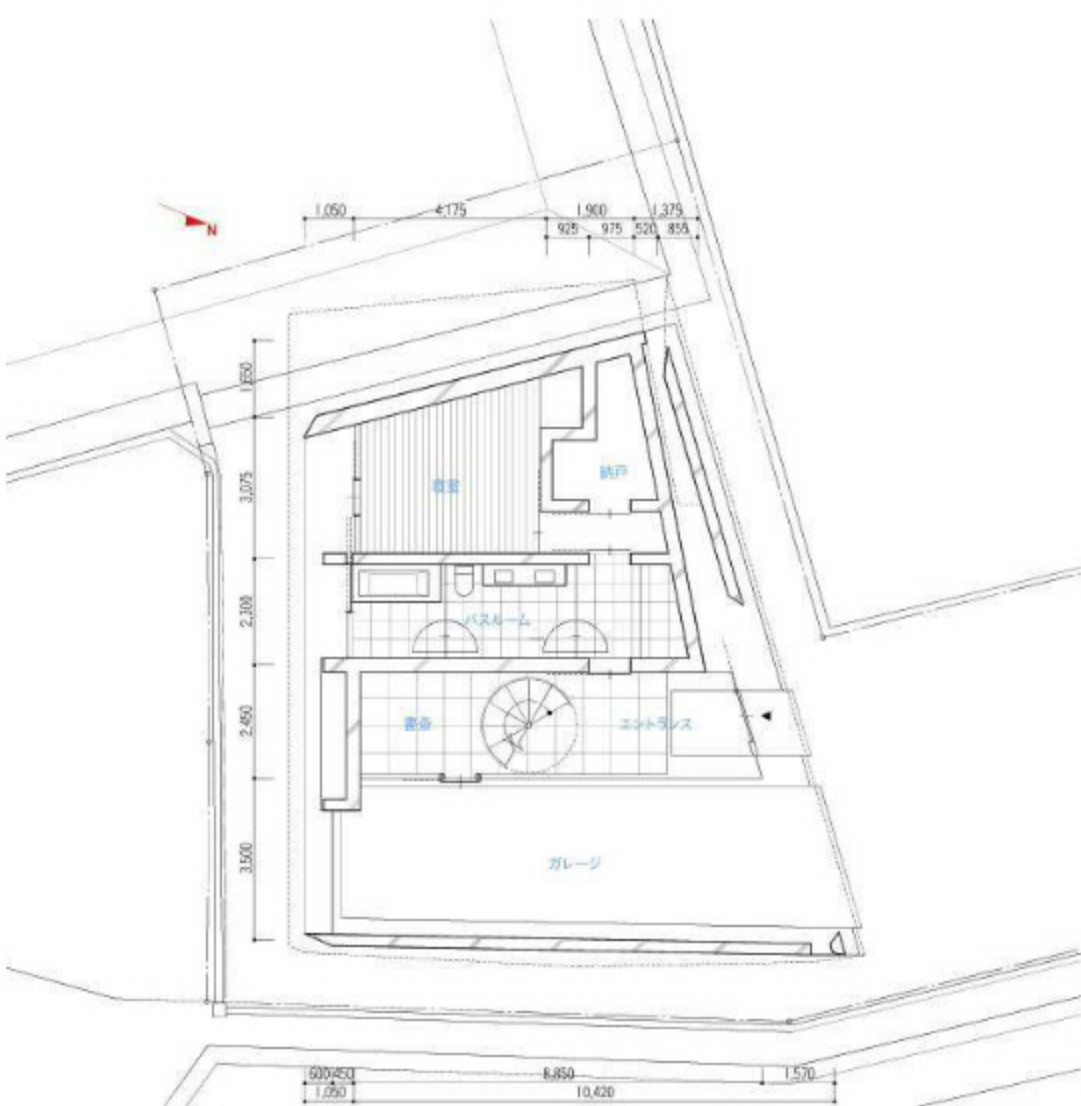
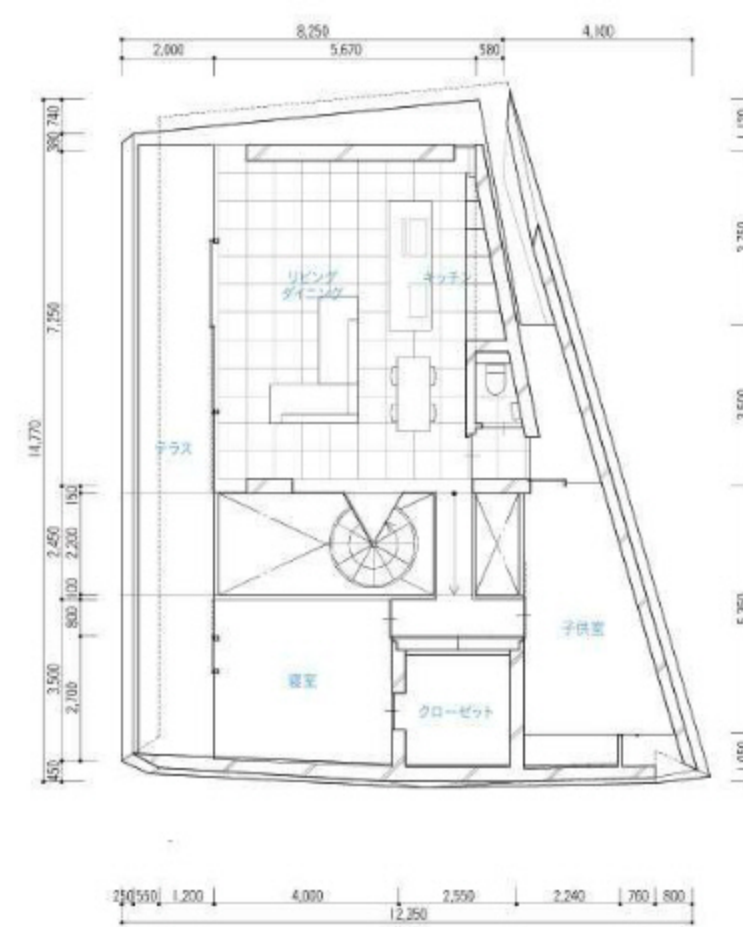
リビングダイニングは天井高2,700〜3,200mmに変化する。開口部はステンレス製サッシ、方立ては構造体の鉄骨無垢柱。

抽象化された建築が導く自由

今回の敷地は兵庫県の東部に位置し、周辺はほぼ住宅で埋め尽くされた中にある。その中でも微かに残った小高い丘状の敷地を造成した一角にあり、周囲の密集した住宅群からほんの少しだけ突出した場所に位置していた。そのために阪神間でも類い稀なほどに素晴らしい夜景を放つ街並みと、瀬戸内の穏やかな海のきらめきが180度を超えるパノラマ状に広がる。さらには、海抜約100mの高さにあることで、上下、左右共に空中からの風景で視界は埋め尽くされる。豊かな自然と整然とした街並みを見下ろしていると、まるで天上の世界に迷い込んだかのような気持ちにさせられる。

接している生活道路との高低差はないに等しく、北面は密集した住宅群のひとつとしてほとんど開放性を感じない佇まいを醸し出す。それに対し、街を見下ろす南に向かう前面は可能な限り開放し、内部の空間と外部環境との境界を失わせていくことで心の中にある垣根をも取り払い、深く強烈な自由を感じさせる。また、地域としては風致地区の指定を受け、30%以上の緑地や植栽が求められることも考慮して、敷地の南側いっぱいに寄せて建てることにした。さらに南の隣地に見える大きな石群は、7世紀はじめ頃に埋葬された老松古墳で、60基の横穴式石室からなる八十塚古墳群のひとつである。歴史を刻む古墳と現代の街並みが共に存在し、時間の流れを実体的に感じる中でさまざまなファクターのわずかな変化さえもキャッチして、変動するダイナミズムを感知できる空間を具現化しようと試みた。1枚の白いプレートを、一方向に巻き込むことのみで空間をつくり出す。最少の要素と操作によって生まれた空間の中、素材はもとより極小化した端部やディテールは、建築自身だけでなく自然や環境も含めたすべての存在を抽象的な世界へと導いていく。具象的なる実態を、概念的、精神的な視点によって翻訳し、抽象というプラットフォームへと誘って、自らの中にある「心」と融け合わせ一体化する。固定化された建築の触媒的作用によって起こるプロセスを経て、変化し続ける「自然」と揺らぎ続ける「心」が反応し融合して、自然の動きと共にどこまでも広がる心の襞が、自らの境界を抜け出して本質的な自由を獲得し、生活に豊かさが満ち満ちていくことを願っている。　（窪田勝文）

子供室よりリビングダイニングを見る。子供室はリビングダイニングに比べ、470mm床が上がる。

リビングダイニングの照明はプレート面には設置せず、キッチン収納棚上部に設置した蛍光灯（遠藤照明 シームレストラフ）のみ。

1階平面図　縮尺1：200

2階平面図

左：ガレージからの室内を見る。階段室の吹抜け回りにライン照明を設置。／右：1階寝室からの眺め。天井高は2,500mm

接道面側外観。風致地区規定に沿い、建物を敷地の南に寄せ、北側を緑化している。

配置図　縮尺1：2,000

TA-HOUSE
所在地／兵庫県西宮市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子＋母

設計
窪田建築アトリエ　担当／窪田勝文　樋崎和也
　窪田知紗　松山康洋
構造　なわけんジム　担当／名和研二　下田仁美

施工
建築　ケイ・アイ・エス　担当／阪本権一郎
　乾勝彦　椎木俊作　坂本浩二
設備工事　シーティーテック
　担当／城野俊哉　羽方亮
土工事　河村建設工業　担当／河村鉄雄
型枠工事　安藤工務店　担当／安藤文利
鉄筋工事　小笹鉄筋　担当／小笹一郎
地盤改良工事　報国エンジニアリング
　担当／塚本英　大蔵雅雄
コンクリート工事　旭　担当／真鍋貴幸
防水工事　キンキ瀝青工業
　担当／中村正　中村正義
タイル工事　キバタイル　担当／木場昇
木・軽鉄工事　ユタカ建装　担当／多田豊
金属工事　大栄製作所
　担当／盛山直志　盛山直也
金属製階段工事　尾崎製作所　担当／尾崎正夫
左官工事　平野工業　担当／平野秀明
金属製建具工事　メタル・テクノ
　担当／権屋幸雄　石原昌俊
　文化シャッター　担当／村上尚史　岸田義博
木製建具工事　上中産業
　担当／上中克彦　松江勤
硝子工事　猪股工業　担当／猪股文義
塗装工事　平野塗装　担当／平野順一
内装工事　メル・コーポレーション
　担当／延山憲則
家具工事　カリエラ　担当／船越優二
　すぎおか工房　担当／杉岡滋
キッチン工事　キッチンハウス　担当／小山一斉
　木村修二　久保沙織　渡部剛　田島宗八
外構工事　小西造園　担当／小西寿生

構造・構法
主体構造・構法　鉄筋コンクリート造
基礎　べた基礎

規模
階数　地上2階
最高の高さ 7,090mm
敷地面積　310.13m²
建築面積　123.20m²
　（建蔽率39.73% 許容40%）
延床面積　199.21m²
　（容積率52.26% 許容100%）
　1階　102.08m²　2階　97.13m²

工程
設計期間　2009年7月〜2011年6月
工事期間　2011年7月〜2012年4月

敷地条件
地域地区　第一種低層住居専用地域　第三種風致地区　第一種高度地区　法第22条指定区域
道路幅員　北5.0m

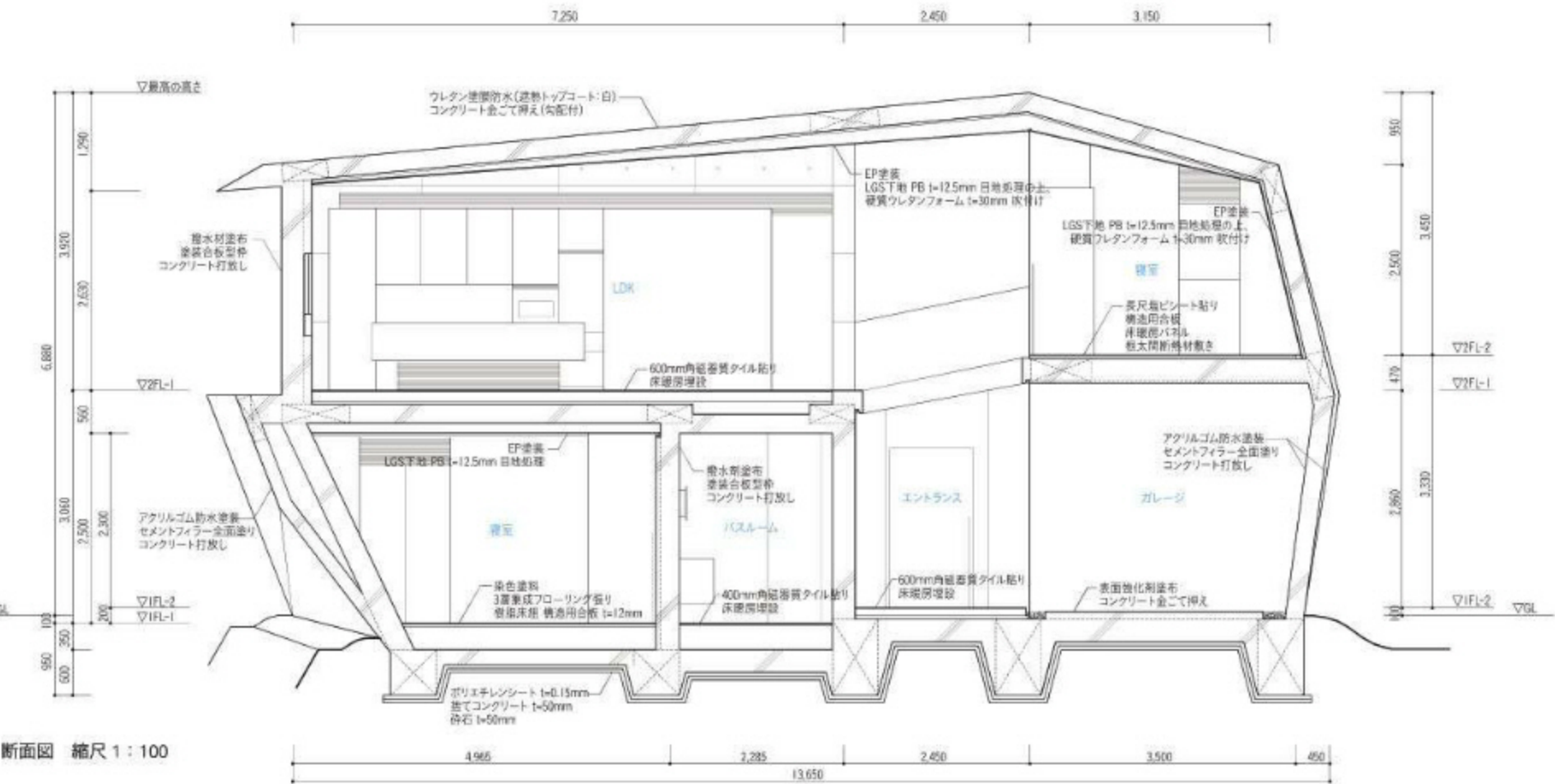
外部仕上げ
屋根／コンクリート金ごて押え ウレタン塗膜防水遮熱トップコート
外壁／コンクリート打放し 補修アクリルゴム防水塗装　コンクリート打放し撥水剤
開口部／ステンレス製サッシ
外構／植栽　芝　砂利敷

内部仕上げ
玄関ホール　書斎
床／600mm角タイル貼り
壁／コンクリート打放し
照明／遠藤照明 T5 シームレストラフ
1階寝室
床／3層集成フローリング オスモカラー
壁／コンクリート打放し　コンクリート打放し補修 EP
天井／PB t=12.5mm EP
照明／遠藤照明 T5 シームレストラフ
LDK
床／600mm角タイル貼り
壁／コンクリート打放し
天井／PB t=12.5mm EP
照明／遠藤照明 T5 シームレストラフ
2階寝室　子供室
床／長尺シート
壁／コンクリート打放し補修 EP
天井／PB t=12.5mm EP
照明／遠藤照明 T5 シームレストラフ

設備システム
空調　冷暖房方式／空冷ヒートポンプ式エアコン
　換気方式／機械排気
　床暖房／ガス温水式
給排水　給水方式／上水道直結
　排水方式／下水道接続
給湯　給湯方式／ガス温水器

撮影／新建築社写真部

断面図　縮尺1：100

階段室を介し、子供室より外を望む。2階は間仕切り壁に透明強化ガラスを用い、室内の開放性を高めている。

敷地は新興住宅地と田畑の境界に位置し、南に面する田畑は1,100mm地盤が下がっている。

山崎町の住居

HOUSE IN YAMASAKI

兵庫県宍粟市

島田陽建築設計事務所／タトアーキテクツ

YO SHIMADA

配置図　縮尺1：4,000

北側外観。1階の床レベルは地盤から760mm掘り下げてあり、1,800mmの基壇部に設置した玄関扉（写真右手）から室内に入る。
外壁はフレキシブルボード下見板張りで、開口部は高さ1,300mmの既製品引き違い窓の片面のみを使用したもの。基壇の上部には素材の異なる3つの小屋を設置。

北側接道面からの外観。周囲の住宅よりもヴォリュームが低く、田畑方向に視界が抜ける。

小屋に使用している材料は、この地域に存在する農作業小屋で使われる素材。

1階に開けられた約1,200mm角の開口からの風景は、地面が近くに感じられる。

安定した室内気候をさがして

兵庫県北部に建つ夫婦と子どもふたりのための住宅だ。

敷地は曇天の多い山間部で、そこに明るく安定した室内気候をつくり出したいと考えた。でき上がった住宅は高さ1,800mmの灰色の基壇上に3つの家型の小屋が並んでいる。

まず、斜面地を造成した敷地だったので良好な地盤まで掘り下げたいと考えたこと、基礎蓄熱型床暖房を採用しており、地熱を利用してさらに安定した性能を発揮させたいことなどの理由から、1階床面を地盤面から760mm掘り下げた。また、これにより屋上と地面が近くなり敷地全体を庭のように使えるのではないかと考えた。敷地は住宅地の入り隅に位置するため、屋上面を下げることで空や山などの周辺環境への抜けをつくり出すことは、この新しい住宅地にとっても、よいことのように思えた。

立体化した中庭

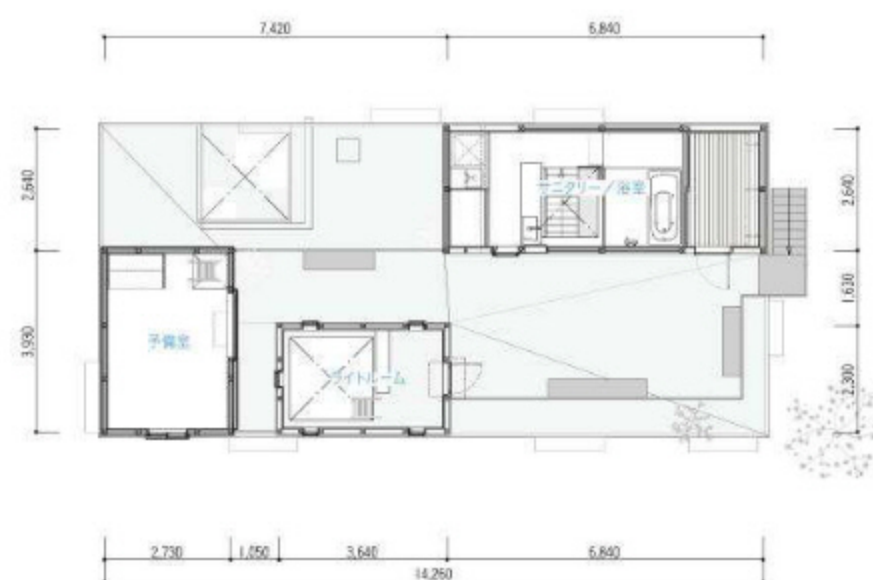
基壇の上に3つの家型の小屋を並べ、それぞれ予備室、サニタリー、ライトルームとした。サニタリーとライトルームは下階に対しての採光や通風を担っている。ある意味では立体化した中庭ともいえる。特にライトルームは冬期には集熱装置として働き、夏期は電動で一斉に開閉できる合計5カ所のサッシにより風をとらえて速やかに熱を排出する。実は外部から住居のように見える家型は人が常に滞在するスペースではなく、その下の基壇に生活が広がっていることになる。

結果として近隣の目線からは遠ざかり、庭や、外で遊ぶ子どもの目線と近付くことになって周辺環境から奇妙な近さと遠さをつくり出せたように思う。

敷地は田畑が住宅地に置き換わっていく境界に位置する真新しい住宅地で、真新しい商品化住宅が建ち並ぶことが予想された。そこにこういった波板などの農村地帯のバナキュラーな素材を利用した農作業小屋のようなスケールをもつ住宅を建てることで、既存の田園風景と新たな住宅群の両者をつなぐ存在となることを期待した。

ものたちの自由な振る舞いを

室内にはいくつか収納やトイレなど箱状のヴォリュームが必要だったので、梱包用の箱のように仕立てた。また、屋上の手摺りについて、防水層を痛めない固定方法を考えているうちにベンチと手摺りが交じり合った。吹抜けの開口には洗面台が掛かり、手摺りを兼ねている。ライトルームはほとんど温室そのものだ。ここではさまざまな要素が参照要素として誤用され、手摺りやトップライトなどの建築的な要素は慣習的な事物と混ぜ合わされ、二重の意味を帯びている。そのようにした理由は、これらの操作によって、その場にあるすべてのものがブリコラージュ的にたまたまそのように使われているにすぎないという、ある種の自由さを室内風景につくり出したかったからだ。それにより住人のもち込む、多様なものたちも自由に振る舞うことができるのではないかと期待している。　（島田陽）

1階平面図　縮尺1：200

2階平面図

1階東側から西側を見通す。収納や間仕切り壁は間柱を現しに、また引き戸のレールを床面で納めることで梱包用の箱のような見え方をつくり出している。写真右手の階段はサニタリーに、中央奥の梯子は予備室に向かう。

南北断面図　縮尺1：70

東西断面図

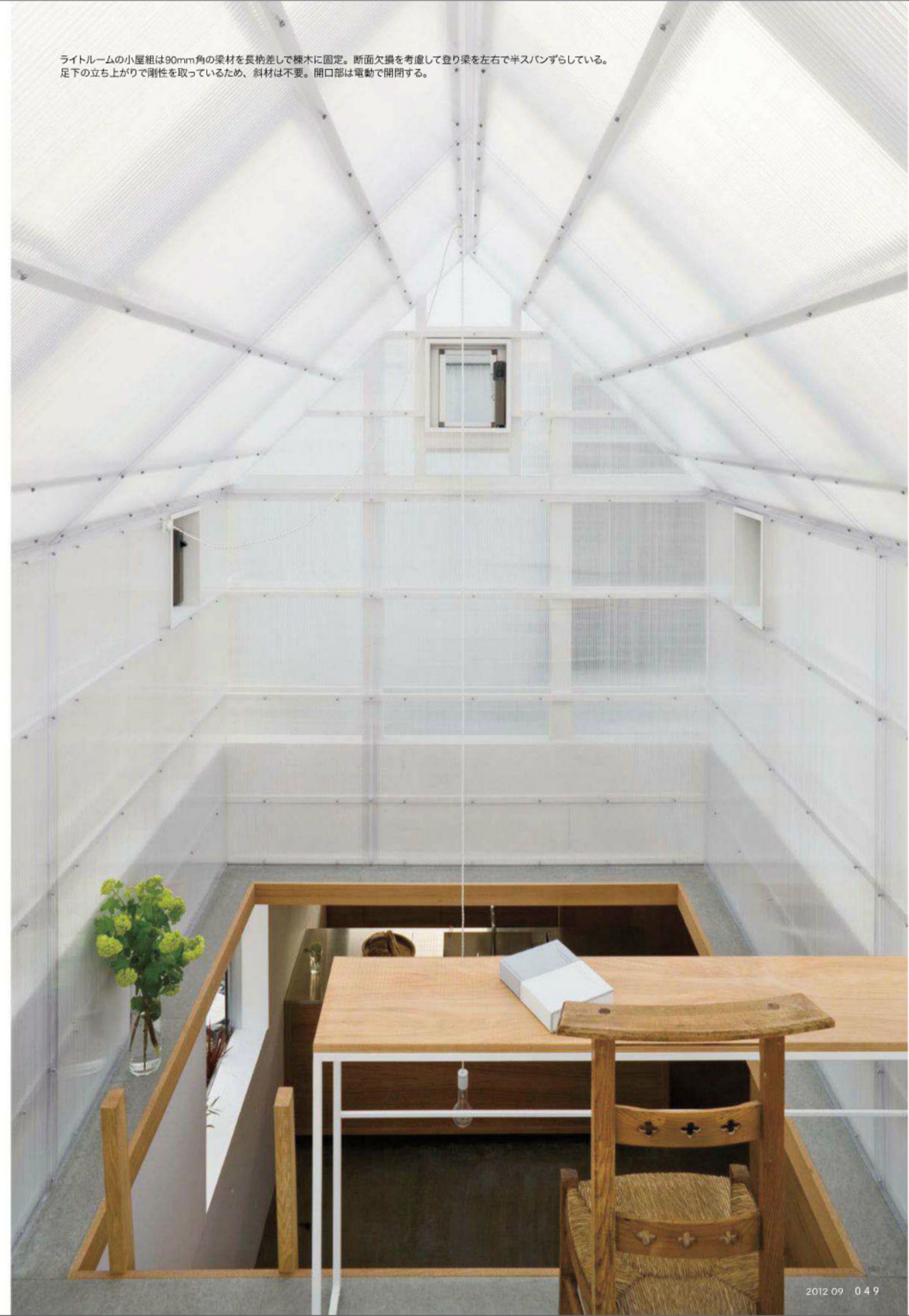
小屋断面詳細図（左から予備室、ライトルーム、サニタリー）　縮尺1：20

室内環境を保つために

基壇上に建ち並ぶ3つの小屋のうちサニタリーとライトルームは日射を取り込むため、ポリカーボネイト波板を外壁に採用している。波板と軸組の間には温室の吸水・吸湿・保温用シートを挟み、両者とも内壁側はポリカーボネイト複層板で断熱層を形成した。サニタリー棟にはさらに壁天井内にペットボトルを再生した透光性の断熱材を充填している。1階と2階の距離を近付けるために、両者をつなぐ開口部付近は50mm角鋼管を敷き並べて床材と天井材でサンドイッチし、合計90mmとした。猛暑時や厳冬期夜間には開口部をシェードで塞ぐこととしている。
基壇部の外壁は厚さ8mmのフレキシブルボードの下見板張り。下地を加工して浮かすように取り付け、端部の水切れを図ると同時に陰影をつくり出した。コンクリート部は外断熱とし、外周には雨水の排出や断熱を考えて割栗石を敷き詰めている。　（島田）

左：予備室から屋上を見る。予備室はラワン合板突付張り。／右：サニタリーの階段手摺りは洗面台が担う。

ダイニングからライトルームへの抜け。逆梁にし、吹抜け回りの床を鋼管組みにすることで、床の厚みを87mmに抑えている。

ライトルームの小屋組は90mm角の梁材を長枘差しで棟木に固定。断面欠損を考慮して登り梁を左右で半スパンずらしている。
足下の立ち上がりで剛性を取っているため、斜材は不要。開口部は電動で開閉する。

サニタリーの小屋組は105mm角の柱梁材に9mmのスチールロッドによる筋交いで剛性を確保している。
蛍光アクリルの踏み台や1階クローゼット1の換気窓（43頁写真右）はタトアーキテクツで製作。

屋上の手摺りは防水層を痛めないようにベンチを兼ねて屋上面に置かれている。屋根仕上げや棟の高さは小屋ごとに異なる（詳細は46頁）。

山崎町の住居

所在地／兵庫県宍粟市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供2人

設計

島田陽建築設計事務所／タトアーキテクツ
担当／島田陽　濱崎容子
構造　S^2Associates　担当／橋本一郎

施工

笹原建設
設備／ダイワ商会
電気／山村設備商会
外構・造園／植物事務所 COCA-Z
担当／古鍛冶達也

構造・構法

主体構造・構法　木造在来工法
基礎　べた基礎

規模

階数　地上2階
軒高 4,120mm　最高の高さ 5,550mm
敷地面積　231.72m^2
建築面積　93.68m^2
（建蔽率40％ 許容60％）
延床面積　119.11m^2
（容積率51％ 許容200％）
1階　86.72m^2　2階　32.39m^2

工程

設計期間　2010年10月〜2011年8月
工事期間　2011年10月〜2012年2月

敷地条件

地域地区　都市計画区域内　区域区分非設定
道路幅員　北5.0m　　駐車台数2台

外部仕上げ

屋根・外壁
2階：サニタリー／ポリカーボネイト小波板
ライトルーム／ポリカーボネイト小波板
予備室／ガルバリウム鋼板 t=0.4mm 小波板
1階：屋根／ FRPトップコート仕上げ
外壁／フレキシブルボード t=8mm 素地
開口部／アルミサッシ（TOSTEM）　木製建具
外構／砕石敷き

内部仕上げ

リビング　ダイニング　キッチン

床／モルタル金ごて仕上げ t=30mm 表面強化剤
壁・天井／ラワン合板 t=6＋6mm EP
厨房機器／
食洗器／パナソニック NP-45MD5S
IHヒーター／三菱電機CS-G30M
換気扇（シェード）／ CONFALE CON-3L-601
シンク水栓金物／混合栓（TOTO TKWC35）

サニタリー　バスルーム

床／ FRPトップコート仕上げ
壁・天井／ポリカーボネイト複層板 t=10mm
照明／ NIPPO FLR96T6
洗面台／ TOTO MR710
バスタブ／大洋金物 FLN72-4304
シャワー水栓金物／ GROHE 3362410J

ルーム1　ルーム2

床／ナラ無垢フローリング t=15mm オスモフロアクリアー
壁・天井／ラワン合板 t=6＋6mm EP

予備室

床／構造用合板 t=24mm＋ラワン合板 t=6mm オスモフロアクリアー
壁・天井／ラワン合板 t=6＋6mm 素地

設備システム

空調　冷暖房方式／ルームエアコン
換気方式／第三種換気
その他／床暖房　1F：深夜電力利用
基礎蓄熱床暖房：エナーテック
給排水　給水方式／市上水道直結
排水方式／公共下水道直結放流
給湯　給湯方式／自然冷媒ヒートポンプ給湯器

撮影／新建築社写真部

左：サニタリーに向かう階段。／右：サニタリーの浴槽脇は半外部となっており、ここから屋上に出られる。

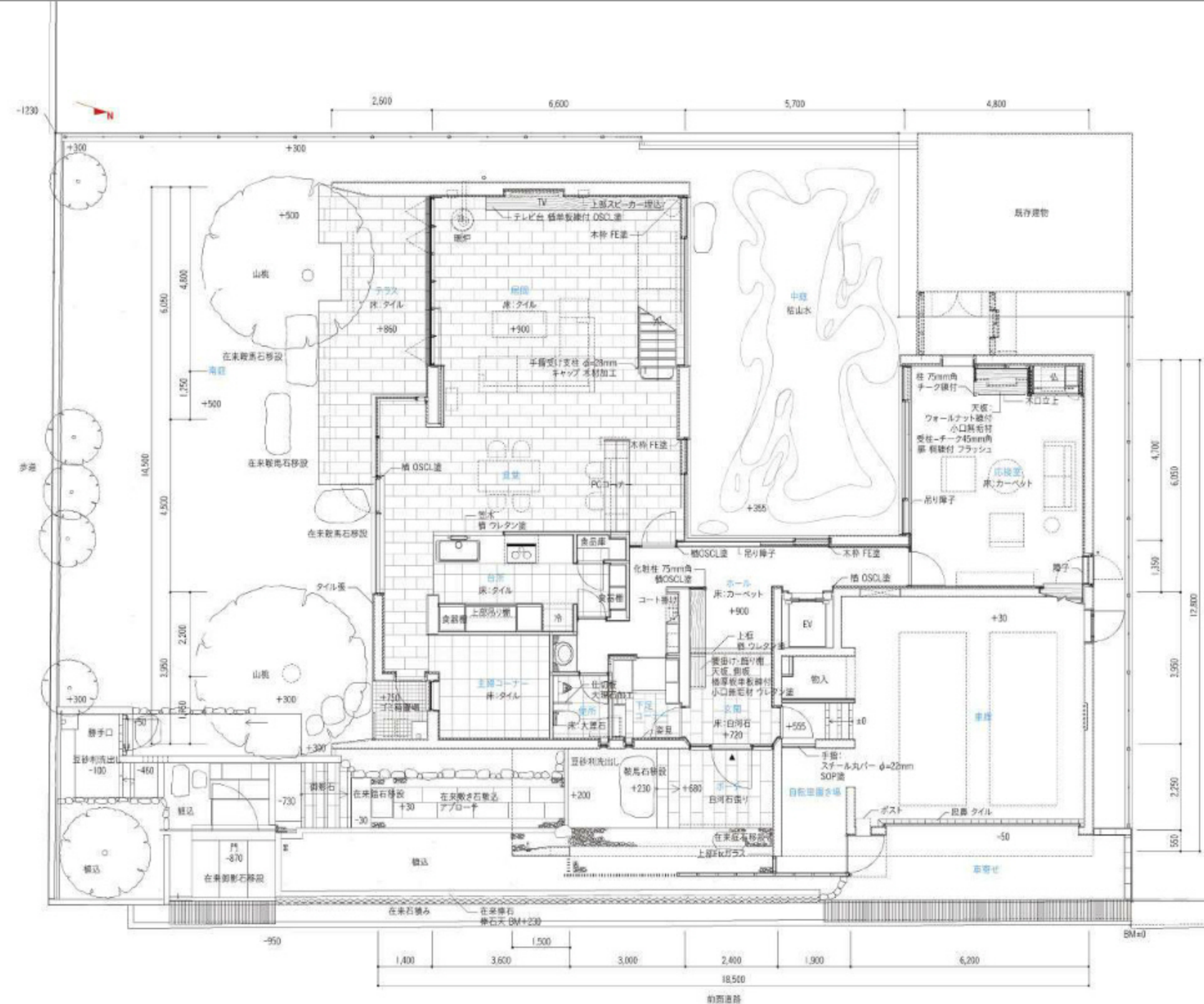
起雲居

Kiunkyo
兵庫県芦屋市

木原千利設計工房
Chitoshi Kihara Architect and Associates

応接室から重森三玲による枯山水の庭を見る。見るための庭として位置づけられ、障子は上部にのみ取り付けられている。

玄関から見る。左は飾り棚、物入れ兼腰掛け。和室をもたないこの住宅では、居室によって洋間でありながら和の質感を醸し出す空間が考えられた。床はカーペット、土間部分は白河石を使用。

南庭より見る。奥に枯山水の庭と南庭の間に居間が位置する。左はもともとあった山桃の木を残している。

1階平面図　縮尺1：150

2階平面図　縮尺1：300

1965年に重森三玲が作庭した、枯山水を残した庭の全景。

2階廊下1から見下ろす。南庭は枯山水の庭と対照的に動の空間として位置付け、台所・食堂・居間とテラスの床はポルトガル産磁器無釉タイルを用いて積極的に内外を連続させている。吹抜け部分の天井高さは5,300mm。

静の庭と動の庭を保存しながらつなぐ

夏のある日、しばらく空家になっていた住まいを若夫婦と夫人のご両親に案内していただいた。取り壊しを予定していた住まいである。一部屋一部屋案内していただいた。思い出の空間、お気に入りの部屋、自慢の照明、お茶室もあった。見納めの日だったのかもしれないと今思う。暑い日であった。

新しい住まいでは娘夫婦とご両親の老後のためのコンパクトな二世帯住宅をと、娘夫婦に計画を任され、われわれが設計をすることになった。

計画にはいくつかの条件があった。もとから重森三玲が作庭した枯山水の庭があり、それを存続させること、南庭に立つ対の山桃の木を近隣と街の記憶として残し、設計の中で上手く活かすこと、さらに多くの既存の庭石を活用することだった。

南側が新しい幹線道路に面していたが、幸い敷地が1.8m上がっていたので、道路との隔たりはコンクリート塀を立ち上げた。その中で護られた山桃などのほかにも植木も増やし、憩い、遊べる場所として南庭を開放させた。南庭と枯山水の庭の間には、吹抜けの居間と食堂と台所のための空間をつくった。居間は南庭に対し全開放の建具とし、遊び楽しむ動の空間として、建主の要望に応えている。2階はバルコニーをもたせたプライベートのための部屋として大きな庇で包み、軒先と山桃を街への景観としてデザインする。

北側に仏間と飾り床のある応接室は、枯山水の庭を挟み、離れの趣で配している。そのつなぎを玄関とし、応接室の平面計画は、枯山水の庭を中庭を長手に見るようにして活かす静の空間として位置付けた。

外の顔としては、門回りにかつての御影石を、玄関に至るアプローチには鞍馬石を使い、表と内の結界の役割をここで再び担ってもらった。

こうして枯山水の庭、庭石、山桃の木は一部移植も含め、以前の住まいを新しい生活空間に受け継ぐことができた。住まいの名前はかつての茶室の扁額を用いて「起雲居」と名付けた。

（木原千利）

階段、手摺りの金物

手触り、肌触り、目障りも住宅には大切な納まり。だから建物の中で金属工事もこだわりがある。私は家具でも鉄を使う。茶の湯に使われる釜のような鉄錆の色合いが、和の空間に不思議と溶け込み、何ともいえない表情になる。相性の違う鉄と木、ガラスと組み合わせることをよく行うが、仕事の精度・難度が上がってしまう。

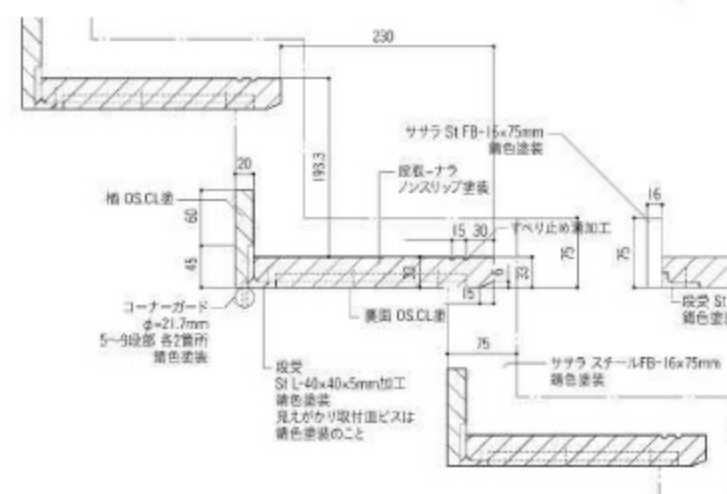
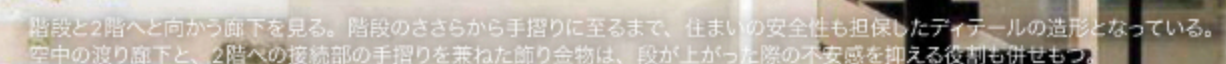
職人の仕事に精度を求めるには、われわれの意図したかたちを原寸図にまとめてくれる人がいる。費用の増える要求は迷うこともあるが、セイワ工業の飛松健児さんが「後でしまったと思う方がいやですから、やりましょう」と後押しをしてくれる。そうして飛松さんは、寸法が決め手になる作業を、わずかなピッチで調整する。現場で「今まで製作して、現場で寸法が違ったことがないね」と話しかけると、「チェックが厳しいからね」と返ってくる。この現場では段状のささら桁、手摺りの受け金物を製作してもらった。（木原）

部分断面詳細図　縮尺1：60

階段踏板・端部 詳細図　縮尺1：10

階段手摺り 詳細図　縮尺1：10

階段と2階へと向かう廊下を見る。階段のささらから手摺りに至るまで、住まいの安全性も担保したディテールの造形となっている。空中の渡り廊下と、2階への接続部の手摺りを兼ねた飾り金物は、段が上がった際の不安感を抑える役割も併せもつ。

左官壁

室内の壁仕上げには、砂を色粉で調合したプラスター木ごて摺りを採用した。
いつも色の調合と仕上げの表情に苦労する。砂の色が産地と時期によって異なり、砂の色を基本に色粉で調合するため、思う色が出ないためである。三木左官は見本塗りを何度もつくって事務所まで運んでくれる。さらに現場でもう一度、大塗りの見本で色と仕上がりの確認をさせてもらい、私も仕上げの表情を一緒につくる。鏝の走りで砂の動きに壁が反応して、表情を見る。水の引き具合が、仕上げ表情に大きく影響するので、その勘どころが壁一面に出てしまう。「仕上がりの表情が悪い時は全部落としてね」と頼む長い付き合いの中、緊張の一瞬がある。時々失敗することもあるが、この現場は幸い上手く仕上がった。　（木原）

外構の鞍馬石

数奇屋の庭に欠かせない石のひとつが鞍馬石であろう。現在は掘り出し禁止となり、貴重な石となった。鞍馬石は鉄分を含む錆色が表情に現れ独特の風合いをもつ。座敷の踏み石によく使われ、侘びの中に少し華やぎもあり、重苦しさがない。もとの座敷の踏み石も鞍馬石だったのを、門アプローチから玄関ポーチに上がる階段手前に土間仕上げ同面に据え表面だけ見せた。もとは広縁と庭への結界としてあったように、外部と内部への結界としての役割を再び担う。経年のものだけがもつこれらの石の味を、新しい家の顔として風格をもたせた。　（木原）

食堂から居間を見る。居間の広い壁をはじめ、食堂やホール、応接室に至るまで、左官で塗った壁はこの住宅全部で200m²に及んだ。

アプローチにはめ込まれた鞍馬石。右側の砕石も鞍馬石で玄関回りまで巡らせている。

応接室。応接室の床との調和を考え、庭面の開口に内法から900mmの吊り障子建具を設けて庭面に視線を下げている。飾り床奥は土蔵へとつながる扉。

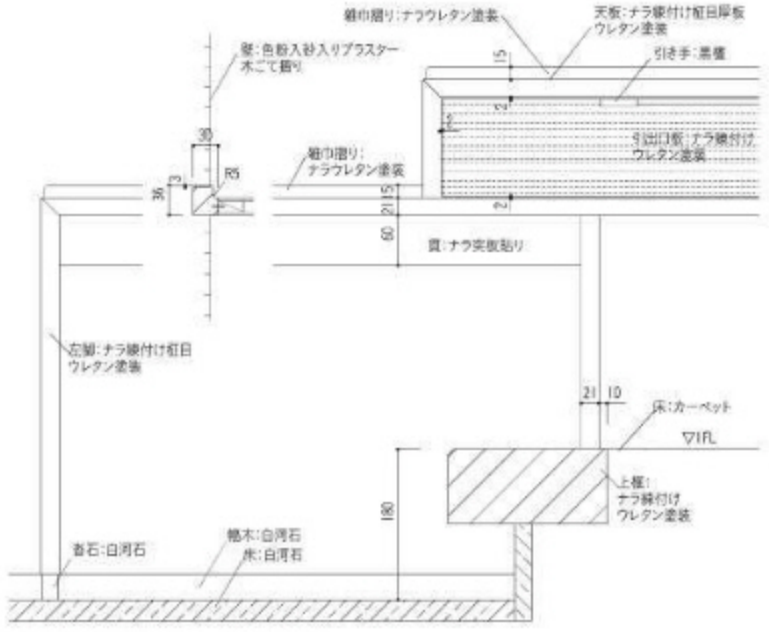
玄関飾り棚と応接室飾り床

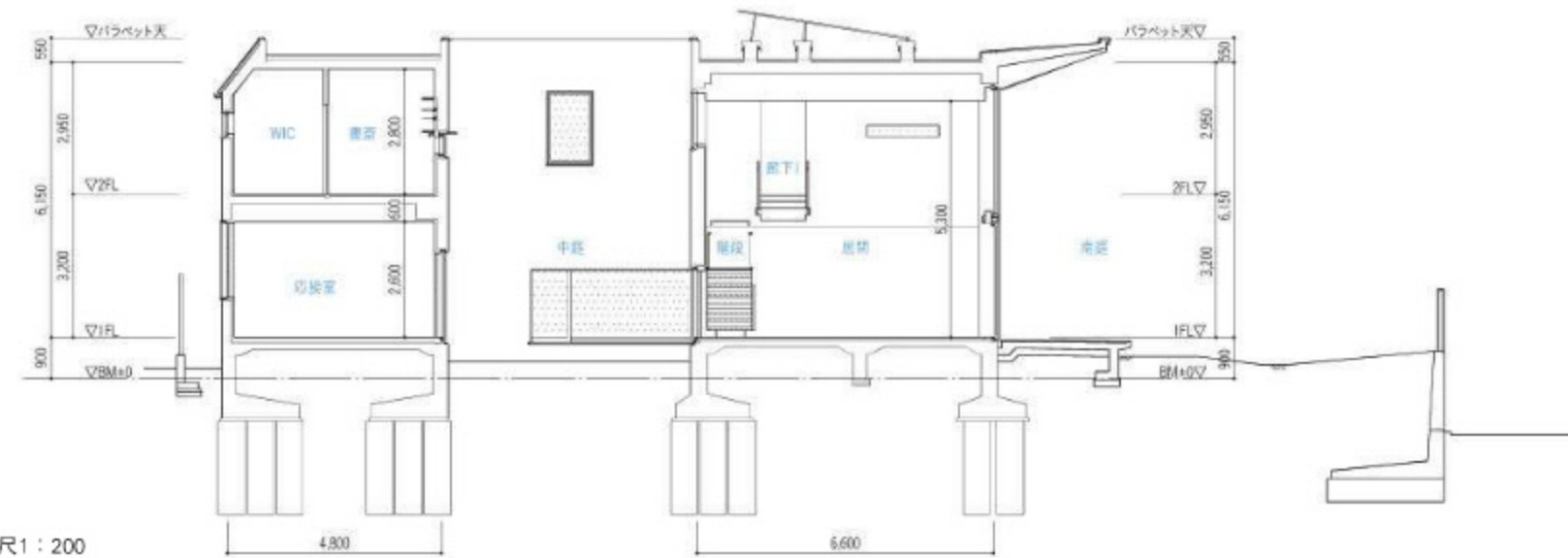
家具工事は室内空間を締める決め手となる。
応接室の飾り床は、ウォールナット厚単板練付けとして、先端は無垢材で少し立ち上げ、飾り床の縁の決めとしている。玄関の家具は、飾り棚を兼ねた物入れと、履き物を脱ぎ履きする時の腰かけにと、簡単な来客の利用のために設えてある。壁際の雑巾摺りも目立たぬよう、掃除のことも考えた納まりに仕上げた。仕様はナラ練付け、ウレタン仕上げ三分艶、引き手は黒檀の加工である。

私と職人の間に入って調整してくれたのは、くらしのギャラリー山田。われわれの図面をもとに、原寸図を描くことから始まり、模型をつくり、かたちの確認をする。材料の選定、色見本と色艶の仕上がりの調整、見本の確認をさせてくれるうえに、金物も数ある中からデザインに合わせて探してくれて、最後に家具職人に指示する。その後も「最後の確認が私の役割ですから」と何度も足を運んで修正を加えてくれる。そんな非効率な作業のうえに成り立つでき上がりは、シンプルで無駄がない。いつの頃からか、これだけのことができる人も少なくなったように思う。　（木原）

左：玄関の飾り棚兼腰掛け。／右：応接室の飾り床縁。5mm立ち上げている。

玄関腰掛け 立断面図　縮尺1：10

職人との連携によって成立する精緻なディテール

南側の庭から見る。軒裏サッシ上面から逆勾配天井として軒先に向けて上げている。
軒先は三重の水切りとして水平線を強調させ、街へ開く外観にシャープさをもたせた。

断面図　縮尺1：200

起雲居

所在地／兵庫県芦屋市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供2人

設計

木原千利設計工房
　担当／木原千利　多田雅　緒方敬男
構造　アスコラル構造研究所
　担当／村澤藤四男
造園　京都庭園研究所　担当／小野みち子

施工

SEEDS・CASA
　担当／古川幸憲　当田勉　山内規至
型枠　布崎組　担当／長尾司
鉄筋　石見鉄筋　担当／関屋圭彦
木工事　大西木工　担当／冨永浩史
屋根・板金　松谷板金　担当／松谷正信
石・タイル・クンスト　西宮タイル工房
　担当／中田則雄　松本憲洋
左官　三木左官店　担当／三木勝弘
金属　セイワ工業　担当／飛松健児
鋼製建具　YKK AP　担当／熊澤光峻
ガラス　杉山硝子　担当／杉山洋一
木製建具　藤波建具店　担当／川上健治
内装　松本建装　担当／秋原敏幸
塗装　サトウ塗装店　担当／佐藤道義
電気　沼電気工業　担当／満野利一
給排水　東山商会　担当／小谷崇人
空調換気　城陽設備　担当／辻貴久
ガス設備　鳳工業　担当／相良昌志
家具　家楽　担当／鶴本俊昭
　くらしのギャラリー山田　担当／山田正登

構造・構法

主体構造　鉄筋コンクリート造
基礎　布基礎

規模

階数　地上2階
軒高 7,010mm　最高の高さ 8,160mm
敷地面積　535.17m²
建築面積　251.52m²
　（建蔽率47.00％ 許容60％）
延床面積　400.85m²
　（容積率66.52％ 許容200％）
　1階　220.43m²　2階　180.42m²

工程

設計期間　2009年8月～2010年7月
工事期間　2010年8月～2011年10月

敷地条件

地域地区　第一種中層住居専用地域
　法22条区域
道路幅員　南22m　　駐車台数2台

外部仕上げ

屋根／アスファルト外断熱防水
外壁／スタッコ吹きつけ金ごて押さえ 一部タイル貼り
開口部／木製建具　スチールサッシ　アルミサッシ
外構／鞍馬石　御影石　白河石　土間コンクリート豆砂利散布洗い出し

内部仕上げ

玄関
床／白河石
壁／色粉入砂入りプラスター木ごて摺り
天井／ PB t=9.5mm寒冷紗パテしごきの上EP-Ⅱ塗り

ホール　応接室
床／カーペット
壁／色粉入砂入りプラスター木ごて摺り
天井／ PB t=9.5mm寒冷紗パテしごきの上EP-Ⅱ塗り

居間　食堂
床／ 300×600mm角 ポルトガル産磁器無釉タイル
壁／色粉入砂入りプラスター木ごて摺り
天井／ PB t=9.5mm寒冷紗パテしごきの上EP-Ⅱ塗り

台所
床／プラスチックタイル
壁／色粉入砂入りプラスター木ごて摺り
　一部化粧珪酸カルシウム板張り
天井／耐水PB t=9.5mm 寒冷紗パテしごきの上EP-Ⅱ塗り

洗面所
床／ 450mm角プラスチックタイル
壁／プラスター金ごて仕上げ
天井／珪酸カルシウム板 t=6mm 底目地張り
　EP-Ⅰ塗り

浴室
床・壁／ 300mm角 サーモタイル
天井／バスパネル
バスタブ／ TOTO

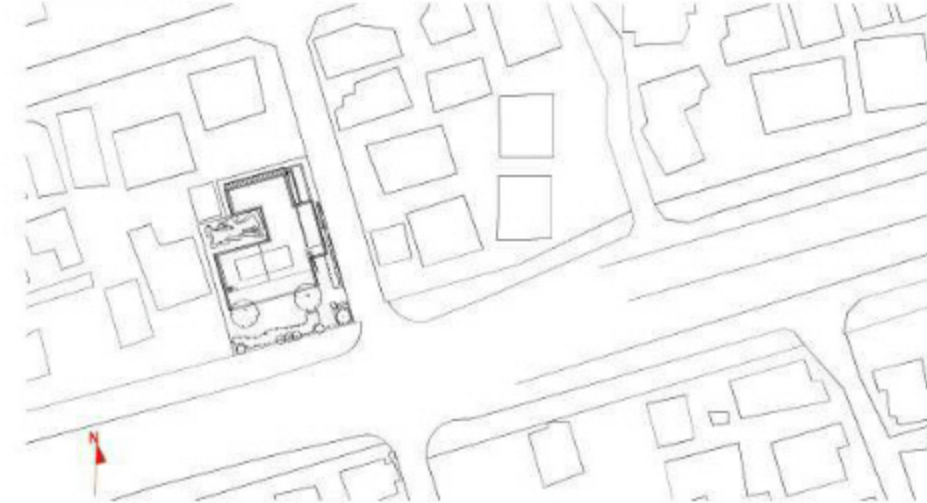
子供室1・2
床／ナラフローリング t=15mm
壁・天井／ビニールクロス

寝室1・2
床／カーペット
壁・天井／珪藻土

設備システム

空調　冷暖房方式／ヒートポンプ式エアコン
　　換気方式／全館換気方式
　　その他／電気式床暖房
給排水　給水方式／公共上水直結
　　排水方式／公共下水放流
給湯　給湯方式／ヒートポンプ給湯器

撮影／新建築社写真部

配置図　縮尺1：1,500

左：玄関から見る、鞍馬石をはめ込んだアプローチ。／右：東側外観。手前の門の床は既存の御影石を使用。左は山桃の木。

油壺の別荘

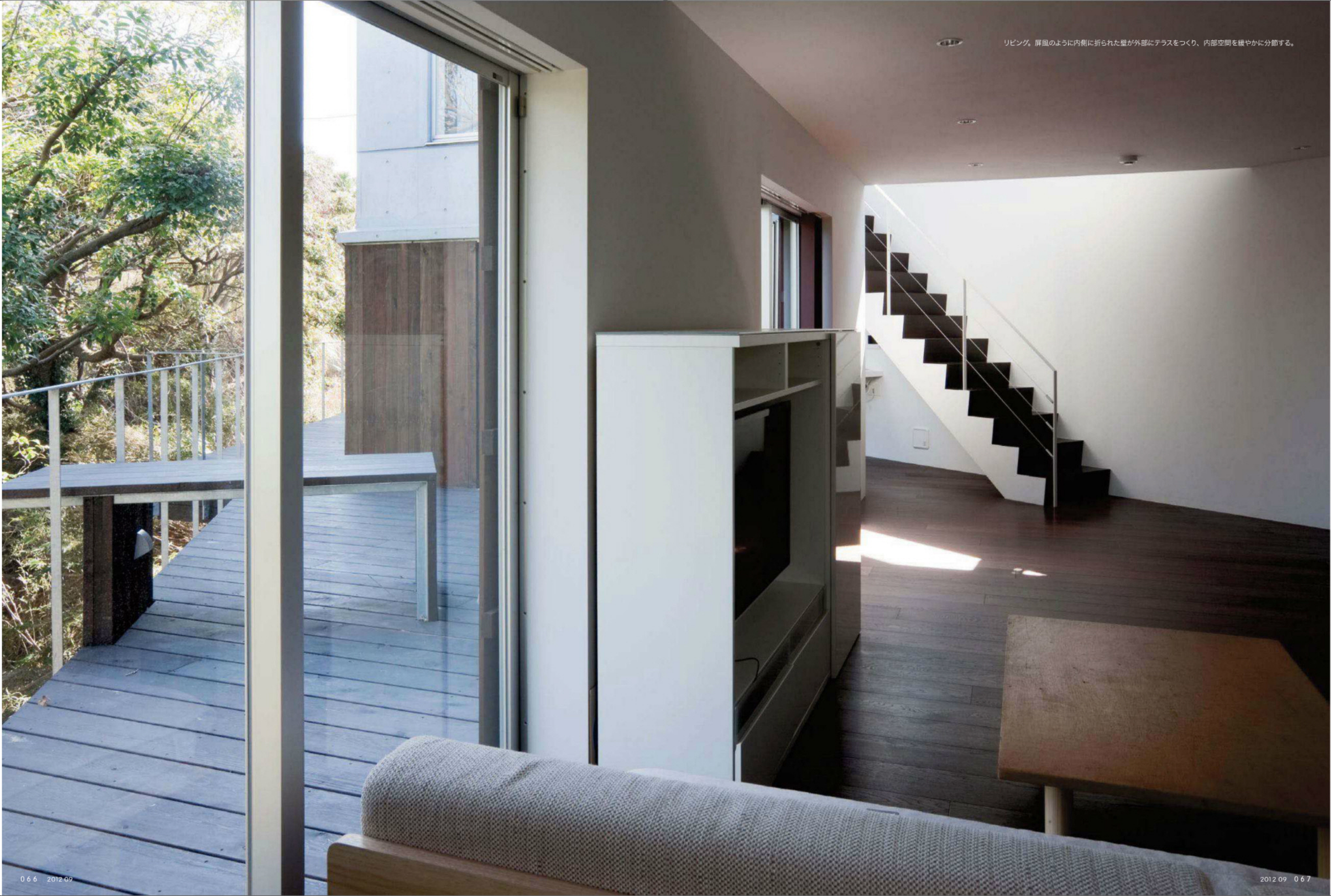
Villa in Aburatsubo

神奈川県三浦市

千葉学建築計画事務所

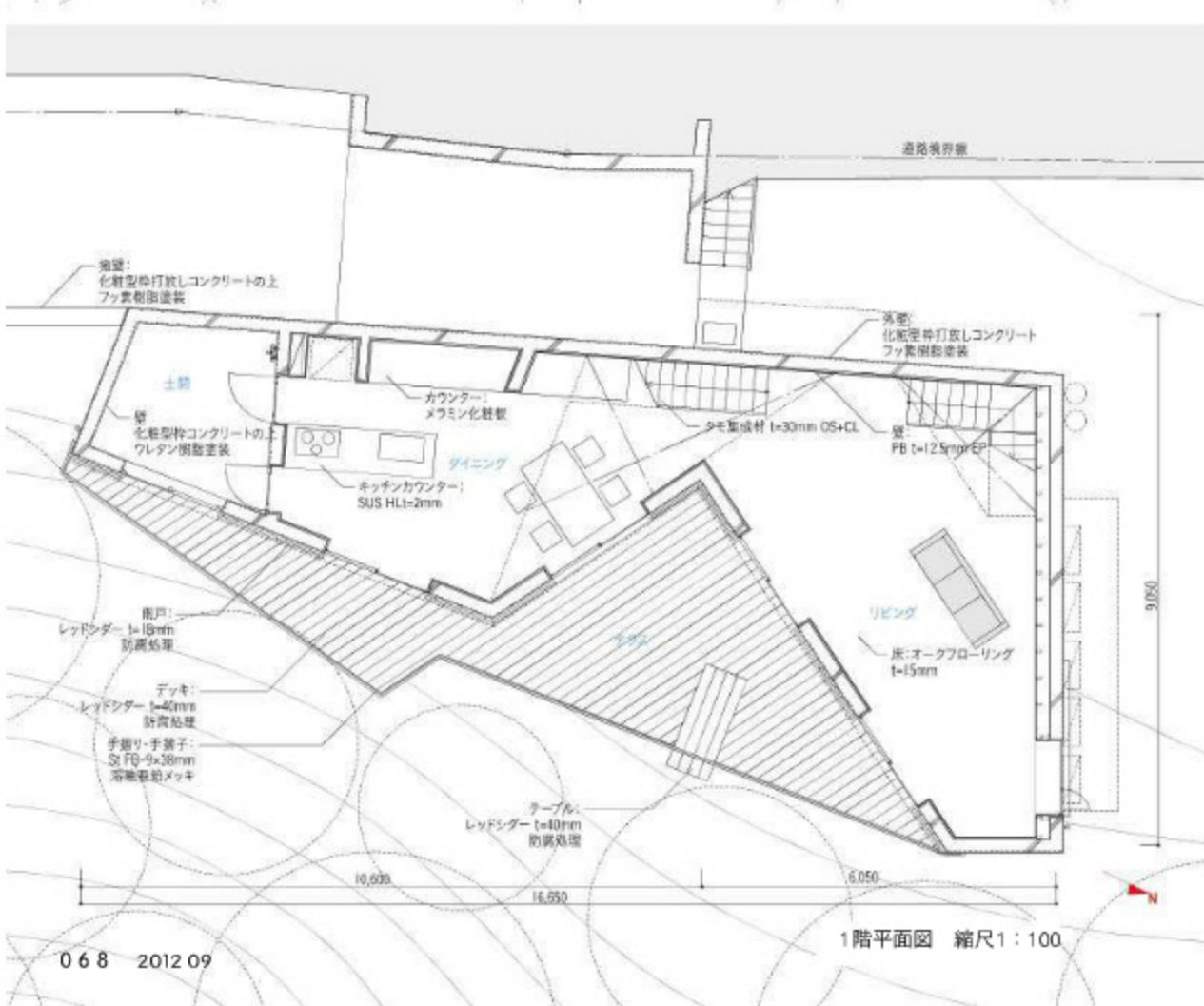
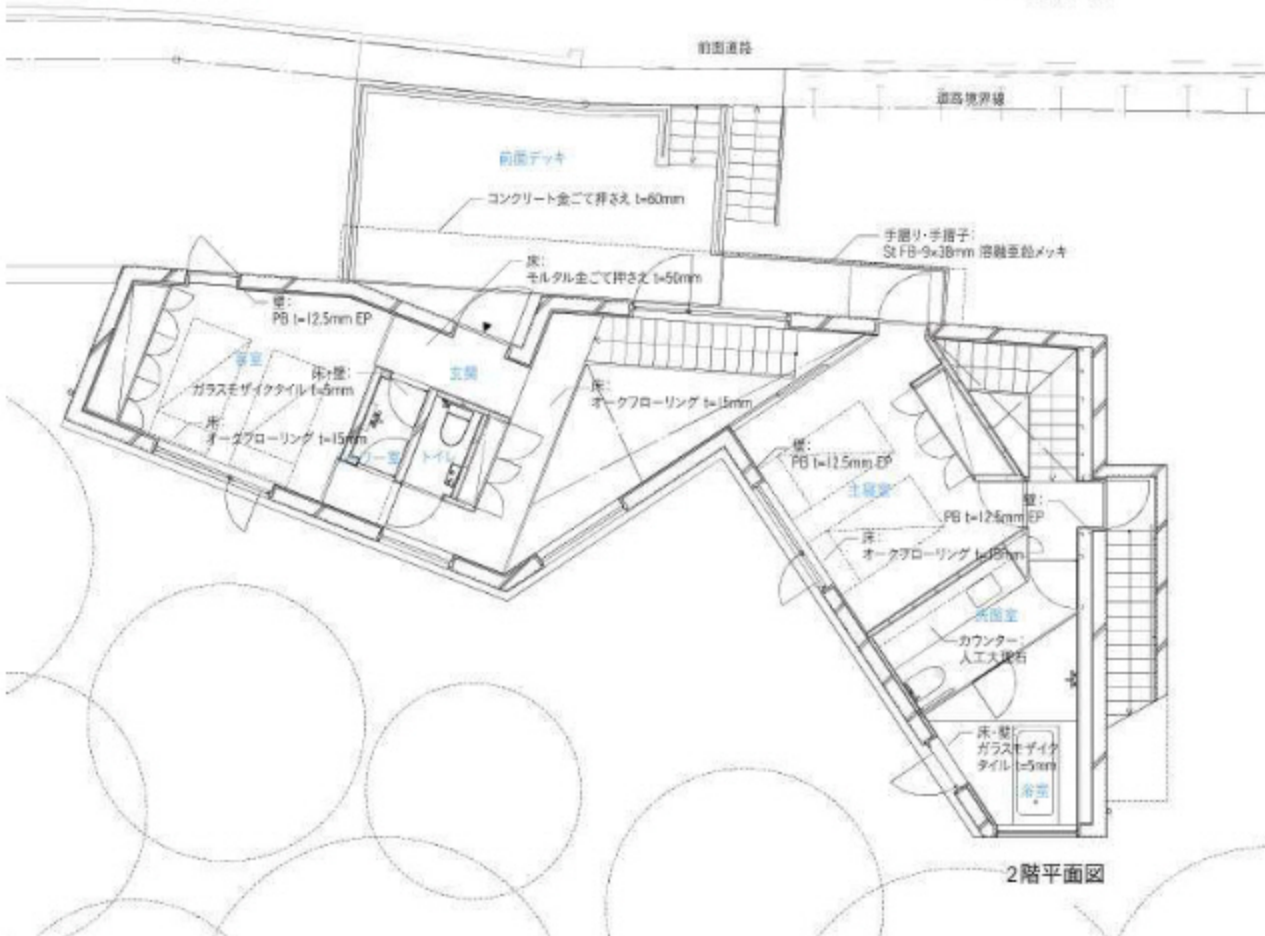
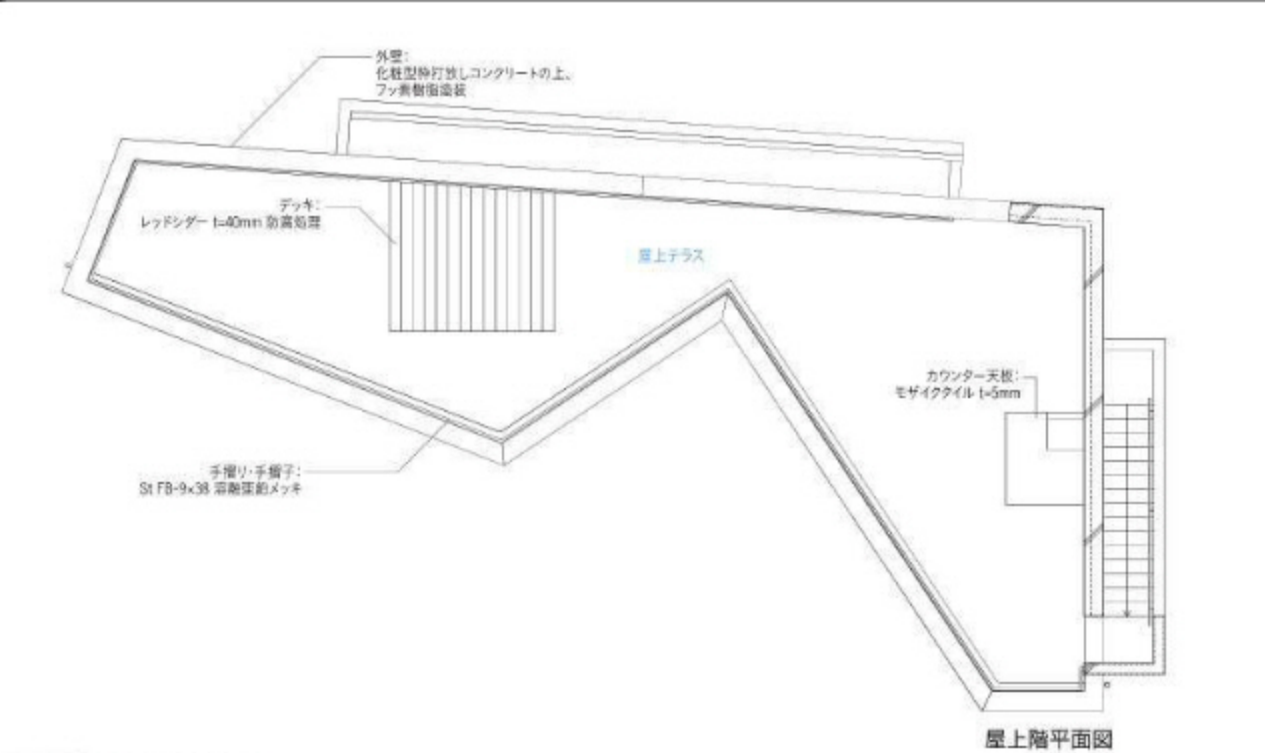
CHIBA MANABU ARCHITECTS

2階主寝室へ続く階段の横からキッチンまで見通す。正面の階段は2階玄関、客室へ続く。

玄関から続く階段室から1階にダイニング、2階に客室用水回りのコアを見る。照明はペンダントライトを長さと配置をランダムに吊り下げたもの。

リビング。屏風のように内側に折られた壁が外部にテラスをつくり、内部空間を緩やかに分節する。

屋上階平面図

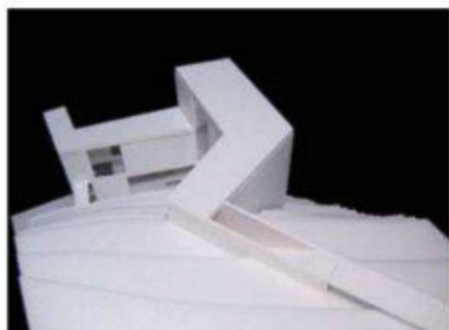
2階平面図

1階平面図　縮尺1：100

三浦半島の油壷湾を見下ろす高台に建つ別荘である。

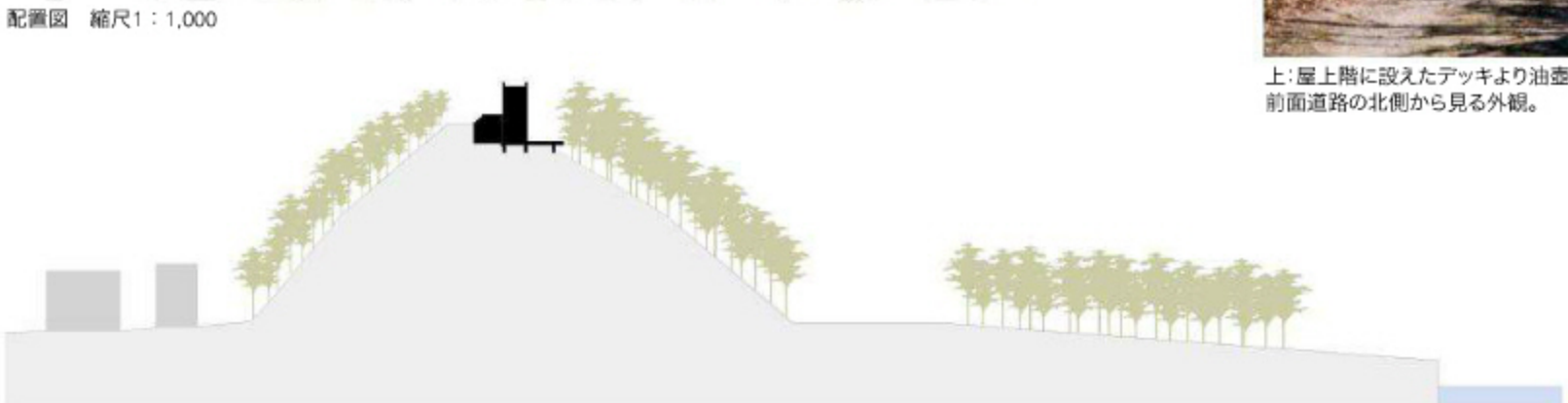
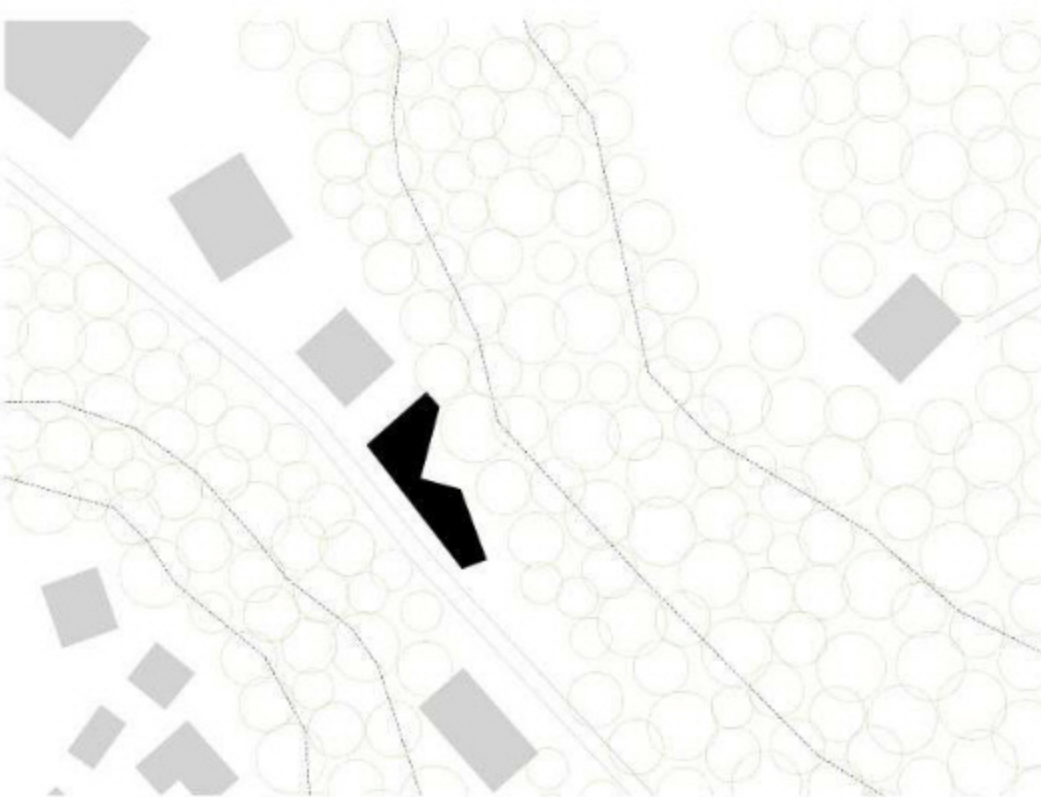
この計画はもともと雑誌の企画から始まった。およそ宅地としては売れそうもない急斜面の土地を、建築の設計も併せて行うことで、土地への理解を助けると同時に付加価値を生み出そうというのである。その時点での設計は、斜面に大蛇が這うようにして建築のヴォリュームが森に分け入っていく計画で、斜面を上り下りしながら生活が　開する空間となっていた。

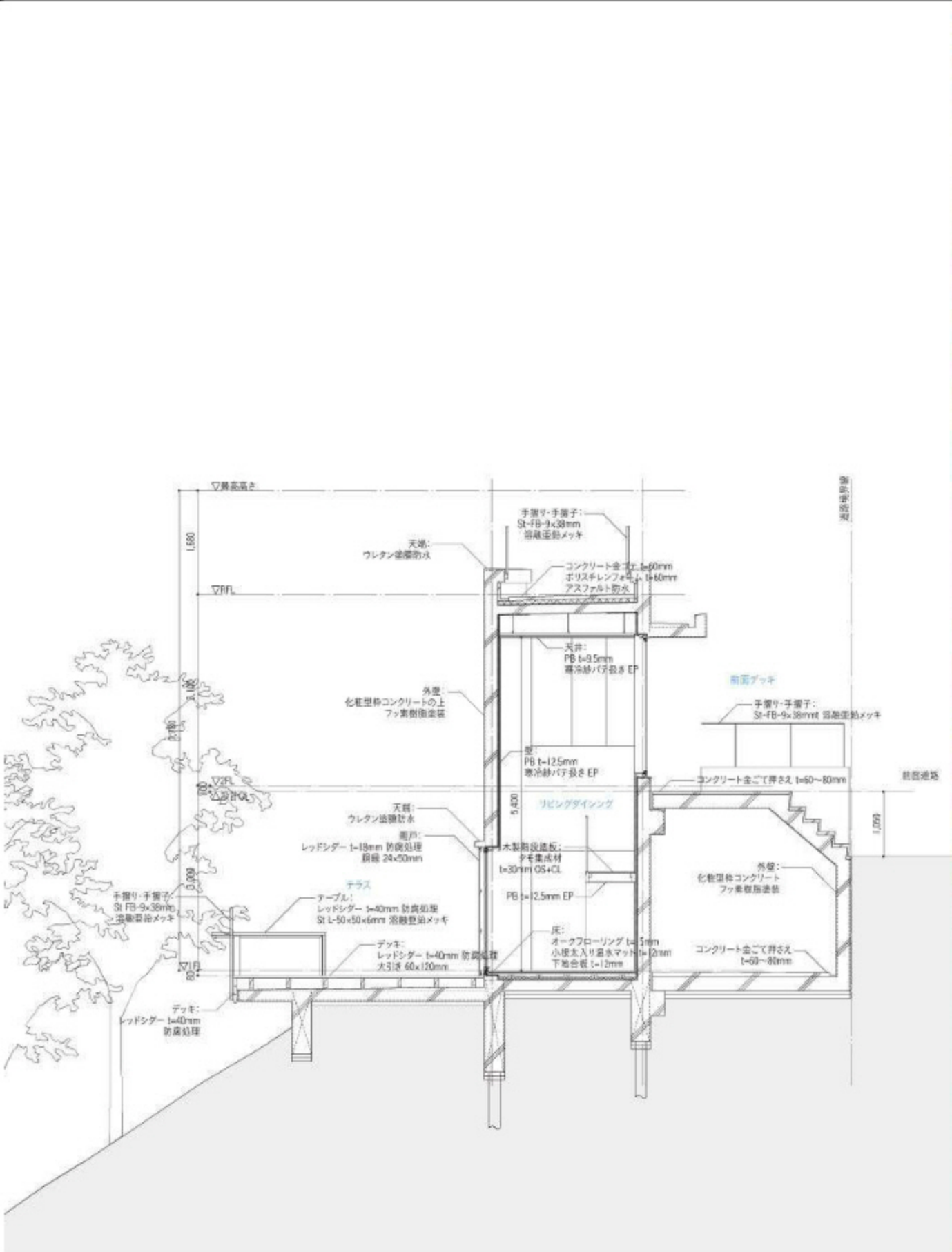
しかし実際に建主が決まり、そこでの生活が具体化していくにつれ、またこの斜面地での計画の困難さが現実の条件として見えてくる中で、案は大きく方向転換することになった。建主はもともと近くのマリーナに船をもち、週末には友人を招きながらゆったりとした時間を過ごす。そのためのコンパクトでありながらも客のプライバシーにも配慮した空間を求めていた。しかしコストや施工上の条件も考慮すると、現実的に建設可能なエリアは斜面沿いの細長い三角形状の狭い範囲しかない。そこで僕たちは、この細長い空間の海側の壁を屏風のようにうねらせて、内部空間は窪みによって緩やかに分節されながらもつながっているような、そして同時に屋外のテラスと内部空間が、より親密な関係を築けるような空間を考えた。さらに動線的にも、小さい中にも回遊性のある計画とすることで、客間と寝室は相互に独立しながらもそれぞれが森や海、そしてリビングやダイニングにも関われるような関係性を築いている。リビングやダイニングも、それぞれが森や海を異なる角度から楽しめると同時に、どちらもテラスと一体になった利用ができるようになっている。

そしてこの屏風状の壁は、薄べったい建築の短辺方向にバランスよく耐震要素を配することも可能とし、施工上は大変厳しい条件でありながら、きわめて合理的なコストで実現することにつながった。

もともとイメージしていた斜面に分け入るような建築、あるいは斜面を上り下りしながら　開する生活、それは、かたちは変えながらも小さくて薄べったい空間の中にエッセンスとして残されている。　　（千葉学）

斜面を這うように展開していた初期案。

2階廊下より主寝室の納まるヴォリュームを窓越しに見る。左の開口からは2階部分で接道する前面道路が見える。

配置図　縮尺1：1,000

上：屋上階に設えたデッキより油壺湾を望む。／下：前面道路の北側から見る外観。

断面配置図　縮尺1：1,000

断面図　縮尺1：100

ダイニング横のテラスより見る夕景。屏風状の壁により分節された内部空間の連なりが浮かび上がる。1層分の外壁と開口部の雨戸をレッドシダーで設え、森からデッキ、外壁と景色に溶け込むことが意図される。デッキ材もレッドシダー。

浴室。

油壺の別荘

所在地／神奈川県三浦市
主要用途／専用住宅
家族構成／親子3人

設計
千葉学建築計画事務所
　担当／千葉学　森元気
構造　金箱構造設計事務所
　担当／金箱温春坂本憲太郎
設備　Gn設備計画　担当／五木田正和
その他　コーディネーター　渡邉亮平

施工
平成建設
設備　石井設備工業　担当／石井政徳
電気　岩澤電機商会
　担当／岩澤重廣　大友直久

構造・構法
主体構造・構法　鉄筋コンクリート造
基礎　杭基礎

規模
階数　地上2階
軒高 6,300mm　最高の高さ 7,982mm
敷地面積　499.97m²
建築面積　70.85m²
（建蔽率14.17% 許容20%）
延床面積　131.88m²
（容積率26.37% 許容80%）
1階　70.85m²　2階　61.03m²

工程
設計期間　2009年5月～2010年7月
工事期間　2010年8月～2011年8月

敷地条件
地域地区　第一種低層住居専用地域
　第一種風致地区
道路幅員　南西4m　駐車台数1台

外部仕上げ
屋根／押さえコンクリート
外壁／化粧型枠コンクリートの上フッ素樹脂塗装
開口部／アルミサッシ　スチールサッシ
外構／押えコンクリート　砂利敷
テラス／レッドシダー

内部仕上げ・使用機器

キッチン
床／オークフローリング
壁／ PB t=12.5mm EP
天井／ PB t=9.5mm EP
厨房機器／
　食洗器／ Miele G1102SC-i
　オーブン／リンナイ RBR-S51E-ST
　ガスコンロ／リンナイ RS7/W 5ALR2-ST
　換気扇（シェード）／ ARIAFINA CFED-951S
照明／ダウンライト 遠藤照明 B-666WA

浴室
床・壁／ガラスモザイクタイル
天井／ケイ酸カルシウム板 t=6mm VP
照明／ダウンライト DE-4634
バスタブ／カルデバイ
空調機器／バス乾燥機：リンナイ RBH-C333K2SNP

トイレ　洗面所
床／洗面所：ガラスモザイクタイル
　トイレ：オークフローリング
壁／ PB t=12.5mm EP
天井／ PB t=9.5mm EP
照明／ダウンライト 山田照明 DE-2157
便器／ INAX SATIS
洗面カウンター／コーリアン

リビング　ダイニング
床／オークフローリング
壁／ PB t=12.5mm EP
天井／ PB t=9.5mm EP
照明／リビング：ダウンライト 山田照明 DE-2157　ダイニング：ペンダントライト DAIKO DPN-36346E別注

主寝室　客室
床／オークフローリング
壁／ PB t=12.5mm EP
天井／ PB t=9.5mm EP
照明／ダウンライト 山田照明 DE-2157

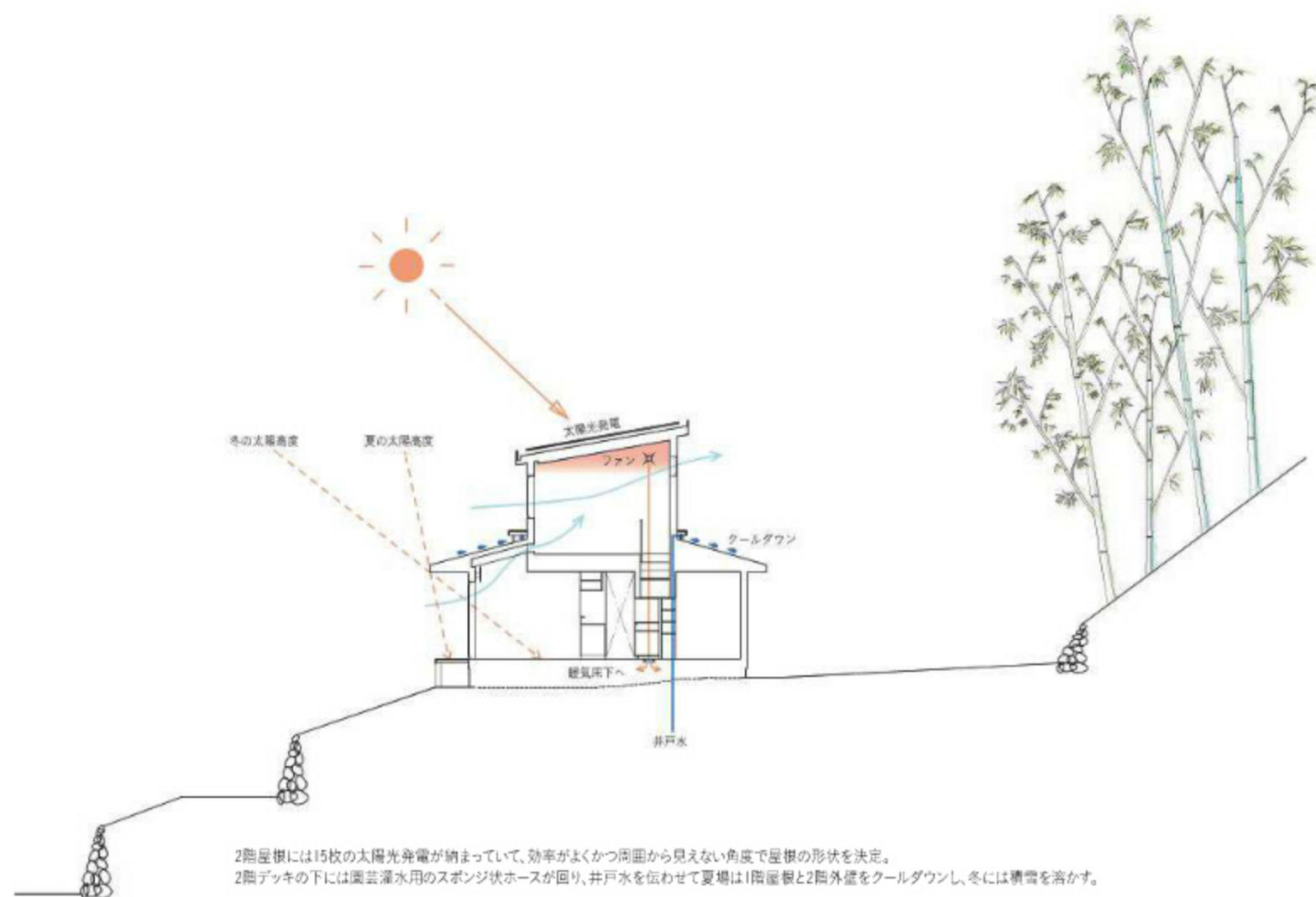
設備システム
空調　冷暖房方式／ルームエアコン
　換気方式／第三種換気
　その他／床暖房　ガス床暖房
給排水　給水方式／直結給水方式
　排水方式／敷地内浸透処理
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／新建築社写真部

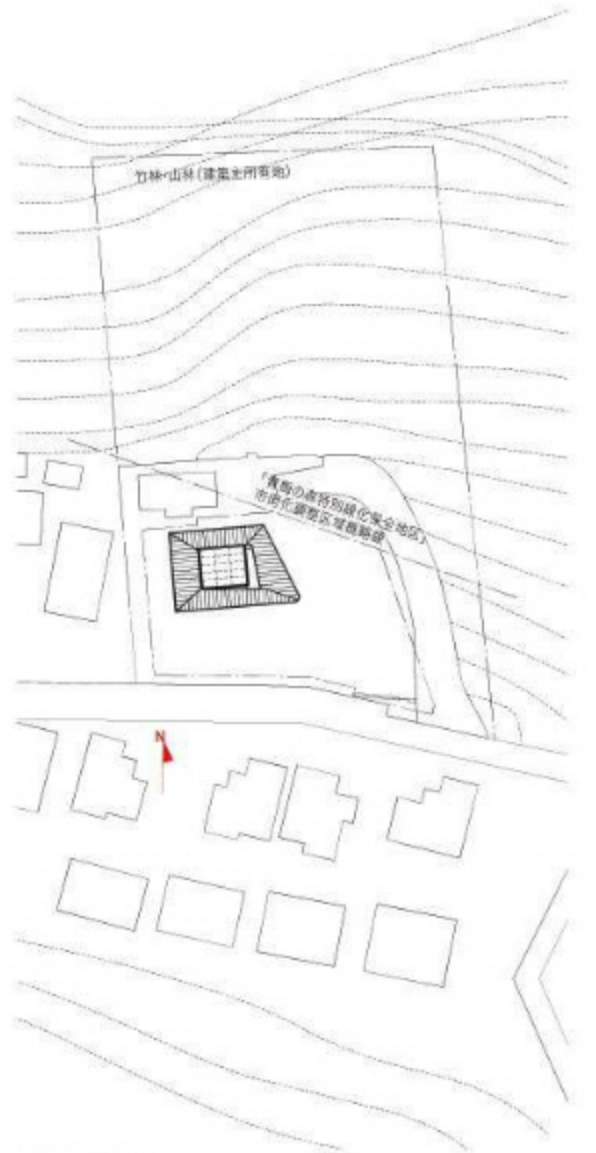
陽傘の家

Sunbrella House
東京都青梅市

池田雪絵建築設計事務所
Ikeda Yukie Architects

東南側から見る外観。東南に伸びた庇は午後の厳しい西日を遮り、涼みの影を大きく延ばす役割を担う。

2階屋根には15枚の太陽光発電が納まっていて、効率がよくかつ周囲から見えない角度で屋根の形状を決定。
2階デッキの下には園芸灌水用のスポンジ状ホースが回り、井戸水を伝わせて夏場は1階屋根と2階外壁をクールダウンし、冬には積雪を溶かす。

配置断面図　縮尺1：200

東側外観。2階屋根の太陽光パネルは、光を効率よくとらえつつ、地面から見えない角度で設置されている。デッキには井戸水を引き上げて灌漑用ホースを取り付け、1階屋根に冷水を流すことができる。右側は玄関。

配置図　縮尺1：1,000

道路から見上げた遠景。緑豊かな環境の中で、石垣から連続して積層させる表現として、1階と2階で外装の色を変えている。

やさしく環境に呼応するアール型と庇

都市のマンション住まいだった建主は、リタイア後に故郷の青梅で自給度の高い田園生活を始めたいと土地を探し、山を背後に抱き、南に尾根を望むこの高台に一目惚れをした。自然の懐での新しい生活に期待を高める一方で、寒暖の厳しさなど移住への不安も強くもっていた。

計画では敷地をぐるりと囲む緑を楽しめること、コスト内で寒暖を最小限にする工夫、可能なかぎりのエネルギー自給が望まれた。田園に帰還する都市生活者をシェルターとして守りながら、そっと背中を押す役割が建築に求められたように思う。

敷地は広いが緑化保全地区を避け、母屋との関係、車の切り返し、基礎のコストを考えると残された場所は多くなかった。その中で外との関係を考え、風景を最大限享受できるように配置と平面を定め、決して広くない内部からも緑の“ぐるり感”を感じて水平の広がりが得られるようにと、三隅をアール型にした。

夏の日射を遮る深い庇は、農作業と急な雨宿りの屋根にもなる。以前から関東の田園地における光熱環境や雨を考えた時、深い庇の適応性に強く惹かれていた。既視感を避け庇を否定するのではなく、その可能性から現れる新しいかたちを模索した結果、作業場として最適な東南に長く庇を伸ばし、1階平面とずらしてふわりと回し、さらに2階、デッキ、太陽光パネルの屋根も段々畑とつながるよう緩やかに重ねた。

ほぼ平屋としたため、1階屋根はもっとも広い環境とのインターフェースとなる。雨を落とすのはもちろん、通気断熱と共にデッキ下に回した灌漑ホースによって夏には冷たい井戸水が流れ、四周の屋根と2階外周の空気をクールダウンする。

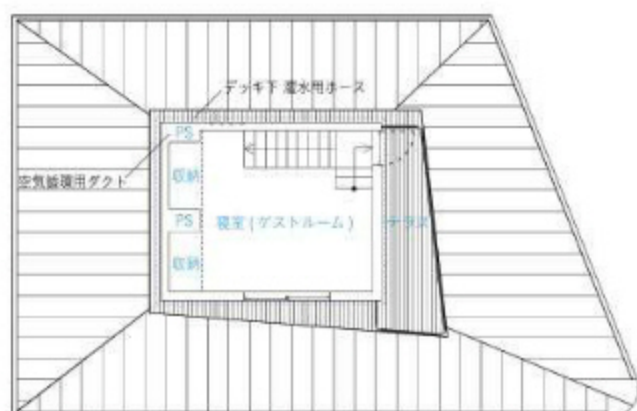
内部は1階天井の垂木とその下の幕板が360度回り、広がりと傘がかかるような守られた感じを与えている。そこに2階を少し沈ませて1階の気積と2階の外壁面を減らすことで、空調負荷を抑えながら1階の吹抜け感も演出する。

2階屋根は、ガスインフラがなく、よい陽当たり、エネルギー自給の希望から太陽光発電パネルを載せ、効率よく光をとらえパネルが見えない角度とした。

太陽の強い陽射しから守り、光は利用して発電する、山に開く陽傘のような家となった。（池田雪絵）

1階リビングからダイニング、主寝室を見通す。温熱環境を考慮して、周囲へと開きすぎることなく開口部を設けている。
ダイニング上部から広がる360度に伸びる垂木は、外部へ向けた開放感を導く。

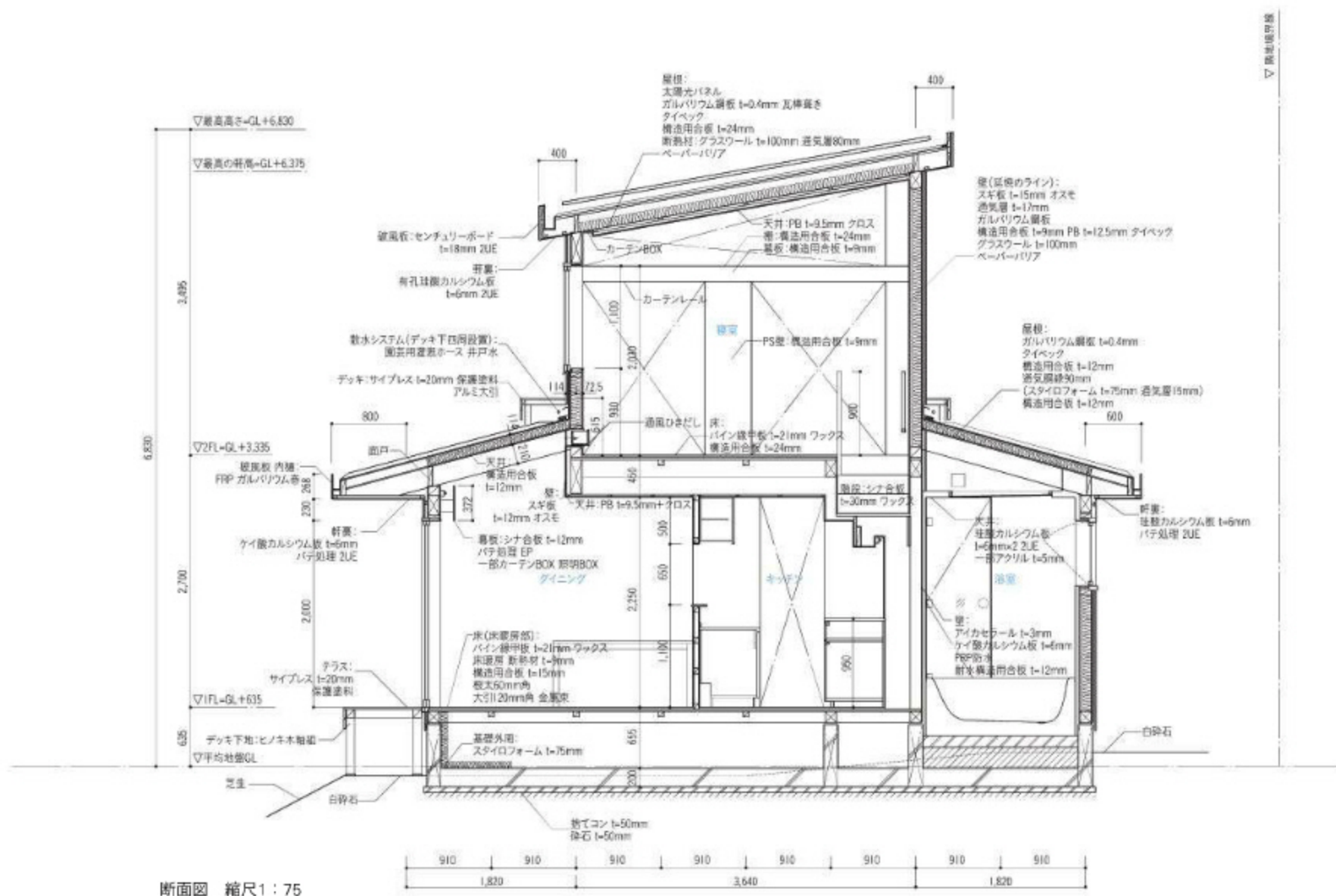
主寝室。家具にもアールの設えが現れる。垂木の奥行感を出し、桁と垂木の取り合いを調整するため、幅が変化する幕板を回している。ブラインドやライトボックスの役割も兼ねる。

上2点：家具屋が製作した基礎型枠（左）と桁（右）。／中左：三次曲面となりひとつずつ角度が異なる東面屋根の垂木。／中右：庇架構見上げ。構造壁のみ建ち上がっている状態。／下左：家具屋で製作中の土台と桁。／下右：桁全景。

2階平面図

家具屋製作のアール型基礎型・土台・桁

敷地の諸条件より配置平面が決まったが、ひとつの隅だけを直角とする不等辺四角形、その3隅をアールにした異形となった。異形の桁に垂木をかけるため、南と東の壁では取り合い部の高さがひとつひとつ異なる。

また東の屋根面は三次曲面になるので、施工上さまざまな工夫がなされた。桁上に高さ調整材を載せると共に、東面では梁の角度がそれぞれ異なるので、すべての垂木の施工図を起こし、プレカットして現場調整を最小限にしつつ、棟梁の技量と合わせて組み立てた。アール部分は非耐力壁とし、家具職人が基礎の型枠と、積層合板による土台と桁を製作することで、それを定規に無理のない価格で精度の高いアール壁を成立させた。（池田）

1階配置平面図　縮尺1：200

断面図　縮尺1：75

陽傘の家

所在地／東京都青梅市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦2人＋子供1人

設計

池田雪絵建築設計事務所
　担当／池田雪絵　大野俊治
構造　MID研究所
　担当／加藤征寛　馬場貴志（元所員）

施工

藤建設工房　担当／藤田能房
木工事　角田建築　大工棟梁／角田晴己
基礎工事　曽根興業　担当／曽根周一
鉄骨　堀鉄工所　担当／堀純則
板金　里見板金銹工業　担当／里見晃
塗装　武藤塗装店　担当／武藤稔
木製建具　松本建具店　担当／松本義明
家具　フジケン　担当／内藤忠明
設備・電気　松岡電気設備
　担当／松岡富男
水道　バウム　担当／山本敏雄

構造・構法

主体構造　木造在来工法
基礎　べた基礎

規模

階数　地上2階
軒高 6,375mm　最高の高さ 6,830mm
敷地面積　472.98m^2
建築面積　73.40m^2
　（建蔽率15.52％ 許容40％）
延床面積　85.97m^2
　（容積率18.18％ 許容80％）
　1階　69.41m^2　2階　16.56m^2

工程

設計期間　2010年5月～2011年2月
工事期間　2011年3月～2011年9月

敷地条件

地域地区　法22条区域　第一種高度地区
　最低敷地120m^2
道路幅員　北4m　駐車台数2台

外部仕上げ

屋根／ガルバリウム鋼板 t=0.4mm
　1階屋根：竪はぜ葺き　2階屋根：瓦棒葺き
外壁／スギ板 t=15mm 縦羽目貼り オスモ
開口部／アルミサッシ　一部木製建具（製作）
外構／白砕石　芝生　テラス・デッキ：サイプレス t=20mm 保護塗料

内部仕上げ

キッチン

床／パイン縁甲板 t=21mm ワックス
壁／PB t=12.5mm EP　ビニルクロス　キッチンパネル（アイカ工業）
天井／PB t=9mm ビニルクロス
厨房機器／システムキッチン：サンヴァリエ〈アミィ〉（LIXIL）
　造作カウンター／天板：シナ合板 UC　扉：シナ合板 UE2

浴室

床／200mm角タイル（INAX）
壁／アイカセラール（アイカ工業）
天井／ケイカルt=6+6mm UE2　一部アクリル
照明／パナソニック
バスタブ／T-form（FLN72-4373）
シャワー水栓金物／TOTO（TMHG40EC）

玄関

床／モルタル金ごて仕上げ　防塵塗装
壁／PB t=12.5mm　ビニルクロス
天井／垂木現し　構造用合板 t=12mm
製作家具／棚：シナ合板 UC　扉：シナフラッシュ 突板 UC

リビング　ダイニング　主寝室

床／パイン縁甲板 t=21mm ワックス
壁／PB t=12.5mm EP　ビニルクロス　下がり壁：スギ板 t=12mm 縦羽目貼り オスモ
天井／垂木現し　構造用合板t=12mm　下がり天井：PB t=9mm ビニルクロス
製作家具／棚：シナ合板 オスモ　テーブル：白タモ集成材 オスモ

寝室

床／パイン縁甲板 t=21mm ワックス
壁／PB t=12.5mm　ビニルクロス　構造用合板 t=9mm
天井／PB t=9mm ビニルクロス
製作家具／棚：構造用合板 t=24mm

全室共通

照明／遠藤照明　パナソニック

設備システム

空調　暖房方式／ヒートポンプ式エアコン
　冷房方式／ヒートポンプ式エアコン
　換気方式／第一種換気方式　第三種換気方式　浴室：換気乾燥機（三菱電機 V-121BZ-BL）
　その他／床暖房　電気式床暖房（東洋オートメーション）　床下送風　パイプファン（三菱電機）
給排水　給水方式／上水道直結　井戸水（散水用）　排水方式／下水道直結
給湯　給湯方式／エコキュート

撮影／新建築社写真部

通風引き出し

左：1階キッチン上部は2階のヴォリュームが一部落とし込まれ、1階の気積を抑えつつ外壁の表面積を抑えている。垂木との接続面に通風引き出しがある。／右：2階。床部分の通気のために、開閉可能な通風引き出しを足元に設けた。夏は1階からの風が抜け、冬は暖気で2階窓のコールドドラフト防止になる。

八王子ツリーハウス

HACHIOJI Tree house
東京都八王子市

安藤毅／エアスケープ建築設計事務所
大友和樹／トリノス建築計画
TSUYOSHI ANDO / AIRSCAPE ARCHITECTS STUDIO
KAZUKI OHTOMO / TORINOSU

リビング。木立のような壁柱で構成される空間は外部との距離が適度に保たれ、柔らかな光で満たされる。床はコンクリート金ごて研磨仕上げ、天井高は4,450mm。

オフィス。アプローチテラスから直接アクセスできる。

空の人がいて、地面の人がいる。
いつの間にか周辺には高層の集合住宅が建ち並び、新しい居住者が住まう。大勢の人が行き交う路上では、挨拶を交わす近隣住民もいるが、圧倒的に見知らぬ人の方が多い。
敷地は八王子駅前の中心市街地に近く、商業を中心とした市街地と住宅地、変わろうとする街並みとそのままであろうとする街並みの境界にある。

世界観というバリア

建主は以前よりこの地に住み、周辺環境の変化を肯定的にとらえながらも、以前と変わらない生活を送りたいと考えていた。
そこで自分たちの明確な世界観を再提示する生活スタイルを取り、感覚的なバリアをつくり出すことで自分たちなりの「住みやすさ」を実現しようと考えた。
それは高い壁による物理的バリアではなく、他を受け入れながらもアイデンティティを守る精神的なバリアのある環境をつくり上げることである。そして疎外し合わない、「住みやすい」適度な距離感を生むことになる。
敷地南側には建主と一緒に育った大きなケヤキの木があり、変化する周辺環境に対してこの場所にゆったりとした時間のリズムを与えていた。このケヤキの木が醸し出す雰囲気にこれからの時間の流れをゆだね、樹上生活をモチーフとした生活スタイルをつくり上げていくことにした。

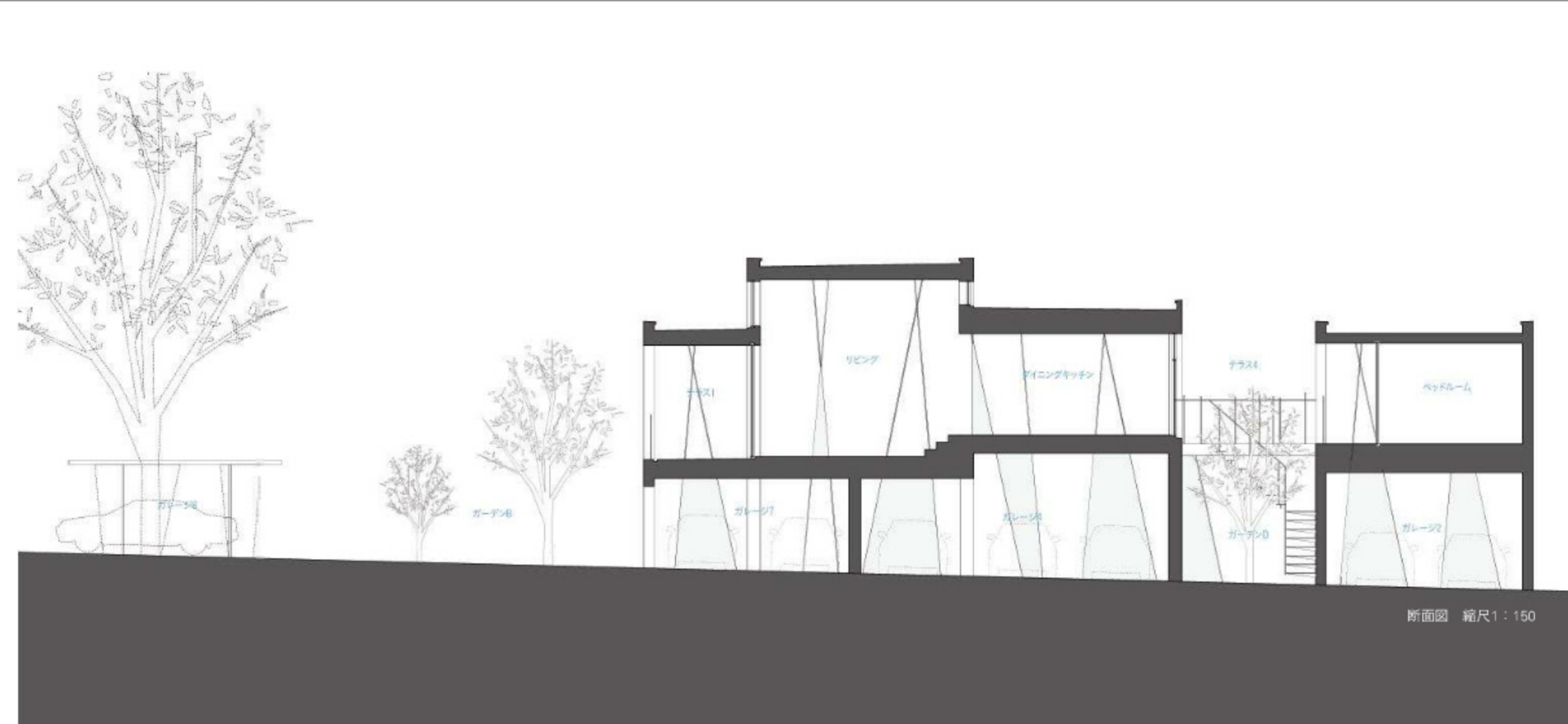
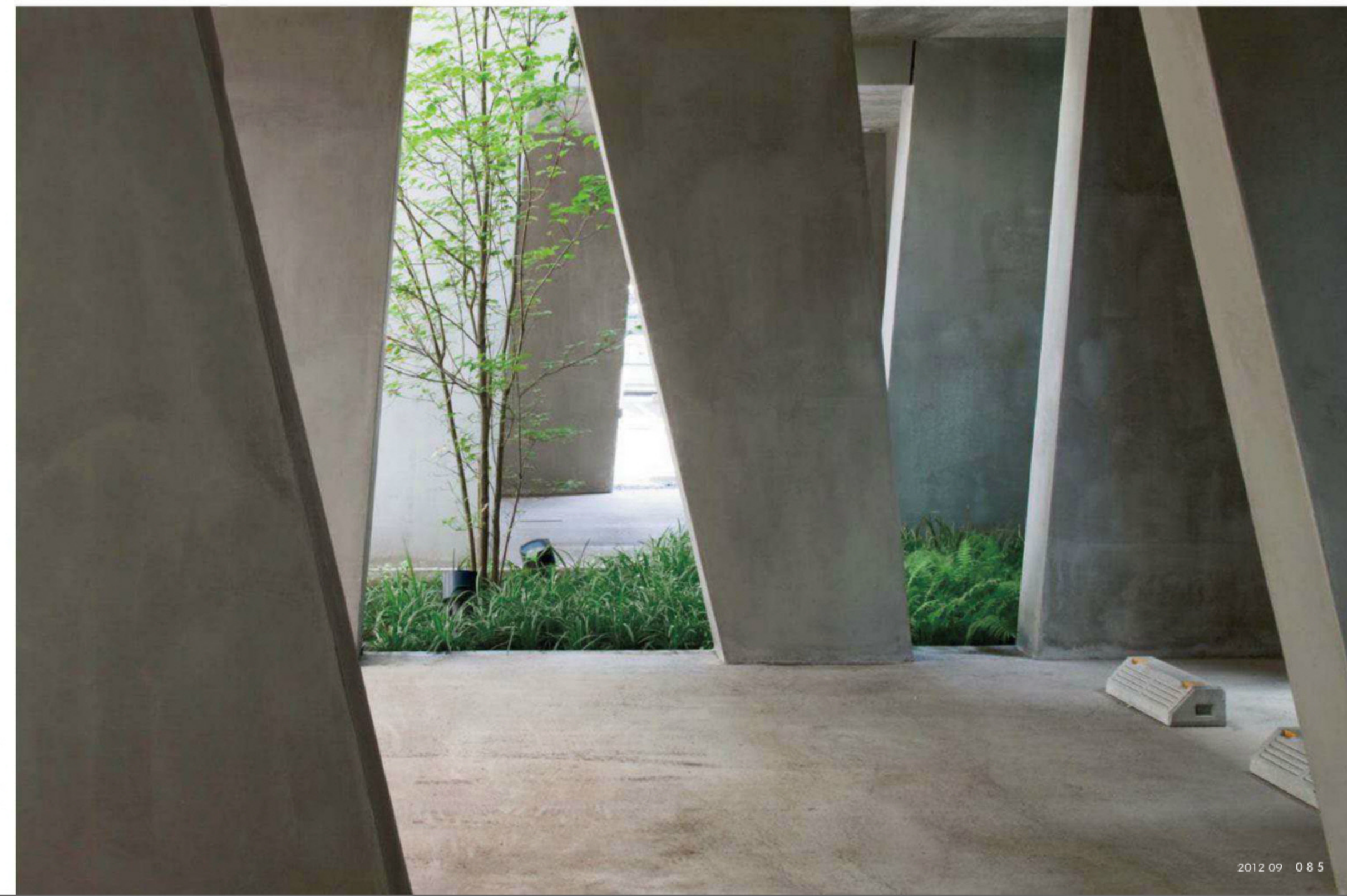
木の上の人

建物は1階を駐車場とし、樹木の枝葉に近い2階を居住スペースにしている。どこにいても木立の中にいる感覚が得られるように、ゾーニングされた各居住スペースは樹木と交互に配置され、それを室内外にわたる回廊がつなぐ中庭型の建物となっている。建物は大きな要素として木立のようなかたちをした壁柱とスラブとで構成し、それだけでさまざまな様相が現れることを期待した。
木立は空間を分け、つなげている。
視線は木立の間を抜け、連なる視点が景色となる。景色は見る対象としてだけでなく見る者を包含し、主客一体となった空間が生まれる。
光は木立の向こうの明るい方から射し込んでくる。そこで木立の向こうに空があることを感じることができる。リビングの天井高さは4,450mm、回廊の一部にあるライブラリーはおよそ半分の2,200mm。各スペースは天井高さに変化をもたせ、大きな木の下には大きな空間が生まれ、その下には留まる場所ができる。コンクリートでできたクールな木立の中で、スラブの位置を操作することで空間に表情を与えている。(安藤毅)

配置図　縮尺1：1,500

テラス2から北を見返す。中庭越しに壁柱に囲まれ2階にもち上げられた居住空間が回廊状に展開する。テラス2から内部に入ると猫用ステップの張り出すネコホール。

断面図　縮尺1：150

左上：リビングと接続するテラス1は奥行が2,635mmあるため、半屋外として利用される。正面に立つケヤキの木が高層マンションからの視線を遮る。／左下：子供室。左手はウォークインクローゼット、右手は可動式の収納家具。天井高は3,800mm。／右：1階ガレージ。傾斜する壁柱がレイヤー状に連なる。

本棚の中に設えた照明。ブックエンドとしての役割も果たす。

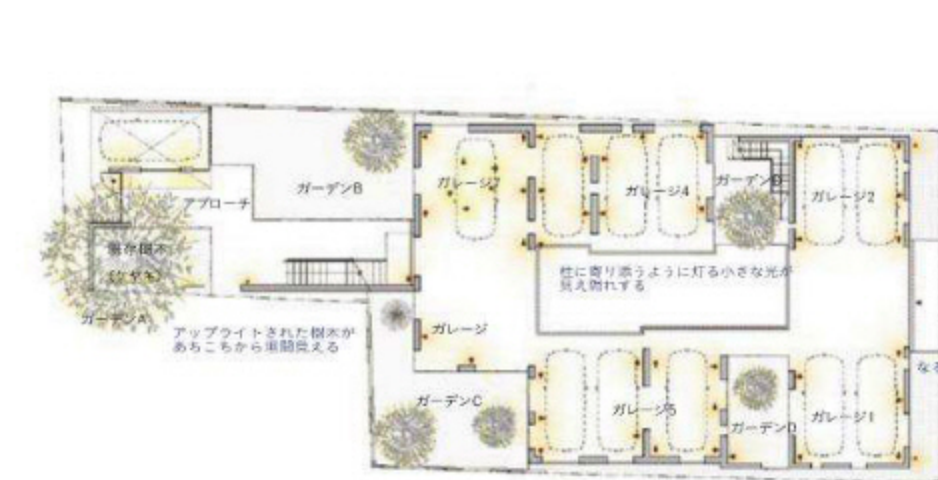
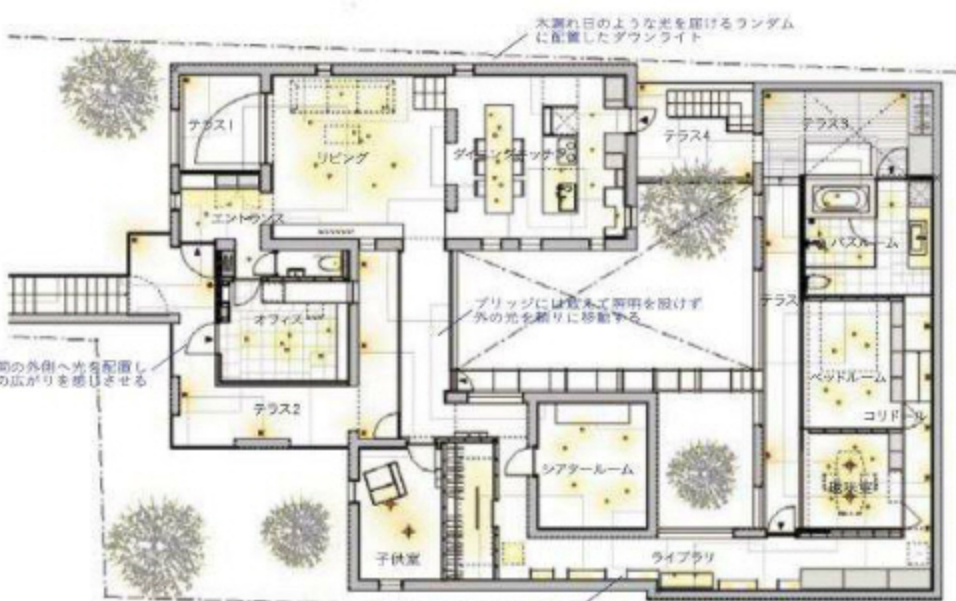
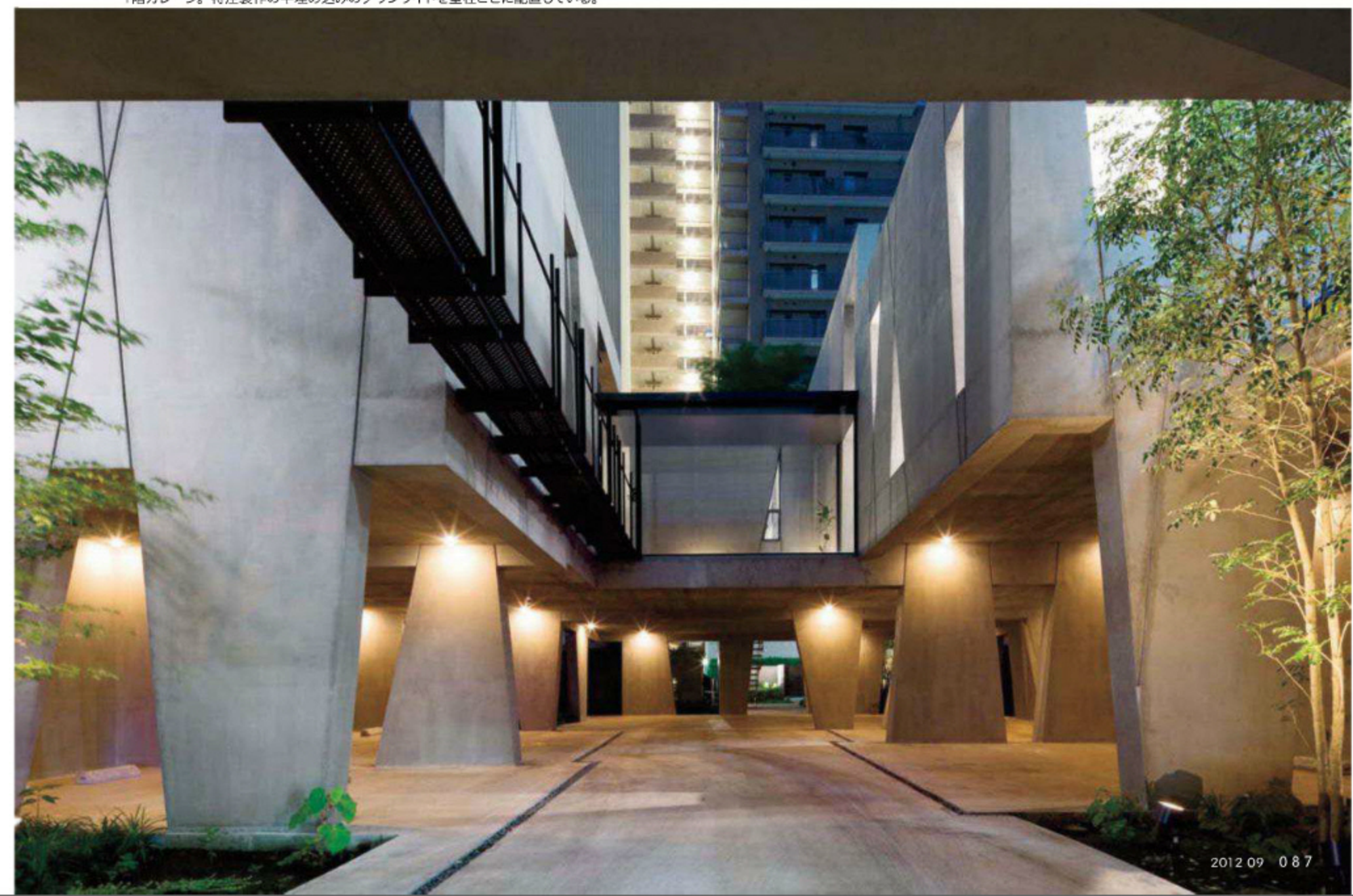
2階平面図　縮尺1：150
（1階配置図は左ページ1階照明計画参照）

内と外を曖昧にする光の配置

今回の計画で意識したのは、必要な所をきちんと明るくする機能性を満たしつつも、固定概念にとらわれない光のあり方である。全体としては内と外（あるいは部屋と部屋）の境界を曖昧にするような光の配置とし、室内をひとつの閉じられた空間に感じないよう心がけた。
リビングのダウンライトはあえてランダムな配置とし、木々の隙間から光が射し込むかのように光の濃淡をつくっている。リビング脇のテラスには視線を外部へと導く小さな明かりがあり、その先にはシンボルツリーであるケヤキがそびえ立つ。リビングから伸びるガラス張りの廊下は、室内に照明器具を一切付けず、隣接するテラスに小さな光を置くことで、ガラスの存在を感じさせることなく外部まで伸びやかにつなげている。ライブラリーも天井には極力照明器具を取り付けず、本棚に合わせてデザインした照明器具はその存在をほとんど感じさせないが、夜になると両脇に並んだ本をほんのりと照らし出す。駐車場は特注製作の半埋込のダウンライトを壁柱ひとつひとつに配置することで林立する木々の隙間から小さな明かりが見え隠れするような風景をつくり出している。　（内藤真理子／コモレビデザイン）

1階照明計画

2階照明計画

1階ガレージ。特注製作の半埋め込みのダウンライトを壁柱ごとに配置している。

左：リビングの天井。木漏れ日を意識してダウンライトをランダムに配置。／中左：テラス4から見るライブラリ。読書スペースには壁に読書灯を取り付けている。／中右：テラス2は壁柱の足下にデッキライトを設えている。／右：コリドール。一段ごとにアッパーライトが埋め込まれている。

2階アプローチテラスよりアプローチを見返す。左手のケヤキの木にはじまり、建物に寄り添うように植栽が施される。

八王子ツリーハウス

所在地／東京都八王子市
主要用途／住宅+オフィス+駐車場
家族構成／3人

設計

エアスケープ建築設計事務所　担当／安藤毅
トリノス建築計画　担当／大友和樹
構造　フレームワークス
　担当／神野昌也　田畑孝幸
照明　コモレビデザイン
　担当／内藤真理子

施工

平成建設　担当／姫野富美夫　柏木健太郎
　石垣雅幸
設備　シー・エイチ・シー・システム
　担当／藤生明寿
電気　福井電業社　担当／鈴木和廣
鋼製建具　東京フロント　担当／丸山勲志
木製建具　坪原木工　担当／坪原成一郎
家具　リビング　担当／岡前英樹
キッチン　TIDEA　担当／立花義則
　石橋麻弓
床研磨　CRTワールド　担当／井桁大輔
外構・造園　緑化計画　担当／湯島興久

構造・構法

主体構造・構法　鉄筋コンクリート造
基礎　べた基礎

規模

階数　地上2階
軒高 7,760mm　最高の高さ 8,060mm
敷地面積　532.80m²
建築面積　255.66m²
　（建蔽率47.98%　許容80%）
延床面積　438.85m²
容積対象面積　351.08m²
　（容積率65.89%　許容442.2%）
　1階　237.48m²　　2階　201.37m²

工程

設計期間　2010年1月～2010年12月
工事期間　2011年1月～2011年10月

敷地条件

地域地区　商業地区　防火地域
道路幅員　北7.86m　南4.00m
駐車台数　12台

外部仕上げ

屋根／シート防水
外壁／RC下地モルタル薄塗仕上げ
　撥水剤塗布
開口部／スチールサッシ　アルミサッシ
外構／中高木：イロハモミジ　ハナミズキ
　シマトネリコ（株立）　ヤマボウシ（株立）
　ナナカマド

内部仕上げ・使用機器

ダイニング　キッチン

床／モルタル金ごて押え防塵塗料塗布
壁／モルタル薄塗り仕上げ
天井／PB t=9.5mm EP
厨房機器／
　食洗器／Miele G1182SCVi
　オーブン／Miele H4020BM
　ガスコンロ／ハーマン DW35F2JTKST
　換気扇／富士工業 USR-3A-901R
　シンク水栓金物／GROHE 3232100J

浴室

床・壁／磁器質タイル
天井／ケイ酸カルシウム板 外部用EP
バスタブ／T form FLN72-4373
シャワー水栓金物／CERA HG27160

リビング

床／コンクリート金ごて押え研磨仕上げ
壁／モルタル薄塗り仕上げ
天井／RC化粧打放し仕上げ

ベッドルーム　趣味室

床／フローリング OS染色
壁／PB t=12.5mm（二重貼り）EP
天井／PB t=9.5mm EP

子供室

床／フローリング OS染色
壁／モルタル薄塗り仕上げ 黒板塗料
天井／RC針葉樹合板型枠打放し仕上げ

オフィス

床／御影石400mm角
壁／モルタル薄塗り仕上げ
天井／RC打放し仕上げ

設備システム

空調　暖房方式／ガス温水式床暖房
　冷暖房方式／ルームエアコン
　換気方式／第三種換気
　その他／床暖房
給排水　給水方式／上水道直結
　排水方式／下水道直結
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／新建築社写真部

北側外観。

南側の前面道路から見る。計画前からこの土地に根付いている大きなケヤキの木を手がかりに、木立のような壁柱にと樹上で生活するような空間が導かれた。

N-HOUSE

東京都

玉上貴人／タカトタマガミデザイン
TAKATO TAMAGAMI ／ TAKATO TAMAGAMI ARCHITECTURAL DESIGN

南側外観。Aハウス、Bハウスから成る2世帯住宅。地階を形成するRC壁の上に載る3層分の白いヴォリュームを、少しもち上げて中庭へ続く抜けをつくり出している。敷地の間口は15m、奥行は30m。

階段室より1階中層庭を見る。天井高は1,500mm。

都内の高台に建つ二世帯住宅である。

規模や部屋数といった与条件から、長くなりがちな動線に立地を活かした眺望や設えを鏤めることでシークエンスの豊かな家にしたいと考えた。

敷地は間口15m奥行30mと南北に長く、西側隣地には教会が聳える。あらゆる方向から採光を得るため教会に面して中庭を設け、建物はコの字型の配置とした。主に上階部分を親世帯の住戸（Aハウス）、下階部分を子世帯の住戸（Bハウス）とし、中庭を介して互いの気配が感じられる適度な関係性をもたせた。

外壁には外断熱の上に白セメントを施した。その白亜のファサードは基壇に載り体を成すが、ファサードの一部を少しもち上げることによって基壇との間に空隙を設けた。

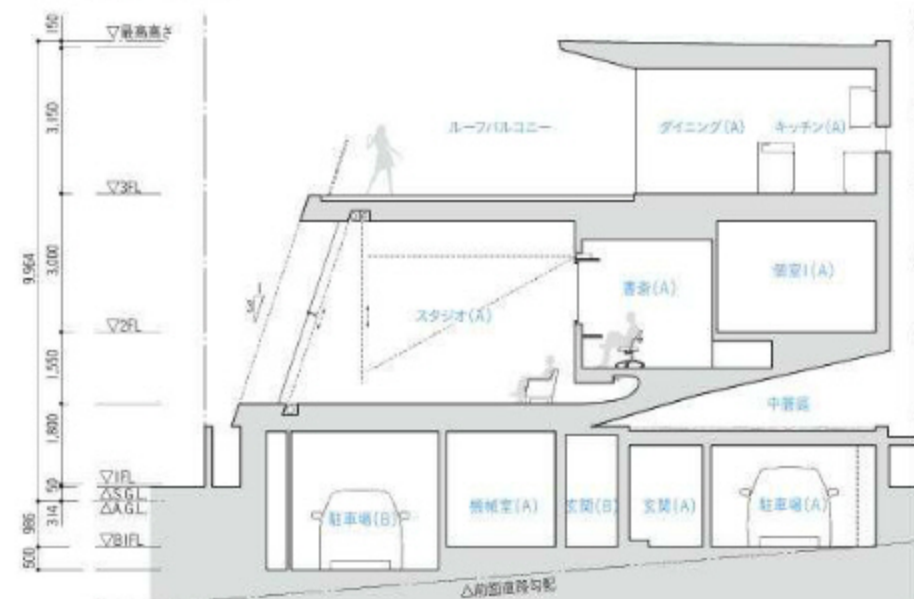
この空隙はAハウスの細長い玄関を抜けた先のホールに明るさをもたらし、階段の踊り場から街の雰囲気や子世帯の気配が感じられるという効果を生んだ。さらには中庭への通風を促し、敷地奥にあるBハウスと街との関係をつないでいる。

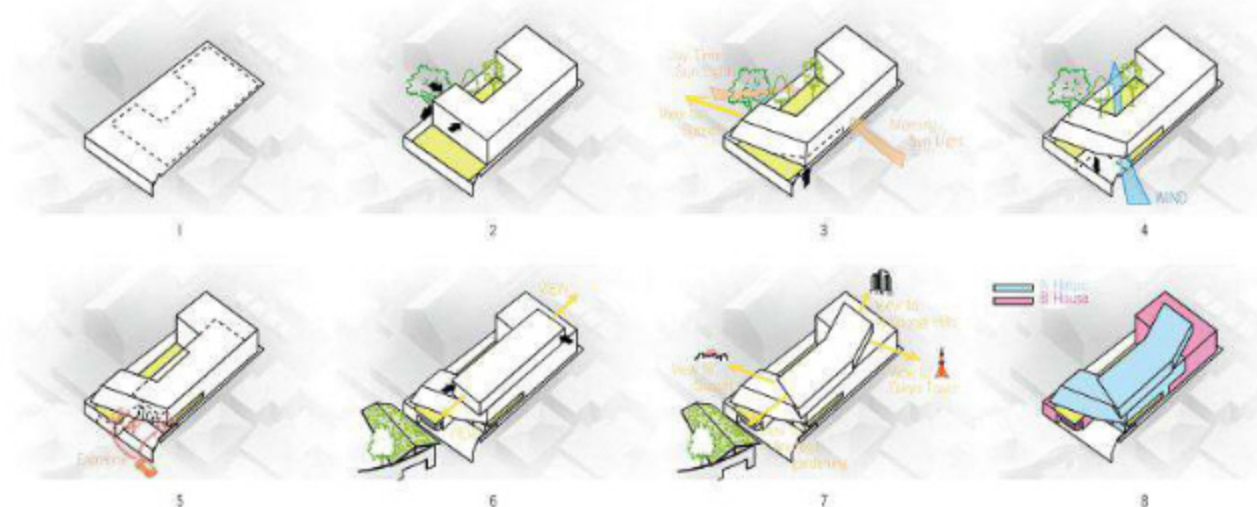
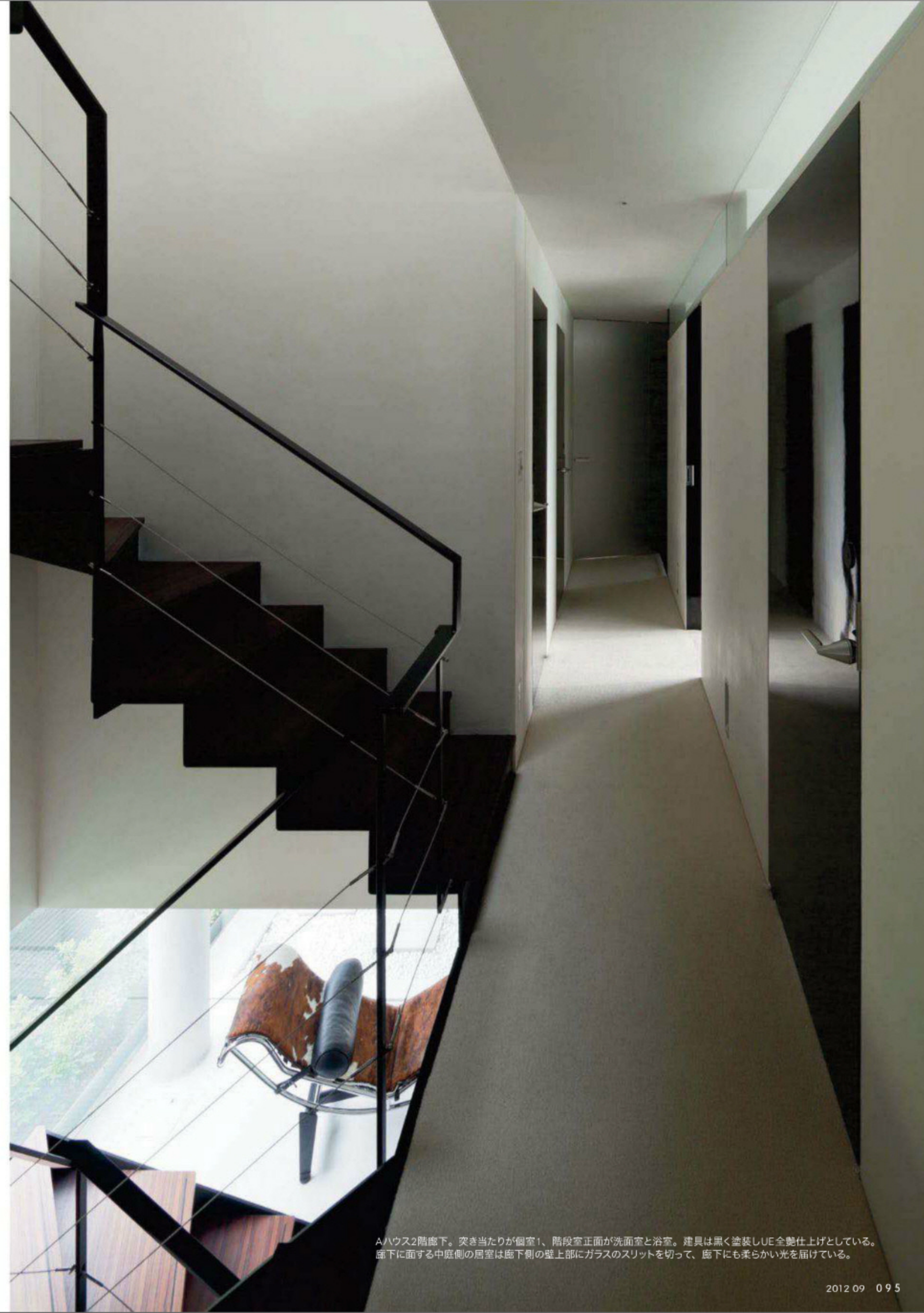
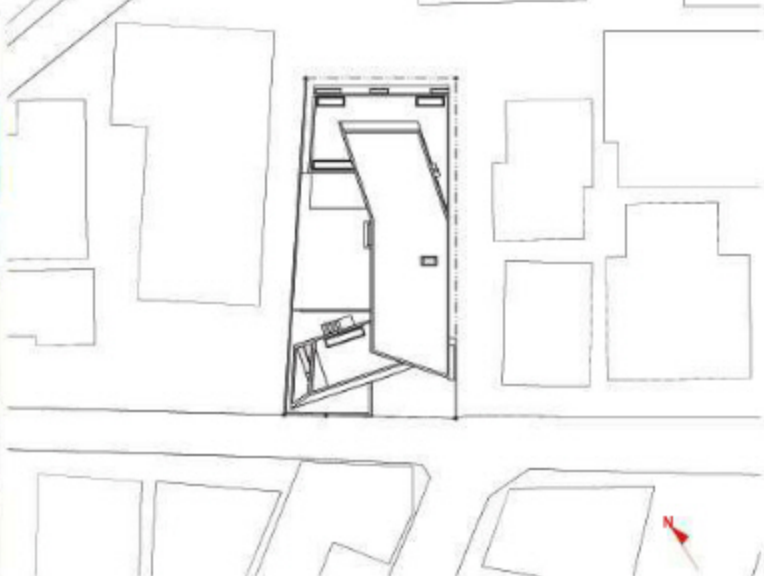
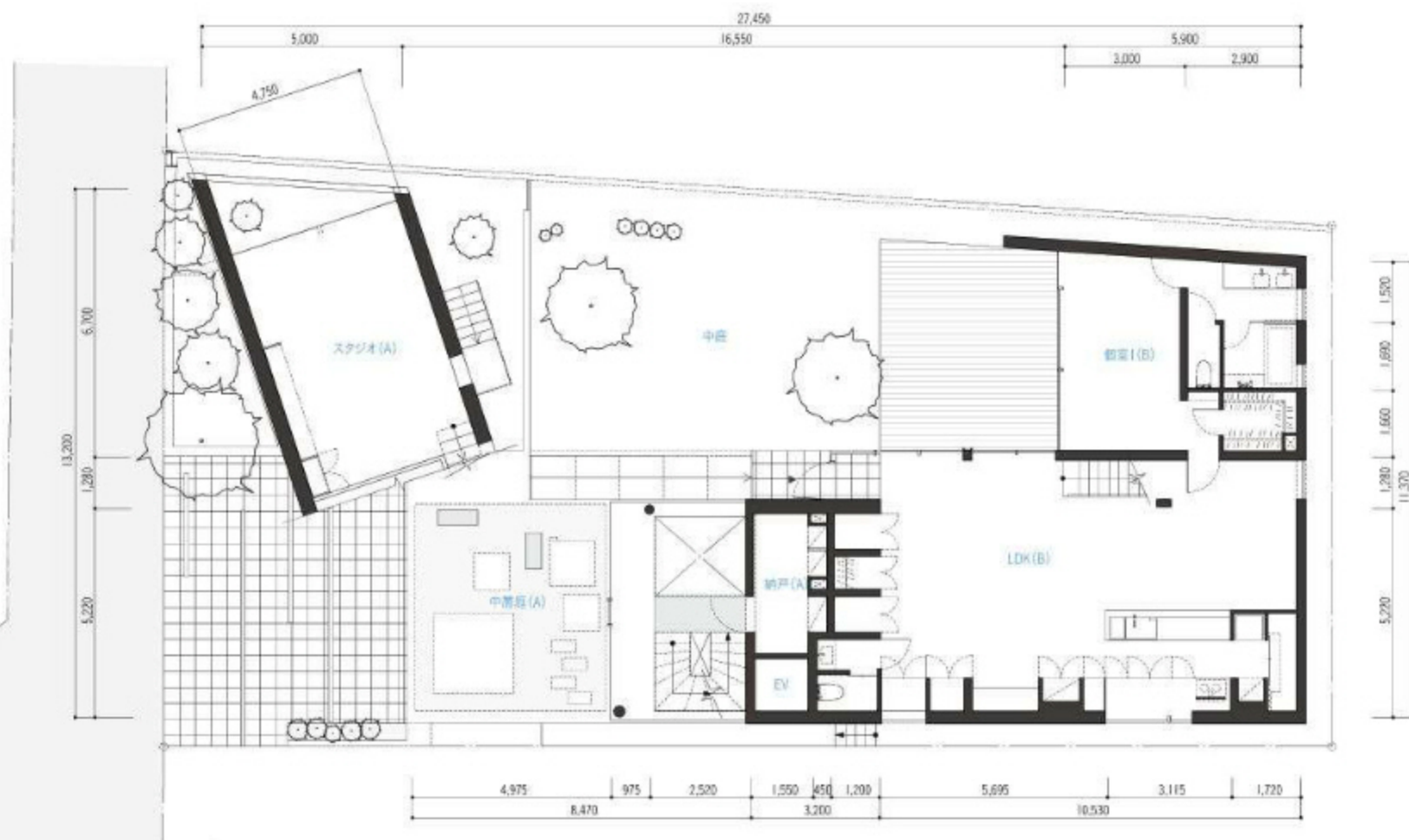
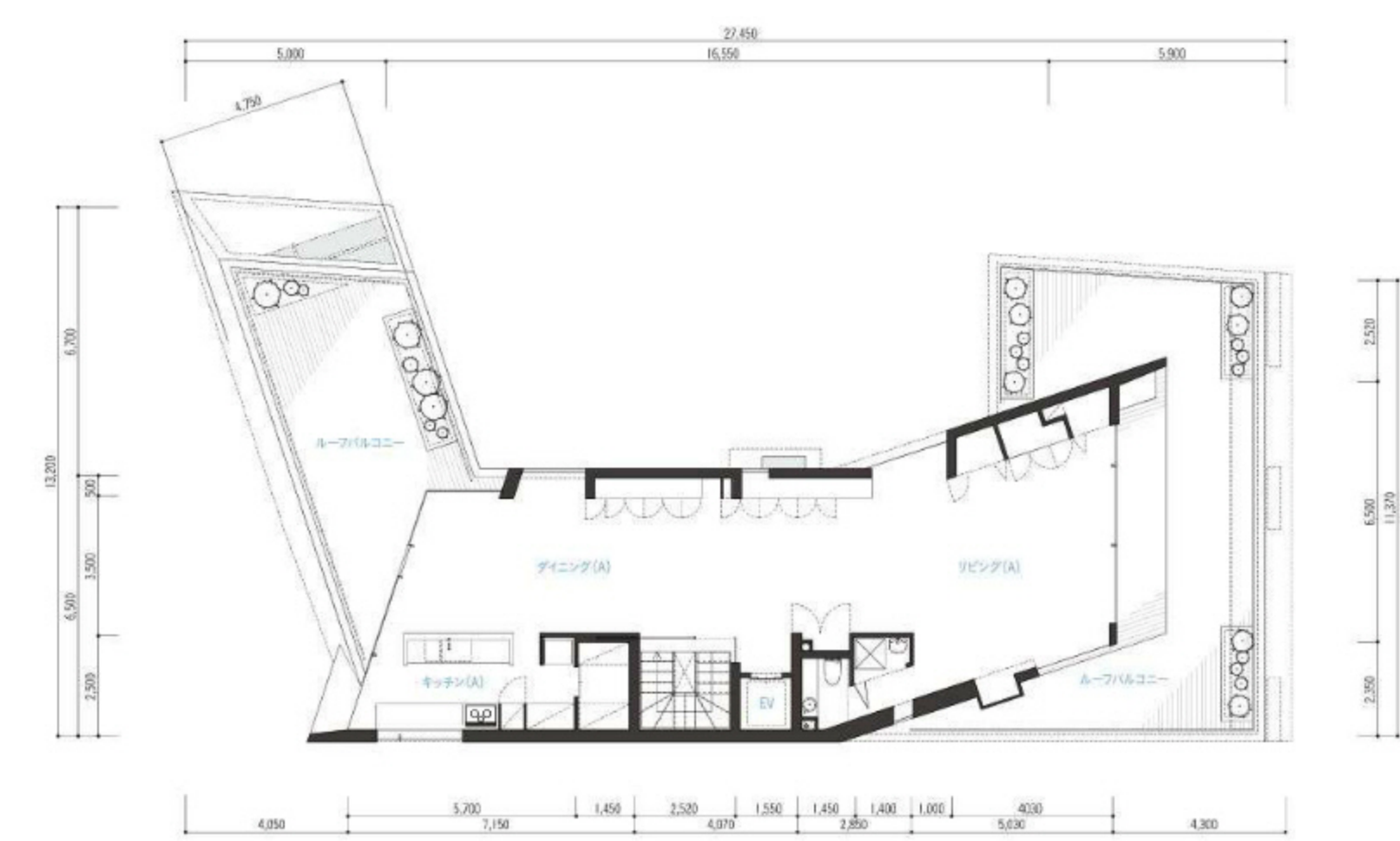
ファサードの大きなヴォリュームは天井高4mのスタジオを内包している。壁と天井が吸音材で仕上げられたこの部屋では映画鑑賞や楽器演奏が楽しめる。併設された書斎は可動式のガラススクリーンで仕切られ、デスクワークの傍らスタジオの様子が伺える。スタジオのボトムアップスクリーンを開け放てばフルハイトの大開口を通して隣地樹木と西の空が借景として現れる。

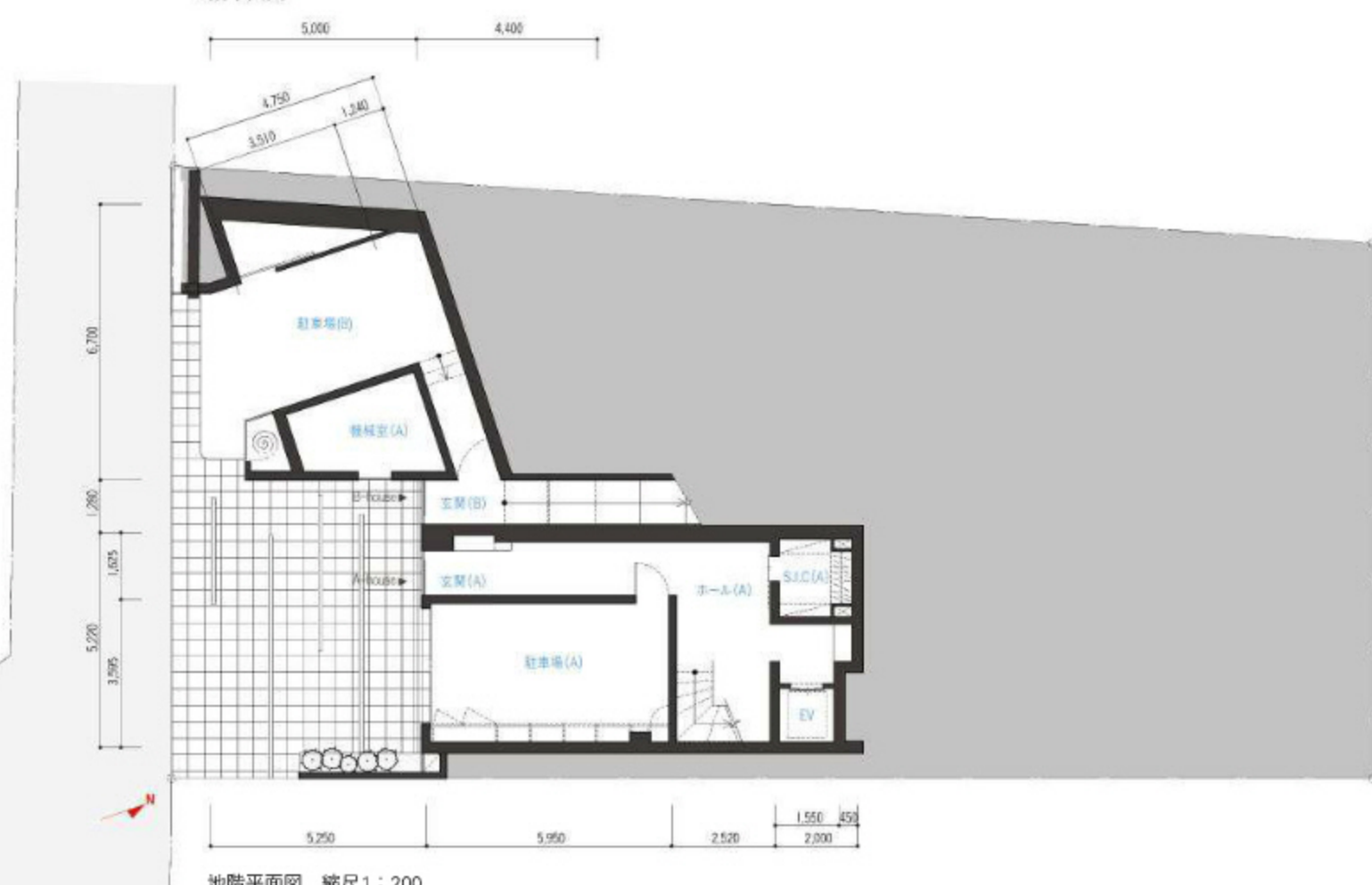
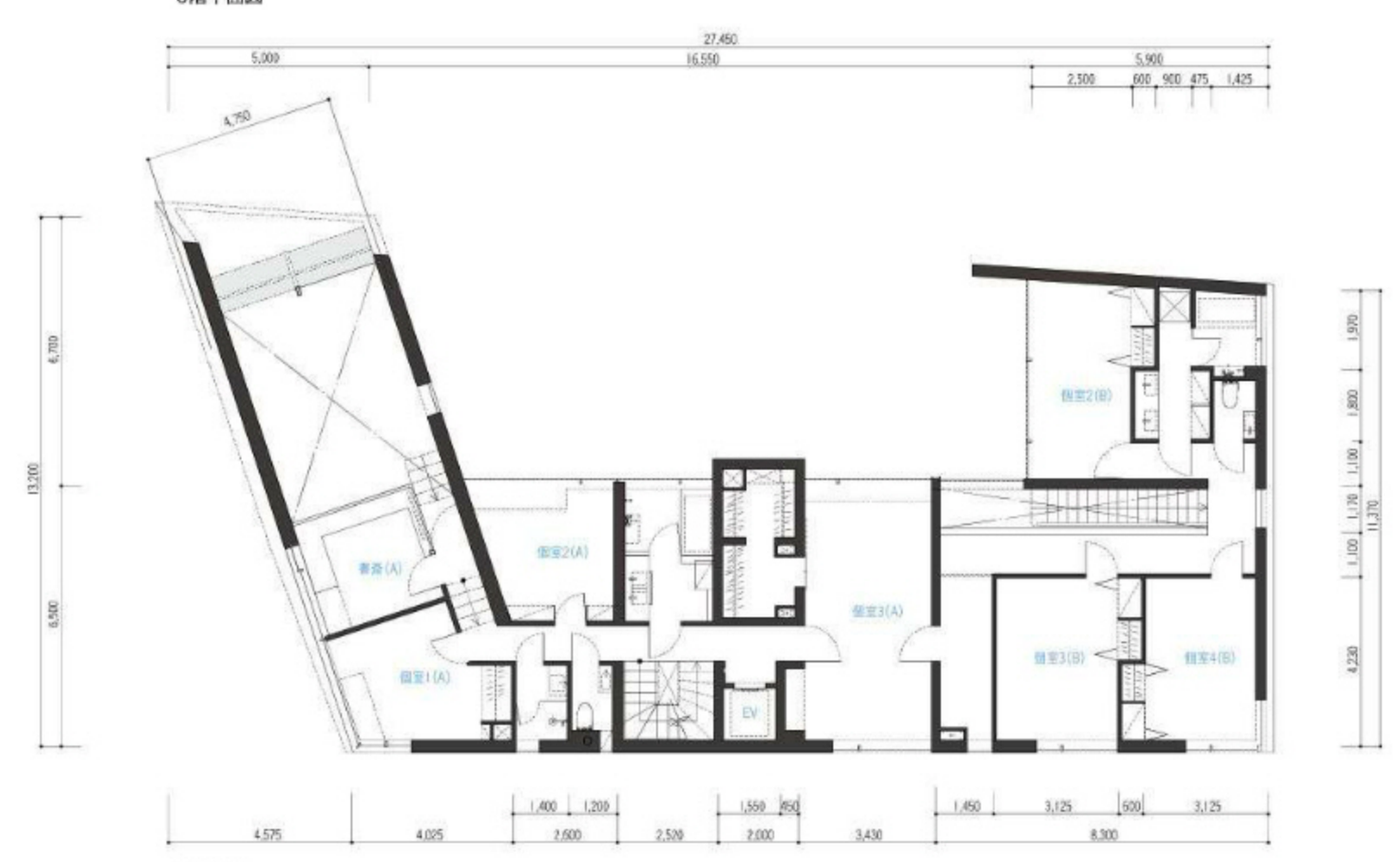
最上階は南北に広がるLDKである。平面形をくの字型に振ることで、南側の向いの屋上の緑や西側の夕暮れの街並みを望むだけでなく、北側の六本木方面、東側の東京タワーといった都市を象徴する風景を劇的にとらえている。

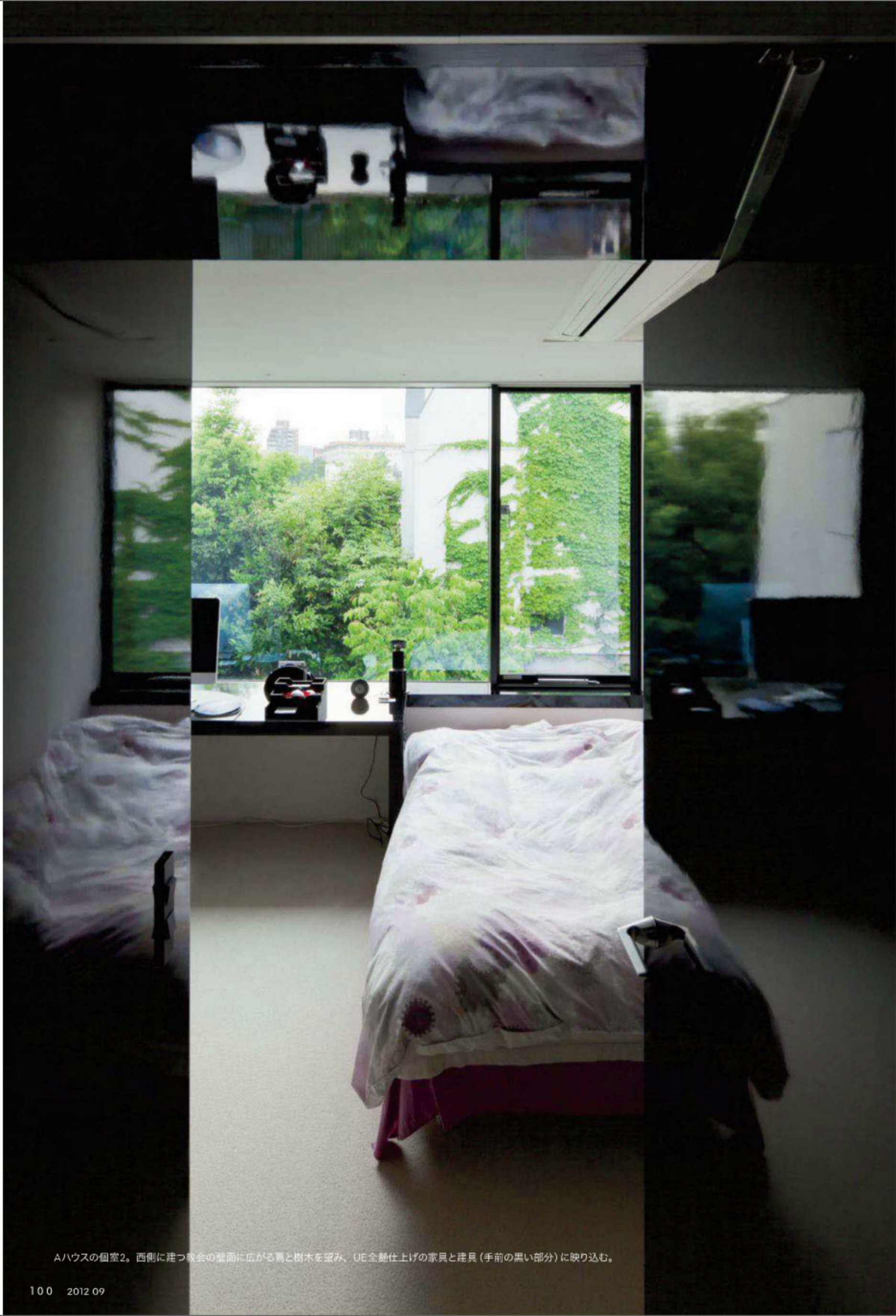
個々の部屋がそれぞれに特色のあるシーンを享受することでこの家には迷路性が生まれた。

それは生活において部屋間を移動する時の期待感を生み、翻って部屋に辿り着いた時の安心感や居心地のよさを高めている。　　（玉上貴人）

玄関Aよりホールを見る。正面の金属左官塗りの建具（W:700×H:3,000mm）をスライドさせると納戸へと続く。

断面図　縮尺1：200

空間構成過程のダイアグラム

1・2：あらゆる方向からの光を採り入れるためコの字に配置、ヴォリュームを立ち上げる。／3・4：手前のヴォリュームを外側に開き、右下を切り欠くことで採光と通風を確保。／5：共有のポーチからAハウス、Bハウスそれぞれのガレージにアプローチ。／6・7：周囲の景色を取り込めるよう最上階のヴォリュームの向きを調整する。／8：それぞれ長手方向の奥行を生かして2世帯を配置。

Aハウス2階廊下。突き当たりが個室1、階段室正面が洗面室と浴室。建具は黒く塗装しUE全艶仕上げとしている。廊下に面する中庭側の居室は廊下側の壁上部にガラスのスリットを切って、廊下にも柔らかい光を届けている。

左：中庭から正面にBハウスを見る。右手前の緩やかな階段からアプローチする。／右：配置図　縮尺1：800。／右頁、左：Aハウスのダイニングが面するルーフバルコニー。デッキ材はジャラ。／右頁、右：Aハウスのリビング。東側に東京タワーを望めるようにプランが調整されている。北面は高さ2,700mm、幅4,000mmがすべてFIXの開口となっている。

1階平面図

地階平面図　縮尺1：200

3階平面図

2階平面図

Aハウスのダイニングからリビングまで見通す。リビング手前をクランクさせることで、景色を取り込むと共に奥行をもたらしている。床はローズウッドのフローリング、天井高は2,700mm。天井に絡み合うように伸びる2つのラインは照明で、スポットライトのほか溝型に彫り込んだ穴に照明器具を這わせ、ライン状に明かりが灯るようになっている。（点灯時は101頁写真参照）

Aハウスの個室2。西側に建つ教会の壁面に広がる蔦と樹木を望み、UE全艶仕上げの家具と建具（手前の黒い部分）に映り込む。

N-HOUSE

所在地／東京都
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供1人

設計
タカトタマガミデザイン
　担当／玉上貴人　井出走野（元所員）
　八代嘉則
構造　エスフォルム　担当／大内彰
設備　スリーク　担当／齊藤誠　横井基泰
電気　スリーク　担当／齊藤誠　山本周吾

施工
佐藤秀　担当／加来裕之
設備　三栄設備工業　担当／高橋俊則
電気　高木電気工業社
　担当／畑中健　比良田覚
外構・造園　岩城　担当／長束有祐　関豊昌

構造・構法
主体構造　鉄筋コンクリート造
　一部鉄骨鉄筋コンクリート造
基礎　べた基礎

規模
階数　地下1階　地上3階
軒高 9,814mm　最高の高さ 9,964mm
敷地面積　407.1m²
建築面積　233.02m²
　（建蔽率57.24% 許容60%）
延床面積　586.87m²
　（容積率131.98% 許容160%）
　地階　106.93m²　1階　179.21m²
　2階　185.05m²　3階　115.69m²

工程
設計期間　2008年11月〜2010年10月
工事期間　2010年10月〜2012年2月

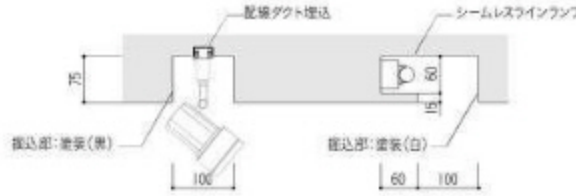
敷地条件
地域地区　第一種中高層住居専用　準防火
　第二種高度地区
道路幅員　南4m　　駐車台数2台

外部仕上げ
屋根／シート防水
外壁／ EPS断熱材＋白セメント珊瑚砂洗い出し＋撥水剤　コンクリート打放し＋撥水剤
開口部／アルミサッシ　スチールサッシ
　スチールドア　ステンレスドア
外構／ウッドチップ　ピンコロ

内部仕上げ
LD（A）
床／ローズウッドフローリング
壁／漆喰半磨き 西澤工業
天井／漆喰
家具／収納棚造作（UE全ツヤ）
照明／パナソニック　ルミナベッラ
　DNライティング 森川製作所
キッチン（A）
床／ローズウッドフローリング
壁／漆喰半磨き（西澤工業）
天井／漆喰
照明／パナソニック　トキスター
　DNライティング　森川製作所
厨房機器／造作
　カウンタートップ／シーザーストーン
　面材／ UE全ツヤ
　食洗器／ AEG F89020VI
　オーブン／ Miele H5240BP
　ガスコンロ／パナソニック KZ-JT75VC
　水栓金物／コーラー K-649-VS
　換気扇（シェード）／ ARIAFINA FED-901
スタジオ（A）
床／カーペット（フォアベルク）
壁・天井／グラスウール（ガラスクロス貼り）ボタン留め
家具／収納棚造作（アルミ）
照明／モデュラー 1022010　クレオン Mini
　Side in-Line　DNライティング D2-1250A
その他／ボトムアップロールスクリーン
　映写スクリーン
個室1・2・3・4　廊下（A）
床／カーペット（フォアベルク）
壁／漆喰半磨き（西澤工業）
天井／漆喰
家具／収納棚造作（UE全ツヤ）
照明／ DNライティング　森川製作所
　ダイコー　クレオン
建築金物／モドリック Agaho
浴室・脱衣室（A）
床／ビエトラレッド ダイナワン
壁・天井／ドイツ壁
洗面台／造作（コーリーライト）
洗面水栓金物／アドヴァン
照明／森川製作所　DNライティング
建築金物／モドリック　Agaho
バスタブ／大和重工業
シャワー水栓金物／ HANSGROHE
空調機器／浴室暖房乾燥機（三菱電機）
トイレ（A）
床／大判磁器質タイル（アドヴァン）
壁／漆喰半磨き 西澤工業
天井／漆喰
手洗台／造作（コーリーライト）
手洗水栓金物／アドヴァン
照明／森川製作所
建築金物／モドリック　Agaho
便器／ 3F：INAX　2F：TOTO
玄関　ホール　SIC（A）
床／トラバーチン水磨き（アドヴァン）
壁／漆喰半磨き（西澤工業）
天井／漆喰
照明／ DNライティング　モデュラー
LDK（B）
床／ローズウッドフローリング
壁・天井／ EP
家具／収納棚造作（UE）
照明／パナソニック　DNライティング
　トキスター　森川製作所
厨房機器／造作
　カウンタートップ／シーザーストーン
　面材／ UE
　食洗器・オーブン／ AEG
　ガスコンロ／パナソニック
　水栓金物／コーラー
　換気扇（シェード）／富士工業
個室1・2・3・4　廊下（B）
床／ローズウッドフローリング
壁・天井／ EP
家具／収納棚造作（UE）
照明／ DNライティング　パナソニック
建築金物／モドリック　Agaho
浴室（B）
床／磁器質タイル アドヴァン
壁・天井／ドイツ壁
照明／森川製作所　パナソニック
バスタブ／大和重工
玄関（B）
床／トラバーチン水磨き アドヴァン
壁・天井／白セメント珊瑚砂洗い出し＋撥水剤
照明／森川製作所　パナソニック

設備システム
空調　冷暖房方式／空冷ヒートポンプ式
　換気方式／第三種換気
　その他／土壌蓄熱式床暖房　電気式床暖房
給排水　給水方式／直結給水方式
　排水方式／合流式（雨水宅内処理）
給湯　給湯方式／電気式給湯器エコキュート

撮影／新建築社写真部

Aハウスのスタジオより書斎を望む。壁は吸音材としてグラスウール（ガラスクロス貼り）をボタン留めしている。書斎とのレベル差は775mm。

溝型ライン照明詳細　縮尺1：15

タスクとアンビエント─視線を導く2本の照明
間接照明と配線ダクトを2本のラインが絡み合うようにリビングダイニングの天井に走らせた。これにより空間に広がりをもたらし、コンセプトに沿って視線を導く役割をもたせた。また、ベース照明と手元照明などを分けることでタスク・アンビエント照明を実現した。（玉上）

AハウスのLDKの照明を点灯したところ。ライン状の照明は光にムラなく浮かび上がる。

ポジャギの家

Pojagi House
神奈川県横浜市

森清敏+川村奈津子／MDS
番祐貴子／ハッタユキコ
名和研二／なわけんジム
Kiyotoshi Mori+Natsuko Kawamura / MDS
Ban Yukiko / hatta yukiko
Kenji Nawa / nawakenji-m

ダイニング、リビング、キッチンの吹抜けを見る。1階、2階共にワンルーム空間で、韓国の伝統工芸の布ポジャギが間仕切りの機能を担う空間構成。ダイニングの天井高さは3,500mmで、上部はロフトになっている。

パッチワークのように縫い代をもったポジャギは光をやさしく透過する。そのため間仕切りだけでなく、カーテンとしての機能も担い、視線を遮るのはもちろん冬場は冷気を窓回りの床の換気口へといざなう。自由にポジャギを使用できるよう、天井にレールを巡らせている。

スケルトンとインフィルをつなぐポジャギ

インテリアデザイナーである建主は、今回のプロジェクトの共同設計者でもあったため、どのように役割分担すべきか？　ということで頭を悩ませた。一般に、建築設計者とインテリアデザイナーの役割は、それぞれスケルトンの設計とインフィルの設計と区分されることが多いが、本来、住宅はプランニング、窓の位置や大きさ、構造、素材などが相互に関わり、同時進行していくべきものだと思う。

設計を始める際に、建主より「ポジャギ」という韓国の伝統的なパッチワークを使うことをテーマとして挙げられた。そこで私たちはポジャギを襖と見立てた「続き間」とすることを考えた。続き間は、ある時はポジャギを閉じて小さな部屋として、またある時はポジャギを開けて広く使うことができる。

シンプルな平面の中に150mm角の木柱を並べた列柱壁と可動のポジャギを配置した緩やかな空間構成とし、ポジャギのレイアウトによりさまざまななシーンをつくり出す。構造の耐力壁とインテリアとしてのポジャギを、短冊状の同列のデザイン要素とすることによって、建築と構造の設計者が壁・窓・ポジャギの配置や構造を、インテリアデザイナーが仕上げやポジャギのデザインを主に考えるといった一般的な設計手法を取りつつ、スケルトンとインフィルが分離しない、一貫したデザインを実現することができた。

基壇のコンクリート部分はアトリエ。緑豊かな公園に面して、道路面より一層高いレベルを2層の居住スペースとし、その中央部に天井高さのあるダイニング、その上部にロフトスペースを設け、それらを取り囲むようにフレキシブルな場をつくっている。その境界部分に構造体である木材の列柱壁を配し、輻射暖房の熱がその木材に蓄熱されることで、室内の熱環境を緩やかに保つ。また窓際のコールドドラフトをポジャギにより遮りながら、階段・吹抜けなどを最大限生かし、室内の熱エネルギーを循環させている。

外壁は、内部の列柱壁と同じモジュールを反映させた黒いスギ壁とガラス、そしてガラス内側にかかるポジャギという、四周とも同じ構成とし、眺望により開口率を変化させたものとなっている。

（森清敏　川村奈津子）

1階リビングからダイニング方向を見る。階段室にはPSパネルを設置して1、2階の空気を輻射熱で暖める。中央部の構造は150mm角スギ無垢柱を7本重ねた壁を4つ配置して構成、短冊状という点でポジャギの意匠を踏襲。ダイニング回りの3面もポジャギの設置ができるようにしている。

東側外観。傾斜地に位置し、基壇部は玄関、アトリエ、水回りが入る。正面に公園。ポジャギを想起させる外壁デザインを4面で展開。

カーテンにも間仕切りにもなるポジャギ

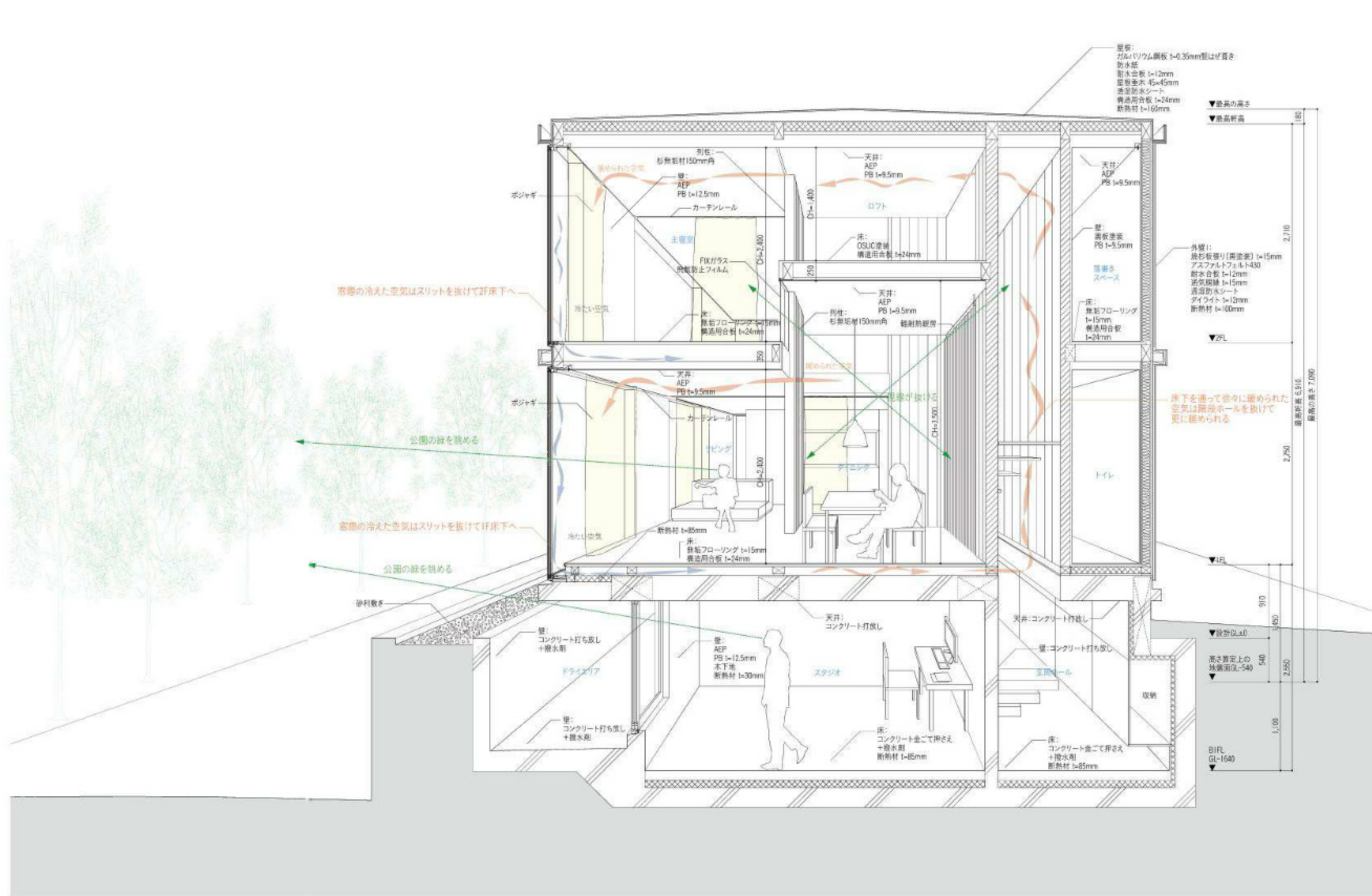
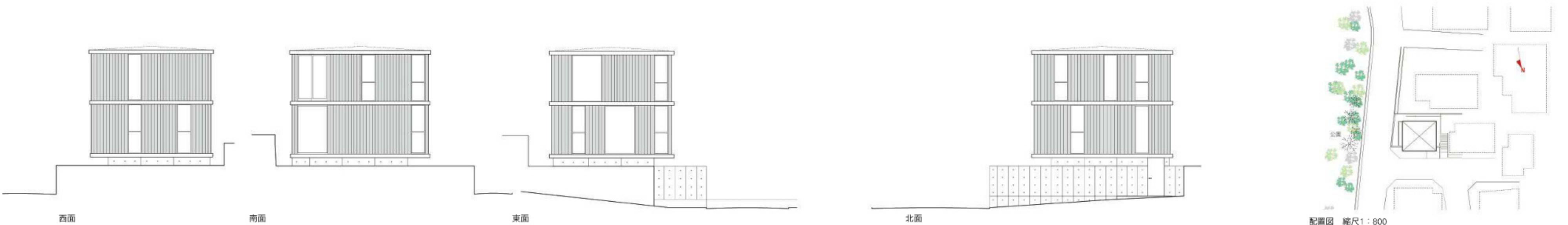
「ポジャギ」とは韓国の伝統工芸品であり、暮らしで使う手仕事用の布を用いた、縫い代を主役にした希有なクラフトである。大きな開口部で公園の緑を取り込みたいけれど、生活のために覆いも必要。人目を遮りつつ光を入れて、木々と相性がよいものを……と、この敷地に建つ家を考えた時、ポジャギを用いることしか浮かばなかった。

ポジャギの縫い代は漫画のコマ割りに似て、視点を飛ばしてくれる。また表裏をつくらない縫い方をすることで、空間の間仕切りとしての自由度を高め、透け感は重なった時に新しい色を見せてくれる。ポジャギが間仕切りにもカーテンにもなるようにカーテンレールを巡らせ、90×240cmの大きさの短冊状のポジャギを麻に似た素材で製作して吊るした。意匠、構造設計者はポジャギのイメージをうまく変換してくれた。現在吊るしているポジャギは7枚。これからも必要に応じてつくり、この家を完成させていきたい。（番祐貴子）

非構造的主（ヌシ）ポジャギのための構造構成

人工地盤的な機能も兼ねたRC造地下1階部と、木造2階地上部からなるアトリエ兼用住宅である。構造への要求は、建主（インテリアデザイナー）、建築家が意図する、ポジャギのある地上部の空間構成であった。

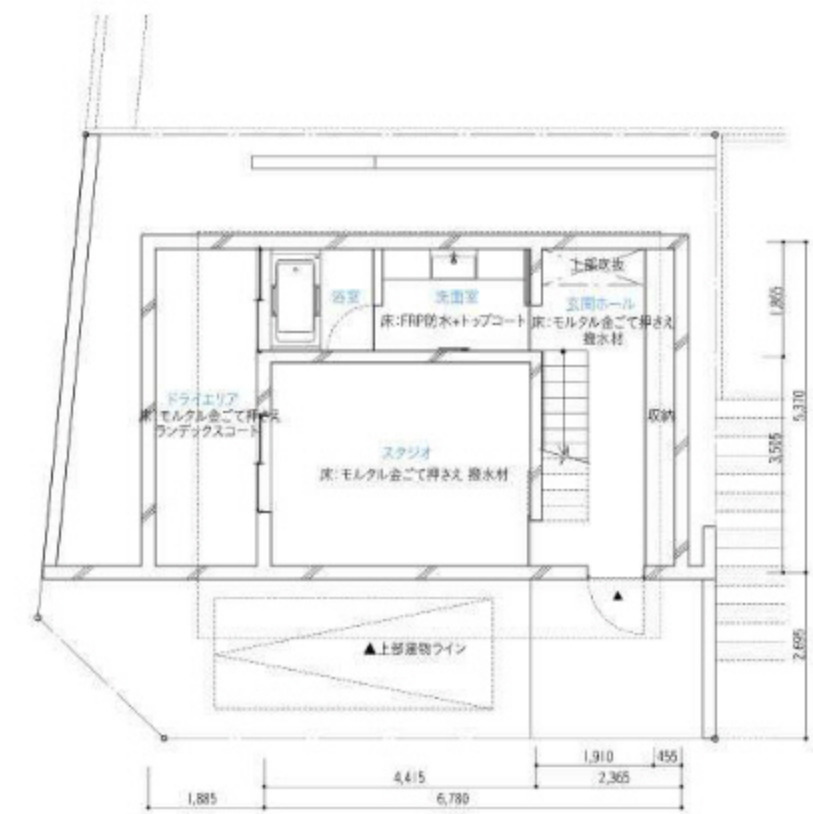
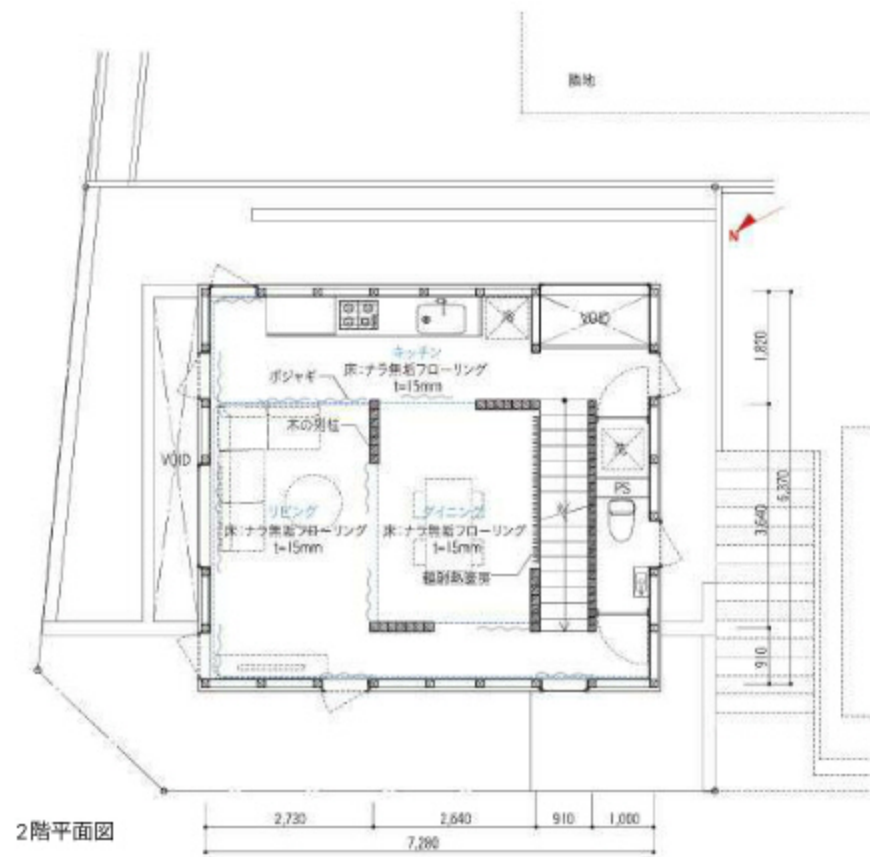
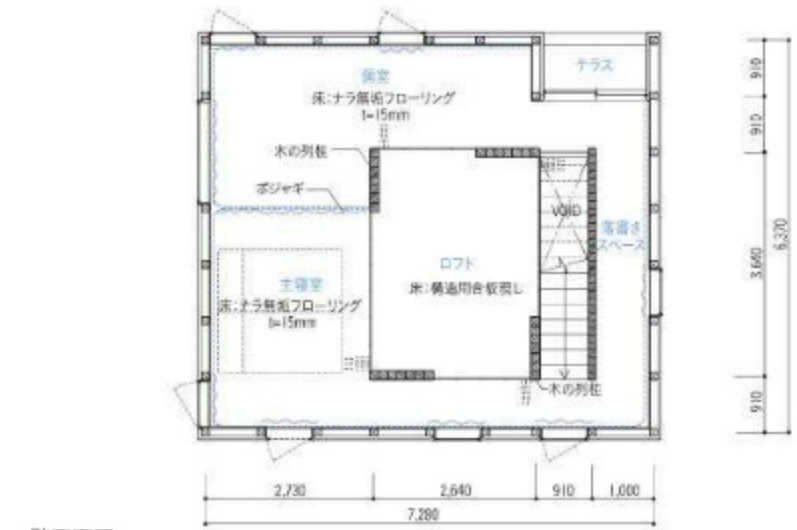
このポジャギという要求を、吊るすことからの上下という方向性、布材たる強く儚い無垢性、そしてひとつの役割に留まらない複数の意味を兼ねた存在としてとらえることとした。結果として、平面中央部分に上下2層にわたり軸力を負担する、木無垢材による群柱を配置した。

この150mm角材7本1組による群柱部は、各材1本における構造的負担が分散され小さくなる一方で、集積群としてその存在の印象を強めていく。ここでは構造的負担のない主（ヌシ）たるポジャギと、構造を担い存在の印象は希薄な一般的構造部材の中間的意味をもたせた部材として扱うことを意図した。（名和研二）

断面パース　縮尺1：60

立面図　縮尺1：200

配置図　縮尺1：800

3階平面図

2階平面図

1階平面図　縮尺1：150

ポジャギの家

所在地／神奈川県横浜市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供1人

設計
森清敏＋川村奈津子／MDS
　担当／森清敏　川村奈津子　清水純一
インテリアデザイン　番祐貴子／ハッタユキコ
　担当／番祐貴子
構造　名和研二／なわけんジム
　担当／名和研二　皆川宗浩

施工
栄港建設　担当／奥誠　上原智行（元社員）
大工　やまひろ　担当／梶原廣竜
家具　松本家具製作所　担当／松本勝一
設備　アクア齋藤　担当／齋藤謙治
電気　アクラEEC　担当／北条一美
キッチン　マードレー　担当／山根ひとみ

構造・構法
主体構造　鉄筋コンクリート造（地下1階）
　木造在来工法（1、2階）
基礎　杭基礎

規模
階数　地下1階　地上2階
軒高 6,910mm　最高の高さ 7,090mm
敷地面積　102.68m²
建築面積　46.38m²
　（建蔽率45.17％ 許容50％）
容積対象延床面積　79.67 m²
　（容積率77.59％ 許容80％）
延床面積　117.18m²
　地階　37.51m²　1階　44.64m²
　2階　35.03m²

工程
設計期間　2008年4月〜2009年7月
工事期間　2009年8月〜2010年3月

敷地条件
地域地区　第一種低層住居専用地域
　法22条地域　第一種高度地区
道路幅員　北4.5m　東6.5m　駐車台数1台

外部仕上げ
屋根／カラーガルバリウム鋼板 t=0.35mm 竪はぜ葺き
外壁／焼杉縦羽目板張り t=15mm
開口部／アルミサッシ
外構／コンクリート洗出し仕上げ

内部仕上げ
リビング　ダイニング　キッチン　個室
床／ナラ無垢フローリング t=15mm クリアオイル
壁／PB t=12.5mm AEP
天井／PB t=9.5mm AEP
厨房機器／
　食洗器／パナソニック
　ガスコンロ／Rinnai
　換気扇（シェード）／ARIAFINA
　照明／オーデリック　スガツネ
　シンク水栓金物／GROHE
　その他／HAFELE　KAWAJUN
洗面室　浴室
床・壁／FRP防水 トップコート
天井／コンクリート打放し 撥水材
製作家具／ナラ練付 CL
照明／NIPPO　小泉産業
建築金物／ATOM　BEST
バスタブ／TOTO
シャワー水栓金物／GROHE
玄関ホール　スタジオ
床／モルタル金ごて押さえ 撥水材
壁／PB t=12.5mm AEP　コンクリート打放し
天井／コンクリート打放し
製作家具／ナラ練付 CL
照明／パナソニック　NIPPO

設備システム
空調　暖房方式／PS輻射熱暖房
　冷房方式／ルームエアコン
給排水　給水方式／上水道直結
　排水方式／公共下水道放流
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／新建築社写真部

上：2階はロフトを中心とした回遊動線をもつ。／左下：ダイニングからキッチン方向を見る。／右下：RC造の地下1階の玄関ホール。

1階ダイニング横からリビング方向を見る。

ハウスFU

HouseFU
東京都品川区

飯田善彦建築工房
IIDA ARCHISHIP STUDIO

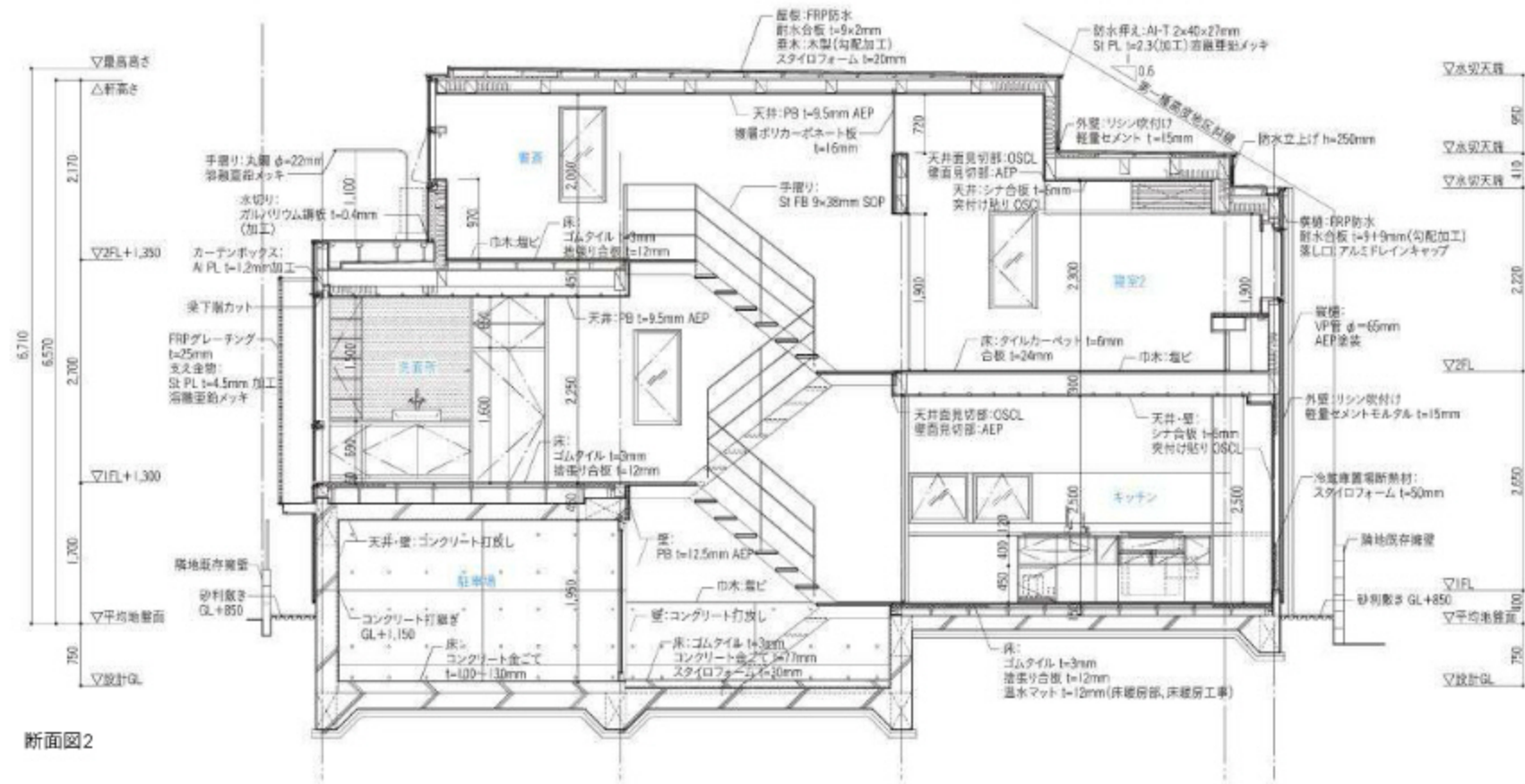
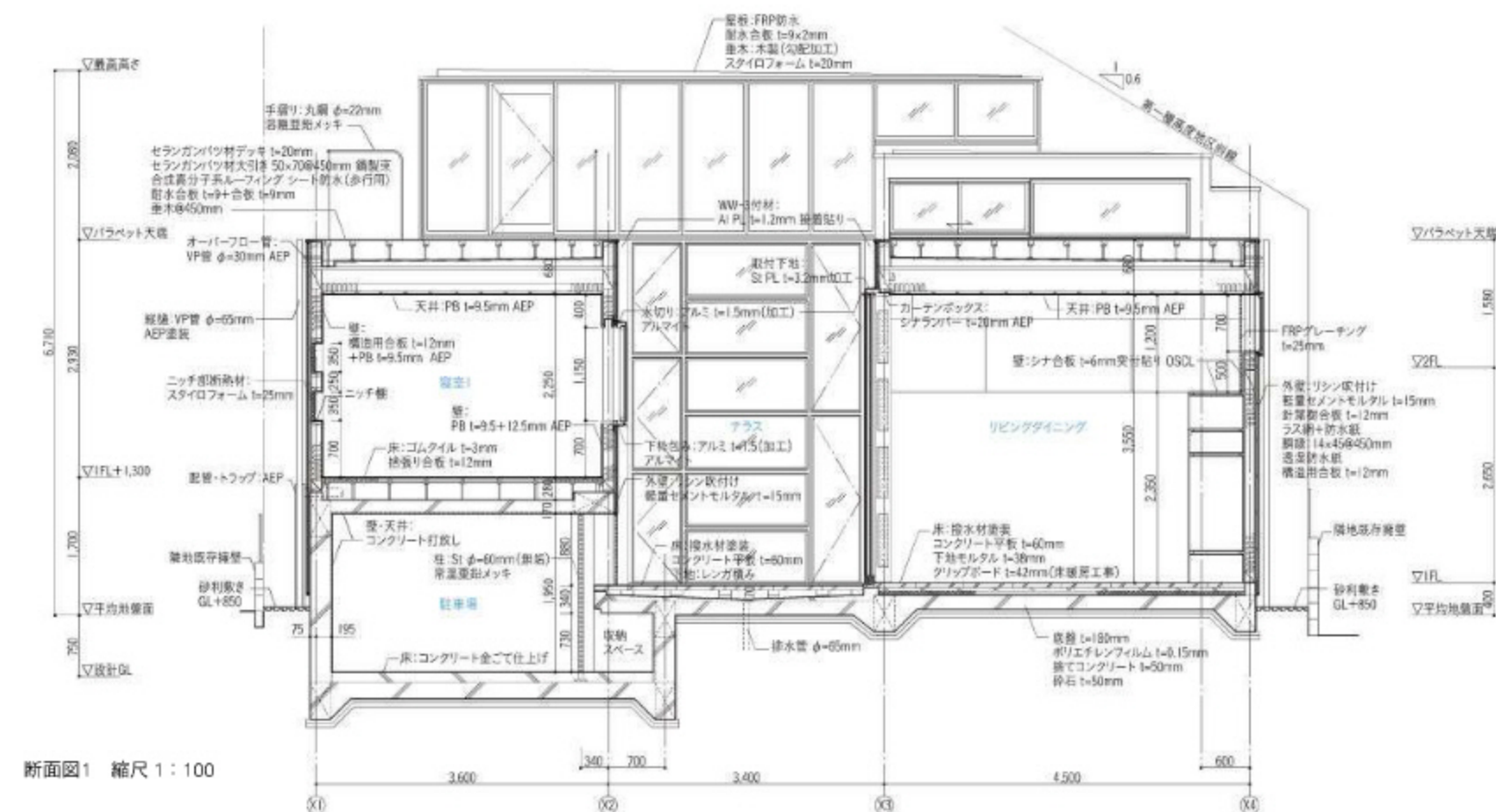
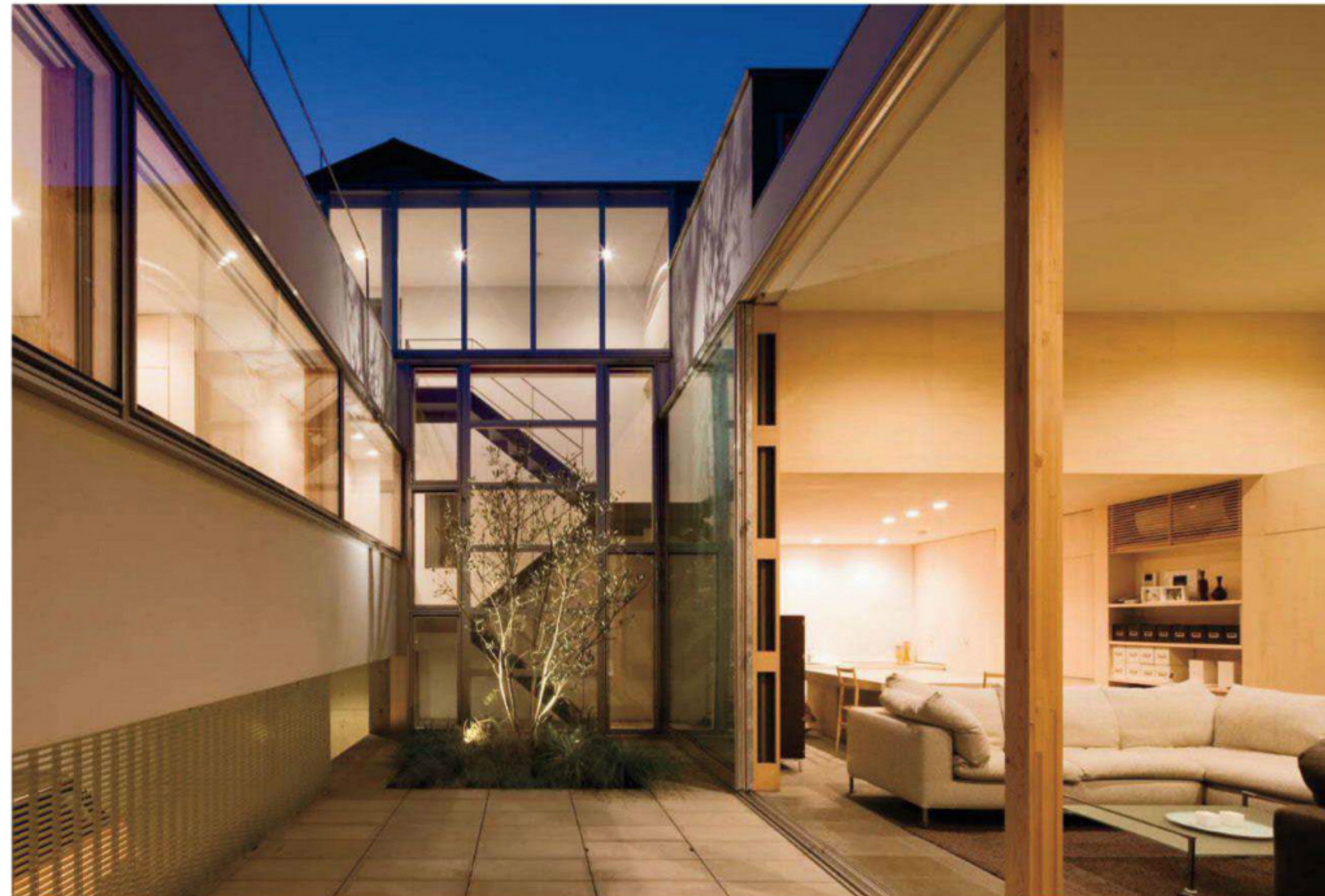
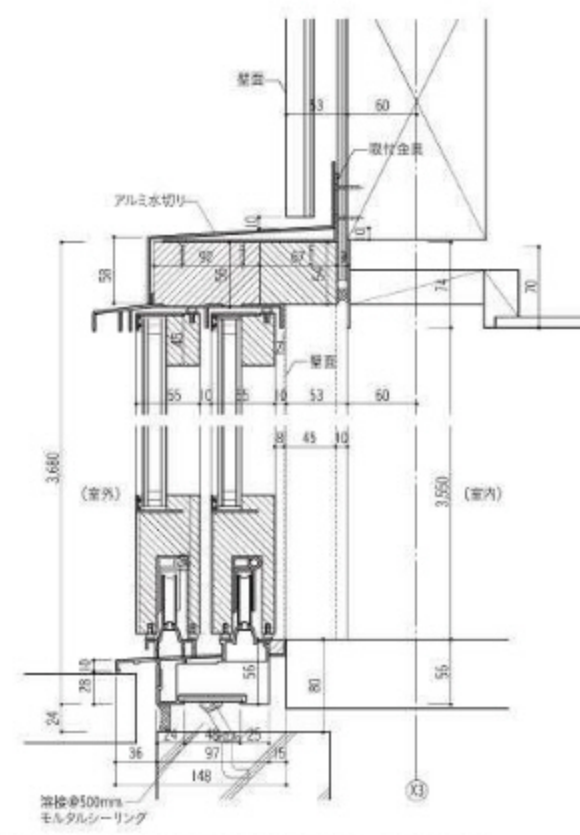
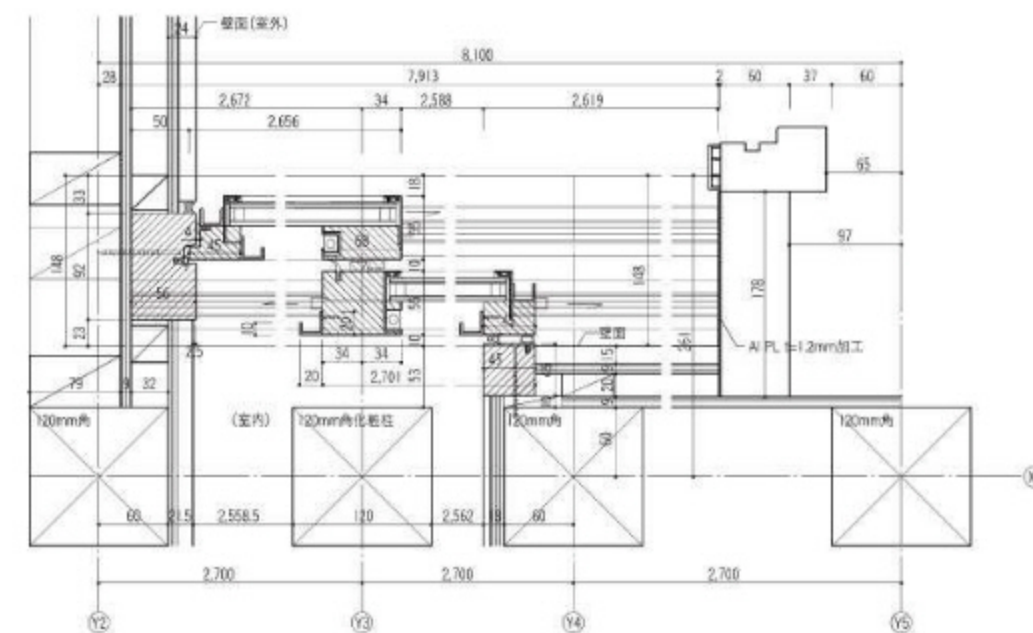
敷地の形状を活かし、前面道路より1m高い位置に中庭を設置。
中庭は3,400×8,100mmと大きく、リビングダイニングと一体となって室内外に開放的な空間を生み出している。

都市生活者の強く確かな夢

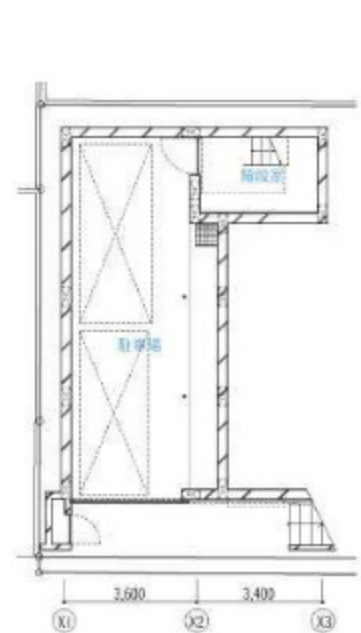
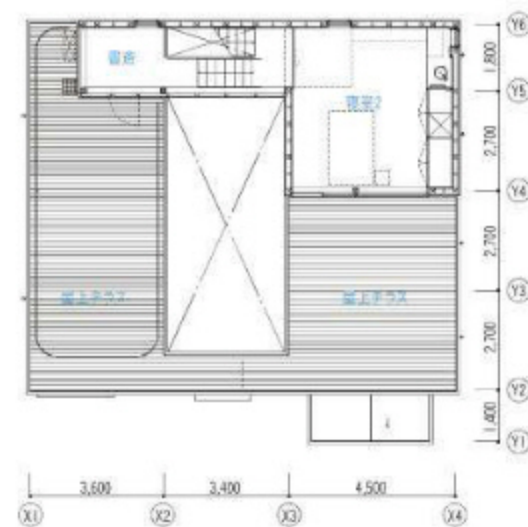
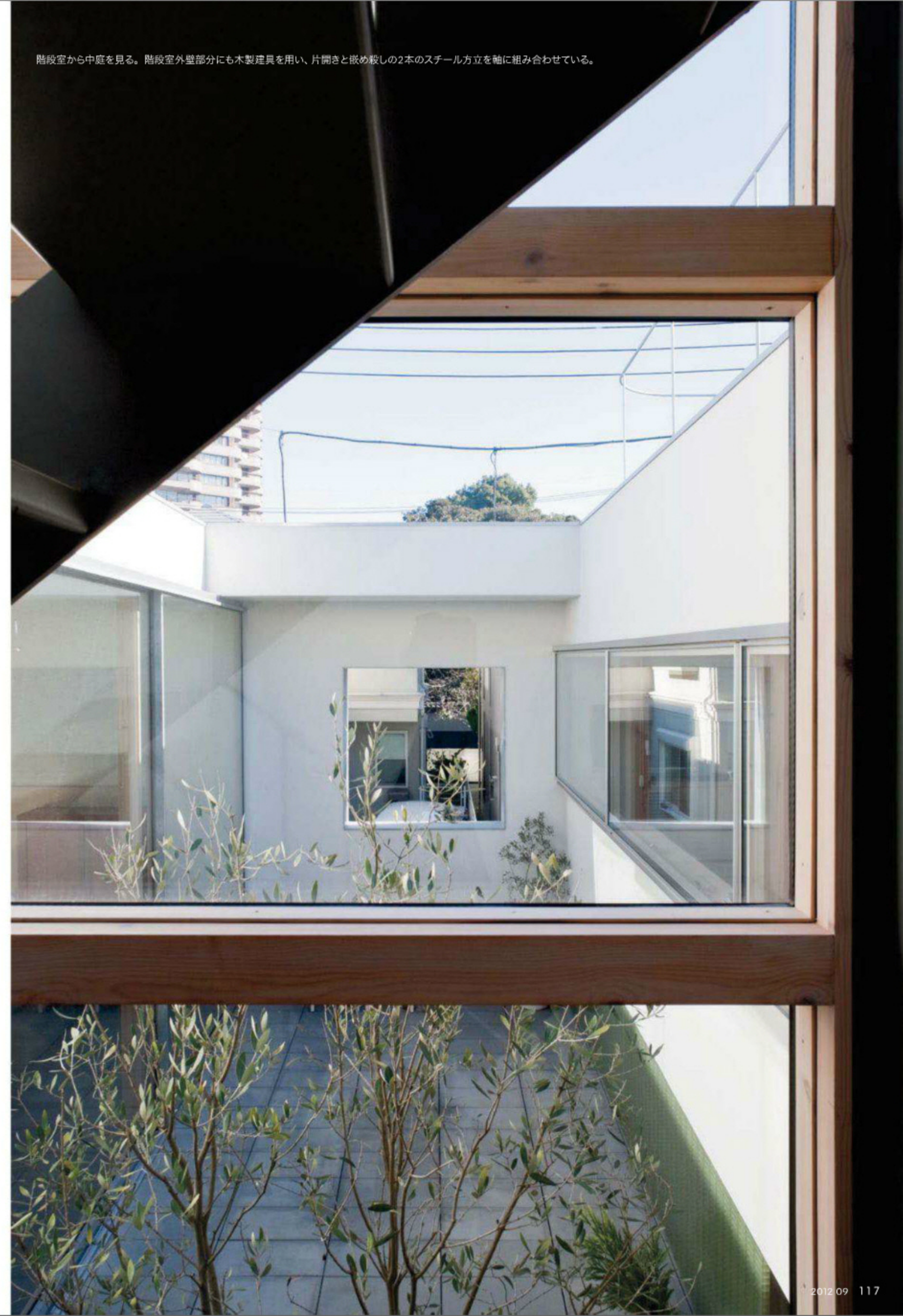
──屋外のような明るさと開放性をもつ都市の住まい

品川の高台にあたるこの辺りは、大きな建物が並ぶ表通りから引き込まれた路地状の細街路に、ところどころ残るまとまった緑に混じって大小さまざまな家が建て込んでいる。とはいえ、郊外住宅地とは異なる印象もあって、閉鎖的でありながら独特で静かな明るさ、のようなもの、が漂う。東側2項道路から1mほど高い宅地であるこの住宅の敷地も、南西北のすべてに隣家が迫っているものの、少し離れた樹々や超高層ビル、高く大きな空など取り巻く都心の空気に何か不思議な魅力が感じられた。家族は夫婦＋大学生の3人。加えて老犬と猫。今の都心居住家族像のひとつの典型ともいい得る、スマートで洗練された確かなスタイルが感じられる生活像。密集地といえども、というより、密集地であるからこそ開放的で快適な空間を訴求する強い意志。そのような、いわば都市への共感に導かれながら、さまざまな案を示し会話を重ねる中で、クライアント自身が描いたセンターコートをベースに組み立てた構成を最終的にかたちにしている。1mほど高い敷地条件を利用し、車庫を含む必要とされるスペースを中庭を挟んでスキップさせ積み重ねる。ふたつの寝室と水回りの位置を吟味したうえで、中心を占めるリビングダイニングには中庭と一体になるように限界ぎりぎりのサイズの木製引戸を仕組み、ほとんど屋外に近い明るさと開放性を生み出したいと考えた。特に今の時代、このような室内の屋外化、逆にいえば、屋外を室内に見立てる、あるいは、室内外の境界を極力曖昧にすることが、都心密集地での住宅を成立させるひとつの手法にほかならない、といえるだろう。ここに現れている空間の質は、都市に共生する強い意志にかたちを与える中で、できるだけ軽やかに、最小限の身振りで最大効果を得たい、と考えた結果でもある。　　（飯田善彦）

リビングダイニングと中庭を仕切る木製建具は約w=2,700×h=3,550mmの2本引き（詳細は115頁を参照）。

左：駐車場から1,000mmほど高い中庭を見る。／右：寝室1は中庭およびリビングダイニングから1,300mm床が高い。

断面図2

断面図1　縮尺1：100

中庭から階段室方向を見る。キッチン上部に寝室2を設置し、屋上面との高低差を利用して採光している。

リビングダイニング回りの開口部断面詳細図　縮尺1：15

リビングダイニング回りの開口部平面詳細図

地階平面図　　1階平面図　縮尺1：250　　2階平面図

階段室から中庭を見る。階段室外壁部分にも木製建具を用い、片開きと嵌め殺しの2本のスチール方立を軸に組み合わせている。

キッチンから洗面所へ向かう階段。上がり切った先に水回りが集約されている。写真中央のグレーチングで目隠しした開口部は換気・採光用。

左：寝室2から書斎を見る。
右：パラペットの立ち上がり面に揃えて屋上テラスを設置。

配置図　縮尺1：4,000

東側外観。寝室出窓、中庭開口部、玄関、車庫引戸などの要素を即物的なディテールにすることで各部位の機能を超えた表現とすることを意図した。
それらは生活の断片を街に表出する装置でもある。（飯田）

ハウスFU

所在地／東京都品川区
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供1人＋犬＋猫

設計
飯田善彦建築工房　担当／飯田善彦　武田尚久
構造　ロウファット ストラクチュア
担当／横山太郎　須藤正尊
植栽計画　藤村雅史デザイン事務所
担当／藤村雅史

施工
建築　前川建設　担当／前川政一
設備　Fusion3　担当／安江慎一郎　鈴木守
電気　ハマファクトリー
担当／濱田礼　吐師克彦
大工　瑞啓　担当／菅原佑一
仮設・土工事　松本工業　担当／松本洋一
鉄筋　瀧本鉄工　担当／瀧本雄次
アルミサッシ　横浜ビル建材
担当／大津圭一郎
ガラス　森商店　担当／森荘一郎
木製サッシ　キマド　担当／木原正進
塗装　昭研工業　担当／金子由憲　宮内大輔
左官　久保田左官　担当／久保田博之
佐藤企画　担当／尾脇一
タイル・石　小助川タイル　担当／小助川充
内装　一色　担当／井澤正
防水　日本シールス
担当／田村正典　若林憲久
造作家具　プロペラ　担当／前川幸子
内部建具　野口建具店　担当／野口正男
カーテン　ダムダムハウス　担当／小倉光晴
暖房システム　東京ガスエネフロント
担当／斉藤始之

構造・構法
主体構造・構法　木造在来工法＋一部鉄筋コンクリート造
基礎　べた基礎

規模
階数　地下1階　地上2階
軒高 6,570mm　最高の高さ 6,710mm
敷地面積　157.32m²
建築面積　93.83m²
（建蔽率59.64% 許容60%）
延床面積　131.49m²
（容積率83.58% 許容150%）
地階　49.05m²　1階　93.83m²
2階　28.09m²

工程
設計期間　2010年2月～2010年8月
工事期間　2010年10月～2011年5月

敷地条件
地域地区　第一種低層住居専用地域　準防火地域　第一種高度地区　日影規制
道路幅員　東4.00m　　駐車台数2台

外部仕上げ
屋根／合成高分子系ルーフィングシート＋セランガンバツ材デッキ　FRP防水
外壁／軽量セメントモルタル t=15mm　リシン吹付け
開口部／木製サッシ　アルミフロントサッシ
住宅用アルミサッシ
外構／コンクリート平板 t=60mm 600×300mm

内部仕上げ
キッチン
床／610mm角ゴムタイル t=3mm
（KAYAR-オーシマプロス）
壁／PB t=9.5＋12.5mm AEP
天井／シナ合板 t=6mm 突付け貼り OSCL
リビングダイニング
床／コンクリート平板 t=60mm 600×300mm
壁／PB t=9.5＋12.5mm AEP
天井／PB t=9.5mm AEP
シナ合板 t=6mm突付貼り OSCL
家具／RC研出しダイニングテーブル　収納
照明／DAIKO DDL-3499YW
寝室1
床／610mm角ゴムタイル t=3mm
（KAYAR-オーシマプロス）
壁／PB t=9.5＋12.5mm AEP
天井／PB t=9.5mm AEP
照明／DAIKO DDL-3499YW

設備システム
空調　暖房方式／ガス温水式床暖房
ファンコンベクター
冷房方式／ヒートポンプ式エアコン
換気方式／第三種換気方式
給排水　給水方式／直結給水方式
排水方式／公共下水道直結
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／新建築社写真部

前面道路から約1m上がって玄関に向かう。接道面のヴォリュームの高さは約5m。

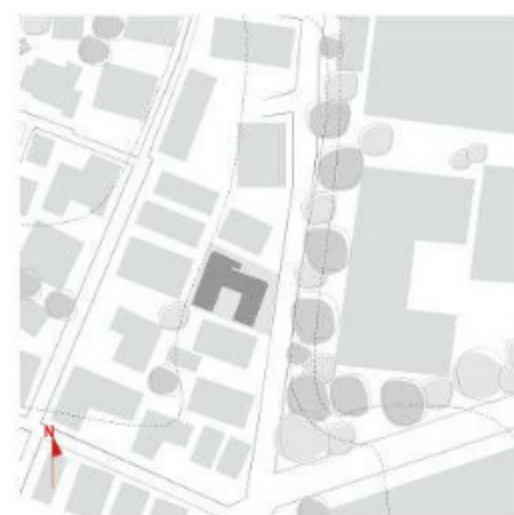
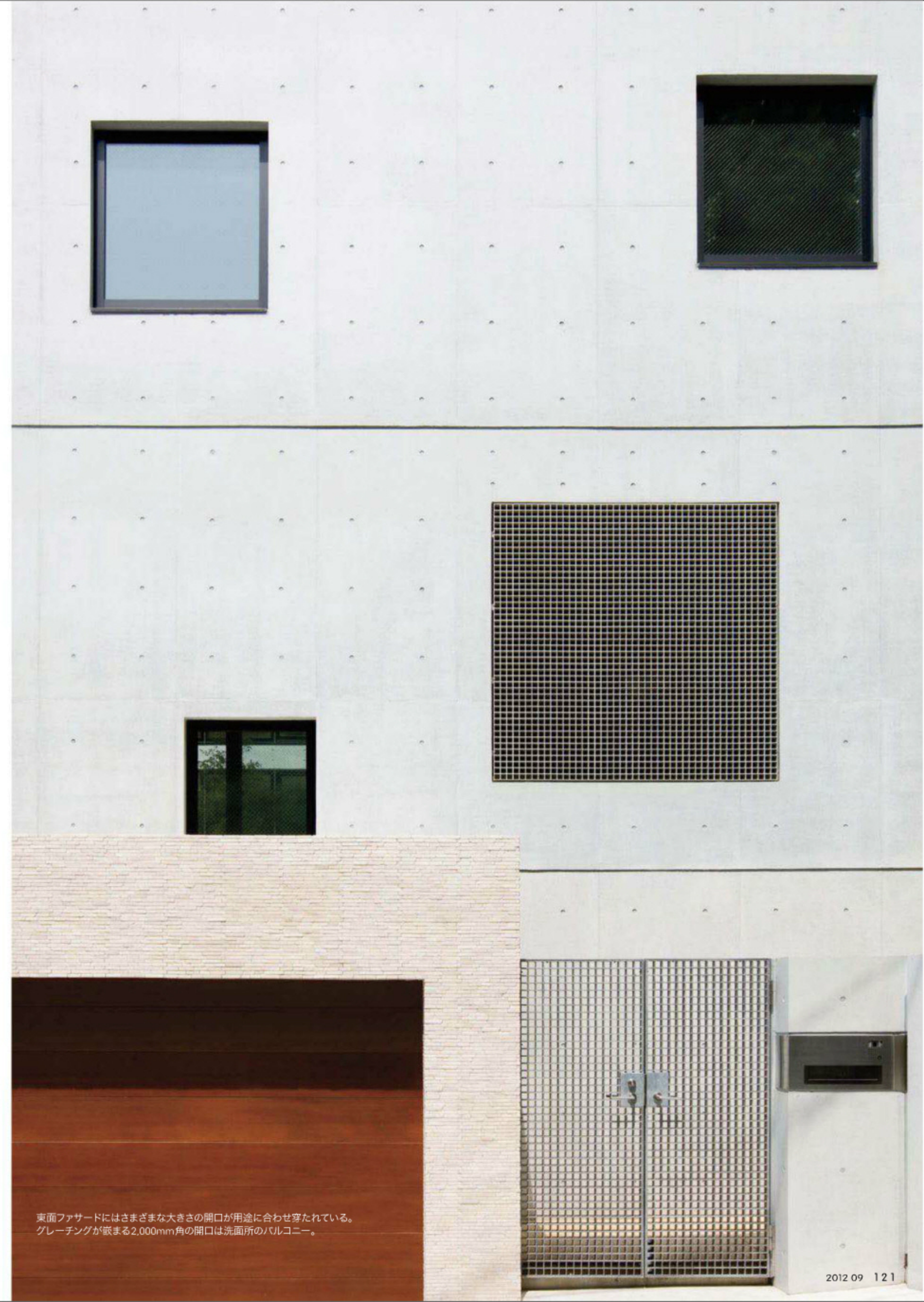
東側外観。道路側の面は角をRにして、街に対する印象を柔らかくしている。敷地形状に従い、玄関は道路面より2,450mm高くなっている。

大岡山の家

HOUSE in OOKAYAMA

東京都大田区

プラネットワークス

Plannetworks

配置図　縮尺1：2,000

東面ファサードにはさまざまな大きさの開口が用途に合わせ穿たれている。
グレーチングが嵌まる2,000mm角の開口は洗面所のバルコニー。

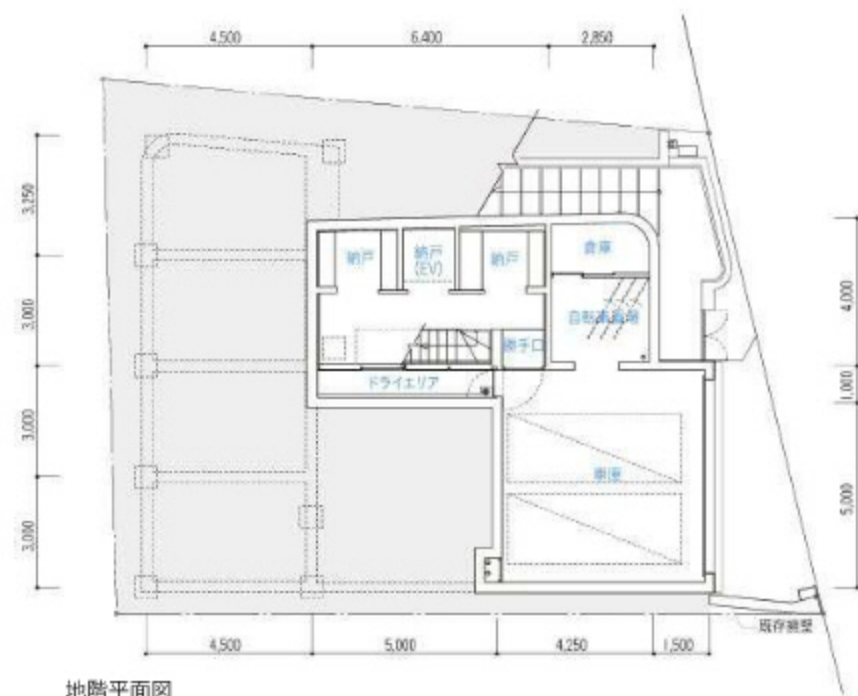
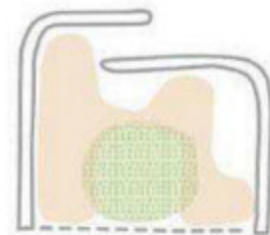
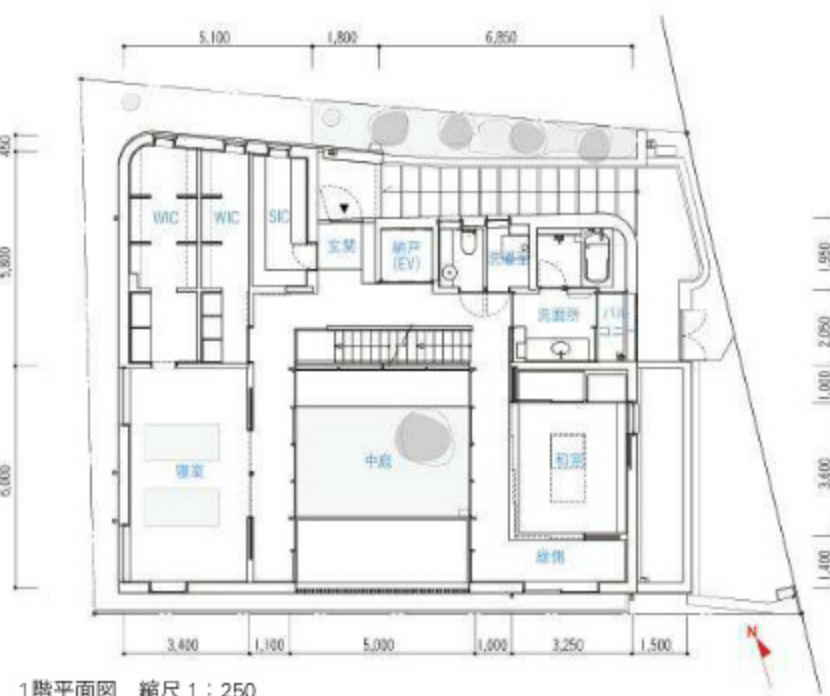
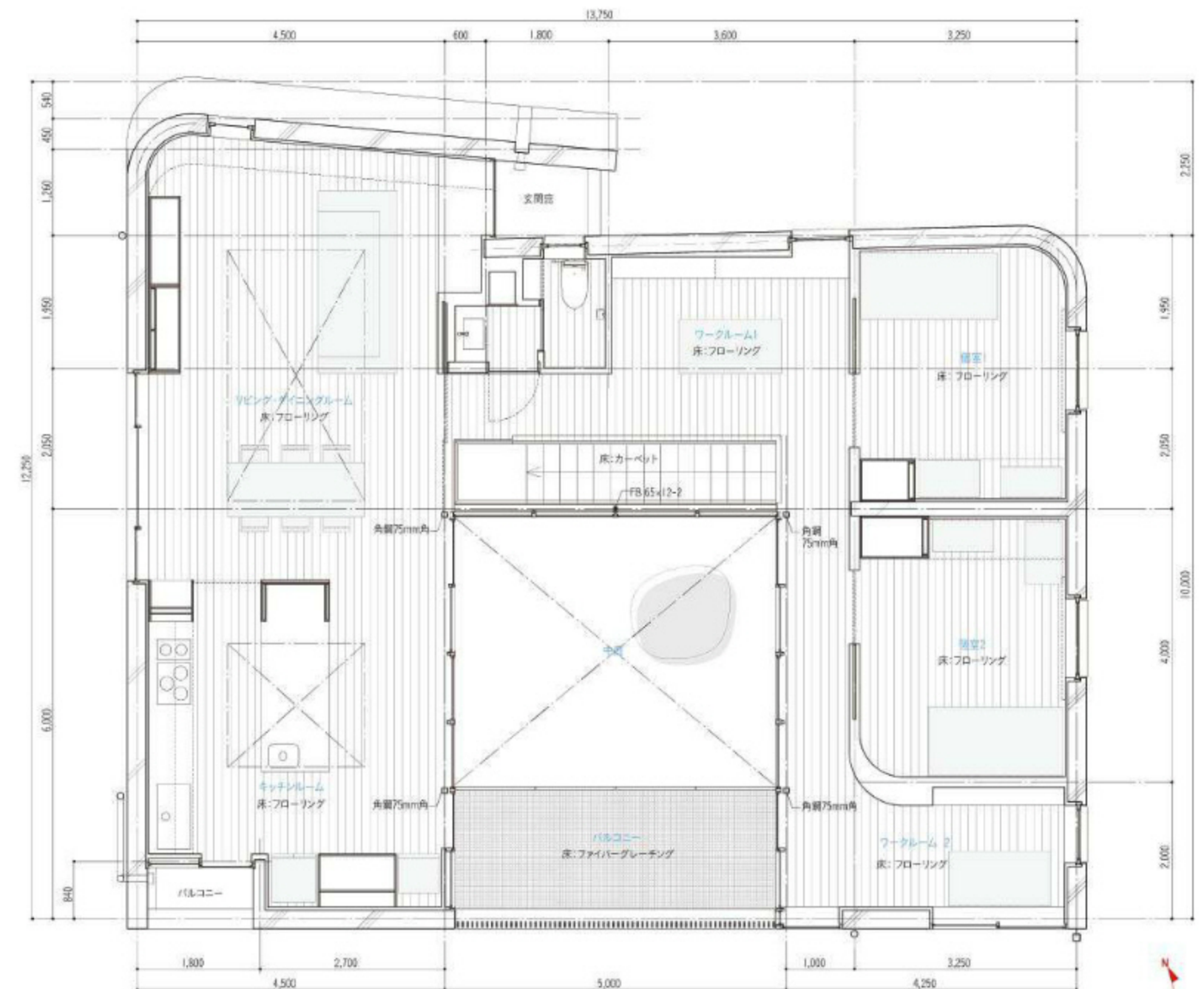
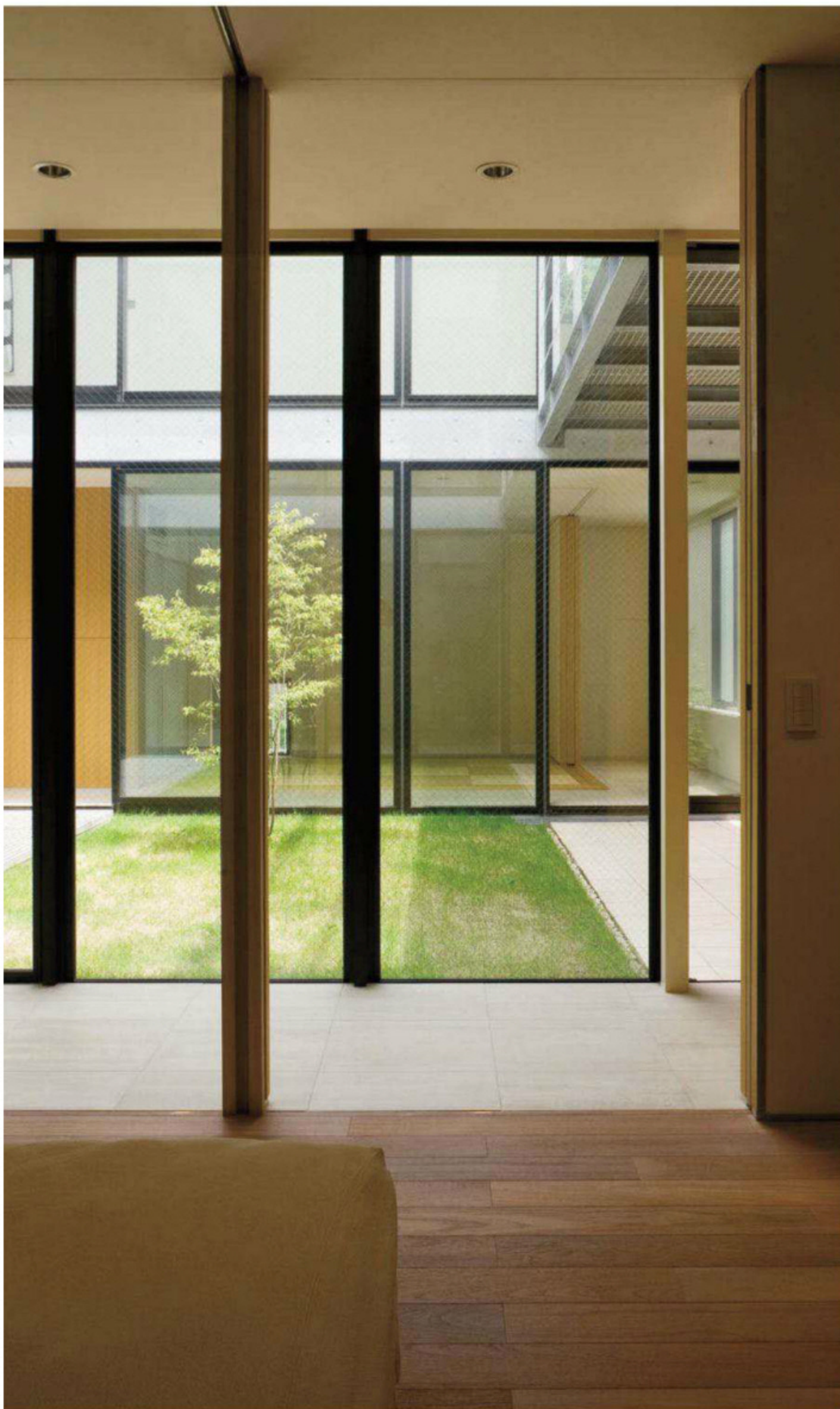
下：外部環境に向けて開放的な南側境界面は、アルミの可動ルーバーにより視界や光をコントロール可能。2階の東西方向は鉄骨で組んだ床でつないでいる。／右：中庭を見下ろす。中庭、バッファーゾーンとしての動線空間、居室と円環状に空間が配置されている。開口部の詳細は127頁参照。

124頁：動線空間から広がるリビング・ダイニングルーム。斜線制限に沿って囲い壁は傾き、壁のずれからは大学キャンパスの緑が見える。
125頁左：動線空間はワークルームにも広がる。ワークルーム奥の個室1もキャンパスの緑に向けて開口を設置。／右：ワークルーム2を見る。

生活の領域を囲む

「なんかこう家全体が一体に感じられるのがいいと思うのですが……」。
何冊かのハウスメーカーの提案書をパラパラとめくりながら、ひと言クライアントはつぶやいた。4人家族の戸建て住宅、敷地73坪、どんな計画でもできそうだった。大学のキャンパスを抜けた坂道にある良好な住宅地である。立地も申し分ない。
クライアントの一言と敷地特性——このふたつのことから、「大岡山の家」は計画された。
全体が南に傾斜した地形により周辺の敷地は少しずつ高さがずれている。道路を挟んだ向かいには学生寮があって、樹木の緑が深い。周辺の家々にはこの住宅地への自負が感じられ、玄関の構え、植栽、フェンスなど街への配慮が見て取れる。しかし、どの家からも窓はあっても中の気配が漏れてくることはほとんどない。道路側の外部環境は必要な分だけ内部との関係をもち、陽当たりを取り込む南側へはどの家も開いている。
課題は街へのスタンスの表現と、個の領域をいかに快適に確保するかということだ。
街に対して、地面から生えたような敷地との一体感と自立した存在感をもたせたかった。両手で囲い込むように2枚のコンクリート曲面壁が領域を囲む。この「囲い壁」は時に傾きながら法的制限をクリアし、ポツポツと開けられた窓が向かいの緑や光や風を選択して取り込むというような周辺との関係を含め、外的な課題を一手に引き受けている。「囲い壁」がずれてできた隙間が入口となり、内側の領域では中庭を中心にして住宅の空間を　開させている。
このスケルトンの思考はそのまま構造計画に反映されている。「囲い壁」とスラブのコンクリートは主要構造部であり、切り取った中庭部分のスラブ先端の垂直荷重を階段脇とバルコニー取付き部にある75mm角の角鋼が支えているので、内部空間と中庭空間は開放的に連続している。中庭を巡る廊下が各室を連結させ、それはただ動線空間であるばかりでなく、キッチン・ダイニング・リビングルームといった家族の集まる部屋と一体化して広がり、時には膨らんでワークルームや書斎など、割り切れない曖昧な機能を収容する場となっている。1階テラスやブリッジ状のバルコニーを介して、この動線はぐるぐると家中を巡ることができる。また家のどこからでも相互を何となく感じることができ、家族が見え隠れしながら動き回るのを眺めることができる。

（杉千春＋高橋真奈美）

2階平面を示したダイアグラム図

地階平面図

1階平面図　縮尺1：250

2階平面図　縮尺1：100

寝室から中庭越しに和室を見る。居室、廊下、中庭と機能ごとに仕上げの異なる床はフラットにつながる。
無垢の鋼材を使用し、開口回りの柱をサッシ枠のサイズに抑えている。

大岡山の家

所在地／東京都大田区
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供2人

設計
プラネットワークス
担当／杉千春　高橋真奈美　臼田真由美
構造　むらの構造設計室　担当／村野清文
インテリアコーディネート　CSL＋Parc
キッチン　リネアタラーラ　担当／徳永亮一

施工
沖島工業　担当／野口修一郎

構造・構法
主体構造・構法　鉄筋コンクリート造
基礎　杭基礎

規模
階数　地下1階　地上2階
軒高 6,450mm　最高の高さ 7,500mm
敷地面積　242.78m²
建築面積　120.00m²
（建蔽率49.43% 許容50%）
延床面積　229.54m²
（容積率94.55% 許容100%）
地階　75.89m²　1階　116.90m²
2階　112.63m²

工程
設計期間　2010年4月～2010年8月
工事期間　2010年11月～2011年8月

敷地条件
地域地区　第一種低層住居地域　準防火地域
第一種高度地区
道路幅員　東5.45m　駐車台数2台

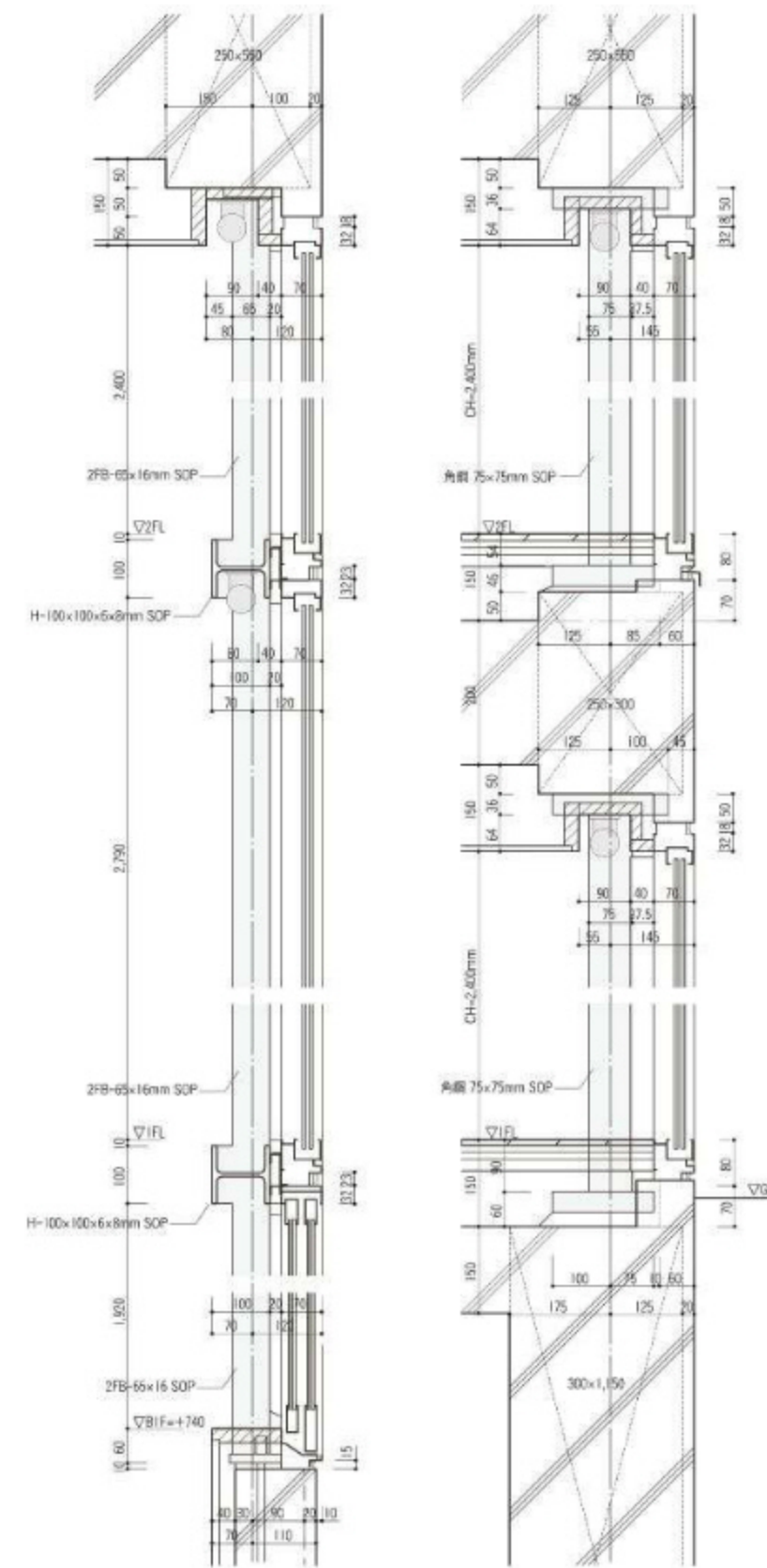
外部仕上げ
屋根／コンクリート金ごて押さえ
外壁／コンクリート打放し 撥水剤塗布
開口部／アルミサッシ
外構／植栽　砂利敷き　モルタル洗い出し仕上げ　タイル

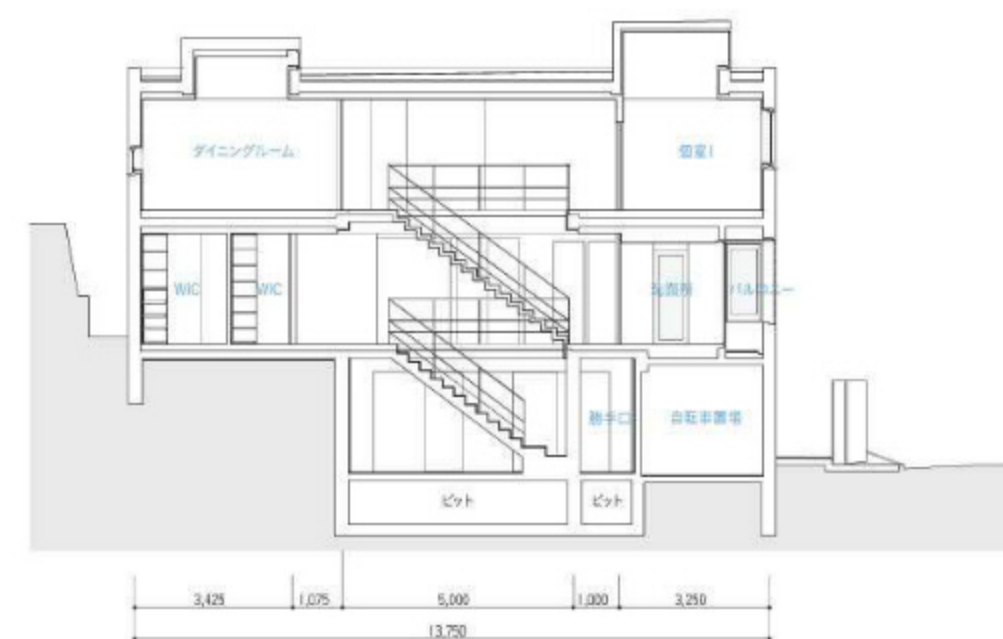
内部仕上げ
リビング　ダイニング　キッチン
床／フローリング t=12mm
壁／PB t=12.5mm AEP　カラーワークス
天井／PB t=9.5mm AEP
家具／ウォールナット CL
厨房機器／
食洗器／Miele G1142SCi
オーブン／リンナイ RSR-S51C-ST
ガスコンロ／リンナイ RHS31W10G7-SL
IHコンロ／リンナイRKD321G10S
換気扇（シェード）／渡辺製作所 WBS-90M特注
家具／ウォールナットCL
シンク水栓金物／GROHE 32445000

浴室
浴室／ハーフバスルーム TOTO
壁／600mm角磁器質タイル
天井／バスパネル

洗面所
床／サイザルカーペット
壁／PB t=12.5mm AEP
天井／PB t=9.5mm AEP
洗面カウンター／サイルストーン
洗面用水栓金物／カクダイ 186-003

設備システム
空調　冷房暖房方式／ルームエアコン
換気方式／自然換気
その他／床暖房　電気ヒーター
給排水　給水方式／上水道直結
排水方式／下水道直結
給湯　給湯方式／ガス給湯

撮影／新建築社写真部

中庭沿い開口部詳細図　縮尺1：15（左に南北方向、右に東西方向）

南北断面図　縮尺1：200

東西断面図2

上：階段は地下から地上2階分の3層吹抜け。
下：玄関から中庭方向を見る。

内外の連続性を生み出す開口部の納まり

中庭側の開口部は内外の空間の連続性を高めることを最重要ポイントとして検討された。サッシの色、形式、割付は視界の妨げにならないように設定され、鉛直荷重を負担する柱はサッシの枠サイズと同様に抑え、躯体との取り付け部はカーテンボックスなどとの調整によって、できる限りシンプルな見えがかりとなることを目指した。また階段部は地下から地上2階まで3層吹抜けとなっているため、各階の耐風梁としてH鋼を設置している。そのサイズをサッシサイズに抑えるために5mスパンの中央を65×16mmのフラットバーの合わせ柱で支えている。

（臼田真由美／プラネットワークス）

TAKANAWA

東京都港区

伊藤博之建築設計事務所＋OFDA

Hiroyuki Ito

南側道路より庭1を見る。3層吹抜けの庭1に対して各部屋が接する。奥に見えるのは玄関。

玄関から見た階段室。2つの棟の間に階段室が位置する。
階段室は外壁と同様に厚さと幅の異なる杉板型枠が用いられ、2棟の存在を明確化している。

階段室の途中から700mmの高さにある庭2を見る。
庭1同様、庭2に対してもさまざまな部屋が接し、通風と採光を行う。

庭2からの見上げ。外壁面に対し、棟の中を間仕切る壁は白く塗装。

ダイニングよりテラス2を見る。ダイニングは天井高5,335mmで3層目部分で子供室1に接する。

キッチンからダイニング、テラス1方向を見る。

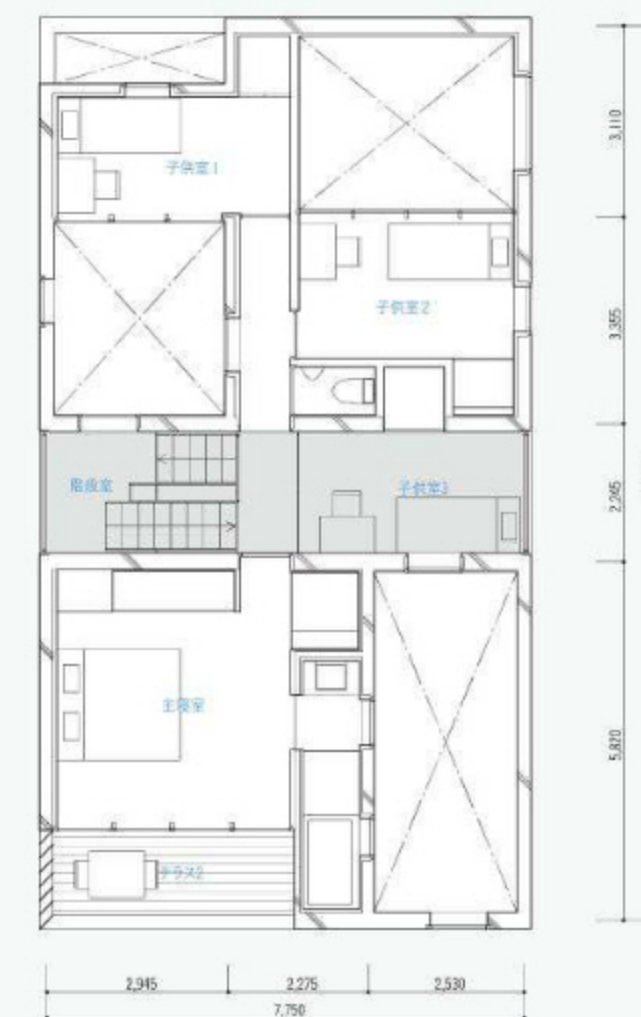
計画の外側

比較的区画の大きな住宅と、低層の集合住宅が混在する、都心の高台にこの建物はある。周囲には、街路から生活が伺えそうな開いた住宅はほとんどない。ある種の佇まいを保つためのローカルな規範があって、建物のヴォリュームや密度と共に、街のあり方が決められているように見受けられる。ここでは、一定のプライバシーをつくることが、住まい手のみならず街からも求められているように感じられた。

５人家族のためのこの住宅は、前後に並んだ、ほぼ同じ大きさのふたつの棟からできている。２棟の内側はすべて白く仕上げられていて、それぞれに屋外を含むさまざまなプロポーションの空間が収められる。屋外の吹抜けが、前の棟では東に、後ろの棟では西に設けられることで、太陽の動きに伴ってさまざまな光の状態が生まれ、シンプルな矩形の中に変化に富む場所ができている。同質になりやすい子供室も、ここではそれぞれ別の吹抜けに面するなど、互いに性格の異なる室となっていて、将来の用途替えにも自然に対応できるよう配慮した。2棟は、構造的にも切り離されていて、それぞれから張り出したテーパー付きのキャンチスラブが両者をつなぎ、最上階では、スラブ間のスリットから光が射し込む。棟の外表の打放し面には、仕上がりを完全にはコントロールすることが難しい厚さと幅の異なるスギ板型枠を、意識的に採用した。棟の中の白い室の塗装は、指定した仕様が、ほぼそのまま実現されるのに対して、その外側では木目と目違いによる、不規則で偶発的な表情が生まれている。

空調効率のために、階段室はそのほかの部分と区画されており、中間期以外の温湿度は、諸室や庭と少しずつ異なる。一般の住宅において普通に経験する、この空気環境の変化が、この住宅では、棟の出入りに重ねられることで、空間の違いをより明確にし、住宅全体は、より身体的な経験として縫い合わされる。

抽象的な白い諸室の狭間につくろうとしたのは、仕上げや構造の隙間にあって、一方で周辺の都市環境とも異質な、どこにも属さないような場所であった。完全に計画され、管理された場所から、少し逸脱したような清々しさを獲得できないかと考えた。　　　　　（伊藤博之）

2階平面図

3階平面図

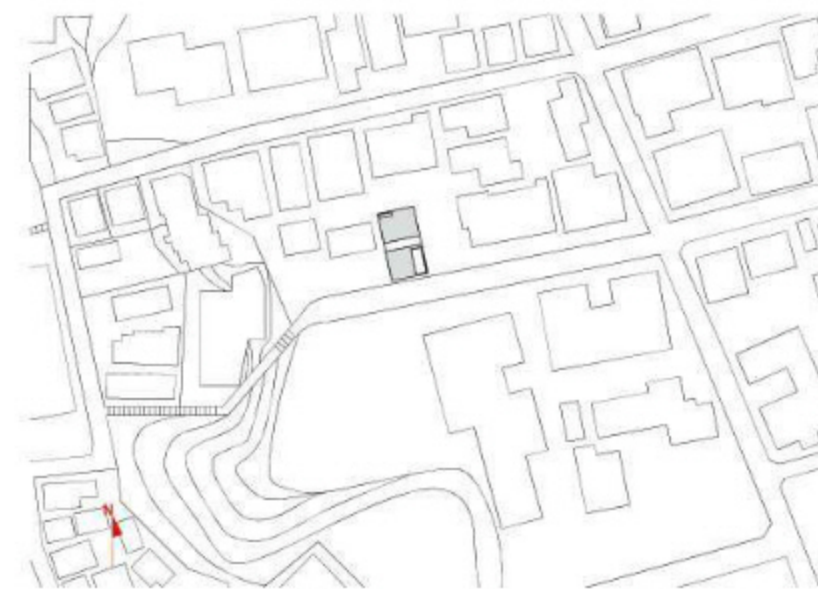
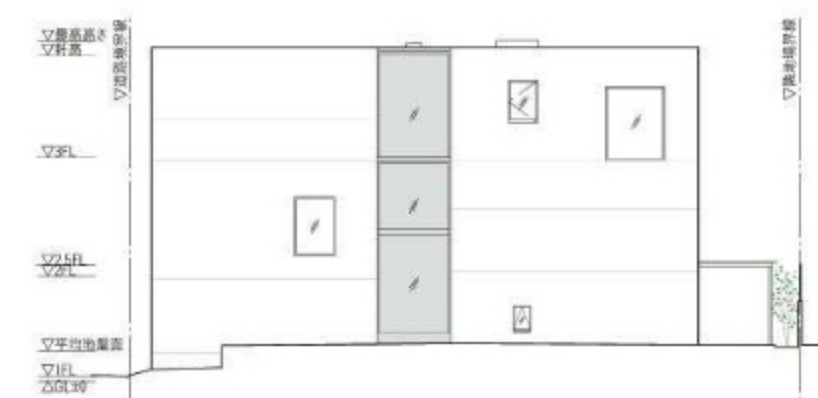
1階平面図　縮尺１：150

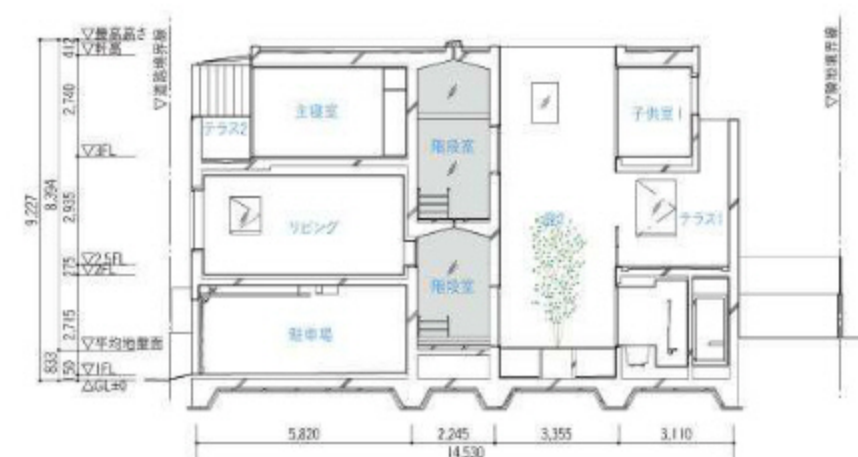
左上：庭2に面する子供室1。／左下：子供室2はダイニングに接する。／右：階段室の最上部にある子供室3。天井面は箱からのキャンチスラブの間にスリットを取り、採光する。

ダイニングからリビングを見る。部屋同士の動線は一度階段室を介するように構成されている。

TAKANAWA
所在地／東京都港区
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供3人

設計
伊藤博之建築設計事務所＋OFDA
担当／伊藤博之　小林賢太
構造　ロウファットストラクチュア
担当／横山太郎　澤田慶太
施工
サンユー建設　担当／倉石剛平
設備　坂本商会　担当／横山健太
電気　オクト電気　担当／相澤佑介
外構・造園　錦花園　担当／長原昇
構造・構法
主体構造・構法　鉄筋コンクリート造
基礎　べた基礎
規模
階数　地上3階
軒高 7,982mm　最高の高さ 8,394mm
敷地面積　161.50m²
建築面積　95.15m²
（建蔽率58.92% 許容60%）
延床面積　199.39m²
（容積率123.5% 許容200%）
1階　87.90m²（駐車場面積30.8 m²）
2階　75.52m²　3階　66.35m²
工程
設計期間　2009年12月～2010年11月
工事期間　2010年11月～2011年7月
敷地条件
地域地区　第一種中高層住居専用地域　準防火地域　第二種高度高度地区
道路幅員　南側5.4m　駐車台数2台
外部仕上げ
屋根／塩ビシート防水
外壁／スギ板型枠コンクリート打ち放し
開口部／アルミサッシ(三協立山アルミ ARM-S)
外構／洗出しコンクリート　砂利敷き
内部仕上げ
ダイニング・キッチン
床／タイル t=11mm
壁／ PB t=12.5mm EP
天井／ PB t=9.5mm EP
厨房機器／製作（TIDEA）
リビング
床／オークフローリング t=16mm
壁／ PB t=12.5mm EP
天井／ PB t=9.5mm EP
玄関　階段室
床／コンクリート磨き（カンエツ）
壁・天井／スギ板型枠コンクリート打放し
1階洗面室
床／タイル t=10.5mm
壁／ PB t=12.5mm EP
天井／ PB t=9.5mm EP
客間　書斎　トイレ1F　廊下1F　納戸
床／オークフローリング t=15mm
壁／ PB t=12.5mm EP
天井／ PB t=9.5mm EP
子供室1・2　トイレ2F　廊下3F
床／オークフローリングホワイトオイル仕上げ
壁／ PB t=12.5mm EP
天井／ PB t=9.5mm EP
子供室3
床／タイル t=10mm
壁・天井／スギ板型枠コンクリート打放し
設備システム
空調　冷暖房方式／ルームエアコン
換気方式／第三種換気
その他／床暖房
給排水　給水方式／上水道直結
排水方式／下水道直結
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／新建築社写真部

配置図　縮尺1：2,000

東立面図　縮尺1：250

断面図2

断面図1　縮尺1：250

東側外観。

南側外観。主寝室はバルコニーを取り(写真左上)、視界の広がる西側の抜けを確保している。

東京スマートホームデザイニング

Tokyo Smart Home Designing
東京都世田谷区

企画・計画統括　上田康裕／電通
アンブレ・アーキテクツ 松尾宙+松尾由希
Yasuhiro Ueda ／ DENTSU
Umbre Architects
Hiroshi Matsuo+Yuki Matsuo

南側から見る外観。手前の白、グレー、薄黄色、黒のヴォリュームは、空間に求める機能や将来の使い勝手、減築などを想定して4つに分けられ、そのずれや高さの違いによって採光や通風に効果をもたらす。建て込んだ場所に建つ都市の住宅としての検討がされ、そのプロトタイプとなるよう計画された。

建物を貫通する路地から敷地最奥に位置する2階エントランスを見る。南側のヴォリュームは低く抑えて敷地に光を採り入れやすくしたほか、道路から離れるほどパブリックな場となるよう動線計画にも工夫がなされた。左は来客用のエントランスで、アトリエへと接続する。

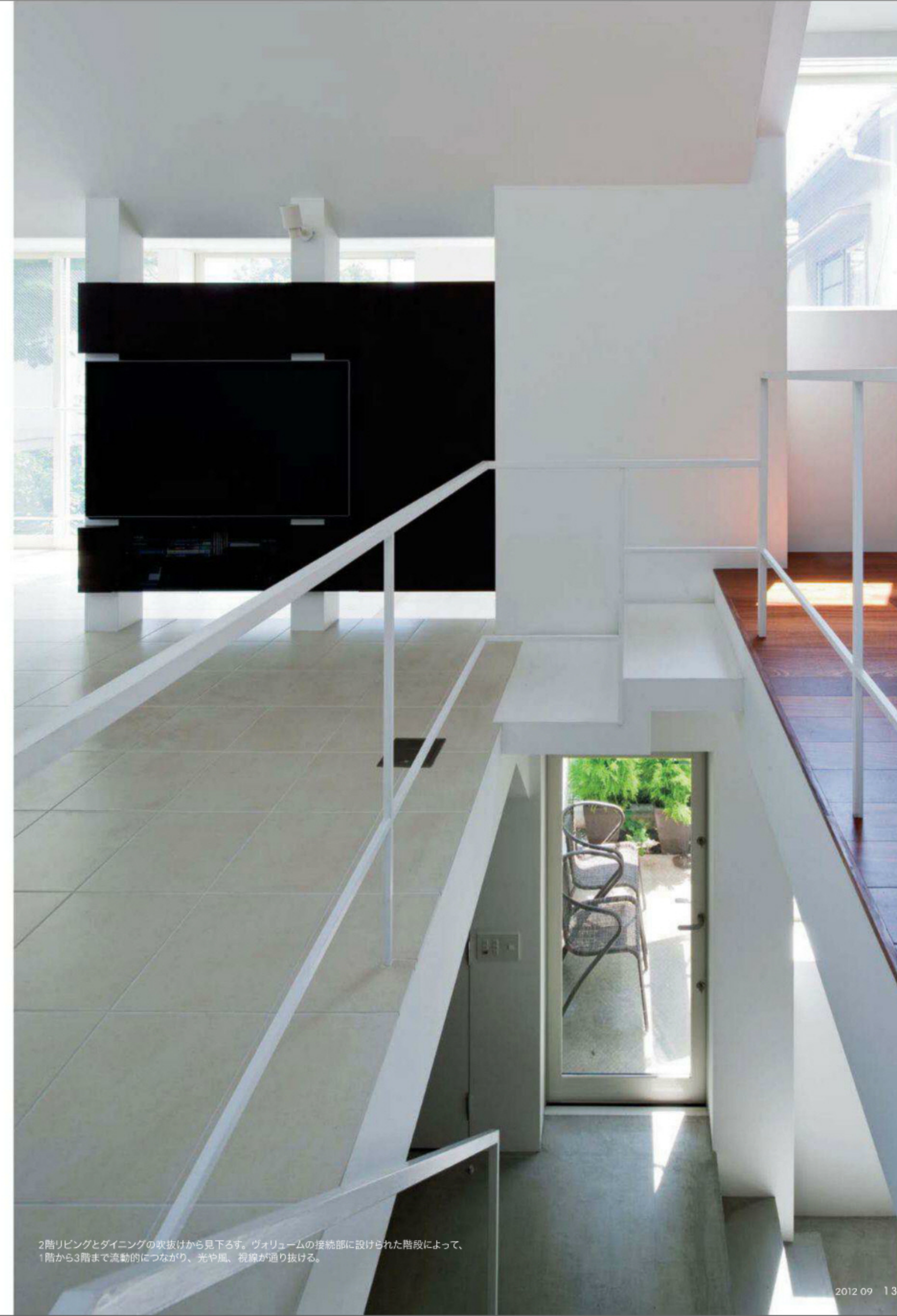
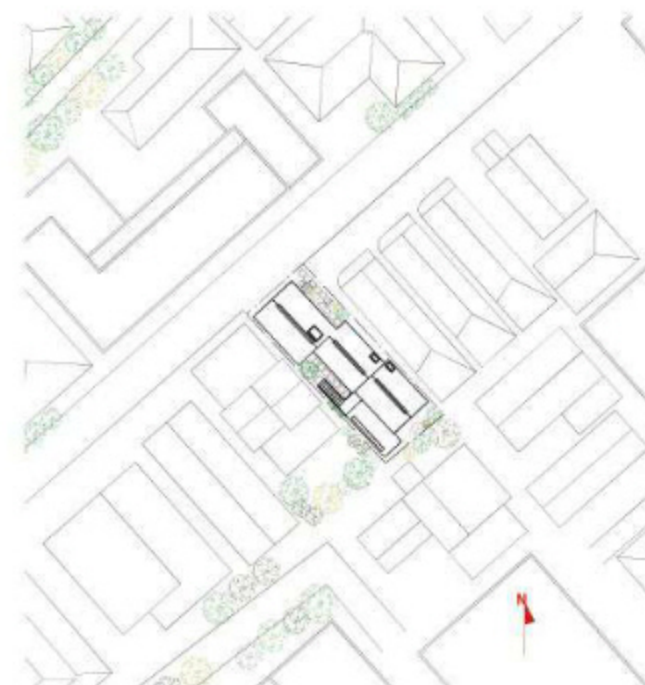
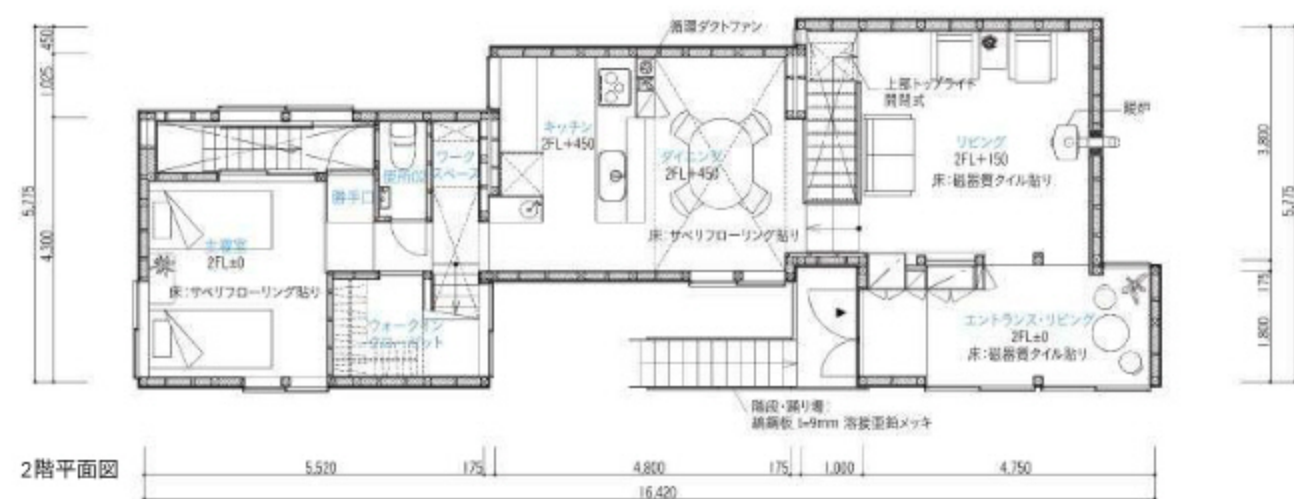
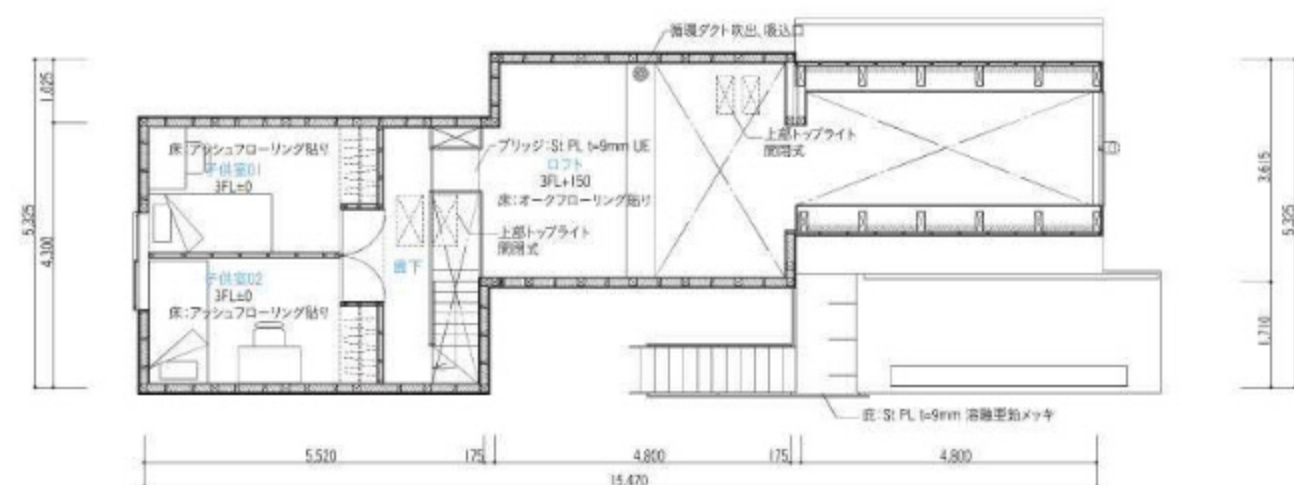
3階平面図

2階平面図

1階平面図　縮尺1：150

北側外観。ヴォリュームの設定には天空率を適用。左奥にアトリエの棟を見る。

配置図　縮尺1：800

2階リビングとダイニングの吹抜けから見下ろす。ヴォリュームの接続部に設けられた階段によって、
1階から3階まで流動的につながり、光や風、視線が通り抜ける。

2階リビングから見る。4つの棟が間仕切りなく、流動的・開放的につながる空間を実現するため、さまざまな温熱環境の工夫がされた。
吹抜けを活用した1階輻射方式床冷暖房のほか、正面ダイニング上部にはファンコイルユニットと循環送風機が入る。
トップライトが空気抜きの役割を果たし、家型は北側斜線と将来の太陽光パネルの設置を想定して導かれた。

この計画は電通で開発中の「スマートホームレシピ」による家づくりのケーススタディである。

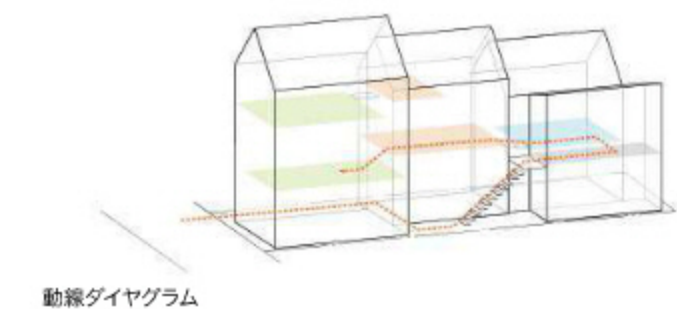
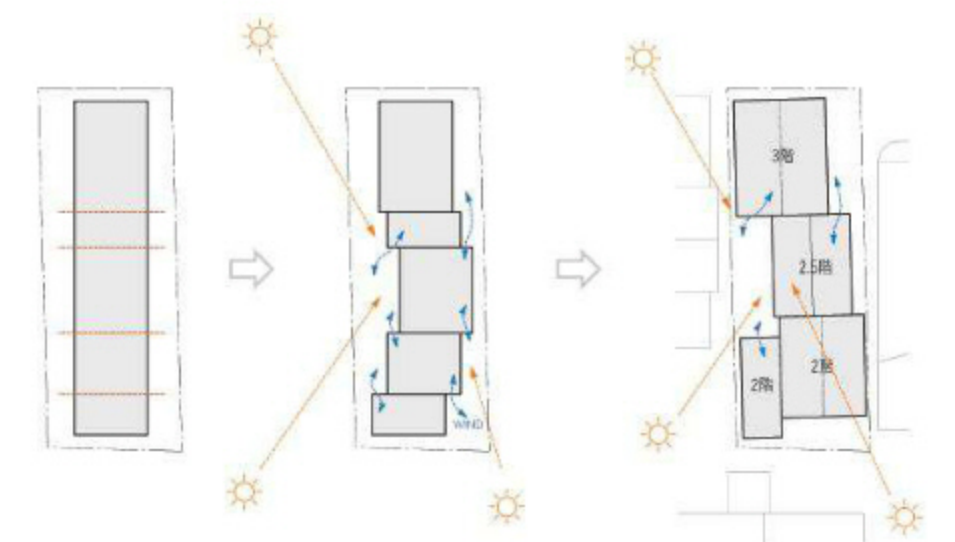
[スマートホームレシピ]
住まい手の暮らしのニーズからスマート化の方針を抽出し、家づくりの構成要素の組合せを計画していくプログラム。手法としては、スマート化に向けて抽出した住まい手の要望を列挙し、暮らしにおけるスマート化へのリテラシー向上と考え方を整理。それを住まい手にとって分かりやすく表現した家づくりの構成要素に変換するものである。

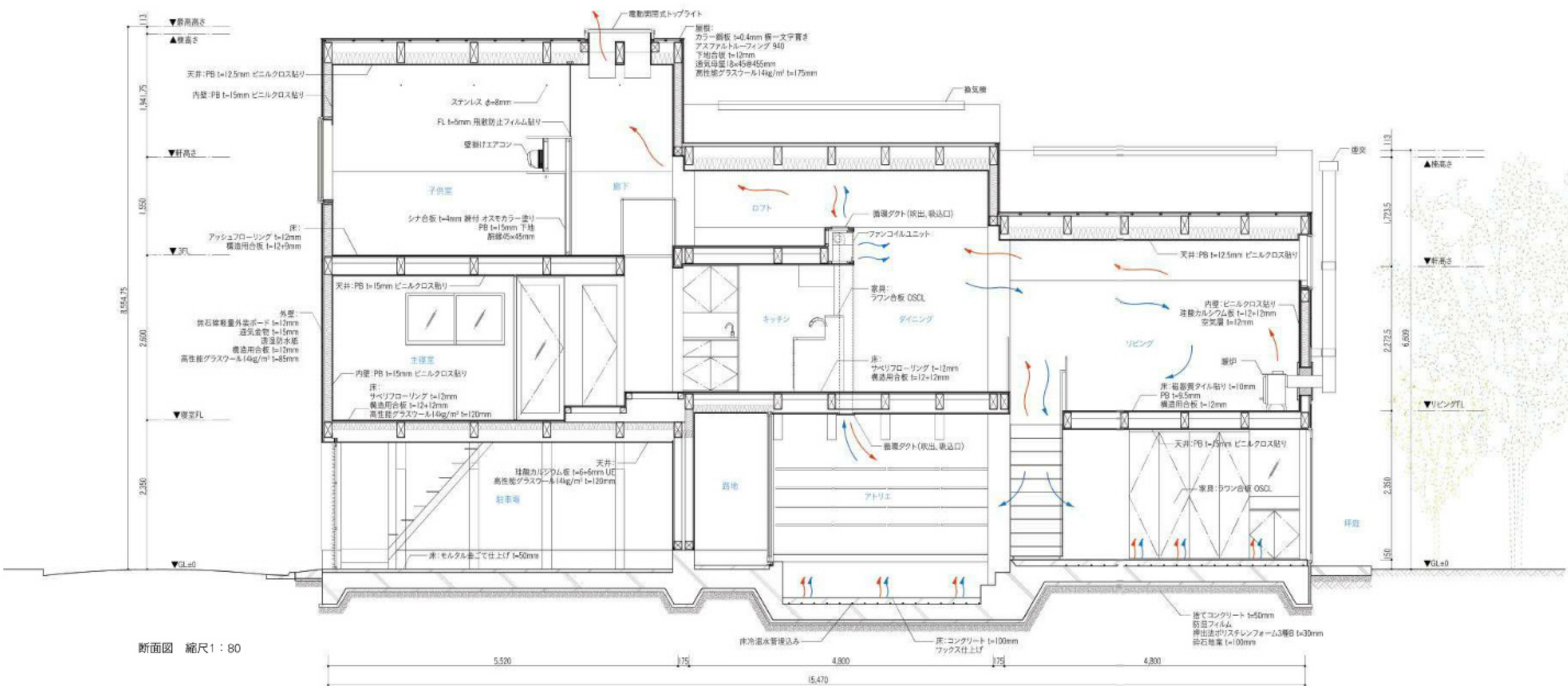
2011年の東日本大震災以降、エネルギーの効率的な利活用（＝スマート化）が家庭でも求められている。電通では住まい手が自らの暮らしからスマート化の方向を見定め、設計・施工者やスマート関連のメーカーと一緒に家づくりをすることを〈スマートホーム〉と提唱、実現に向けてプロジェクトを推進している。今回はその展開に先立っての試行実験ととらえた。スマート化を目指すには機器類の単なる追加だけでなく、家の基本性能と共に生活の快適性や使い勝手に大きく影響する間取り（空間構成）も含めた検討が大切である。それらの組合せと選択の重要性を住まい手に認識してもらい、設計・施工者の質の高い提案につなげていくことがスマートホームレシピの狙いである。
（上田康裕／電通ソーシャル・ソリューション局）

暮らしのニーズ（住まい手の要望）
・夫婦と子供ふたりの4人家族
・妻は画家、アトリエ兼仕事場のパブリックな空間が必要、来客も想定する
・間取りには自由度をもたせたい
（今後の夫婦両親の利用、子供独立後の賃貸利用や減築を想定）
・家事は効率的に行いたい
・ロケーションから庭は期待しないが、自然環境に即した快適な住環境がほしい

家づくりの構成要素の選択（スマート化の方針）
・外回り：敷地、建築条件を最大限に活用
・基本性能：次世代省エネ基準のクリア
・間取り：可変性と自由度の高い空間を確保、および仕事場への来客などを念頭に、公私のグラデーションに留意した諸室の配置、動線を工夫
・冷暖房、空調：プライバシーに配慮した採光と通風の確保と創エネなどを最初から前提としないパッシブな環境計画の検討

〈スマートホームレシピの考え方〉
空間構成、構造、設備を一体的に解いた環境配慮都市型住宅

環境に配慮した都市型住宅のプロトタイプをこの住宅で示すために、さまざまな専門家が協働することになった。はじめに提示された「スマートホームレシピ」（プログラム）に対して、都心部に典型的な縦長の敷地で快適な住環境を実現するための「ヴォリュームをずらして配置する」というアイデアをもとに、意匠、構造、設備の検討を繰り返しながらまとめていった。
はじめにずらすことで生まれた空地をアプローチ、通り庭、坪庭、設備スペースとし、ヴォリュームを貫通する「路地」を設けて空地と空地を結ぶアプローチを計画した。エントランスを敷地最奥に配置することで、物理的な奥が空間構成上の表になるダイナミックな構成が可能になった。エントランスから道路側の寝室に向かって、パブリック〜プライベートへと親密度が増すように計画した空間構成は、都市から個人の生活までを連続的な暮らしのグラデーションとしてとらえたものであり、空間全体を有機的につなぐ骨格となっている。
断面計画では、家型のヴォリュームを北側（道路側）から南側に向かって徐々に小さくすることで、建物全体が明るく、風通しのよい環境となることを目指した。それは道路斜線（天空率を適用）や北側斜線といった都市計画上の規制、空間構成上の要望、将来ソーラーパネルを設置するといった設備的な要望を緻密に整合させたものである。各ヴォリュームの接合部には階段を介したヴォイドを設け、諸室の機能に合わせて床のレベルをずらすことで、建物全体での重力換気を実現し、風や光がいき届く一体的な住空間とした。
構造計画では都市型住宅のプロトタイプとするために、汎用性の高い方杖フレームを用いた木造在来工法による3階建てにした。
設備計画では、建物の基本性能として次世代省エネ基準を満たしながら、高効率エネルギー機器の組み合わせによって、建物全体の省エネ効率を約20%向上させ、快適な住空間を実現した。さまざまな立場の人が「スマートホームレシピ」を共有して協働することで、都市型3階建て住宅のひとつのモデルを提示することができたと考えている。（松尾宙 松尾由希＋上田康裕）

動線ダイヤグラム

必要な機能に応じてヴォリュームをカット。
カットしたヴォリュームをずらして配置。ずらしたことでできた段差部分は、通風・換気・採光に有効。
ヴォリュームを南に向かって小さくして幅や向きなどを要望に合わせて調整し、アプローチ、動線、空間構成を勘案して配置を決定。
ヴォリューム検討ダイヤグラム

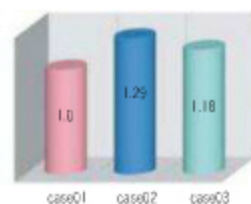
断面図　縮尺1：80

意匠デザインとマッチングさせる設備の工夫

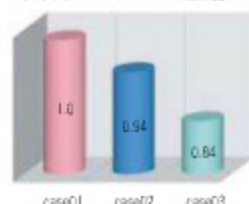
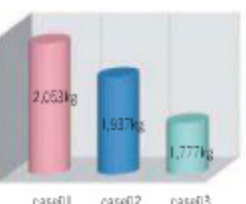
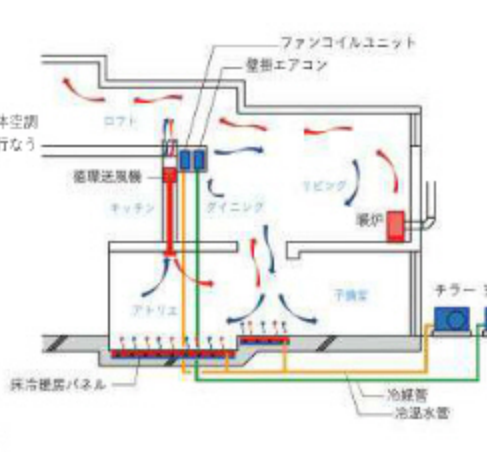
環境に配慮した都市型住宅を実現するためには、都市部での密集した敷地の中でもエネルギーを上手に効率よく計画することが大切である。建築プランと整合性の取れたスマートハウスをつくることを目的に計画を進めた。
建物は次世代省エネ基準を満たした高気密、高断熱の構造で、内部は採光と換気が十分取れるような、吹抜けを含む開放的で流動的な空間である。そのため設備計画においても建築意匠デザインとの整合性を重視し、吹抜け空間を含む間仕切りのないヴォリュームに対する温熱環境をつくり出すことを基本的な考えとして設備方式を採用した。
設備システムの選定では、吹抜けを含む大空間は上下の温度差を用いた重力換気による通風を利用すること、また冬季は比較的晴天日の多い東京地方ではトップライトのある天井面に熱だまりができるため、この暖気を階下へ送風すること、夏場の1階の冷気を上階へ送風することを念頭においたサーキュレーターファンを取り付け、吹抜けに接する上階の部屋にはファンコイルユニットを設置した。
冷暖房システムは、熱源は冷温水を利用する熱源ヒートポンプチラーである。1階吹抜け空間居室は対流式より効率がよく、蓄熱体としてコンクリート躯体も活用できる、伝導式の床埋設輻射冷暖房パネル方式を採用した。
省エネルギーで快適な温熱環境とするため、このように輻射熱による居住域空調を主体とし、大空間部分は通風を取って空気の流れを「人」に感じさせることで、体感的には不快に感じない温熱環境をつくる運転としている。エアコンによる対流式の吹抜け空間を冷暖房する方式に比較して、空調負荷で概ね25～30%の低減を図っている。（辺見久活／イーエスアソシエイツ）

イニシャルコスト・ランニングコスト・$LCCO_2$比較表

case01：エアコン+暖炉方式
case02：エアコン+暖炉+電気床暖房（蓄熱）方式
case03：エアコン+暖炉+輻射冷暖房（蓄熱蓄冷）方式

イニシャルコストの比較
CASE01を基準とした相対比率

case01	case02	case03
1.0	1.29	1.18

ランニングコストの比較
CASE01を基準とした
1年間のランニングコストの相対比率

case01	case02	case03
1.0	0.94	0.84

$LCCO_2$排出量の比較

吹抜け大空間の空調方式検討案―システムフロー

子供室。北側3階に位置し、パブリックからプライベートに至る動線のもっとも奥にある。

子供部屋前から見る。家型が見通せる場であり、奥にリビングの窓が見える。

2階エントランス・リビングから通り庭方向を見る。ラワン合板を染色した家具は、空間を仕切る装置として設計している。

東京スマートホームデザイニング

所在地／東京都世田谷区
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦+子供2人

設計
企画・計画統括　上田康裕／電通ソーシャル・ソリューション局
設計　一級建築士事務所アンブレ・アーキテクツ　担当／松尾宙　松尾由希
構造　フレームワークス
担当／神野昌也　秋元恵美
設備　イーエスアソシエイツ　担当／辺見久活

施工
建設計画　担当／阿部達也　椋木奈美

構造・構法
主体構造　木造在来工法
基礎　べた基礎　柱状改良

規模
階数　地上3階
軒高 6,500mm　最高の高さ 8,554mm
敷地面積　116.59m²
建築面積　69.93m²
（建蔽率59.98% 許容60%）
延床面積　170.89m²
（容積率126.64% 許容150%）
1階　69.51m²　2階　69.51m²
3階　31.87m²

工程
設計期間　2010年2月～2011年5月
工事期間　2011年6月～2012年1月

敷地条件
地域地区　第一種高度地区　準防火地域
道路幅員　北側4.0m　　駐車台数1台

外部仕上げ
屋根／アポロルーフ一文字葺き
外壁／無石綿軽量外装ボードの上UE
開口部／アルミサッシ
スチール製作品（玄関扉　ガレージ折戸等）
外構／黒土　砂利敷き　土間コンクリート金ごて仕上げ

内部仕上げ

キッチン
床／サペリフローリング t=12mm
壁・天井／ビニルクロス貼り
キッチンパネル貼り t=3mm（壁のみ）
厨房機器／
食洗器／パナソニック
IHコンロ／三菱電機
換気扇（シェード）／パナソニック　家具製作
製作家具／ラワン合板 OSUC、天板：SUS t=2mm HL　大理石
シンク水栓金物／ SUS絞りシンク
自動水栓：INAX
その他／キッチンハンガー：収納事典

浴室・脱衣室
床・壁／磁器質タイル貼り
天井／珪酸カルシウム板 t=5mm 5EP
バスタブ／大洋金物
シャワー水栓金物／ GROHE
空調機器／パイプファン：三菱電機

便所01 02
床／磁器質タイル貼り
壁・天井／ビニルクロス貼り

アトリエ　客間
床／コンクリート金ごて押えの上コンクリートシーラ塗り　床冷温水管打込み
壁・天井／ビニルクロス貼り
製作家具／ラワン合板オスモカラー塗り

エントランス
床／磁器質タイル貼り
壁・天井／ビニルクロス貼り
製作家具／ラワン合板OSUC

リビング
床／磁器質タイル貼り
壁／ビニルクロス貼り　暖炉設置面：ビニルクロス貼り 珪酸カルシウム板 t=12＋12mm 空気層t=12mm
天井／ビニルクロス貼り
製作家具／ラワン合板OSUC
建築金物／暖炉：アドヴァン

ダイニング　主寝室　ウォークインクローゼット
床／サペリフローリング t=12mm
壁・天井／ビニルクロス貼り

子供部屋
床／アッシュフローリング t=12mm
壁・天井／ビニルクロス貼り
シナ合板 t=4mm オスモカラー塗り（壁のみ）

ロフト
床／オークフローリング t=9mm
壁・天井／ビニルクロス貼り

駐車場
床／モルタル金ごて仕上げ
壁・天井／珪酸カルシウム板 t=6mm 6EP

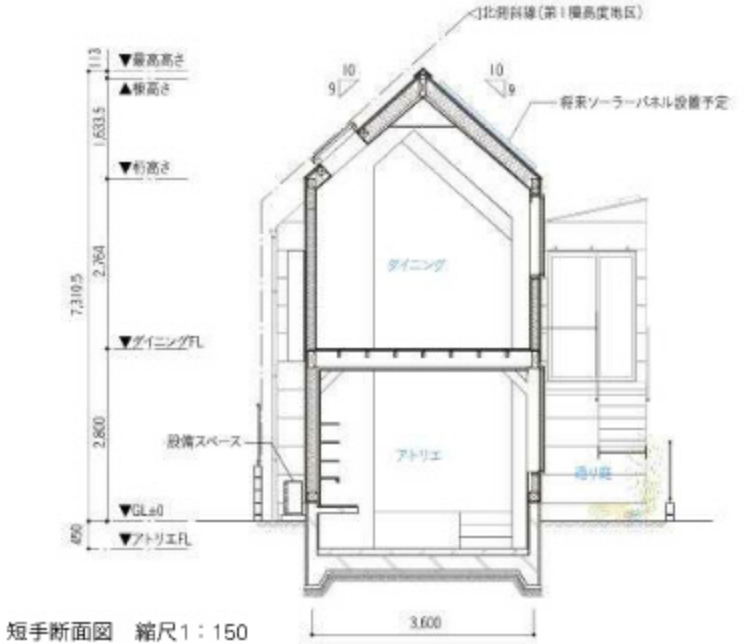
全室共通
照明／ MAXRAY　パナソニック　ヤマギワ

設備システム
空調　冷暖房方式／ファンコイル方式（ヒートポンプチラー）
個別ヒートポンプエアコン（主寝室、子供部屋）
換気方式／第三種機械換気
床冷暖房方式／床冷暖房輻射方式
（冷温水利用・床スラブ蓄熱方式）
給排水　給水方式／上水道直結方式
排水方式／公共下水道放流方式
給湯　給湯方式／ヒートポンプ式電気温水器
（エコキュート）

撮影／新建築社写真部
*印撮影／川辺明伸

1階アトリエ・客間。間仕切りの少ない木造3階建てのため、1階は方杖を連続させて梁方向の構造を担保している。床には冷温水を利用した伝導式の輻射冷暖房パネルを埋設。

4棟が独立して成立する構造を木造3階建てでつくる

奥行が深く間口が限られている敷地に対して、建物は4つの棟が雁行しながら緩やかに連続していく。各棟はすべて各階、各方向共に合板貼りの耐震壁を基本の耐震要素とした木質在来工法として計画しているが、必要壁量が多くなる1階の梁間方向は、桁行方向に人や光や空気が自由に通り抜けていく本計画と整合しなかった。そのため、方杖フレームを850 ～ 1,150mmピッチで並べることで耐震壁を減らし、トンネル状の空間を構成することで解決することにした。方杖フレームは、在来工法の範疇で取り扱えるため汎用性が高く、木質ラーメンフレームより敷居が低い。また、空間的に連続している各棟間にはエキスパンションを設け、各棟が独立して成立するよう計画している。そのことで各棟が互いを拘束することなく、屋根レベルや床レベルを用途や空間に応じて自由に設定し、将来の減築にも対応することを可能にしている。（神野昌也／フレームワークス）

短手断面図　縮尺1：150

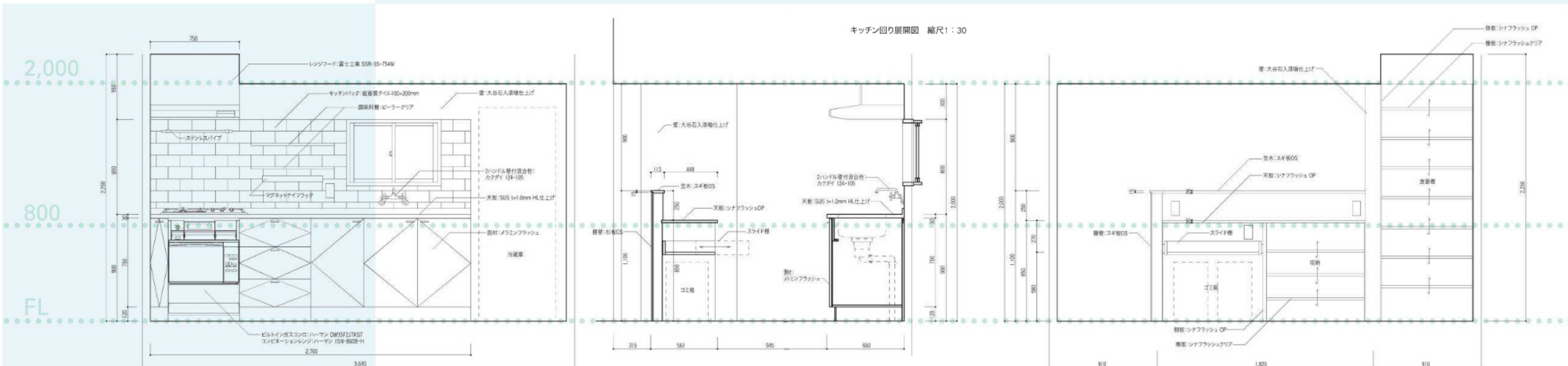
キッチン回り 空間での配置と 高さのデザイン

146-155頁写真撮影：新建築社写真部

広さも高さもコンパクトに納める

南沢の小住宅［本誌1205］　若原一貴

キッチンは天井高さを2,000mmに抑え、手前の居間側に向いている腰壁（スギ板）は笠木上部が1,100mmの高さのカウンターとし、正面左側の収納の裏側に食器棚を設置している。カウンター下はスライド棚とゴミ箱置き場。生活に必要な要素が外に出したままにならないよう、キッチン回りの納まりを検討。奥のキッチン奥行は650mm。キッチンバックは100×200mm磁器質タイル。上端と開口部建具高さを揃えて、見え方の美しさにこだわっている。手前のナラ材のダイニングテーブルは、この住宅に併せて製作した、ハオアンドメイによるオリジナル。天板の厚みは30mm。（若原）

キッチン回り展開図　縮尺1：30

テーブルと一体化したキッチン

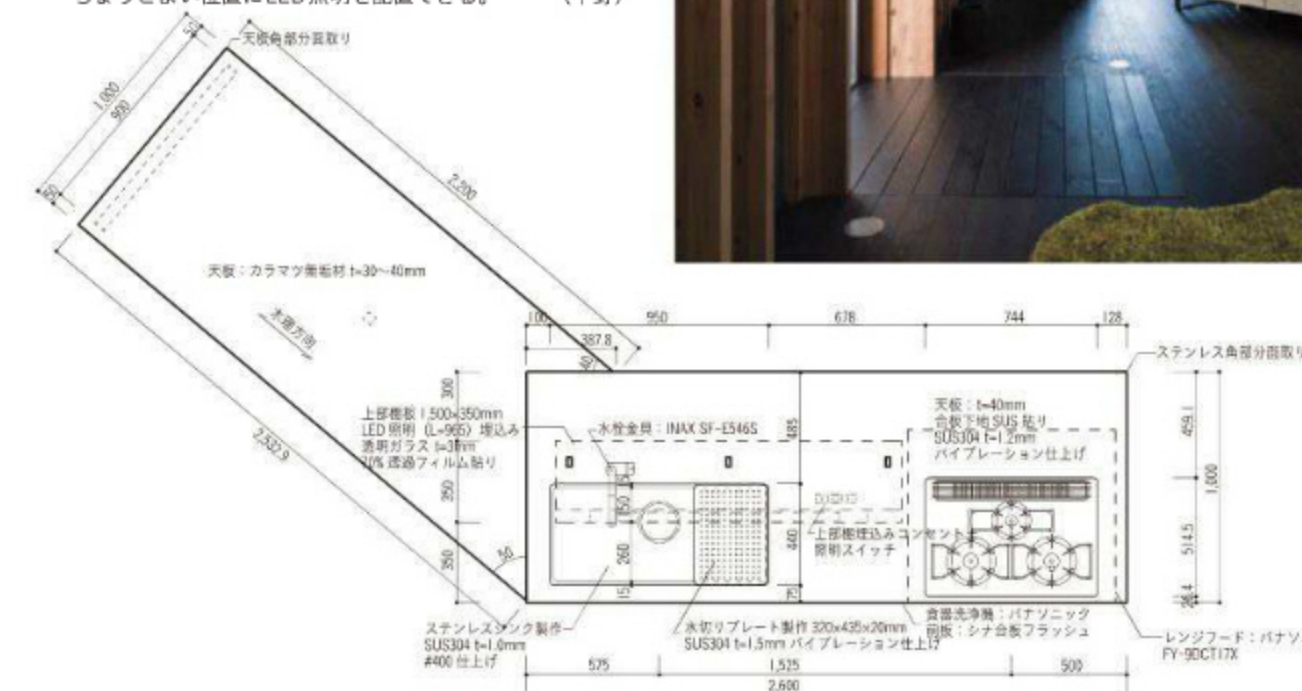
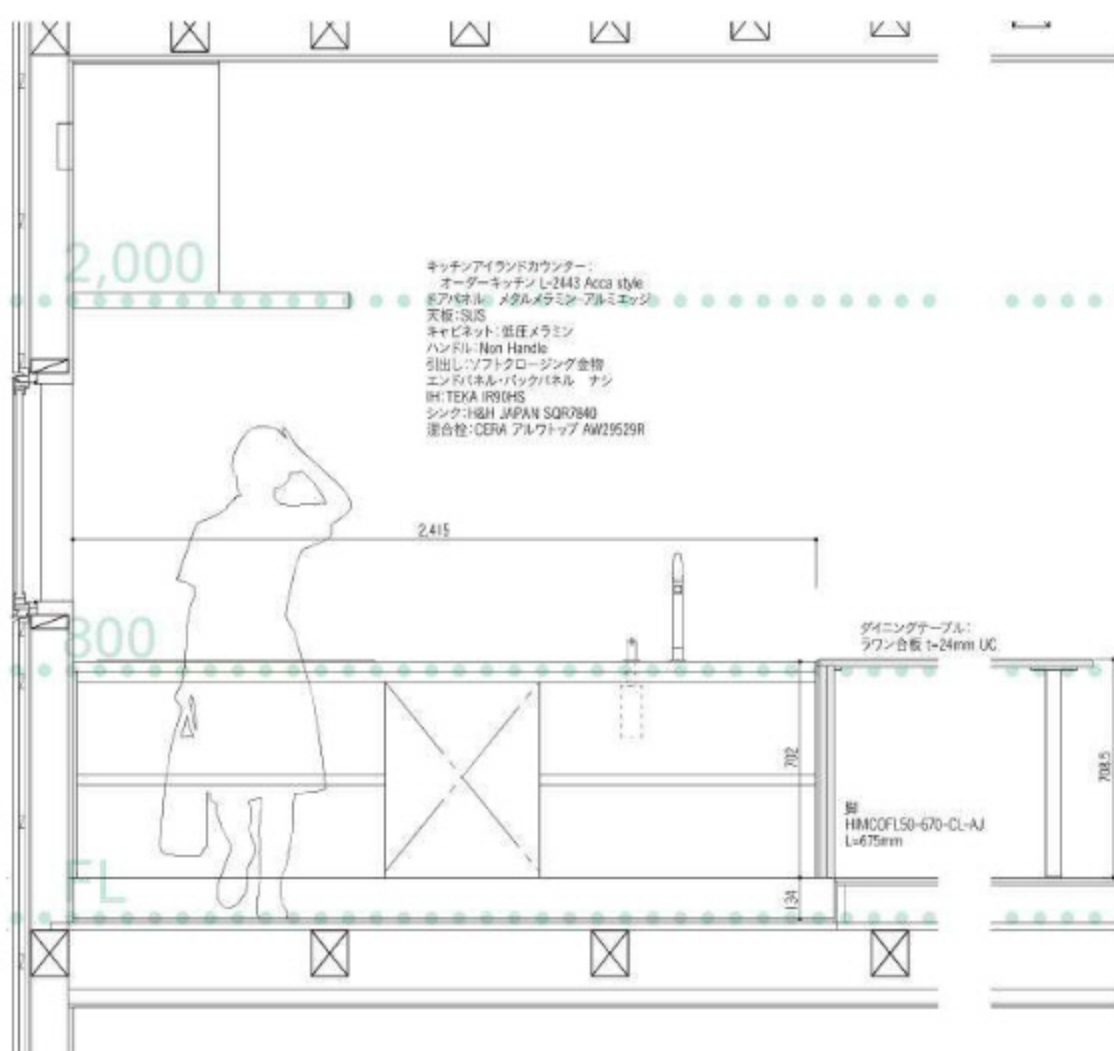
アミダハウス［本誌1108］　河内一泰／河内建築設計事務所

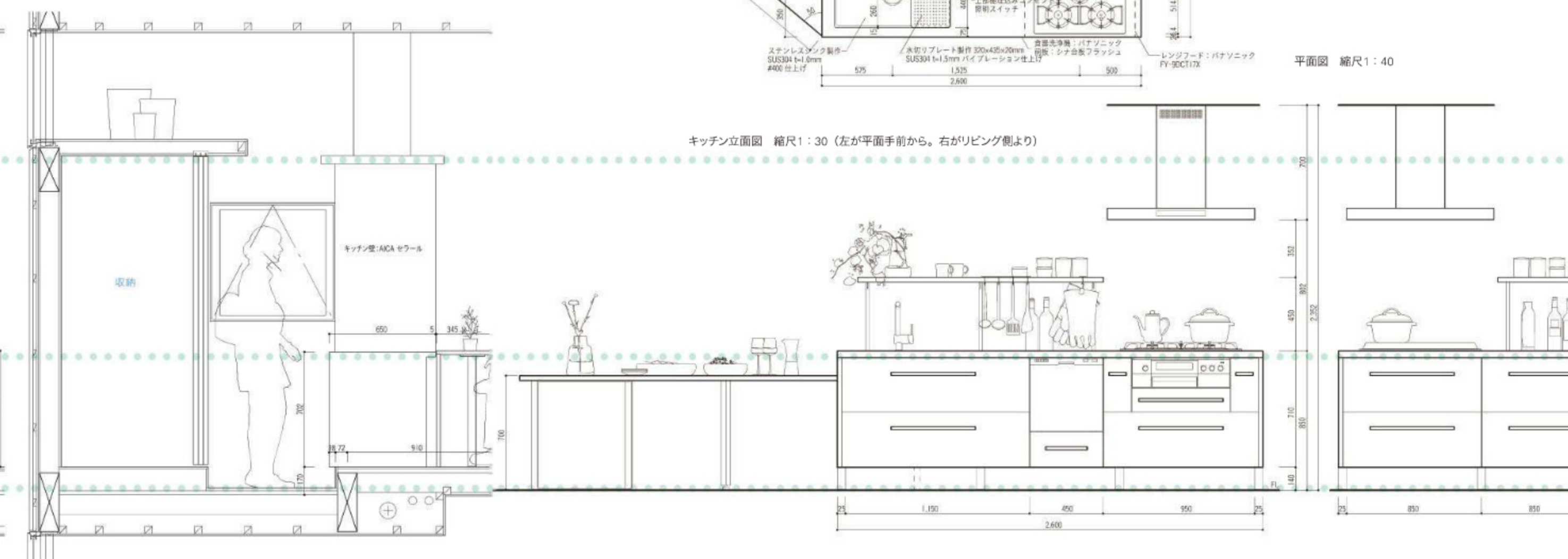
スキップ状にそれぞれの床が架けられている住宅のキッチンは、ダイニングテーブルと一体化されている。キッチン高さとテーブル高さを調整するため、キッチン部分で床が134mm下がる。テーブル高さは708.5mm。左奥の引き戸を開けると収納となっていて、冷蔵庫、炊飯器、レンジ、食器などキッチン関係の収納と奥さんの書斎コーナーが収納されている。ダイニングテーブルはラワン合板24mmUC塗装で、幅は1,000mm。ステンレスのキッチンをL字型の合板で囲い、キッチンというよりは大きなテーブルに見えるようにしている。　（河内）

キッチン回り断面図　縮尺1：30

フロアを見渡せる配置と両側収納

霧霧コヤ［本誌1110］　平野正典　名和研二

幅が2,600mm、奥行が1,000mmのキッチン台は、調理機能をもったリビング・ダイニングの収納家具として両側に引き出しを設置。調理場側は調理器具・食器、リビング・ダイニング側は家族それぞれの日用品などの収納となる。ダイニングテーブルを回り遊ぶ子どもたちの引き出しは、らくがき帳や色鉛筆などが入る。一体化したキッチンとダイニングテーブルは、床のレベル差を調整するのではなく、必要な高さをフロアレベルから取って合体させている。
キッチン天板は1.2mm厚のステンレス、バイブレーション仕上げ。ダイニングテーブルは無垢のカラマツ材を使用。キッチンの外部表面仕上げは、シナ合板クリア塗装。
角度をつけたレイアウトは、調理中にもフロアを見渡しやすいように、そして、ダイニング照明のアームが折れ曲がる角度、構造梁のちょうど間にキッチンフードを配置させるための寸法にて決定されている。キッチン台から＋450mmに設けた上部の便利棚は、棚の上に物がある程度置かれた状態でも向こう側を見渡せ、かつ手元灯としてちょうどよい位置にLED照明を配置できる。　（平野）

平面図　縮尺1：40

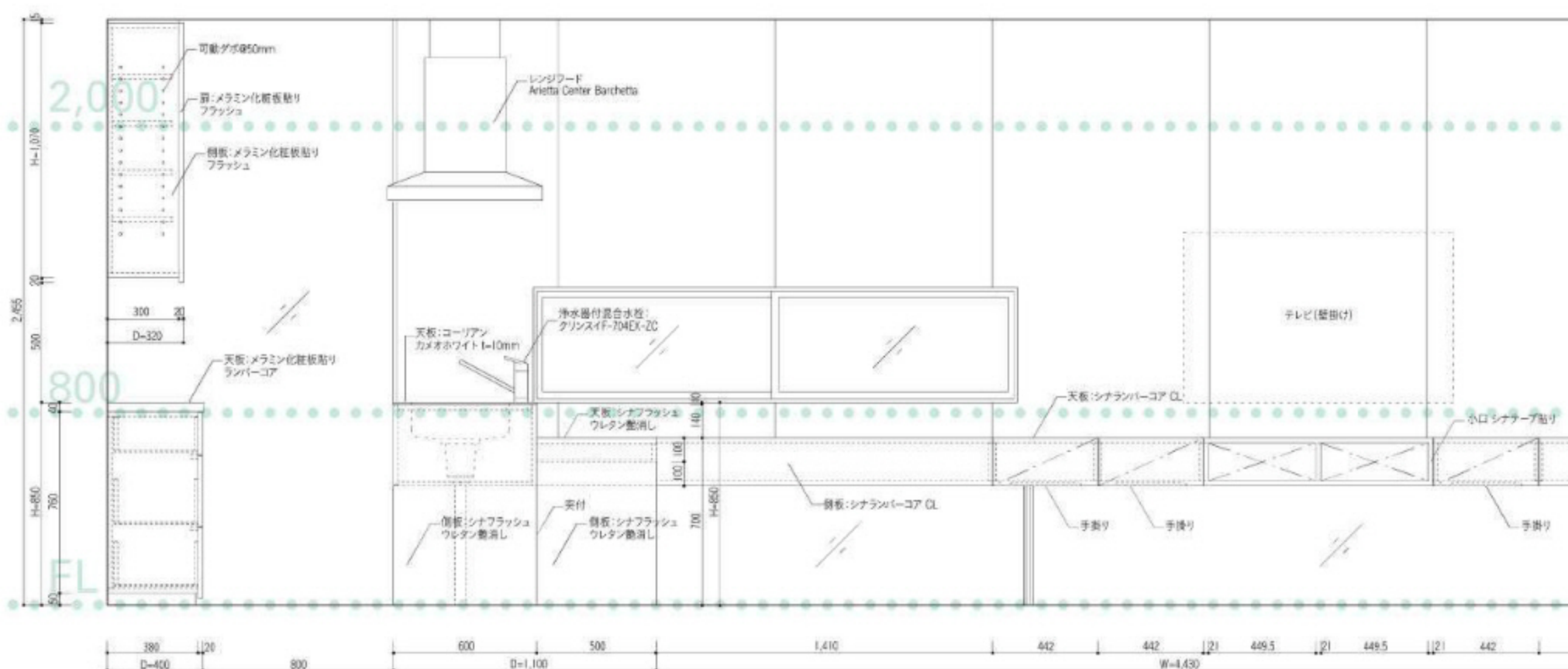
キッチン立面図　縮尺1：30（左が平面手前から。右がリビング側より）

ダイニングテーブルを壁際に延長する

中目黒の家［本誌1111］　林順孝建築設計事務所

キッチンとテーブルが一体となり、テーブルがそのまま壁際の棚となってぐるっと回る。キッチンの高さは850mm、テーブルの高さは700mmだが、キッチンと対面することで、その段差を吸収したダイニングキッチンの断面構成をつくっており、ダイニングテーブルの厚みは100mmで、テーブル天板とキッチンの下端との高さの差200mmが、そのまま棚の厚みとして空間に現れる。キッチン下部は抜けていて、棚との連続性を強調。棚の下はフリースペースとなっており、窓際に椅子を置いてテーブルとしても使用できる。棚はその厚みを利用して、部分的に引き出しやAV機器の収納スペースとなる。すべての出隅を留めで納めることによって、抽象的なヴォリュームとしている。

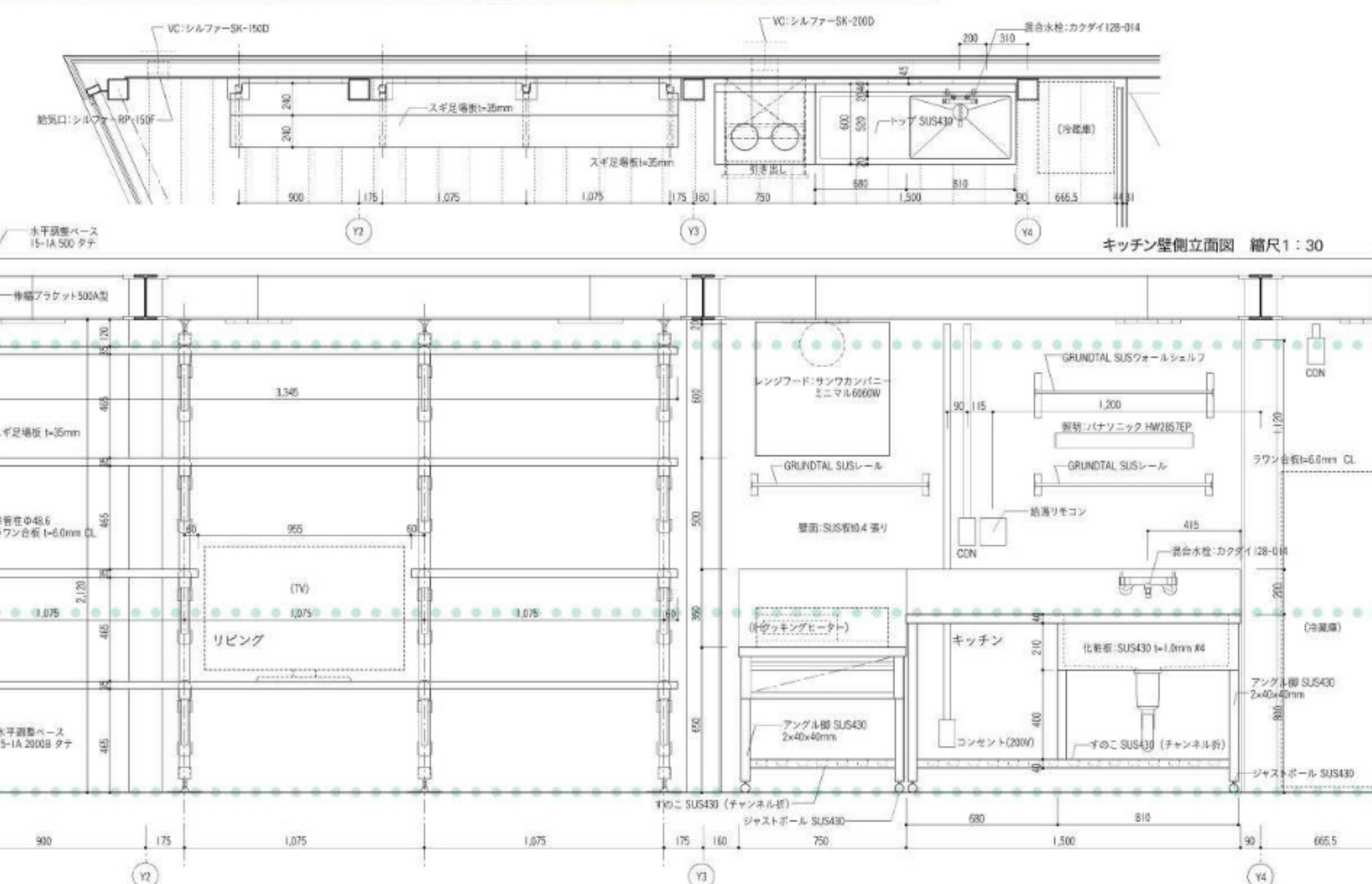
空間全体の天井高さは2,455mm。（林）

平面図　縮尺1：80

キッチン立断面図　縮尺1：30

キッチンのスケルトンインフィル

キャビネットハウス［本誌1112］　田中知博／田中知博建築設計事務所

ステンレスで制作された最小限の機能に特化したローコストでコンパクトなキッチン。スケルトンとしての鉄骨造の建物に対して、インフィルとしての融通性を最大限に高めるため、ひとつの家具として壁面に等価に並べて設置している。造り付けのキッチンのように特定のキッチンスペースを設けるのではなく、大きな空間の一要素と位置付けて計画された。寸法体系や意匠については、一般の業務用厨房機器に合わせて製作されているため、必要に応じて作業台を延長・増設したり、汎用機器を追加しても違和感がない。調理機器は露出しており、IH調理台はところどころに設けられている200Vコンセントを利用することでもち出して使用できる。キッチンの奥行は600mm。天板高さは800mm。壁面には0.5mm厚のステンレス板を貼り付けている。（田中）

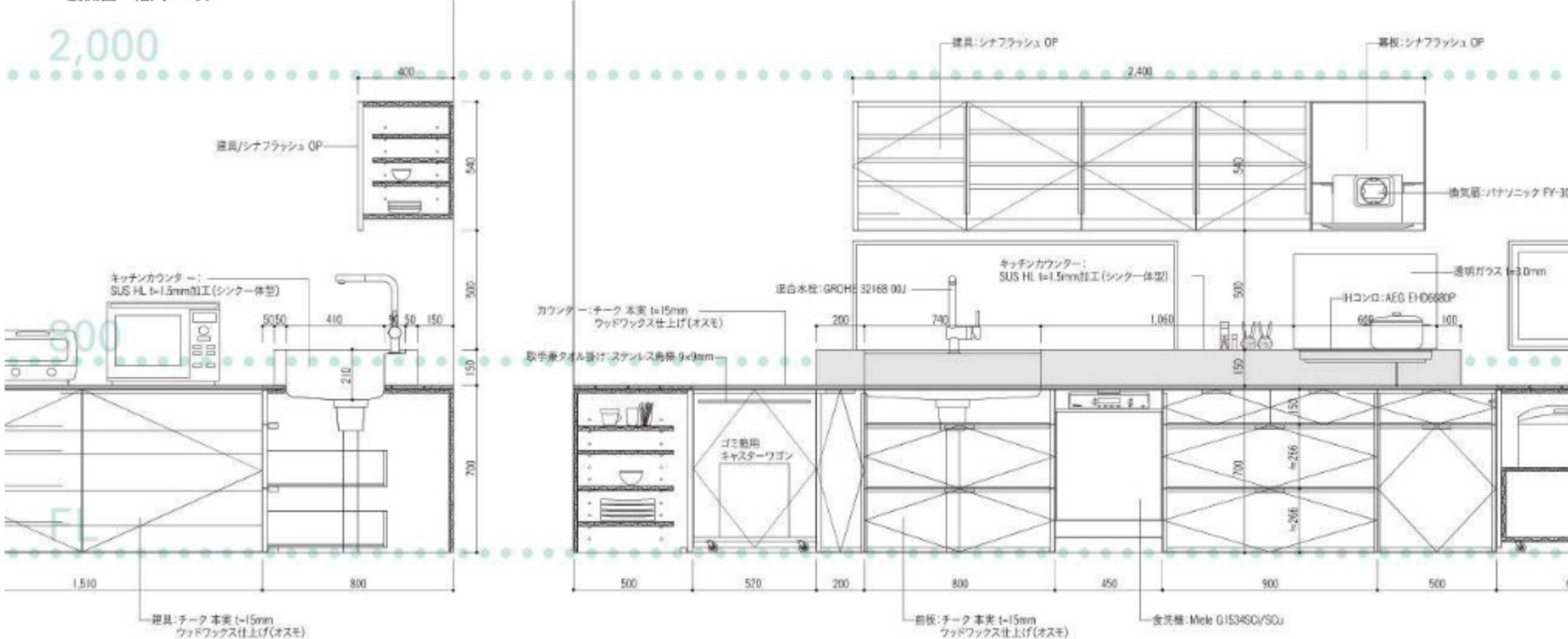
部分平面図　縮尺1：50

キッチン壁側立面図　縮尺1：30

キッチンが載る壁際収納

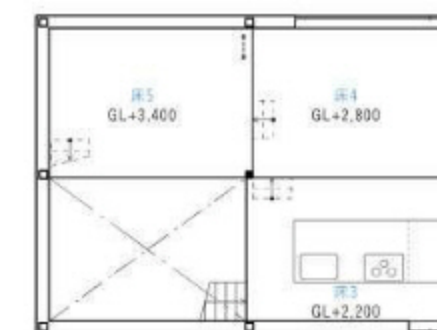
IN-IN-home［本誌1202］　服部信康建築設計事務所

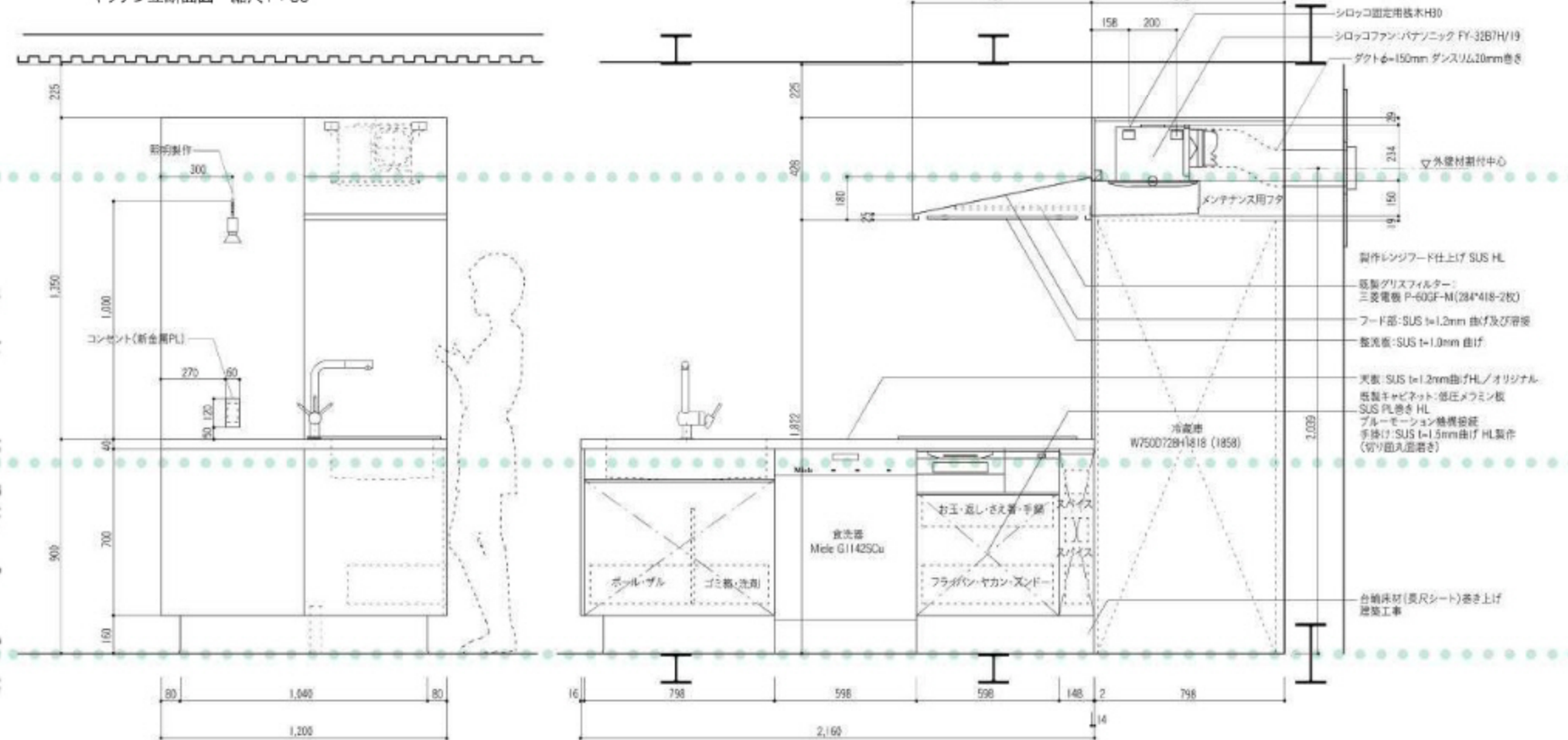
天井高の高い（4,400mm）空間に対して、ダイニングテーブルを囲うように水回りスペースや冷蔵庫、調理機器が置ける配置となっているキッチンとダイニング。
高さ700mmで（ダイニングテーブルと同じ高さ）回る「棚」兼、「キッチン台」兼、和室への「アプローチ床」。同じ高さでありながら、さまざまな関係性がキッチン周辺で生まれている。正面のIHコンロや水回りが配置された部分の仕上げはステンレス。高さは150mmほど立ち上げてある。
また収納の面材・腰壁の材及び、床・階段までニューギニアチーク材で統一することで一段埋もれるような感覚にして空間の体積を感じられる場をつくり出した。　（服部）

平面図　縮尺1：200

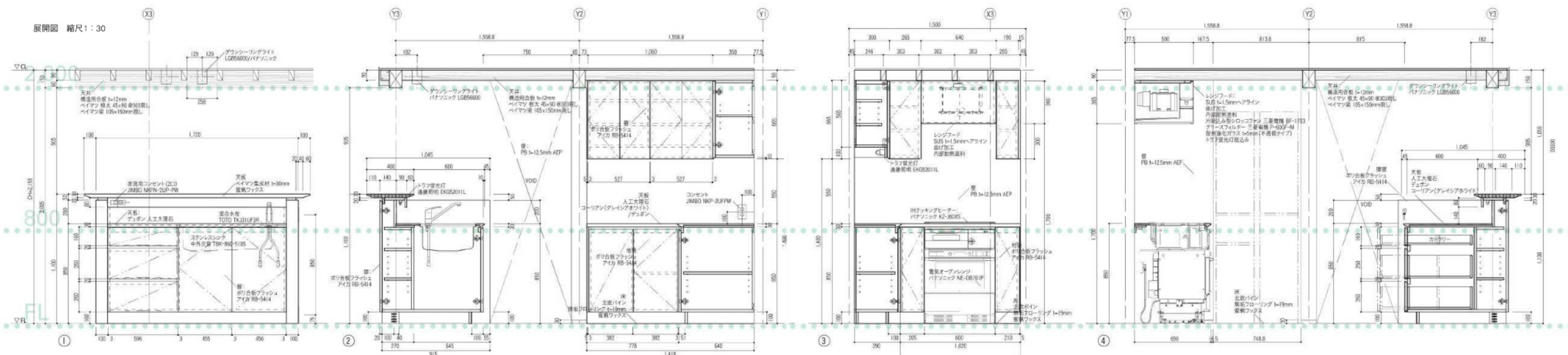
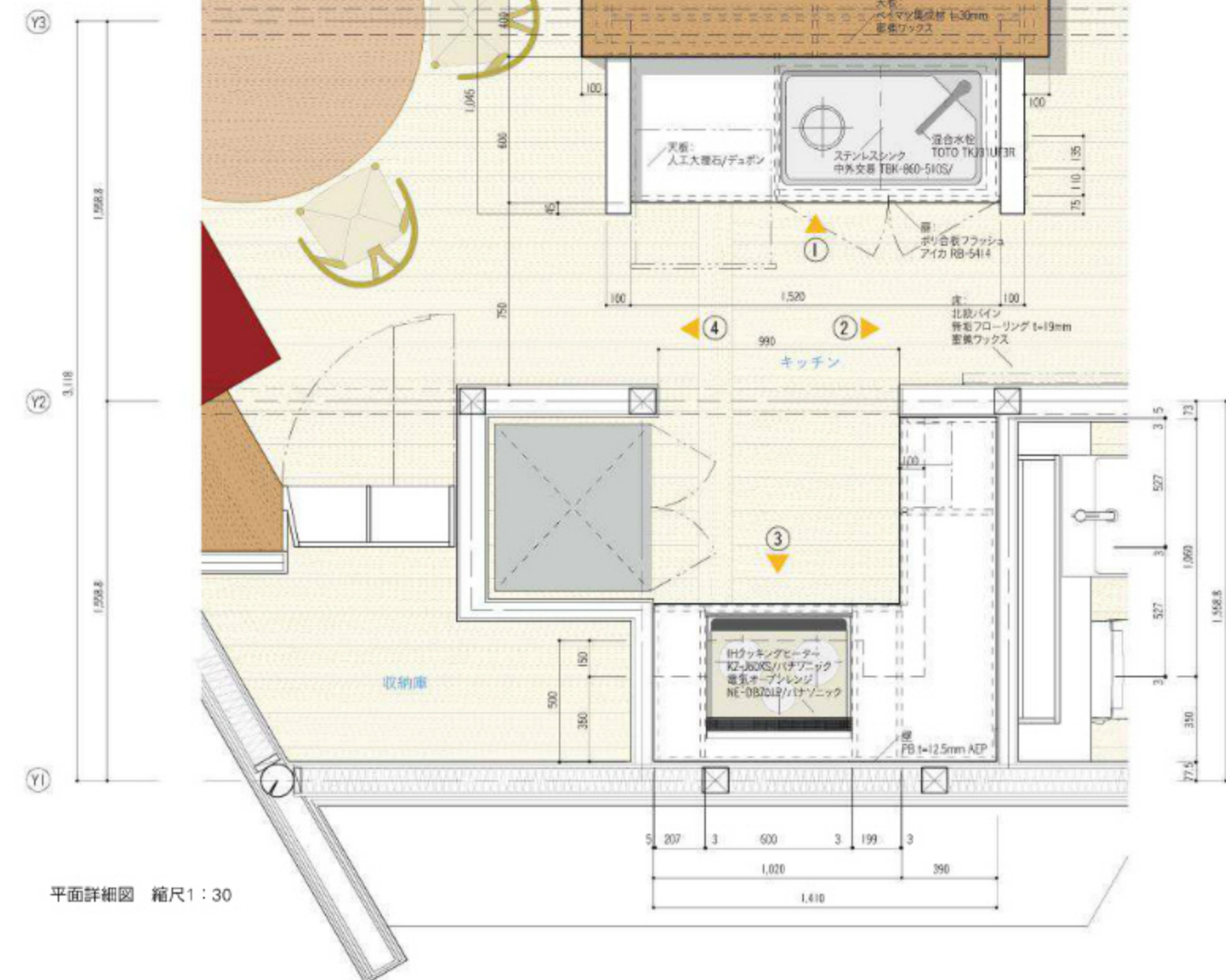
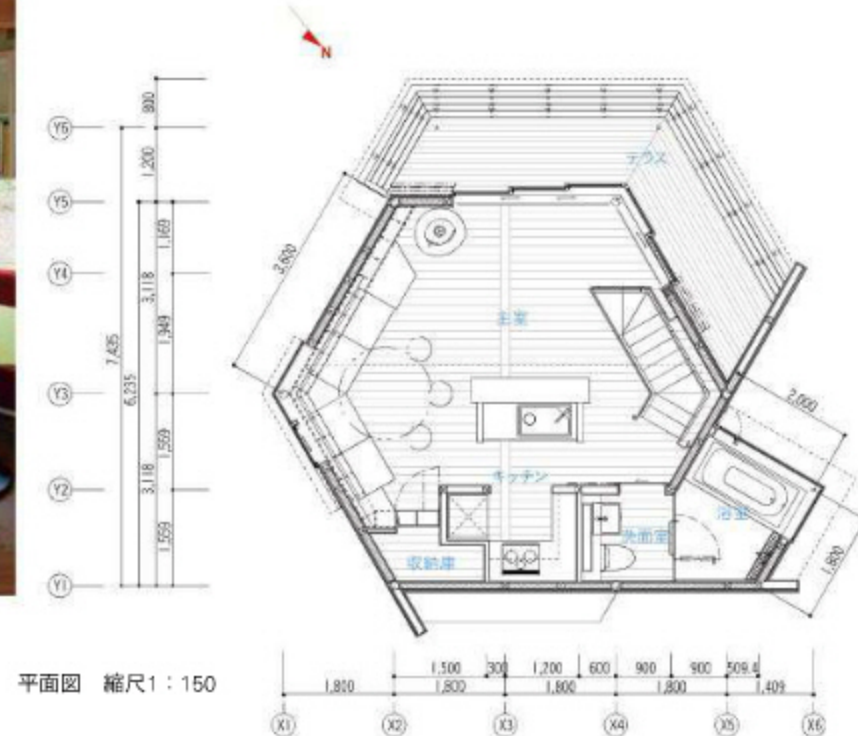
展開図　縮尺1：30

凹凸のない箱のようなキッチン

梅島の建物［本誌1205］　齋藤由和／アデザイン

写真左手前に見えているのが製作レンジフードで、仕上げはステンレスヘアライン仕上げ。調理の際は奥側に立つため、向こう側の面には食洗器や、調理機器、器具を収納する引き出しが設置されている。こちら側に見えているのは洗濯・乾燥機。
その隣は食器類などを収納する引き出しなど。キッチン天板の高さは900mm。幅は1,200mmと広い。空間のディテールと併せるように、シャープな納まりで単に箱が置かれているかのようなヴォリュームがキッチンとなっている。
オリジナルにデザインしたレンジフードは、既製品のシロッコファンを冷蔵庫上部に収納することで、クッキングヒーター上部には、吸込み口だけを用意すれば足り、シャープにデザインすることを可能にしている。内部には、丸洗いできる既製グリスフィルターを納め、整流板で気流をコントロールすることとした。　（齋藤）

平面図　縮尺1：120

キッチン立断面図　縮尺1：30

キッチンに見えない環境をつくる

志立別邸［本誌1205］　横河健／横河設計工房

手前のベイマツ集成材の天板が載ったカウンター部分は、内側にシンクを設置。750mm幅の床奥に、990mm幅のスクエアエリアを取り、正面奥にIH、右手壁の後ろ側が冷蔵庫置き場としている。最小限の動作環境の中で、料理をする行為を効率的にするための配置が緻密に検討され、空間全体で見た時、キッチンの雑然とした表情がワンルーム空間に現れない構成となっている。
全体のプラン（平面図）から見て分かるように、キッチンスペースが独立してあるのではなく、人の動線とも重なりながら主室にはみ出し、微妙なバランスのもとに成立していながら、静謐な質を維持している。　（横河）

平面図　縮尺1：150

平面詳細図　縮尺1：30

展開図　縮尺1：30

日建ハウジングシステムは1970年の創立からこれまで、10万戸を上回る分譲、賃貸住宅を設計してきた。今回の 覧会では、その中でも代表的な10のプロジェクト15住戸ユニットのプランニングに焦点を当て、その変遷を辿り、ユニットのこれからを考えることが意図されている。会場に 示されたパネルには「プライバシーを守る」「新しい住空間の創造」「構造への挑戦」「自由な間取りの追求」「ランドスケープとの融合」という5つのキーワードによるユニットの分類が、社会状況と共に時代順にまとめられた。さまざまな集合住宅のユニットの型になったともいえる「大倉山ハイム」(1973年)では、住宅公団による51C型、67型に対し、プライバシーが重視され、近年では暮らしの多様化や省エネルギー対策などの社会テーマと共にプランニングが変化する。プランニングを軸にしたからこそ、社会状況と共に変化する新たな住まい方への提案が一目で伝わり興味深い。またそれを可能にする技術も紹介され、これからどのような住まいが提案されるのか、楽しみになる。

上：会場風景。今回の展覧会は若手が中心となり企画された。／下：来場者がその住まい方を検討できる「大倉山ハイム」の1/20模型。

これまでの代表的なプロジェクトを振り返るパネルとそれぞれの住戸ユニットの1/30模型。

「住戸ユニットの未来」—日建ハウジングシステムの仕事— 開催中

会期　9月28日まで
会場　日建設計 東京ビル1階ギャラリー（東京都千代田区）
URL　http://www.nikken.co.jp/ja/

「石井修図面展」開催

本誌連載「家をつくる図面」連動企画｜2012年7月号

会期　7月25日〜8月6日
会場　ヒカリエ 8/ CUBE 3（東京都渋谷区）
URL　http://www.hikarie8.com/

渋谷ヒカリエにて、石井修氏の遺した原図が見られる 覧会が新建築社主催で開催された。建築ができるまでの生産過程である図面表現から建築家の作風を読み解こうとする本誌連載「家をつくる図面」の主旨に合わせ、「回帰草庵(目神山の家1)」「天と地の家」などの図面を中心に、"自然と共存"する住宅を追い求めた氏の思想に触れられる内容となっている。誌面に掲載された図面以外にも、着想・構想の過程が分かる原図が置かれ、また画面上で参照できるアーカイブデータや、弟子である竹原義二さんと子女の石井智子さんが当時のことや図面について語るインタビュー映像が見られる貴重な 示だった。4,000人超の来場者に、独創性溢れる図面の楽しさとそこから見える家づくりが心に響いていたらと願う。

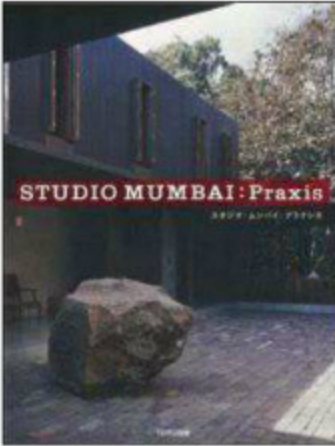
右：原図と作品の写真や氏の言葉が記されたパネルが設置される。／左上：ヒカリエCUBE3で開催された。／左下：アーカイブやインタビュー映像も見られるもりだくさんの会場構成。

「スタジオ・ムンバイ展 PRAXIS」開催中

会期　9月22日まで
会場　TOTOギャラリー・間（東京都港区）
URL　http://www.toto.co.jp/gallerma/

スタジオ・ムンバイは、インドを代表する建築家ビジョイ・ジェイン氏のもと、建築家のほか大工や石工、職人などからなる設計事務所。所内に素材や左官に関する実験、原寸モックアップの製作ができるような工房をもち、自らが試行錯誤を重ねつつ、さまざまなコラボレーターを巻き込み施工まで一貫して行っている。
そんな独自なスタイルで活動するスタジオ・ムンバイの工房さながらな空間が本 では再現されている。会場いっぱいにところ狭しと並べられた棚やテーブルには、模型やポートフォリオのほか、ベニヤを使ったエスキース、素材のサンプル、建具の蝶番や家具の脚のようなものなどさまざまなパーツから顔料や工具まで、彼らの日常を思わせるもので溢れている。さらに実際の作業過程をとらえた映像が、インドでのものづくりをより身近に感じさせてくれる。サンプルに触れたり棚をのぞき込んだり、映像に見入ったり。ゆっくりと時間をかけて見て回ることをお勧めしたい。

左上：3階会場風景。模型や写真のほか素材やパーツのサンプルが多数展示される。棚やテーブル、椅子もインドからもち込まれたもの。*／右上:テーブルには「パルミラの住宅」の模型、床には石材のサンプル。*／左下：上段には工具、下段には家具のテンプレート。*／右下：カラーコンクリートのサンプル。

*撮影：新建築社写真部　特記なき撮影：本誌編集部

STUDIO MUMBAI : Praxis

ビジョイ・ジェイン＋ジョセフ・ファン・デル・ステーン 監修
TOTO出版 編集
スタジオ・ムンバイ 協力

(B5判変型／220頁／3,360円／TOTO出版)

インドのムンバイ近郊を拠点に活動する設計事務所「スタジオ・ムンバイ」の作品集。世界的に注目を集める建築家ビジョイ・ジェイン氏のもと、職種もさまざまな人びとが集まり、インドに伝わる伝統的な技法や素材を生かしつつ、所内の工房で試行錯誤を重ね施工まで手がける。巻頭のジェイン氏へのインタビューからは、土地や風景を大切にする氏の建築観のほか、所内でどのようなコミュニケーションを取り意識を共有し、目標を見据えていくのか、時代と共に進化しようとする彼らの姿が浮かび上がる。また最新作を含む12作品を豊富な写真と図面で紹介しており、見応えも十分。インスピレーションを受けたインドならではの風景や石工や大工などスタッフへのインタビューも掲載され、「スタジオ・ムンバイ」を深く知る手がかりとなる。

風景の思想

西村幸夫　中井祐　伊藤毅 編

(四六判／224頁／2,625円／学芸出版社)

風景という言葉は広く一般的に使われているが、風景はこれまでどのように見られてきたのか、そしてこれからどう関わっていけばよいのか。本書は中世史、民俗学、都市建築史、文化的景観、土木デザインなどさまざまな分野の専門家たちが2009年に行われた議論をもとに、改めて考察を記したものである。風景という壮大なテーマについて、主に日本人の視点を主眼に置き、「歴史」「場所」「これからの風景づくり」という3つのアプローチから構成され、分野ごとに異なった風景との関わり合いや接し方が論じられている。一見漠としてとらえられがちな「風景」だが、江戸の都市イメージを歌川広重の浮世絵から読み解いたり、琵琶湖周辺における里地里山の再生運動に着目したりと、各章ごとに独自性がありそれぞれに面白い。多分野をとりまとめた重層的な構成が効果的な一冊となっている。

団地再生まちづくり３

団地再生支援協会・NPO団地再生研究会・合人社計画研究所 編著

(A5判並製／224頁／1,995円／水曜社)

団地は盛んに開発された時代からおよそ30年が経過し、立地や空間的余裕から、緑豊な周辺環境としてまちにとって貴重な資産になっている一方で、老朽化や少子高齢化などの問題も抱えている。これまでに出版された「団地再生まちづくり」シリーズの第三弾となる本書は、副題に「団地再生・まちづくりプロジェクトの本質」を掲げ、「絆を深めて賑やかなまちに」「サステナブルな暮らし方」「団地と地域の再生マネジメント」など6つのテーマから団地再生の国内外の実践的な取り組みを報告する。浴室とその改修方法の変遷からマレーシアの集合住宅の自主改造の例など30以上ある論考は多種多様である。研究者だけでなく、建築家、企業・行政職員、自治会担当者などが主体となり書かれた論考は各5ページ程度で写真も多く、テンポよく読み進めることができる。

こっそりごっそりまちをかえよう。

三浦丈典 文　斉藤弥世 絵

(A5判／224頁／1,890円／彰国社)

日本中のビルを横にして1階建てだけの世界ができたなら……、大人や車の入れない子供だけの王国は東京のどこにあるべきだろう……そんな空想をしてみるとたんに自分を囲む日常が新鮮なものに見えてくる。本書にはそのような自由な発想で住まいやまちを見つめるたくさんの作戦がまとめられている。紹介される作戦ごとにクスッとしてしまう挿絵が挟まれ、子供にも読みやすい絵本仕立てになっているが、その背後には資産所有や世帯構成、都市交通など現代の社会状況を映し出す数々のデータが存在する。しかしデータをただの数値として扱わず、これだけの作戦へと転換した三浦さんの豊かな想像力には脱帽する。肩肘張って世界に挑まなくても、まちに暮らすひとりひとりが身近なところを住みやすくする作戦を想像する。人びとのそんな想像が集積した時、どんな新しい世界ができるだろうか。

第7回 構造デザイン賞発表

去る7月17日、日本構造家倶楽部（斎藤公男会長）は、第7回日本構造デザイン賞を発表した。本賞は、構造デザイン活動の活性化と建築文化発 への寄与を目的として、優れた成果を発揮した構造設計者、構造技術者を毎年顕彰している。選考委員は、梅沢良三（委員長）、手塚貴晴、乾久美子、陶器浩一、小西泰孝の5氏。

松井源吾特別賞は、「さいたまスーパーアリーナやモード学園スパイラルタワーズ等の一連の大規模建築の構造デザイン」で小堀徹氏（日建設計）。組織事務所エンジニアリング部門に身を置きながらも、長年、大空間・超高層建築において構造デザインを追求していることが高く評価された（『新建築』0007、0805）。

日本構造デザイン賞は「ホキ美術館」（同1012、設計：日建設計）で向野聡彦氏（日建設計）と、「東北大学大学院環境科学研究科エコラボ」（設計：ササキ設計）で山田憲明（山田憲明構造設計事務所）に決定した。同受賞記念講演は、8月31日に東京デザインセンターで行われる。

第10回 住宅建築賞（沖縄）結果発表

沖縄県建築士会は、第10回住宅建築賞を発表した。同賞は会員の技術県産と建築文化向上を目的とし、今回の応募総数は32点。大賞を受賞した福村俊治氏の「知念の家」については、古典的な赤煉瓦葺きの木造離れと、モダンなRC造の母屋を組み合わせた空間演出が評価された。

受賞作品は以下の通り。

［住宅建築大賞、人気投票特別賞］▷「知念の家」＝福村俊治（チーム・ドリーム）

［住宅建築奨励賞］▷「瀬底島の家」＝下地洋平（クロトン）　▷「地球の懐で暮らす」＝根路銘安史（アトリエ・ネロ）

［審査員特別賞］▷「多様な住み方が混在するモザイク住宅」＝本庄正之（アトリエ・ノア）

「知念の家」。

空き店舗を学生賃貸住宅に——前橋市

前橋市中心市街地再生LLP構想会議が、前橋市中心市街地の空き店舗を改修して、学生向けのシェアハウスに用途変換し整備する計画を練っている。空き店舗を有効活用することのほかに、若者を生活者として呼び込み、地域の再生を図ることを目的とする。

前橋工科大学教授の石田敏明氏がアイデアを提供、地元の設計事務所、市内の商店街が加盟する中心商店街協同組合などが中心となり計画を進行中。RC造3階建て、延床面積409m²の施設のうち、1階を賃貸店舗、2,3階を学生向け賃貸住宅とする予定で、商店主、市民有志、行政書士らが出資して2012年度内のLLP（有限責任事業組合）設置、改修、入居者募集を目指している。

「こどものみんなの家」プロジェクト始動 ——伊東豊雄氏とCCC主導

伊東豊雄氏とポイントサービス「Tポイント」を運営するカルチュア・コンビニエンス・クラブ（CCC）は、東日本大震災により失われてしまった子供たちの遊び場と希薄になってしまった地域コミュニティの場所となる施設を建設しようと、「こどものみんなの家」プロジェクトを開始。宮城県松島市の仮設住宅に建設予定で、7月18日より買い物でポイントがたまるCCC運営のTカードによる「Tポイント募金」から、建設資金を募集している。

伊東氏が設計・監理・施工協力を行う「こどものみんなの家」は、広さ10〜15坪の中に、ミニコンサートができる大きな縁側を設けたり、隣接の集会所と接続させて仮設住宅の人びとが集まりくつろげる空間をつくろうというもの。2012年9月着工、12月完成予定。

「Art&Life：生きるための家」展 建築提案公募結果発表

7月15日より東京都美術館で開催中の同 では、 覧会に先立ち「生きるための家」というテーマで新しい価値観をもったこれからの住宅についての提案を公募、応募総数159案から審査が行われた。審査委員は小嶋一浩、西沢立衛、平田晃久、藤本壮介、真室佳武の5氏。

最優秀賞は山田紗子氏の「家族の生きるための家－大柱と屋根のつくる、住むための濃度－」が受賞、会場には同作の原寸大模型が 示されている。

そのほかの受賞作品は以下の通り。

［小嶋一浩賞］「吹き抜けのある共同生活」＝竹田和行

［西沢立衛賞］「一本の大きな木の中に彫りながら棲む」＝坂本尚朗　村口勇太　辺見英俊

［平田晃久賞］「Unfolded Houses-for architectural space」＝marikoabe

［藤本壮介賞］「階段でつくる家」＝sky|studio kikuchi yamamoto

［東京都美術館館長賞］「集合しようとする住宅」＝秦彩奈

「家族の生きるための家－大柱と屋根のつくる、住むための濃度－」原寸大模型。　撮影：中野正貴

武井誠 Makoto Takei　**鍋島千恵** Chie Nabeshima

（武井誠・左）1974年東京都生まれ／1997年東海大学工学部建築学科卒業／1997～99年東京工業大学大学院塚本由晴研究室研究生+アトリエ・ワン／1999年手塚建築研究所／2004年鍋島千恵とTNAを共同設立／現在、東海大学、東洋大学非常勤講師
（鍋島千恵・右）1975年神奈川県生まれ／1998年日本大学生産工学部建築工学科卒業／1998年手塚建築研究所／2004年武井誠とTNAを共同設立／現在、法政大学、日本大学非常勤講師

主な受賞に、「輪の家」（本誌0611）で2007年東京建築士会住宅建築賞、AR AWARD2007 COMMENDED受賞、Record HOUSES 2007、2008年Wallpaper Design Awards 2008 WINNER、2009年DETAIL Prize 2009 Special Prize Glass受賞／「モザイクの家」（本誌0707）でAR AWARD2008 HONOURABLE MENTIONS受賞／「カタガラスの家」（『新建築』0811）で2009年第25回新建築賞、2010年JIA新人賞受賞／「廊の家」（本誌0801）でAR HOUSE 2010受賞／2011年上州富岡駅舎設計提案競技最優秀賞受賞

TNA　〒162-0065 東京都新宿区住吉町9-7-3F　tel. 03-3795-1901　fax. 03-3795-1902
mail@tna-arch.com　http://www.tna-arch.com/index.html

窪田勝文 Katsufumi Kubota

1957年山口県生まれ／1981年日本大学工学部建築学科卒業後、K構造研究所／1988年窪田建築アトリエ設立／現在、山口大学非常勤講師／2004年「山口きらら博山口県館」（『新建築』0108）にてデダロ・ミノッセ国際賞特別賞／「I-HOUSE」（本誌0410）にて2005年バルバラ・カポキン国際賞住宅部門最優秀賞、2006年ひろしま建築文化賞優秀賞／2006年「M-CLINIC」にてデダロ・ミノッセ国際賞審査員特別賞／2006年「M-HOUSE」（本誌0506）にて日本建築士会連合会賞優秀賞／「T-HOUSE」（本誌0709）にて2008年デダロ・ミノッセ国際賞審査員特別賞、2007年AEGキッチンデザインコンテスト最優秀賞／2011年「F-HOUSE」（本誌0801）にてデダロ・ミノッセ国際賞審査員特別賞

窪田建築アトリエ　（head office）〒740-0017 山口県岩国市今津町1-8-24 FORM 2F　tel.0827-22-0092　fax.0827-22-0079
info@katsufumikubota.jp　http://www.katsufumikubota.jp
（ATELIER 1）〒730-0042 広島県広島市中区国泰寺町1-9-32　tel.082-247-0108

島田陽 Yo Shimada

1972年兵庫県生まれ／1995年京都市立芸術大学美術学部環境デザイン学科卒業／1997年同大学大学院修士課程修了／1997年タトアーキテクツ/島田陽建築設計事務所設立

タトアーキテクツ／島田陽建築設計事務所　〒650-0002 兵庫県神戸市中央区北野町2-13-23　tel. 078-891-6382　fax. 078-891-6620
daaas@e.email.ne.jp　http://tat-o.com/

木原千利 Chitoshi Kihara

1940年大阪府生まれ／1972年木原千利建築設計事務所設立／1995年木原千利設計工房に改称／2002～10年関西大学工学部非常勤講師／1993年「路地裏の家」「双葉の家」「懐風荘」で関西建築家大賞受賞／1997年「懐風荘」で日本建築学会作品選奨受賞／2007年「宗達」（『新建築』0707）で第52回神奈川建築コンクリート優秀賞受賞／2009年「風游の家」で第12回徳島市街づくりデザイン賞受賞／主な著書に『住宅に生かす和風のディテール』（1996年、彰国社）、『診療所—木原千利設計工房の作品と方法』（2003年、建築資料研究社）

木原千利設計工房　〒531-0075 大阪市北区大淀南1-6-19 アスタ・ラ・ビスタ新梅田1階　tel. 06-6457-2525　fax. 06-6457-2526
Info@kihara-sekkei.com　http://www.kihara-sekkei.com

千葉学 Manabu Chiba

1960年東京都生まれ／1985年東京大学工学部建築学科卒業／1987年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了／同年、日本設計入社／1993年ファクターエヌアソシエイツ共同主宰(～01年)、東京大学工学部建築学科キャンパス計画室助手（～96年）／1998年東京大学工学部建築学科安藤研究室助手／2001年千葉学建築計画事務所設立／2009年スイス連邦工科大学客員教授（～10年）／現在、東京大学大学院工学系研究科准教授、早稲田大学芸術学校、日本女子大学家政学部住居学科非常勤講師／1998年「和洋女子大学佐倉セミナーハウス」でJIA新人賞／2002年「黒の家」（本誌0110）で東京住宅建築賞、「MESH」（『新建築』0406）で第21回吉岡賞、2005年グッドデザイン賞／「日本盲導犬総合センター」（『新建築』0701）で2007年AACA賞優秀賞、2008年BCS賞、2008年日本建築家協会賞、2009年日本建築学会賞／「こどもの城」（『新建築』0904、池田設計と協働）で平成22年度日事連建築賞一般建築部門奨励賞、2011年度日本建築家協会優秀建築選、2011年度第5回「建築九州賞（作品賞）」一般部門作品賞、2012年第10回環境設備デザイン賞優秀賞受賞／主な著書に「窓のある家」（2006年、インデックスコミュニケーションズ）、「rule of the site-そこにしかない形式」（2006年、TOTO出版）

千葉学建築計画事務所　〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-54-4-B1F　tel.03-3796-0777　fax.03-3796-0788
manabuch@zg7.so-net.ne.jp　http://www.chibamanabu.jp/

池田雪絵 Yukie Ikeda

1973年宮城県生まれ／1998年東京大学建築学科卒業／1999～2000年ヘルシンキ工科大学交換留学／2001年東京大学大学院修士課程修了／2001～03年坂茂建築設計、東京藝術大学先端芸術表現科非常勤講師／2003～05年スタジオ・アーキファーム／2006年～池田雪絵建築設計事務所

池田雪絵建築設計事務所　〒177-0041 東京都練馬区石神井町2-7-4 豊田ビル201　tel. 03-5875-4182　fax. 03-5875-4183
info@snowpict.com　http://www.snowpict.com

安藤毅 Tsuyoshi Ando　**大友和樹** Kazuki Ohtomo

（安藤毅・上）1971年神奈川県生まれ／1997年芝浦工業大学大学院建設工学専攻修士課程修了／1997～2001年岡部憲明アーキテクチャーネットワーク／2001～04年ミリグラムスタジオ／2004年エアスケープ建築設計事務所設立／2008年「ヒカリノカタチ」で第2回トステム設計コンテスト佳作／「Roji-house」で2009年第30回INAXデザインコンテスト審査員特別賞 、2010年住まいの環境デザインアワード2010奨励賞受賞
（大友和樹・下）1979年秋田県生まれ／2000年秋田公立美術工芸短期大学卒業／2001～02年葛西潔建築設計事務所／2004～09年ミリグラムスタジオ／2009年トリノス建築計画設立

エアスケープ建築設計事務所　〒108-0071 東京都港区白金台2-23-2-B101　tel. 03-5422-8946　fax. 03-5422-8947
info@airscape.cc　http://www.airscape.cc

トリノス建築計画　〒158-0083 東京都世田谷区奥沢3-18-12-101　tel. 050-3682-8679　fax. 050-3682-8679
ohtomo@torinosu.jp　http://torinosu.jp

玉上貴人 Takato Tamagami

1973年神奈川県生まれ／1996年明治大学理工学部建築学科卒業／1996～98年田村設計／2002年タカトタマガミデザイン設立／現在、日本大学理工学部非常勤講師／2005年「ジョージズファニチュアオフィスアンドギャラリー」でJCDデザインアワード入選／2008年「SUNWELL MUSE 北参道」でJCDデザインアワード入選／「MAM CAFE」（『新建築』1011）で2008年第2回アイカ・ショップデザインコンテスト入選、2009年JCDデザインアワード入選／2011年「For-rest Park」（『新建築』1010）でSMOKER'S STYLE COMPETITION2010 作品例部門最優秀賞受賞／2011年「パティスリーウチヤマ」でJCDデザインアワード入選／2012年「CAFE AURA」でJCDデザインアワード入選／2012年「LOOP」でJCDデザインアワード銀賞受賞

タカトタマガミデザイン　〒151-0071 東京都渋谷区本町2-45-7 RENN bldg.　tel.03-5365-1701
info@ takatotamagami.net　http://www.takatotamagami.net

森清敏 Kiyotoshi Mori　**川村奈津子** Natsuko Kawamura

（森清敏・左）1968年静岡県生まれ／1992年東京理科大学理工学部建築学科卒業／1994年同大学院修士課程修了／1994～2003年大成建設設計本部／2003年～MDS一級建築士事務所共同主宰／2006年～日本大学非常勤講師／2009年～東京理科大学非常勤講師／2010年株式会社MDSに改組・代表取締役
（川村奈津子・右）1994年京都工芸繊維大学工芸学部造形工学科卒業 ／1994～2002年大成建設設計本部 ／2002年MDS一級建築士事務所設立／2010年MDSに改組・取締役

「王子木材工業本社ビル」（『新建築』0302）で2003年グッドデザイン賞、2004年American Wood Design Awards、2004年インテリアプランニング賞、2005年東京建築賞、2006年JID 賞受賞／「鉄の家」（本誌0712）で2008年日本建築学会作品選集、グッドデザイン賞受賞／「たまらん坂の家」（本誌1002）で2010年日本建築学会作品選集受賞／「深沢の家」（本誌1110）で2012年東京建築士会住宅建築賞

MDS　〒107-0062 東京都港区南青山5-4-35 ＃907　tel. 03-5468-0825　fax. 03-5468-0826
info@mds-arch.com　http://www.mds-arch.com

飯田善彦 Yoshihiko Iida

1950年埼玉県生まれ／1973年横浜国立大学工学部建築学科卒業／1974年計画設計工房（現・谷口建築設計研究所）／1981年建築計画（元倉眞琴と共同主宰）／1986年飯田善彦建築工房設立／2007～12年横浜国立大学大学院Y-GSA教授／現在、横浜国立大学大学院Y-GSA客員教授／1996年「蓼科斜楼」で中部建築賞受賞／1998年「川上村林業総合センター 森の交流館」（『新建築』9709）で日本建築学会賞作品賞受賞／「名古屋大学野依記念物質科学研究館・学術交流館」（『新建築』0405）で2004年中部建築賞入賞、2005年愛知まちなみ建築賞、2007年BCS賞（建築業協会賞）受賞／2009年「佐野清澄高等学校 佐山記念体育館」（『新建築』0903）で栃木県マロニエ建築・景観賞、「横須賀市営鴨居住宅」（『新建築』0908）で神奈川建築コンクール優秀賞受賞／主な著書に、2004年『assenblage集積の方法』（2004年、光画コミュニケーション・プロダクツ）、『建築をつくることは未来をつくることである』（共著、2007年、TOTO出版）

飯田善彦建築工房　〒231-0041 神奈川県横浜市中区吉田町4-9　tel. 045-326-6611　fax. 045-326-6617
ias@kc5.so-net.ne.jp　http://www.iida-arc.com/

杉千春 Chiharu Sugi　**高橋真奈美** Manami Takahashi

（杉千春・上）1958年秋田県生まれ／1981年日本大学芸術学部美術学科卒業／1981～96年スタジオ建築計画／1988年同社取締役／1996年プラネットワークス設立、同社代表取締役／2002、2010、2012年関東学院大学工学部建築学科非常勤講師
（高橋真奈美・下）1959年東京都生まれ／1982年東京藝術大学美術学部建築科卒業／1984年東京藝術大学大学院修了／1984～96年スタジオ建築計画／1991年同社取締役／1994年東海大学工学部建築学科非常勤講師／1996年プラネットワークス設立、同社代表取締役／2010、2012年日本大学理工学部建築学科非常勤講師

プラネットワークス　〒150-0033 東京都渋谷区猿楽町29-8 ヒルサイドテラスEB-2　tel. 03-5459-1360　fax. 03-5459-1242
pw@plannetworks.jp　http://www.plannetworks.jp

伊藤博之 Hiroyuki Ito

1970年埼玉県生まれ／1993年東京大学工学部建築学科卒業／1995年東京大学工学系研究科修士課程修了／1995～98年日建設計／1998年O.F.D.A.共同設立／1999年伊藤博之建築設計事務所設立／2003～09年東京理科大学非常勤講師／2008年～東京電機大学非常勤講師／2010年～御茶ノ水女子大学非常勤講師、慶応義塾大学非常勤講師／2012年～日本大学非常勤講師／2008年「サンブスギの家具」にてグッドデザイン賞、第13回木材活用コンクール特別賞受賞／2008年「富谷町の家」JIA東北住宅大賞受賞

伊藤博之建築設計事務所＋OFDA　〒160-0007 東京都新宿区荒木町14番地　tel. 03-3358-4303　fax.03-3358-4304
ito@ofda.jp　http://www.ofda.jp

松尾宙　Hiroshi Matsuo　　松尾由希　Yuki Matsuo

（松尾宙・左）1972年東京都生まれ／1995年獨協大学法学部卒業／1999年早稲田大学芸術学校卒業／2001～09年石田敏明建築設計事務所／2009年一級建築士事務所アンブレ・アーキテクツ共同設立／2010年～早稲田大学芸術学校非常勤講師

（松尾由希・右）1973年東京都生まれ／1997年成蹊大学文学部英米文学部卒業／1999年早稲田大学芸術学校卒業／1999～2003年大塚聡アトリエ／2009年一級建築士事務所アンブレ・アーキテクツ共同設立

2008年「Aproject」にてSDレビュー奨励賞受賞

一級建築士事務所アンブレ・アーキテクツ　〒173-0004 東京都板橋区板橋4-47-7-1a　tel. 03-5944-4883　fax. 03-5944-4884
info@umbre-arch.com　http://www.umbre-arch.com

執筆者

杉下均（すぎした・ひとし）
1952年岐阜県生まれ／1975年建築研究所J共同設立／1978年杉下均建築工房設立／1995年「真鍋記念館クララザール」で岐阜県ふるさとづくり芸術賞最優秀賞受賞／2003年「本町の家」で第7回ウッドワン実施作品コンペ最優秀賞受賞

服部信康（はっとり・のぶやす）
1964年愛知県生まれ／1984年東海工業専門学校卒業、名巧工芸／1987年総合デザイン／1989年スペース／1992年R&S設計工房／1995年服部信康建築設計事務所設立／「長浦の家」で2003年INAXデザインコンテスト銀賞、2004年AWDA 2004 Award受賞／2003年、2005年、2008年、2009年、2010年 中部建築賞受賞

若原一貴（わかはら・かずき）
1971年東京都生まれ／1994年日本大学芸術学部卒業／1994～2000年横河設計工房／2000年若原アトリエ設立／2003年「あがり屋敷の家」（本誌0311）にて第7回WOOD ONE実施作品コンペ入選／2008年「四季の森デンタルクリニック」にて日本木材青壮年団体連合会主催、第11回木材活用コンクール部門賞（第一部門）／2009年「小日向の仕事場」（本誌0811）にて第30回INAXデザインコンテスト入賞

内藤真理子（ないとう・まりこ）
1973年神奈川県生まれ／1999年芝浦工業大学工学部建築工学科卒業／1999年芝浦工業大学大学院建設工学専攻（藤井博巳研究室在籍）修了／1999年～ライトフィールドアーキテクツ（現・ぼんぼり光環境計画）に約6年間の在籍中、個人住宅から光のまちづくりまで数多くのプロジェクトに参加／2005年～ 照明計画コモレビデザイン設立

番祐貴子（ばん・ゆきこ）
1969年神奈川県生まれ／1993年多摩美術大学美術学部デザイン科インテリアデザイン専修卒業／1993年日本設計インテリア設計部入社／2006年ハッタユキコ二級建築士事務所設立

名和研二（なわ・けんじ）
1970年長野県生まれ／1994年東京理科大学理工学部建築学科卒業／1998～2002年EDH遠藤設計室／1999～2002年池田昌弘建築研究所／2002年なわけんジム（すわ製作所）設立／2007年「2004」にて第23回吉岡賞受賞（中山英之と共同）

上田康裕（うえだ・やすひろ）
1964年東京都生まれ／1988年早稲田大学理工学部建築学科卒業／1990年同大学大学院修士課程修了／1990年電通入社、現在に至る／一級建築士／電通にて企業、官公庁のコミュニケーション、マーケティング関連業務のほか、展示会、博覧会業務に従事／1998～2000年経団連21世紀政策研究所出向、2003～05年愛知万博EXPOエコマネー（エコポイント）事業の企画・プロデュース／2006～08年電通総研に出向、2011年より電通ソーシャル・ソリューション局／現在、スマートハウス関連事業のプロジェクトに従事

神野昌也（かみの・まさや）
1967年福岡県生まれ／1991年明治大学経営学部経営学科卒業／1999～2000年構造設計集団〈SDG〉／2000～03年ジェーエスディー／2003～06年ストラクチャード エンヴァイロンメント／2006年force dimension設立／2010年frameworks共同設立

辺見久活（へんみ・ひさかつ）
1950年生まれ／1969年都立王子工業高校卒業／1985年イーエスアソシエイツ1級建築設計事務所設立と同時に入社、現在に至る

河内一泰（こうち・かずやす）
1973年千葉県生まれ／1998年東京藝術大学建築科卒業／2000年同大学大学院修士課程修了／2000～03年難波和彦＋界工作舎／2003年河内建築設計事務所設立／現在、芝浦工業大学、日本大学、東海大学非常勤講師／2002年「Waving gallery」でSDレビュー2002新人賞受賞／2003年「-5m」でアルミニウム建築構造デザインコンペ優秀賞受賞／2006年「Shinkawasaki Infill」でインフィルデザインコンペ最優秀賞受賞／2008年出雲崎デザインコンペ最優秀賞受賞／2009年「HOUSE kn」でAR Awards 2009 SHORTLISTED受賞／2011年「アミダハウス」（本誌1108）で中部建築賞住宅部門入選

平野正典（ひらの・まさのり）
1977年静岡県生まれ／2001年大阪産業大学工学部環境デザイン学科卒業／2001年～竹下一級建築士事務所／「霞霞コヤ」（本誌1110、56頁）で「住まいの環境デザイン・アワード2011」入賞

林順孝（はやし・よりたか）
1971年京都府生まれ／1995年大阪大学基礎工学部物性物理工学科卒業／2000年東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻博士前期課程修了／2000～04年SANAA／2006年林順孝建築設計事務所設立

田中知博（たなか・ともひろ）
1975年兵庫県生まれ／1998年京都大学工学部建築学科卒業／2000年同大学大学院工学研究科修士課程修了／2000～06年山本理顕設計工場／2007年田中知博建築設計事務所設立

齋藤由和（さいとう・ゆわ）
1974年東京都生まれ／1997年日本大学生産工学部建築工学科卒業／1997～99年西沢大良建築設計事務所／2000年齋藤由和事務所設立／2003年アデザイン設立／2004年中之島新線駅企画デザインコンペ優秀賞受賞

横河健（よこがわ・けん）
1948年東京都生まれ／1970年ワシントン州立大学交換留学生／1972年日本大学芸術学部美術学科卒業／1976年設計事務所クレヨン&アソシエイツ設立／1982年横河設計工房設立／現在、日本大学理工学部教授／1989年「日比谷公園前派出所」（『新建築』8706）で東京建築賞、都市計画局長賞受賞／1999年「グラスハウス」（『新建築』9812）で日本建築学会作品賞、デュポン・ベネディクタス建築賞特別賞受賞／「CESS／埼玉県環境科学国際センター」（『新建築0008）で2001年BCS賞、2002年日本建築学会作品選奨受賞／2003年「武蔵野市立0123はらっぱ」（『新建築』0106）で日本建築学会作品選奨受賞／2004年「トンネル住居」で日本建築家協会25年賞受賞／2011年「多面体の屋根・岐阜ひるがの」（本誌1010）で日本建築家協会賞受賞／著書に作品集「KEN YOKOGAWA landscape&houses」（2012年、新建築社）

編集後記

新建築賞の審査が、去る7月20日に行われました。今年は少し今までとは方法を変えて、一次審査で5組を選考し、対話形式の二次審査を行ったうえで最終的な新建築賞の2組を決めることにしました。審査委員は山本理顕さんと安田幸一さんです。一次審査の結果は誌面に掲載した通りですが、審査を通しては、今私たちが向き合っている社会に対して、どのような建築のあり方が求められているのか、そういったことも含めて議論が展開されました。最終的には、社会性よりも風景や住宅の概念を変えるような建築のあり方が評価されたように思います。二次審査の様子も誌面に掲載いたしますので、ご期待ください。

少し住宅の話とは離れますが、先日、東京・渋谷にオープンしたヒカリエの8階で、本誌に連載されている「家をつくる図面」と、JA86号の若手の作品を展示する展覧会が開かれました。これらが催されたクリエイティブスペース「8/」は、さまざまな企画のもとにイベントが入れ替わり行われたり、シェアオフィスの場が設けられており、新しい商業ビルの空間に、多くの人が訪れています。日本経済低迷期の今、百貨店という商業形態が改めて問われている状況で、何ができるのか。そうした試みの面白い場になっていると感じます。

もうひとつさらに住宅の話からは遠ざかってしまいますが、新建築社では、さまざまな建築コンペの運営も行っています。以前は建築関係企業の主催が主でしたが、近年はそこに広がりが生まれ、コンペにもさまざまな役割が求められるようになりました。私が2006年から携わっているSMOKERS' STYLE COMPETITIONもそのひとつです。コンペとしてどうあるべきかについて、建築とは別な分野の企業の方々が、新建築社と共に、新たな展開を探し、審査委員を含めた関係者全員でひとつのコンペをつくり上げています。

これらの話で共通しているのは、新しい何かを考え、その展開を見つけ出し、どう具体化できるかがさまざまに取り組まれていることです。簡単ではありませんが、これからの社会はその動きが加速し、柔軟に対応できる個が重要になるのだと感じます。　（pika）

バックナンバー・年間定期購読のご案内

新建築　新建築 住宅特集　

バックナンバーをお求めの方は最寄りの書店にてお申し込みください。また、下記のバックナンバー常備店にてお買い求めいただくことができます。
定期購読をご希望の方は最寄りの書店にてお申し込みください。書店でのご購入が不便な方は、弊社からお客様へ直送する「年間定期購読」をご利用ください。お申し込みは右記の年間定期購読係までご連絡下さい。

年間定期購読料（送料は弊社負担）

月刊『新建築』	¥24,000（税込）
月刊『新建築住宅特集』	¥24,000（税込）
季刊『JA』	¥10,000（税込）

株式会社 新建築社　年間定期購読係
〒100-6017　東京都千代田区霞が関3丁目2番5号
霞が関ビルディング17階
tel. 03-6205-4380　fax. 03-6205-4386
e-mail: business@japan-architect.co.jp

月刊『新建築』は1960年1月号より、月刊『新建築住宅特集』は1999年1月号より、季刊『JA』は1号（1991年春号）より目次などの内容が弊社ホームページにてご覧いただけます。

http://www.japan-architect.co.jp

バックナンバー取扱店　※書店により、在庫状況は異なります。事前にお電話で商品在庫をご確認ください。またお取り寄せも可能です。

北海道
MARUZEN＆ジュンク堂書店 札幌店
（札幌市中央区）011-223-1911
コーチャンフォー ミュンヘン大橋店
（札幌市北区）011-817-4000

宮城県
ジュンク堂書店 仙台本店
（仙台市青葉区）022-716-4511
丸善 仙台アエル店
（仙台市青葉区）022-264-0151

新潟県
ジュンク堂書店 新潟店
（新潟市）025-374-4411

埼玉県
ジュンク堂書店 大宮ロフト店
（さいたま市大宮区）048-640-3111

千葉県
丸善 津田沼店
（習志野市）047-470-8313
義翠堂書店
（習志野市）047-472-5011

東京都
三省堂書店 神田本店
（千代田区）03-3233-3312
南洋堂書店
（千代田区）03-3291-1338
丸善 丸の内本店
（千代田区）03-5288-8881
八重洲ブックセンター
（中央区）03-3281-8203
ブックファースト銀座コア店
（中央区）03-3573-8889
TSUTAYA TOKYO ROPPONGI
（港区）03-5775-1515
ブックファースト新宿店
（新宿区）03-5339-7611
○芳林堂書店 高田馬場店
（新宿区）03-3208-0241
紀伊國屋書店 新宿本店
（新宿区）03-3354-0131
デザインブックス
（品川区）03-3445-1341
ジュンク堂書店 池袋本店
（豊島区）03-5956-6111
紀伊國屋書店 新宿南店
（渋谷区）03-5361-3301
青山ブックセンター本店
（渋谷区）03-5485-5750

神奈川県
丸善 ラゾーナ川崎店
（川崎市幸区）044-520-1869

山梨県
○朗月堂本店
（甲府市）055-228-7356

富山県
BOOKSなかだ本店
（富山市）076-492-1192

長野県
□平安堂 長野店
（長野市）026-224-4545

愛知県
丸善 名古屋栄店
（名古屋市中区）052-261-2251
ジュンク堂書店名古屋店
（名古屋市中村区）052-589-6321

京都府
大龍堂書店
（京都市中京区）075-231-3036
ふたば書房 ゼスト御池店
（京都市中京区）075-253-3151
ジュンク堂書店 京都BAL店
（京都市中京区）075-253-6460

大阪府
柳々堂
（大阪市西区）06-6443-0167
□丸善 なんばOCAT店
（大阪市浪速区）06-6635-3225
旭屋書店 本店
（大阪市北区）06-6313-1192
ジュンク堂書店 大阪本店
（大阪市北区）06-4799-1090
アセンス アメリカ村店
（大阪市中央区）06-6258-3255
○紀伊國屋書店 梅田本店
（大阪市北区）06-6372-5821

兵庫県
ジュンク堂書店 三宮店
（神戸市中央区）078-392-1001

鳥取県
ブックヤードチャプター2
（米子市）0859-33-0222

広島県
○ジュンク堂書店 広島駅前店
（広島市南区）082-568-3000
○フタバ図書MEGA祇園中筋店
（広島市安佐南区）082-830-0600
○フタバ図書TERA広島府中店
（安芸郡）082-561-0770

福岡県
紀伊國屋書店 福岡本店
（福岡市博多区）092-434-3100
○GEN建築芸術書房
（福岡市中央区）092-524-2535
○丸善 福岡ビル店
（福岡市中央区）092-731-9000
ジュンク堂書店 福岡店
（福岡市中央区）092-738-3322

大分県
■ジュンク堂書店 大分店
（大分市）097-536-8181

書店名の頭についた記号は以下の通りです。

無印	『新建築』『新建築住宅特集』『JA』
○	『新建築』『新建築住宅特集』のみ
●	『新建築』『JA』のみ
□	『新建築住宅特集』『JA』のみ
■	『新建築』のみ
△	『新建築住宅特集』のみ
▲	『JA』のみ

新建築 住宅特集 バックナンバー

バックナンバーのお取り寄せは最寄りの書店へお申し込みください。
また、下記ウェブサイトからもご注文いただけます。
http://www.japan-architect.co.jp

株式会社 新建築社　〒100-6017　東京都千代田区霞が関3丁目2番5号
霞が関ビルディング17階
tel. 03-6205-4380（大代表）　fax. 03-6205-4386

2012 3月号
定価＝2,000円

[特集] 光と住宅
Daylight House／保坂猛　ナチュラルイルミナンスⅡ／遠藤政樹　名和研二　ナチュラルストリップⅣ／遠藤政樹　名和研二　論考：光空間に試される脚本力　遠藤政樹　TUTANAGA HOUSE／荒谷省午　スキマノイエ／富永哲史　横尾真　HOUSE y／河内一泰　元浅草の住宅／中央アーキ　SLIT／奥村和幸　調布の家／小川広次　茅ヶ崎の家／小川広次　深大寺東の家／小川広次　寄稿：ある建築家の肖像　高宮眞介
[特集2] 軒先のデザイン
樋口善信　益子アトリエ　川口通正　塩田能也　阪根宏彦　奥野公章　元良信彦　阿部勤　上野英二　城戸崎建築研究室　横内敏人　堀部安嗣　野沢正光
[コラム] 住宅の設計力　吉村篤一
近作を訪ねて　伊藤博之　藤原徹平
[エッセイ] 住宅を読む　堀越英嗣　前田圭介

2012 4月号
定価＝2,000円

[作品] 伯翠荘／吉村篤一　ジオ メトリア／原田真宏＋原田麻魚　井原の家／藤本寿徳　荻窪の家／早川邦彦　成城の家／岡田哲史　Layer／中原祐二　MISHIMA HOUSE／芦沢啓治　新小岩の家／飯田善彦　中村の家／加藤功　Portico／会田友朗＋久野紀光＋我伊野威之　鞆の浦の住宅／前田圭介　鷹ノ巣の2世帯住宅／納谷学＋納谷新　牛久の家／八島正年＋八島夕子　郡の家／神家昭雄
[連載] 素材再発見　第7回「再生素材・古材」　安井正
[コラム] 住宅の設計力　北山恒
近作を訪ねて　堀越英嗣　前田圭介
[エッセイ] 住宅を読む　安田博道　藤原徹平
[PROCESS VIEW] ジオ メトリア／原田真宏＋原田麻魚　Layer／中原祐二
[展覧会]「メグロアドレス—都会に生きる作家」／「土門拳写真展「和」—古寺巡礼第五集より—」／「ザ・タワー ～都市と塔のものがたり～」

2012 5月号
定価＝2,000円

[特集] 小さいことへのアプローチ
志立別邸／横河健　43base／三浦慎　ZYX House／中佐昭夫＋田中知博　乃木坂ハウス／岩岡竜夫＋渡邉光　荏原の家／荒木毅　中崎の家／榊原節子　千歳船橋の住宅／長谷川洋平　YNH／平瀬有人＋平瀬祐子　東大泉の家／杉浦英一　川に寄り添う家／水石浩太　青戸の家／田中秀弥　梅島の建物／齋藤由和　BW3／中辻正明＋中辻雅江　Dig In the Sky／竹口健太郎＋山本麻子　南沢の小住宅／若原一貴　目黒本町の住宅／鈴野浩一＋禿真哉
[コラム] 住宅の設計力　菅正太郎
[エッセイ] 住宅を読む視線　安部良
つくり手とのコラボレーション　城戸崎博孝×二ツ谷惠彦
[建築家のプロダクト]　泉幸甫　齊藤名穂
[展覧会] レポート：ハギエンナーレ2012　宮崎晃吉
「縮退時代における都市の記述法へ」／「甦った西本願寺「伝道院」と伊東忠太展」／「多様な光のあるガラス建築展」

2012 6月号
定価＝2,000円

[特集] オリジナルメイキング2012
凱風館／光嶋裕介　川越の家／手嶋保　アース・ブリックス／山下保博　N邸／新田有平＋丸山美紀　狭山丘陵の家／佐藤武見　等々力の二重円環／藤原徹平　HOUSE S／芦沢啓治
[作品] 土橋邸／妹島和世　空の見える下階と街のような上階／栗原健太郎＋岩月美穂　石神井町の家Ⅲ／高野保光　大宮の家／長坂大　Folded W／駒田剛司＋駒田由香
[連載] 建築家自邸からの家学び　第10回 前編　松原の家　真壁智治　東京都市大学 手塚貴晴研究室　小室匡示　古田陽子　内藤恒方　内藤嬰子
[コラム] 住宅の設計力　渡辺康
[エッセイ] 特集を読む　東海林弘靖
つくり手とのコラボレーション　城戸崎博孝×二ツ谷惠彦
住宅を読む視線　荒谷省午
[コンペ作品募集] 第8回 ダイワハウスコンペティション

2012 7月号
定価＝2,000円

[作品] Tunnel House／塚田眞樹子　K HOUSE／吉村昭範＋吉村真基　名和研二　PATIO／矢板久明＋矢板直子　house I／實神尚史　K／木村吉成＋松本尚子　深川の家／谷尻誠　大野博史　パラメトリック・フラグメント／山口隆　ヨシダセカンドハウス／宇野求　青木豊実　竹内晶洋　吉川の家／庄司寛　甲州街道の家／髙山正樹　岡由実子　埼玉の家/O邸／相川直子＋佐藤勤　目神山のいえ／須賀定邦　ヒメシャラの森の家／横内敏人
[連載] 建築家自邸からの家学び　第10回 後編 松原の家　真壁智治　東京都市大学大学院手塚貴晴研究室　中山英之　古田陽子　内藤恒方
家をつくる図面　第1回 敷地の活かし方 回帰草庵　石井修　竹原義二　石井智子
[コラム・エッセイ] 生田京子　坪井宏嗣
[建築家のプロダクト]（水回り）　横河健　藤原徹平・岡安泉　鈴木エドワード　佐藤オオキ　伊礼智

2012 8月号
定価＝2,000円

[特集] リノベーション解 20題
KIM HOUSE 2011／岸和郎　鎌倉のリノベーション/音楽ホール付シェアハウス／北山恒　東寺の家／長坂大　精華町の家／長坂大　北白川の家／長坂大　椹木町通の町家／荒谷省午　mina／木村吉成＋松本尚子　滑の家／三宅正浩　頭町の住宅／魚谷繁礼　壬生東檜町の住宅／魚谷繁礼　惜櫟荘(旧岩波別邸)／設計：吉田五十八　解体復元：板垣元彬　神泉のリノベーション　池袋のリノベーション／能作淳平＋中田裕一　新浦安の住宅／メジロスタジオ　弘明寺の住宅／山口誠　8ビル／塩塚隆生　クサバアパートメント／塩塚隆生　Blanks／稲垣淳哉＋佐野哲史＋永井拓生＋堀英祐　御殿場の別荘／石崎哲也＋石崎瑠美子　高田のいえ／三澤文子　垂水の家／豊田保之
[コラム] 住宅の設計力　三幣順一
[エッセイ] 住宅を読む視線　岩岡竜夫
ディスカッション（前編）　杉下均×服部信康×若原一貴
つくり手とのコラボレーション　高野保光×黒柳崇